松野遺跡発掘調査報告書

第３～７次調査

―新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う―

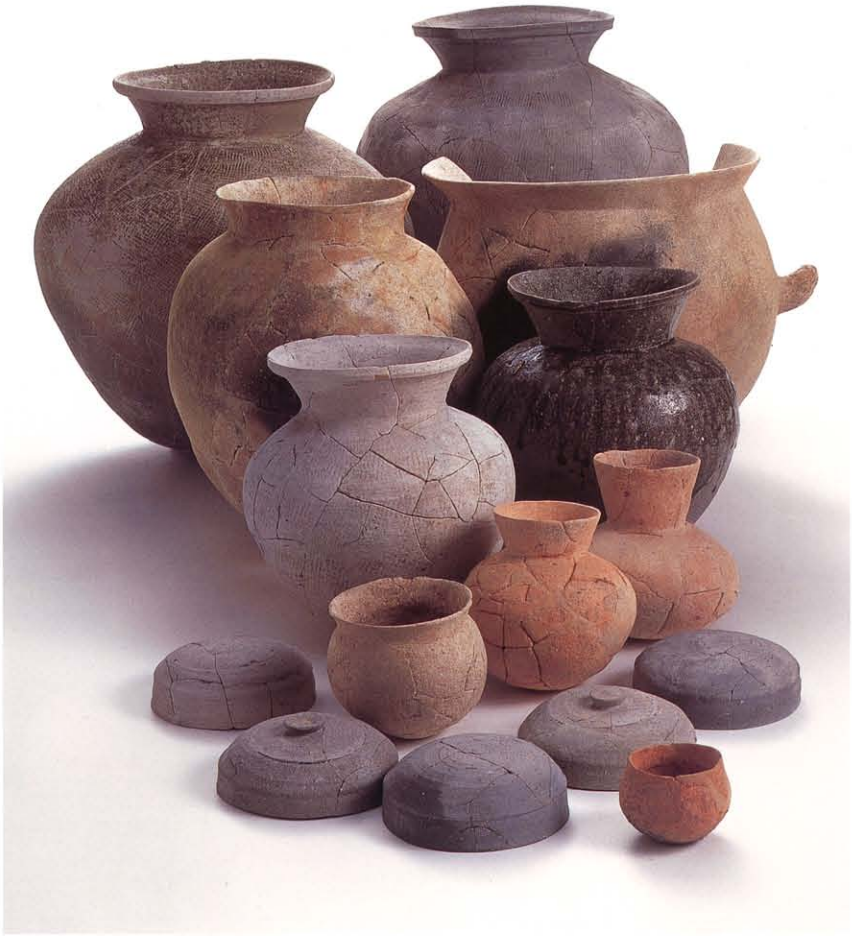
２００１

神戸市教育委員会

ＳＢ213　出土土器

巻頭写真図版 2

ＳＤ204　北群出土土器



1　ＳＤ204　南群出土土器

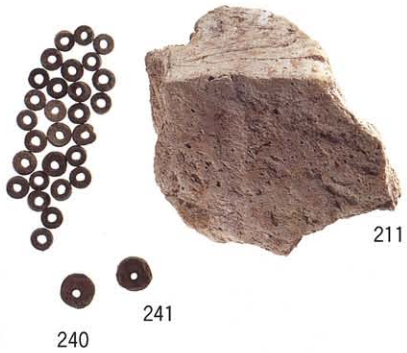
2　ＳＥ201　出土土器

巻頭写真図版 4

ＳＸ204　出土土器

S X 214　出土土器

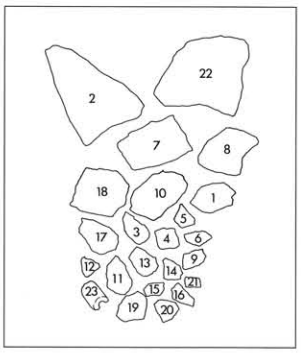
巻頭写真図版 6



1　ＳＥ201出土の滑石製臼玉と砥石

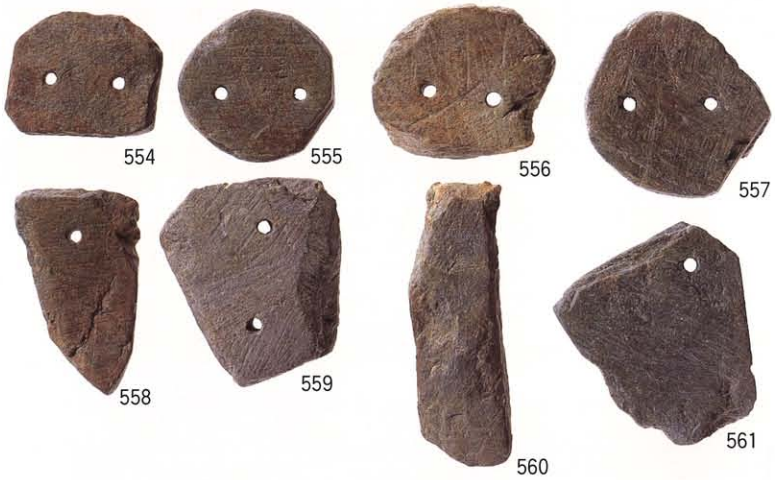
2　ＳＸ204出土の砥石と滑石製品

3　ＳＸ204出土の滑石製品



4　碧玉製玉類蛍光Ｘ線分析試料

1　ＳＸ205出土の玉製品



2　ＳＸ214出土の滑石製品

3　ＳＸ214上層出土の滑石製品

巻頭写真図版 8

滑石製臼玉の製作工程

松野遺跡発掘調査報告書

第３～７次調査

―新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う―

２００１

神戸市教育委員会

序

阪神・淡路大震災の発生から、６年の歳月が過ぎました。本書の発掘調査が行われた長田区は、震災による被害が特に甚大なところでした。

被災地の街並みには新たな建物が加わり、美しい外観を表しつつあります。しかし、震災で被災された人々の深い傷跡や悲しみは、たやすく癒すことはできません。

被災地にも関わらず、地元の方々のご協力とご理解をいただき、発掘調査を無事遂行することができました。

また、地元中学校による体験発掘調査の参加や２度の現地説明会の開催には多くの参加をいただき、熱心に見学していただきました。

本書の報告にある過去の人々の営為に思いを馳せるとともに、過去の経験を活かす一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係諸機関に厚く御礼申しあげます。

2001年３月
神戸市教育委員会

例　言

1．本書は神戸市長田区日吉町２丁目・若松町６・７丁目において、平成８年度から平成11年度にかけて発掘調査を実施した松野遺跡第３～７次の埋蔵文化財調査の報告書である。

調査の概要はすでに『平成８年度～平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』で報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。

2．調査は新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会が神戸市都市計画局の委託を受けて実施したものである。

なお、震災復興に伴う発掘調査事業の進捗を図るため、平成８年度については兵庫県教育委員会より復興支援職員（復興調査班）の派遣を受けた。調査の組織体制の詳細については第１章第２節に記した。

3．本書の作成は各項の文末に記した調査担当者がそれぞれ分担執筆し、口野博史が編集した。

4．各調査の遺構写真は各調査担当者が撮影した。遺物写真については奈良国立文化財研究所　牛嶋　茂氏の撮影および指導を得ました。また、西大寺フォト　杉本和樹氏が撮影を行った。

5．動物遺存体については、奈良国立文化財研究所　松井章氏、歯牙については京都大学霊長類研究所教授片山一道氏の御指導を得ました。

6．下記の作業については委託を行って実施した。

発掘調査作業	安西工業㈱、㈱長谷川工務店
航空写真測量	アジア航測㈱、国際航業㈱、㈱ジオテクノ関西
碧玉産地分析	京都大学原子炉実験所　藁科哲男氏
木製品および炭化材樹種同定	㈱パレオ・ラボ
花粉分析	㈱パレオ・ラボ
大型植物化石分析	㈱パレオ・ラボ
プラント・オパール分析	㈱古環境研究所

7．本書に掲載した位置図は国土地理院発行の25,000分の１の地形図「神戸首部」・「神戸南部」を、詳細位置図は神戸市発行の2500分の１の地形図「大橋」の一部を使用した。

8．本書で使用した方位・座標は平面直角座標系第Ⅴ系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。

9．現地での発掘調査の実施にあたっては、神戸市都市計画局新長田南再開発事務所の協力を得た。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の経緯　1
　第２節　調査の実施状況　2
　第３節　遺跡の立地と歴史的環境　9

第２章　調査の概要 ……13
　第１節　調査の概要　13
　第２節　基本層序　13

第３章　日吉町２丁目地区の調査 ……15
　第１節　調査の概要　15
　第２節　古墳時代以前の遺構と遺物　17
　第３節　古墳時代の遺構と遺物　25
　　１．掘立柱建物および竪穴住居　25
　　２．溝　57
　　３．井戸　72
　　４．土坑　91
　　５．落ち込み等用途不明遺構　100
　　６．ピット　136
　第４節　中世の遺構と遺物　139

第４章　若松町７丁目地区の調査 ……159
　第１節　調査の概要　159
　第２節　小結　168

第５章　若松町６丁目地区の調査 ……169
　第１節　調査の概要　169
　第２節　小結　174

第６章　自然科学分析 ……175
第１節　松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定　175
第２節　松野遺跡第５－１次調査の花粉化石群集　187
第３節　松野遺跡第５－１次調査の大型植物化石　193
第４節　松野遺跡第４－２次調査出土焼失竪穴住居の炭化材樹種同定　197
第５節　松野遺跡第４－１次調査のプラント・オパール分析　203
第６節　松野遺跡出土の管玉、玉材剥片の産地分析　207

第７章　まとめ ……221
第１節　松野遺跡の性格とマツリ　221
第２節　松野遺跡の古墳時代の土器について　225
第３節　松野遺跡の古墳時代の木製品について　233
第４節　中世の遺構と遺物　234
第５節　むすびにかえて　236

挿　図　目　次

fig. 1　調査地位置図 ……1
fig. 2　調査地位置図（新次数） ……3
fig. 3　調査地位置図（旧次数） ……3
fig. 4　再開発事業予定地と遺跡範囲 ……4
fig. 5　調査地区範囲位置図 ……4
fig. 6　周辺関連遺跡分布図……10
fig. 7　日吉２地区基本層序南北断面実測図……14
fig. 8　遺物包含層出土土器実測図……15
fig. 9　遺物包含層出土玉類実測図……16
fig. 10　縄文・弥生時代遺構検出範囲図……16
fig. 11　北西部断割地区出土遺物実測図……17
fig. 12　ＳＤ101出土遺物実測図 ……17
fig. 13　ＳＤ101平面・断面図 ……18
fig. 14　南西部断割調査区および
　　ＳＤ102平面図 ……20
fig. 15　南西部遺構面下層断割土層断面図……21
fig. 16　日吉２地区古墳時代遺構平面図 (1) ……23
fig. 17　ＳＢ201平面・断面図 ……25
fig. 18　ＳＢ202平面・断面図 ……26
fig. 19　ＳＢ203平面・断面図 ……27
fig. 20　ＳＢ204平面・断面図 ……28
fig. 21　ＳＢ205平面・断面図 ……29
fig. 22　ＳＢ206平面・断面図 ……30
fig. 23　ＳＢ206出土遺物実測図 ……30
fig. 24　ＳＢ207平面・断面図 ……31
fig. 25　ＳＢ208平面・断面図 ……32
fig. 26　ＳＢ208－ＳＫ１出土遺物実測図 ……32
fig. 27　ＳＢ209平面・断面図 ……33
fig. 28　ＳＢ210平面・断面図 ……33
fig. 29　ＳＢ211平面・断面図 ……34
fig. 30　ＳＢ211－Ｐ７出土遺物実測図 ……34
fig. 31　ＳＢ212平面・断面図 ……35
fig. 32　ＳＢ213平面・断面図 ……36
fig. 33　ＳＢ213出土土器実測図 ……37
fig. 34　ＳＢ213出土鉄製品実測図 ……38
fig. 35　ＳＢ214平面・断面図 ……39
fig. 36　ＳＢ215平面・断面図 ……40
fig. 37　ＳＢ216平面・断面図 ……41
fig. 38　ＳＢ217平面・断面図 ……42
fig. 39　ＳＢ218平面・断面図 ……43
fig. 40　ＳＢ219平面・断面図 ……44
fig. 41　ＳＢ219－Ｐ３出土遺物実測図 ……44
fig. 42　ＳＢ219－Ｐ４出土遺物実測図 ……44
fig. 43　ＳＢ220平面・断面図 ……45
fig. 44　ＳＢ220－Ｐ５出土遺物実測図 ……45
fig. 45　ＳＢ221平面・断面図 ……46
fig. 46　ＳＢ222平面・断面図 ……47
fig. 47　ＳＢ222－Ｐ３出土遺物実測図 ……47
fig. 48　ＳＢ223平面・断面図 ……48
fig. 49　ＳＢ224平面・断面図 ……49
fig. 50　ＳＢ224－Ｐ２出土遺物実測図 ……49
fig. 51　ＳＢ224－Ｐ４出土遺物実測図 ……49
fig. 52　ＳＢ225平面・断面図 ……50
fig. 53　ＳＢ226平面・断面図 ……51
fig. 54　ＳＢ227平面・断面図 ……52
fig. 55　ＳＢ228平面・断面図 ……53
fig. 56　ＳＢ229平面・断面図 ……54
fig. 57　ＳＢ230平面・断面図 ……55
fig. 58　ＳＤ201出土土器実測図 ……57
fig. 59　ＳＤ201・202・204断面図および
　　ＳＤ201西群遺物検出状況実測図 ……58
fig. 60　ＳＤ201出土玉類実測図(1)……59
fig. 61　ＳＤ201出土石器実測図 ……59
fig. 62　ＳＤ201出土玉類実測図(2)……59
fig. 63　ＳＤ203断面図 ……61
fig. 64　ＳＤ203出土遺物実測図 ……61
fig. 65　ＳＤ203出土砥石実測図 ……61
fig. 66　ＳＤ204北群出土土器実測図(1)……62
fig. 67　ＳＤ204北群出土土器実測図(2)……63
fig. 68　ＳＤ204北群出土土器実測図(3)……65

fig.69　ＳＤ204北群出土土器実測図(4)……66
fig.70　ＳＤ204北群出土玉製品実測図 ……67
fig.71　ＳＤ204南群出土土器実測図(1)……68
fig.72　ＳＤ204南群出土土器実測図(2)……69
fig.73　ＳＤ205平面・断面図 ……71
fig.74　ＳＤ205出土遺物実測図 ……71
fig.75　ＳＥ201平面・断面図 ……72
fig.76　ＳＥ201出土遺物実測図 ……73
fig.77　ＳＥ201出土石製品実測図 ……74
fig.78　ＳＥ202平面・断面図 ……76
fig.79　ＳＥ202出土遺物実測図 ……76
fig.80　ＳＥ203平面・断面図 ……77
fig.81　ＳＥ203出土遺物実測図 ……78
fig.82　ＳＥ204平面・断面図 ……79
fig.83　ＳＥ204下層出土土器実測図 ……81
fig.84　ＳＥ204下層出土玉製品実測図 ……81
fig.85　ＳＥ204出土木製品実測図(1)……81
fig.86　ＳＥ204出土木製品実測図(2)……82
fig.87　ＳＥ204中層出土土器実測図 ……83
fig.88　ＳＥ205平面・断面図 ……84
fig.89　ＳＥ205出土遺物実測図 ……85
fig.90　ＳＥ206平面図 ……86
fig.91　ＳＥ206出土土器実測図 ……87
fig.92　ＳＥ206出土玉類実測図 ……87
fig.93　ＳＥ206出土木器実測図 ……88
fig.94　日吉２地区古墳時代遺構平面図(2) ……89
fig.95　ＳＫ201平面・断面図 ……91
fig.96　ＳＫ201出土土器実測図 ……96
fig.97　ＳＫ202平面・断面図 ……92
fig.98　ＳＫ203平面・断面図 ……92
fig.99　ＳＫ203出土砥石実測図 ……93
fig.100　ＳＫ204平面・断面図 ……93
fig.100　ＳＫ204出土土器実測図 ……93
fig.102　ＳＫ205平面・断面図 ……93
fig.103　ＳＫ206平面・断面図 ……94
fig.104　ＳＫ207平面・断面図 ……94
fig.105　ＳＫ206・207出土土器実測図……94
fig.106　ＳＫ210平面・断面図 ……95
fig.107　ＳＫ210出土土器実測図 ……95
fig.108　ＳＫ214平面・断面図 ……96
fig.109　ＳＫ214出土土器実測図 ……96
fig.110　ＳＫ215平面・断面図 ……96
fig.111　ＳＫ216平面・断面図 ……97
fig.112　ＳＫ217平面・断面図 ……98
fig.113　ＳＫ218平面・断面図 ……98
fig.114　ＳＫ219平面・断面図 ……99
fig.115　ＳＫ219出土遺物実測図 ……99
fig.116　ＳＸ201遺物検出状況平面図……100
fig.117　ＳＸ201出土遺物実測図……100
fig.118　ＳＸ202平面・断面図……101
fig.119　ＳＸ202出土土器実測図……101
fig.120　ＳＸ203平面・断面図……102
fig.121　ＳＸ203出土土器実測図……102
fig.122　ＳＸ204平面・断面図……103
fig.123　ＳＸ204出土土器実測図(1) ……105
fig.124　ＳＸ204出土土器実測図(2) ……106
fig.125　ＳＸ204出土土器実測図(3) ……107
fig.126　ＳＸ204出土土器実測図(4) ……108
fig.127　ＳＸ204出土土器実測図(5) ……110
fig.128　ＳＸ204出土石製品実測図……111
fig.129　ＳＸ205・206平面・断面図 ……112
fig.130　ＳＸ205出土玉類実測図……113
fig.131　ＳＸ205出土玉類実測図……114
fig.132　ＳＸ206出土土器実測図……115
fig.133　ＳＸ206出土玉類実測図……115
fig.134　ＳＸ207出土土器実測図(1) ……116
fig.135　ＳＸ207出土土器実測図(2) ……117
fig.136　ＳＸ208出土土器実測図……117
fig.137　ＳＸ209・210・211平面図……118
fig.138　ＳＸ209出土土器実測図……119
fig.139　ＳＸ210出土土器実測図……119
fig.140　ＳＸ211出土土器実測図……119
fig.141　ＳＸ212平面・断面図……120
fig.142　ＳＸ212出土遺物実測図……121
fig.143　ＳＸ214周辺玉類出土状況平面
　　・断面図……123

fig.144 ＳＸ214出土土器実測図(1) ……124
fig.145 ＳＸ214出土土器実測図(2) ……125
fig.146 ＳＸ214出土土器実測図(3) ……127
fig.147 ＳＸ214出土遺物実測図(4) ……128
fig.148 ＳＸ214出土石製品実測図(1) ……129
fig.149 ＳＸ214上面出土石製品実測図……130
fig.150 ＳＸ214出土石製品実測図(2) ……131
fig.151 ＳＸ215平面・断面図……132
fig.152 ＳＸ215出土土器実測図……133
fig.153 ＳＸ215出土玉製品実測図……133
fig.154 ＳＸ216遺物検出状況平面図……134
fig.155 ＳＸ216出土土器実測図……134
fig.156 ＳＰ205出土鉄製品実測図……136
fig.157 日吉２地区平安～鎌倉時代遺構平面図……137
fig.158 ＳＢ301平面・断面図……139
fig.159 ＳＢ302－Ｐ７出土遺物実測図……139
fig.160 ＳＢ302平面・断面図……140
fig.161 ＳＢ303平面・断面図……141
fig.162 ＳＢ303－Ｐ10出土遺物実測図……142
fig.163 ＳＢ304平面・断面図……142
fig.164 ＳＢ304出土遺物実測図……143
fig.165 ＳＢ305平面・断面図……144
fig.166 ＳＢ306平面・断面図……145
fig.167 ＳＢ306－Ｐ20出土遺物実測図……145
fig.168 ＳＥ301平面・断面図……145
fig.169 ＳＥ301出土木製品実測図……146
fig.170 ＳＥ302平面・断面図……147
fig.171 ＳＥ302出土遺物実測図……148
fig.172 ＳＥ302出土木製品実測図（１）……149
fig.173 ＳＥ302出土木製品実測図（２）……150
fig.174 ＳＥ303平面・断面図……151
fig.175 ＳＥ303出土土器実測図……152
fig.176 ＳＥ303出土木製品実測図……152
fig.177 ＳＥ304平面・断面図……153
fig.178 ＳＥ304出土木製品実測図……153
fig.179 ＳＴ301平面図……154
fig.180 ＳＴ301出土遺物実測図……154
fig.181 ＳＫ301平面・断面図……155
fig.182 ＳＸ301平面・断面図……155
fig.183 ＳＸ301出土遺物実測図……155
fig.184 ＳＸ302平面・断面図……156
fig.185 ＳＸ302出土遺物実測図……157
fig.186 ＳＰ301平面・断面図……157
fig.187 ＳＰ301出土瓦当実測図……158
fig.188 ＳＰ302出土遺物実測図……158
fig.189 ＳＰ303出土遺物実測図……158
fig.190 ＳＰ304出土遺物実測図……158
fig.191 若松町７丁目地区遺構平面図 ……159
fig.192 若松７地区基本層序南北断面図 ……160
fig.193 ＳＢ231炭化材検出状況
および平面・断面図 ……161
fig.194 ＳＢ231出土遺物実測図……161
fig.195 ＳＢ232平面・断面図……162
fig.196 ＳＢ232－Ｐ３出土遺物実測図……163
fig.197 ＳＤ208平面・断面図……163
fig.198 ＳＥ305平面・断面図……164
fig.199 ＳＥ306平面・断面図……165
fig.200 ＳＥ306出土遺物実測図……166
fig.201 ＳＥ207，307，308，309断面図 ……167
fig.202 若松町６丁目地区遺構平面図 ……169
fig.203 若松６地区南北断面図 ……170
fig.204 ＳＥ208平面・断面図……170
fig.205 ＳＥ208出土遺物実測図……171
fig.206 ＳＢ308平面・断面図……171
fig.207 ＳＥ310遺物出土状況および平面
・断面図 ……172
fig.208 ＳＥ310出土遺物実測図……173
fig.209 試料採取位置図 ……189
fig.210 ＳＤ204花粉化石分布図……191
fig.211 ＳＥ204花粉化石分布図……191
fig.212 ＳＢ231出土炭化材の産状と分類群……198
fig.213 プラント・オパール分析試料採取地……203
fig.214 松野遺跡の
プラント・オパール分析結果 ……205
fig.215 花仙山産碧玉原石の
蛍光Ｘ線スペクトル……208

fig.216 碧玉および碧玉様岩の原産地と古墳（続縄文）時代の碧玉製管玉の原材使用分布圏 ……209
fig.217 松野遺跡出土玉材剥片、管玉の蛍光X線スペクトル(1)……214
fig.218 松野遺跡出土玉材剥片、管玉の蛍光X線スペクトル(2)……215
fig.219 碧玉原石のＥＳＲスペクトル ……216
fig.220 碧玉原石の信号（Ⅲ）のＥＳＲスペクトル ……217
fig.221 松野遺跡出土玉材剥片、管玉の信号（Ⅲ）のＥＳＲスペクトル ……218
fig.222 松野遺跡第１～７次調査平面図 ……222
fig.223 松野遺跡第３～７次調査出土の土器 ……230

挿図写真目次

挿図写真１　中学校体験発掘調査作業風景 ……7
挿図写真２　『国際シンポジウム』参加者現地見学風景 ……7
挿図写真３　現地説明会風景 ……7
挿図写真４　中学校体験発掘調査作業風景 ……8
挿図写真５　地元説明会風景 ……8
挿図写真６　日吉２再開発ビル内遺跡説明看板 ……8
挿図写真７　日吉２再開発ビル内遺跡説明看板 ……8
挿図写真８　日吉２再開発ビル完成状況（2000年10月撮影） ……8
挿図写真９　第１次調査地点と日吉２地区（1982年１月撮影） ……11
挿図写真10　北西部断割地区出土遺物……17
挿図写真11　ＳＤ101検出状況（北から） ……19
挿図写真12　ＳＤ101出土遺物 ……19
挿図写真13　ＳＤ102（西から） ……20
挿図写真14　南西部断ち割り状況……22
挿図写真15　ＳＢ228－Ｐ11 柱痕と礎盤検出状況…54
挿図写真16　ＳＫ203完掘状況（北から） ……92
挿図写真17　ＳＫ216（東から） ……97
挿図写真18　ＳＫ219（東から） ……99
挿図写真19　ＳＸ216土器検出状況（南から）…134
挿図写真20　ＳＥ304（北から） ……153
挿図写真21　ＳＴ301出土歯牙……154
挿図写真22　ＳＰ303（南から） ……158
挿図写真23　ＳＥ208（北から） ……170
挿図写真24　ＳＥ310下層（南から） ……173
挿図写真25　ＳＥ310中層（南から） ……173
挿図写真26　鋤溝（北から） ……174
挿図写真27　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真(1)……183
挿図写真28　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真(2)……184
挿図写真29　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真(3)……185
挿図写真30　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真(4)……186
挿図写真31　産出した花粉化石 ……192
挿図写真32　出土した大型植物化石 ……195
挿図写真33　ＳＢ231出土炭化材樹種(1) ……201
挿図写真34　ＳＢ231出土炭化材樹種(2) ……202

表　目　次

表１　調査次数一覧表 ……2
表２　松野遺跡第３～７次調査検出古墳時代掘立柱建物一覧表……56
表３　松野遺跡第３～７次調査検出古墳時代竪穴住居一覧表……56
表４　日吉２地区遺構別玉製品等出土一覧表 ……135
表５　第３～７次調査平安～鎌倉時代掘立柱建物一覧表 ……145
表６　松野遺跡出土木製品の樹種同定結果(1)……179
表７　松野遺跡出土木製品の樹種同定結果(2)……180
表８　松野遺跡出土木製品の樹種同定結果(3)……181
表９　松野遺跡時期別樹種同定一覧 ……182
表10　花粉化石一覧表 ……190
表11　出土した大型植物化石 ……193
表12　ＳＢ231の炭化材樹種……198
表13　松野遺跡のプラント・オパール分析結果 ……204
表14　松野遺跡出土管玉、玉材剥片の一覧 ……207
表15　各碧石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値 ……210
表16　松野遺跡出土玉材および管玉の分析結果(1)……212
表17　松野遺跡出土玉材および管玉の分析結果(2)……213
表18　松野遺跡出土玉材剥片、管玉の産地推定結果 ……219
表19　松野遺跡第１・２次調査、神楽遺跡検出掘立柱建物一覧表 ……223

巻頭写真図版目次

図版１　ＳＢ213出土土器
図版２　ＳＤ204北群出土土器
図版３　１　ＳＤ204南群出土土器　　２　ＳＥ201出土土器
図版４　ＳＸ204出土土器
図版５　ＳＸ214出土土器
図版６　１　ＳＥ201出土の滑石製臼玉と砥石　　２　ＳＸ204出土の砥石と滑石製品
　　３　ＳＸ204出土の滑石製品　　４　碧玉製玉類蛍光Ｘ線分析資料
図版７　１　ＳＸ205出土の玉製品　　２　ＳＸ214出土の滑石製品
　　３　ＳＸ214上層出土の滑石製品
図版８　滑石製臼玉の製作工程

写　真　図　版　目　次

〔日吉町２丁目地区〕

図版１　１　調査地遠景航空写真（東から）　２　調査地遠景航空写真（南から）
図版２　日吉町２丁目地区空中垂直写真（第３～６次調査）
図版３　１　３次－１－１　空中垂直写真　２　３次－１－１　全景写真（東から）
図版４　１　３次－１－２　空中垂直写真　２　３次－１－２　全景写真（西から）
図版５　１　３次－１－３　空中垂直写真　２　３次－１－３　全景写真（南から）
図版６　１　３次－１－４　空中垂直写真　２　３次－１－４　全景写真（西から）
図版７　１　３次－２　空中垂直写真　２　３次－２　全景写真（西から）
図版８　１　４次－１　空中垂直写真　２　４次－１　全景写真（東から）
図版９　１　５次－１－１　全景写真（北から）　２　５次－１－１　空中垂直写真
図版10　１　５次－１－２　空中垂直写真　２　５次－１－２　北部全景写真（東から）
図版11　１　５次－１－２　空中垂直写真　２　５次－１－２　全景写真（東から）
図版12　１　ＳＢ205（南から）　２　ＳＢ206（北から）
図版13　１　ＳＢ210（北から）　２　ＳＢ217（東から）
図版14　１　ＳＢ213床面遺物検出状況（北から）　２　ＳＢ213床面除去後状況（東から）
図版15　１　ＳＢ218（東から）　２　ＳＢ219（北から）
図版16　１　ＳＢ220（北から）　２　ＳＢ221（北から）
図版17　１　ＳＢ222（北から）　２　ＳＢ223（東から）
図版18　１　ＳＢ224（北から）　２　ＳＢ225（東から）
図版19　１　ＳＢ226・227・228（南から）　２　ＳＢ226･227･228（北から）
図版20　１　ＳＢ229（南から）　２　ＳＢ230（北から）
図版21　１　ＳＤ201・202（東から）　２　ＳＤ201西群遺物検出状況（北から）
図版22　１　ＳＤ201西群遺物検出状況（東から）　２　ＳＤ201東群遺物検出状況（東から）
図版23　１　ＳＤ204北群遺物検出状況（北から）　２　ＳＤ204北群遺物検出状況（南から）
図版24　１　ＳＤ204南群遺物検出状況（北から）　２　ＳＤ204・ＳＸ214（東から）
図版25　１　ＳＤ204・ＳＸ205（東から）　２　ＳＤ206（北から）
図版26　１　ＳＥ201遺物検出状況（南から）　２　ＳＥ201完掘状況（南から）
図版27　１　ＳＥ203遺物検出状況（北東から）　２　ＳＥ203完掘状況（北東から）
図版28　１　ＳＥ204中層遺物検出状況（東から）　２　ＳＥ204中層遺物検出状況（東から）
図版29　１　ＳＥ204下層遺物検出状況（北から）　２　ＳＥ204下層遺物検出状況（西から）
図版30　１　ＳＥ205（南から）　２　ＳＥ205遺物検出状況（東から）
図版31　１　ＳＥ206遺物出土状況（北東から）　２　ＳＫ204（南東から）
図版32　１　ＳＸ205（南から）　２　ＳＸ209（東から）
図版33　１　ＳＸ210・209・208（東から）　２　５次－１－１　北西部遺構群（南から）
図版34　１　ＳＸ212（南から）　２　ＳＸ212遺物検出状況（南東から）

図版35　1　ＳＸ214（南から）　2　ＳＸ214（北から）
図版36　1　６次－２　全景写真（東から）　2　６次－４　全景写真（南から）
図版37　1　６次－１　空中垂直写真　2　７次－３　全景写真（西から）
図版38　1　ＳＢ302（南から）　2　ＳＢ306（北から）
図版39　1　ＳＥ301遺物検出状況（東から）　2　ＳＥ303遺物検出状況（東から）
図版40　1　ＳＥ302獣骨等検出状況（東から）　2　ＳＥ302曲物井戸枠内遺物検出状況
図版41　1　ＳＴ301（南東から）　2　ＳＰ301（西から）
図版42　1　ＳＸ301（東から）　2　ＳＸ302（南から）

〔若松町７丁目地区〕
図版43　1　４次－２　空中斜め写真（西から）　2　４次－２　空中垂直写真
図版44　1　ＳＢ231炭化材等検出状況（南から）　2　ＳＥ306遺物検出状況（北東から）
図版45　1　５次－２　全景写真（北から）　2　６次－３　全景写真（南から）

〔遺物写真〕
図版46　ＳＢ206・208・213出土土器
図版47　ＳＢ213出土土器
図版48　ＳＢ213・219・220出土遺物
図版49　1　ＳＤ201東群出土土器　2　ＳＤ201西群出土土器
図版50　ＳＤ201・203・204北群、ＳＸ206出土石製品
図版51　ＳＤ204北群出土土器
図版52　ＳＤ204北群出土土器
図版53　ＳＤ204北群出土土器
図版54　ＳＤ204北群出土土器
図版55　ＳＤ204北群出土土器
図版56　ＳＤ204北群・南群出土土器
図版57　ＳＤ204南群出土土器
図版58　ＳＤ204南群出土土器
図版59　ＳＥ201出土土器
図版60　ＳＥ201・203・204下層出土遺物
図版61　ＳＥ204出土木製品
図版62　ＳＥ204中層出土土器
図版63　ＳＥ205・206出土遺物
図版64　ＳＫ203・204・214・219、ＳＸ201・203出土遺物
図版65　ＳＸ204出土土器
図版66　ＳＸ204出土土器
図版67　ＳＸ204出土土器
図版68　ＳＸ204出土土器

図版69　ＳＸ204・205・207出土遺物
図版70　ＳＸ207・208出土土器
図版71　ＳＸ210・211・212出土土器
図版72　ＳＸ214出土土器
図版73　ＳＸ214出土土器
図版74　ＳＸ214出土土器
図版75　ＳＸ214・215出土遺物
図版76　ＳＸ216，ＳＰ205，ＳＢ302・306，ＳＥ302出土遺物
図版77　1　ＳＥ302出土の牛骨　　2　ＳＥ302出土の縦板
図版78　ＳＥ302出土木製品
図版79　1　ＳＥ303出土木製品　　2　ＳＴ301出土土器
　　3　ＳＸ302出土土器
図版80　ＳＸ310，ＳＰ301・302，ＳＥ306・208・310出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯

松野遺跡の存在するＪＲ新長田駅周辺地域は、戦後ケミカルシューズ生産で知られる地域である。

震災以前より「神戸市基本計画」で西部副都心として位置づけられ、駅前再開発事業が着手されていた。

震災によって甚大な被害を被った当地区に、市街地再開発事業の都市計画決定がなされた。これにより再開発事業対象地区内の埋蔵文化財の有無を確認するため、都市計画局より依頼を受け、平成７年10月より試掘調査が開始された。

再開発事業対象地区内には国道２号線を挟んで北側には松野遺跡、南側には二葉町遺跡が周知されており、これらの遺跡の範囲などを確認するために行われた（fig. ４参照）。

特に、ＪＲ山陽本線北側の松野通４丁目での調査で、古墳時代後期の柵と溝に囲まれた居館が検出されたことが知られている（昭和56年度・松野遺跡第１～２次調査）。

ＪＲ線南側の日吉町２丁目等の地区でも、試掘調査の結果、古墳時代後期の遺物包含層や遺構面が拡がっていることが確認された。

再開発の事業計画に従い、現状建物の除却などの進んだ日吉町２丁目の区域から発掘調査に着手した。松野遺跡第３次調査の開始は平成８年７月からである。その後発掘調査の進捗状況や現状建物の除却状況、建築計画などについての打合せを適宜行い、発掘調査および試掘調査を実施した。（口野）

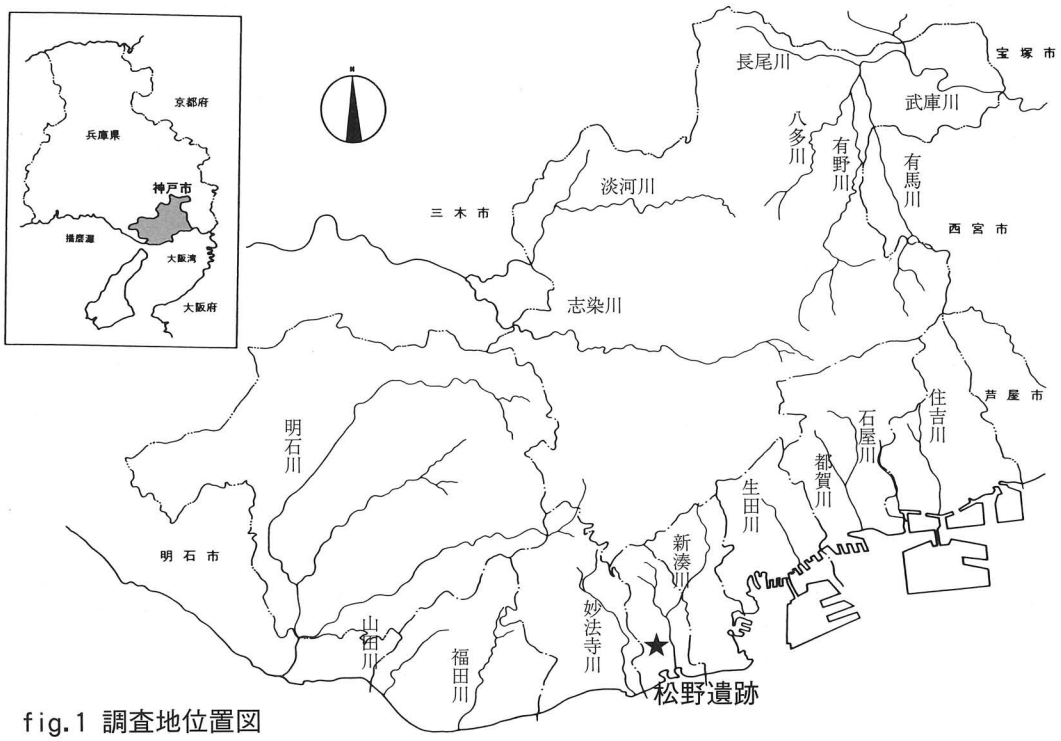


fig.1 調査地位置図
Ｓ＝１：300,000

第２節　調査の実施状況

１　調査の経過

新長田駅南地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査は、平成８年７月から実施した。10年度末には、日吉町２丁目地区の一部を除いて調査が完了し、再開発ビルの建設工事に着手、11年度末には調査が全て完了し、残りの建設工事に着手した。

調査の範囲　本報告に掲載する調査の範囲は、fig. 3のように、年度毎・調査区毎に分割している。

旧次数	新次数	地区名	調査面積	調査原因	調査主体	調査担当者	調査期間	調査内容
1	1	松野通４丁目	3,549m²	市営住宅建設	神戸市教育委員会	渡辺 西岡 口野 千種	811026～820131	古墳後期掘立柱建物，竪穴住居，溝，柵列・弥生時代井戸
2	1	松野通４丁目	1,435m²	市営住宅建設	神戸市教育委員会		810203～820228	古墳後期ピット，土坑
3	2	松野通４丁目	198m²	市営住宅建設	神戸市教育委員会	菅本	820610～820625	弥生時代土坑，溝
4-1	3-1	日吉町２丁目	600m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	川上 阿部 功	960729～960930	縄文晩期～弥生前期流路 鎌倉時代初頭掘立柱建物，井戸，木棺墓 古墳時代後期掘立柱建物，竪穴住居，井戸
4-2			400m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	川上 大西	961009～961111	
4-3			1,400m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	前田 小林	961111～970224	
4-4			100m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	川上	970304～970313	
5-1	3-2	日吉町２丁目	90m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	前田	961203～961226	鎌倉初頭掘立柱建物・古墳後期建物，竪穴住居，井戸
5-2	4-1	日吉町２丁目	468m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	口野	970404～970519	鎌倉初頭掘立柱建物・古墳後期建物，竪穴住居，井戸
6-1	4-2	若松町７丁目	765m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	口野	970506～970626	鎌倉初頭掘立柱建物・古墳後期建物，竪穴住居，井戸
6-2	5-2	若松町７丁目	96m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	口野	981125～981211	鎌倉時代初頭柱穴 古墳時代後期柱穴，溝
7-1	5-1	日吉町２丁目	1,750m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	山本 中居	980728～991113	鎌倉初頭建物，井戸 古墳後期建物，竪穴住居
7-2	5-2	日吉町２丁目	1,650m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	口野	981211～990331	鎌倉初頭掘立柱建物 古墳後期掘立柱建物，溝
8-1	6-1	若松町７丁目	286m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	中居	990414～000428	古墳時代後期溝，土坑
8-2	6-2	日吉町２丁目	88m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	富山	991122～991208	鎌倉初頭掘立柱建物・古墳後期掘立柱建物，竪穴住居
8-3	6-3	若松町７丁目	60m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	中居	000114～000125	中世耕作痕 古墳時代ピット
8-4	6-4	日吉町２丁目	60m²	市街地再開発	神戸市教育委員会	口野	000316～000327	古墳時代ピット
9-1	7-1	若松町６丁目	422m²	市街地再開発	(財)神戸市体育協会	中居	990506～990526	鎌倉時代初頭井戸，ピット 溝
9-2	7-2	若松町６丁目					990816～990824	
9-3	7-3	若松町７丁目	22m²	市街地再開発	(財)神戸市体育協会	口野	000324～000331	古墳時代後期溝

表１　調査次数一覧表　　太線枠内が当報告書掲載分

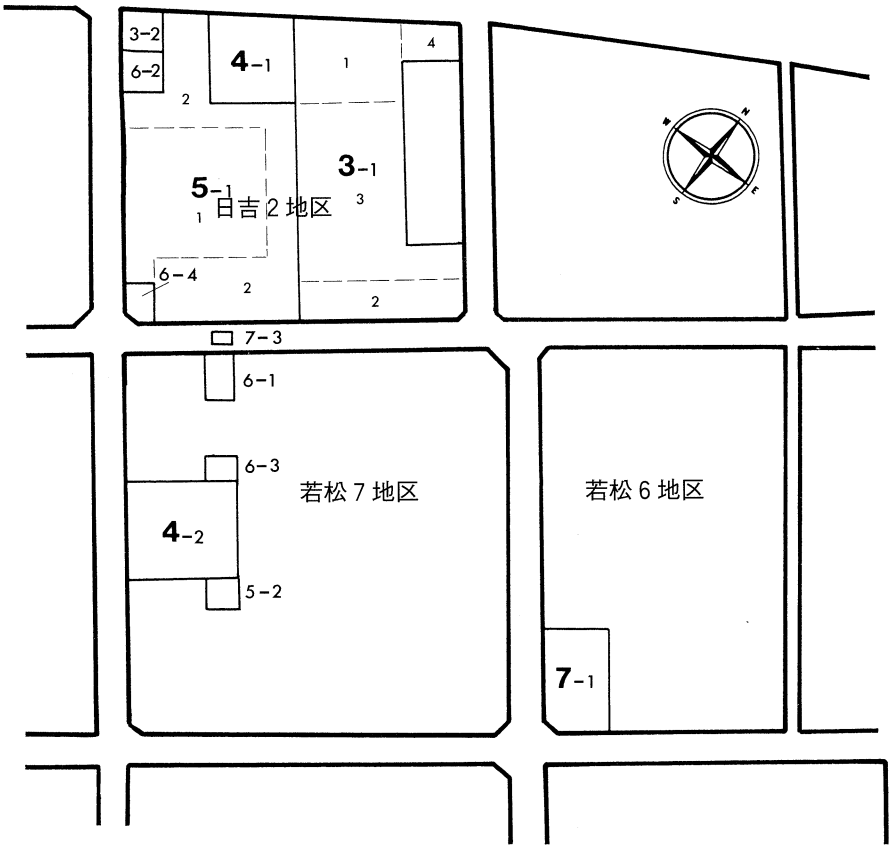


fig. 2　調査地位置図（新次数）
S＝１：2,000

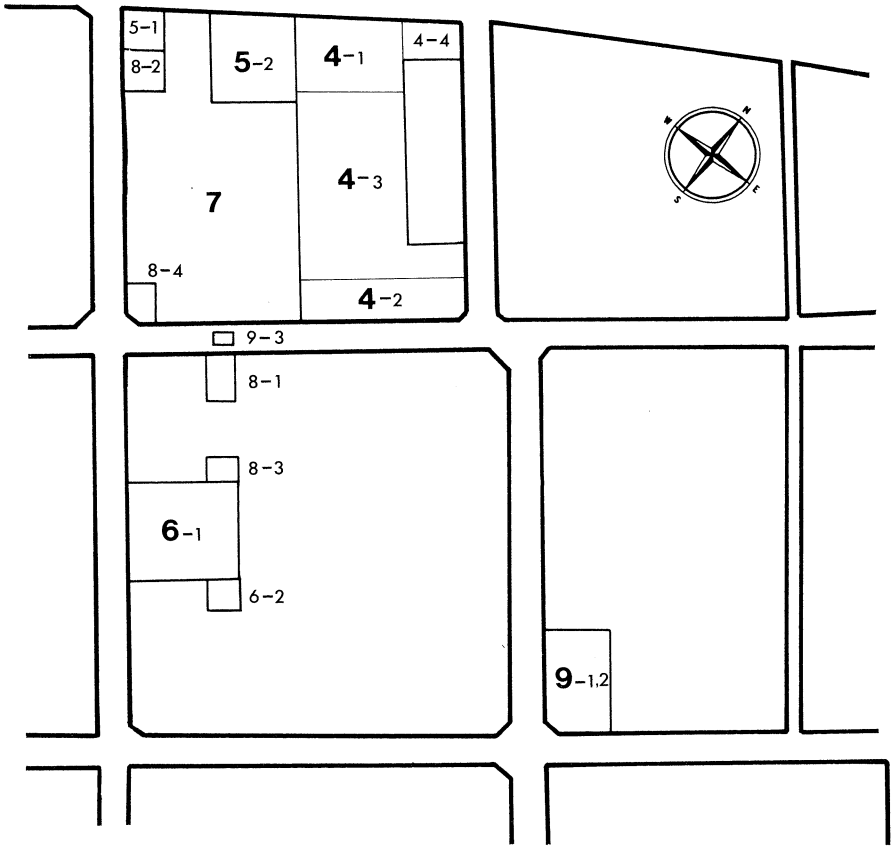


fig. 3　調査地位置図（旧次数）
S＝１：2,000

fig. 4 再開発事業予定地と遺跡範囲
事業予定地：実線・遺跡範囲：破線
S＝1：10,000

2．調査の次数

神戸市域での行政上の発掘調査の件数のみについても、過去数十年の蓄積がある。この蓄積は図らずも、調査地点の詳細な把握による食い違いや、調査団体の相違により齟齬を来す部分があった。

これらの問題点を一掃し、情報開示の準備に備えるべく、部内に作業班を設置し作業を進めている。作業は、市域での既往の調査を精査し且つ網羅し、基本データ化し、整備している。また、平成12年度（2000年度）以降の調査次数については、新次数を用いて報告書などを刊行することとした。

なお、今後の出土品の整理についても遺漏のないよう図るとともに、市民からの問い合わせにより適格に対応できるよう現在作業を進めている。（口野）

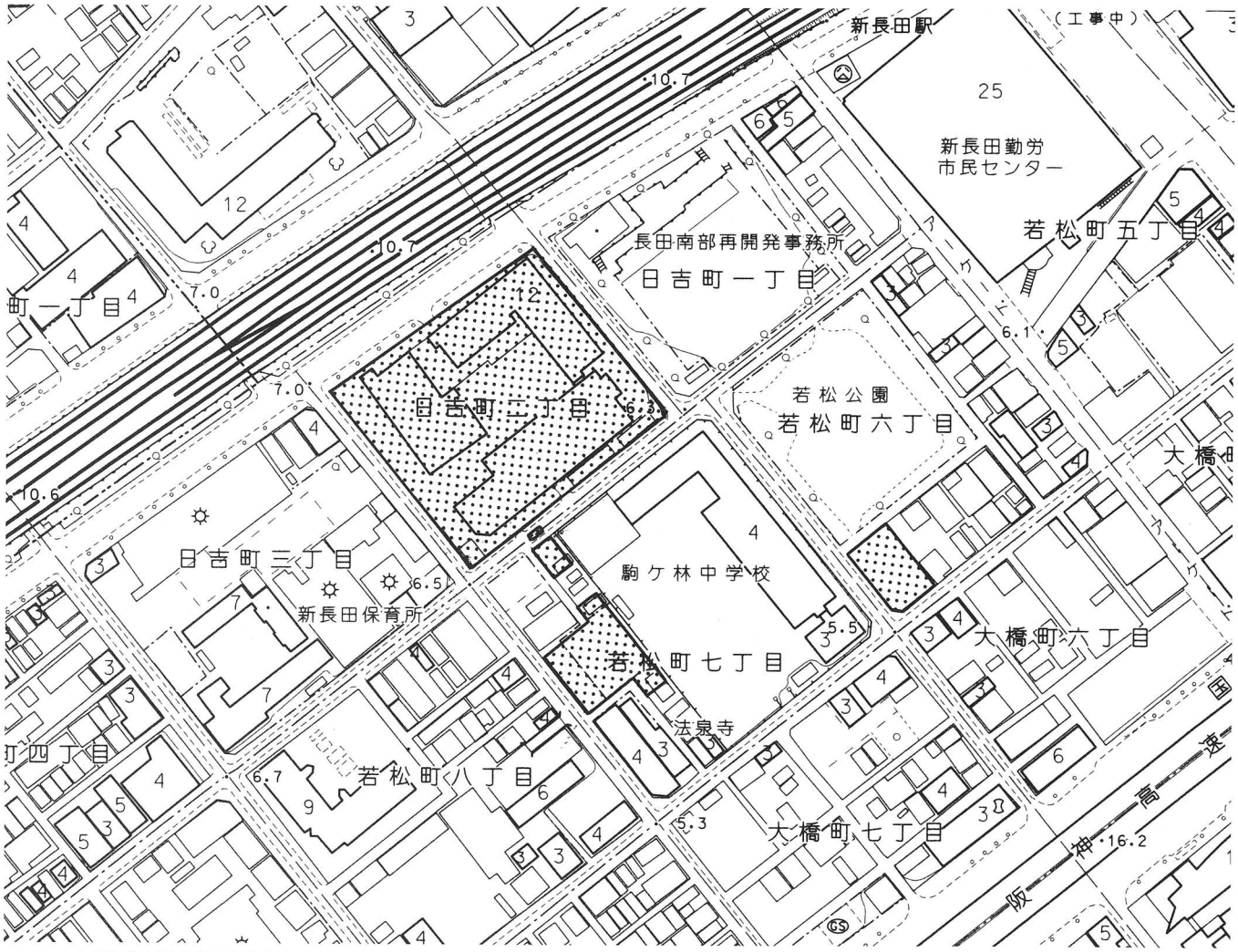


fig. 5 調査地区範囲位置図 S＝1：2,500

３．調査組織

発掘調査の実施は、神戸市文化財専門委員会の指導を得て、下記の調査組織によって実施した。

平成８年度　（第３次調査）

神戸市文化財専門委員会

檀上　重光　神戸女子短期大学教授　　和田　晴吾　立命館大学文学部教授

山岸　常人　神戸芸術工科大学助教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男	社会教育部長	矢野栄一郎	文化財課長	杉田　年章
社会教育部主幹	奥田　哲通	埋蔵文化財係長	渡辺　伸行	文化財課主査	丹治　康明
文化財課主査	丸山　　潔	事務担当学芸員	菅本　宏明	事務担当学芸員	松林　宏典
調査担当学芸員	前田　佳久	調査担当学芸員	川上　厚志	調査担当学芸員	阿部　　功
遺物整理担当学芸員	藤井　太郎	兵庫県復興支援	大西　貴夫	兵庫県復興支援	小林　公治
保存科学担当学芸員	千種　　浩				

平成９年度　（第４次調査）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

檀上　重光　神戸女子短期大学教授　　工楽　善通　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男	社会教育部長	矢野栄一郎	文化財課長	杉田　年章
社会教育部主幹	奥田　哲通	埋蔵文化財係長	渡辺　伸行	文化財課主査	丹治　康明
文化財課主査	丸山　　潔	文化財課主査	菅本　宏明	事務担当学芸員	松林　宏典
事務担当学芸員	橋詰　清孝	調査担当学芸員	口野　博史	遺物整理担当学芸員	佐伯　二郎
保存科学担当学芸員	千種　　浩				

平成10年度　（第５次調査）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

檀上　重光　前神戸女子短期大学教授　　工楽　善通　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男	社会教育部長	矢野栄一郎	文化財課長	大勝　俊一
社会教育部主幹	奥田　哲通	埋蔵文化財係長	渡辺　伸行	文化財課主査	丹治　康明
文化財課主査	丸山　　潔	文化財課主査	菅本　宏明	事務担当学芸員	安田　　滋
事務担当学芸員	東　喜代秀	事務担当学芸員	井尻　　格	調査担当学芸員	口野　博史
調査担当学芸員	山本　雅和	調査担当学芸員	中居さやか	遺物整理担当学芸員	黒田　恭正
保存科学担当学芸員	千種　　浩				

平成11年度　（第６次調査）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

檀上重光　前神戸女子短期大学教授　　工楽善通　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男	社会教育部長	水田　祐次	文化財課長	大勝　俊一
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行	文化財課主査	丹治　康明	文化財課主査	丸山　潔
文化財課主査	菅本　宏明	事務担当学芸員	東　喜代秀	事務担当学芸員	井尻　格
事務担当学芸員	藤井　太郎	調査担当学芸員	富山　直人	遺物整理担当学芸員	平田　朋子
保存科学担当学芸員	千種　浩	保存科学担当学芸員	中村　大介		

（財）神戸市体育協会

会長	笹山　幸俊	副会長	田村　篤雄	専務理事（兼務）	田村　篤雄
常務理事	中野　洋二	常務理事	静観　圭一	総務課長	村田　孝政
総務課主幹	中西　光男	総務課主幹	奥田　哲道	総務課主査	丹治　康明
事務担当学芸員	斎木　巌	調査担当学芸員	口野　博史	調査担当学芸員	中居さやか

平成12年度　（遺物整理）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

檀上重光　前神戸女子短期大学教授　　工楽善通　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	木村　良一	社会教育部長	水田　裕次	文化財課長	大勝　俊一
社会教育部主幹（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	渡辺　伸行				
事務担当学芸員	西岡　誠司	事務担当学芸員	東　喜代秀	事務担当学芸員	橋詰　清孝
埋蔵文化財調査係長	丹治　康明	文化財課主査	宮本　郁雄	文化財課主査	丸山　潔
文化財課主査	菅本　宏明	事務担当学芸員	山口　英正	遺物整理担当学芸員	谷　正俊
保存科学担当学芸員	千種　浩	保存科学担当学芸員	中村　大介		

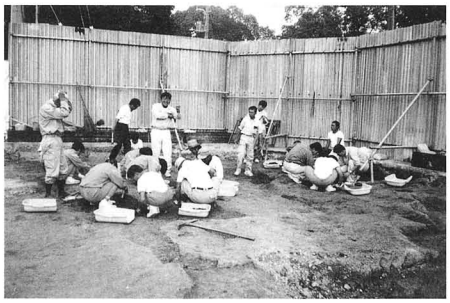
（財）神戸市体育協会

会長	笹山　幸俊	副会長(専務理事事務取扱)	鞍本　昌男	副会長	山田　隆
副会長	家治川　豊	副会長	木村　良一	相談役	加茂川　守
常務理事	静観　圭一	参事	財田　美信	総務課長	前田　豊晴
事業係長	瀬田　吉則	事業係主査(兼務)	丸山　潔	事業係主査(兼務)	菅本　宏明
事務担当学芸員	斎木　巌				

４．調査日誌抄

平成８年度（第３次調査）

平成８年７月29日　調査準備作業開始
3(-1)　８月５日　重機掘削開始
８月20日　包含層掘削　遺構検出
９月10日　航空写真測量全景写真
９月11日　駒ケ林中学校現場見学
（見学者約290名）
９月20日　鎌倉時代井戸検出
９月30日　埋戻し作業完了
3(-2)　10月９日　重機掘削開始
県復興班 大西貴夫 調査合流
10月22日　駒ケ林中学校体験発掘(約100名)
包含層掘削　遺構検出



挿図写真１
中学校体験発掘
調査作業風景

11月５日　遺構平面実測
11月６日　航空写真測量全景写真
11月11日　現場作業終了
3(-3)　11月11日　重機掘削開始
11月13日　県復興班 小林公治 調査合流
11月29日　遺構検出作業
平成９年１月10日　遺構平面実測
１月20日　『災害から文化財を守る』
神戸大会国際シンポジウム参加
者調査現場見学約50名

挿図写真２
『国際シンポジウム』
参加者現地見学
風景

１月29日　航空写真測量
２月２日　現地説明会（見学者約410名）

挿図写真３
現地説明会風景

２月６日　柱穴断ち割り作業
２月24日　埋戻し作業　現場作業終了
3(-4)　３月４日　重機掘削開始
３月12日　航空写真測量全景写真
３月13日　現場作業終了
平成８年12月３日　調査開始　重機掘削
3-2　12月10日　包含層掘削　遺構検出
12月19日　航空写真測量平面実測
12月26日　埋戻し作業　現場作業終了

平成９年度（第４次調査）

平成９年４月４日　調査開始　重機掘削
4-2　４月14日　包含層掘削　遺構検出
５月１日　航空写真測量全景写真
５月19日　埋戻し作業　現場作業終了
平成９年５月６日　調査開始　重機掘削
５月21日　包含層掘削　遺構検出
５月27日　駒ケ林中学校体験発掘(約100名)
６月13日　遺構平面実測
６月17日　航空写真測量
６月26日　埋戻し作業　現場作業終了

平成10年度（第５次調査）

平成10年７月28日　調査準備作業開始
5-1　８月19日　包含層掘削　遺構検出
赤塚山高校体験学習９名
９月17日　航空写真測量全景写真
９月18日　断ち割り作業
部分的に第２遺構面が存在
10月12日　重機掘削開始
10月22日　包含層掘削　遺構検出
駒ケ林中学校体験発掘(約70名)
11月10日　航空写真測量　断ち割り作業

挿図写真４
中学校体験発掘
調査作業風景

5-2　11月24日　重機掘削開始
　　12月１日　全景写真
　　12月４日　航空写真測量　断ち割り作業
　　12月11日　埋戻し作業　現場作業終了
5-1　12月11日　重機掘削開始
　　12月28日　遺構検出　遺構検出状況写真
平成11年１月21日　調査地区拡張重機掘削
　　２月５日　航空写真測量
　　２月10日　重機掘削開始
　　２月16日　重機掘削　包含層掘削
　　A,B－3,4区臼玉類多数出土
　　３月２日　重機掘削遺構掘削平面実測
　　３月９日　航空写真測量
　　３月13日　地元現地説明会（見学者90名）

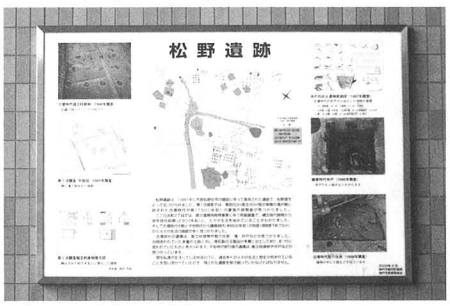
挿図写真５
地元説明会風景

　　３月17日　遺構掘削平面実測
　　３月24日　航空写真測量全景写真
　　３月31日　現場撤収

挿図写真６
日吉２再開発
ビル内遺跡
説明看板

平成11年度（第６・７次調査）

平成11年４月14日　調査開始　重機掘削
6-1　４月22日　航空写真測量　断ち割り作業
　　４月22日　埋戻し作業　現場作業終了
6-2　11月22日　調査開始　重機掘削
　　12月１日　遺構検出掘削
　　12月６日　航空写真測量　全景写真
　　12月８日　埋戻し作業　現場作業終了
平成12年１月13日　調査開始　重機掘削
6-3　１月20日　航空写真測量　全景写真
　　１月25日　埋戻し作業　現場作業終了
6-4　３月16日　調査開始　重機掘削
　　３月24日　航空写真測量　全景写真
　　３月31日　現地資材撤収作業
平成11年５月６日　調査開始　重機掘削
7-1　５月17日　全景写真
　　５月26日　埋戻し作業　現場作業終了
7-2　８月12日　調査準備作業開始
　　８月23日　全景写真　平面実測
　　８月24日　埋戻し作業　現場作業終了
平成12年３月24日　調査開始　重機掘削
7-3　３月29日　全景写真　平面実測
　　３月31日　現況復旧作業完了



挿図写真７
日吉２再開発
ビル内遺跡
説明看板

挿図写真８
日吉２再開発
ビル完成状況
（2000年10月撮影）

第３節　遺跡の立地と歴史的環境

自然環境　松野遺跡は、六甲山に起因する土砂や一部大阪層群から流出した土砂によって形成された、沖積地に立地する遺跡である。地形は、北西方向から南東方向に徐々に下がる緩斜面地で、標高約７ｍ前後の沖積地上に立地する遺跡である。地形としては、妙法寺川と苅藻川が形成した複合扇状地末端部から自然堤防帯に位置する(1)。また阪神・淡路大震災の被害状況からも軟弱な地盤に立地していることが言える。

歴史的環境　次に松野遺跡を取り巻く歴史的環境について、周辺の主要な遺跡とともに略述する。

旧石器時代や縄文時代の遺跡は周辺地域では少なく、現状では断片的な資料をつなぎ合わせるような状況である。松野遺跡の北東約2.5㎞の会下山遺跡(2)でナイフ型石器が採集されており、北約2.5㎞の名倉遺跡(3)で縄文時代中期の土器などが採集されている。

縄文時代晩期末から弥生時代前期頃なると遺跡数がやや増加してくる。人々の土地利用の方法が変化する時期と符合するようである。この時期の主要な遺跡をあげると、戎町遺跡(4)・長田神社境内遺跡(5)・五番町遺跡(6)・三番町遺跡(7)・上沢遺跡(8)・大開遺跡(9)・楠・荒田町遺跡(10)などをあげることができる。これらの遺跡は、突帯文土器と弥生前期の土器を共伴する遺跡で、当地域での縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての大きな変革期の状況を理解するうえで重要である。

大開遺跡は環濠集落で、環濠は一度の拡張が確認されている。戎町遺跡は、前期の水田および未製品を含む広鍬などの木製品・磨製石包丁などが検出されている。また、松野遺跡(11)も試掘調査時に木葉文を持つ土器が出土し、第１次調査当初は弥生時代の遺構が検出されるものと考えられていたが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。

弥生時代中期は当地域では、前期から継続する戎町遺跡・楠・荒田町遺跡などを除き、遺跡数は増加しない。

弥生時代の後期では、松野遺跡(12)・神楽遺跡(13)・長田神社境内遺跡などがあげられる。遺跡数がやや増加する傾向があるようである。

古墳時代前期には、鷹取町遺跡(14)・若松町遺跡(15)・三番町遺跡などの集落で生活が始まる。戎町遺跡は前期頃までは継続するが、中期以降集落は途絶える。長田本庄町遺跡(16)の周辺にもこの時期の生活の痕跡を見出すことができる。

古墳時代中期になると、神楽遺跡・三番町遺跡(17)・上沢遺跡(18)などがあげられ、いずれも竪穴住居と掘立柱建物によって構成される集落である。

神楽遺跡では韓式系土器や算盤玉形滑石製紡錘車が出土している。三番町遺跡では、小型青銅鏡が大溝から出土している。上沢遺跡では、大壁造建物や韓式系土器、大量の滑石製玉製品などが検出されている。

古墳時代後期の集落では、鷹取町遺跡・湊川遺跡(19)・楠・荒田町遺跡などの遺跡があげられる。

周辺の前期古墳では、西から得能山古墳・会下山二本松古墳・夢野丸山古墳が知られている。これらの古墳は近接した時期と考えられ、また、妙法寺川・苅藻川・旧湊川とそれぞれの水系毎に古墳が築造されているように考えられる。

得能山古墳(20)は、標高約50ｍの丘陵上に存在する竪穴式石室を埋葬施設とする古墳で

1．松野遺跡
2．二葉町遺跡
3．長田野田遺跡
4．長田本庄町遺跡
5．若松町遺跡
6．鷹取町遺跡
7．千歳町遺跡
8．大田町遺跡
9．戎町遺跡
10．神楽遺跡
11．御船遺跡
12．御蔵遺
13．三番町遺跡
14．五番町遺跡
15．長田神社境内遺跡
16．上沢遺跡
17．室内遺跡
18．林山窯
19．大開遺跡
20．湊川遺跡
A．念仏山古墳
B．得能山古墳
C．会下山二本松古墳
D．夢野丸山古墳

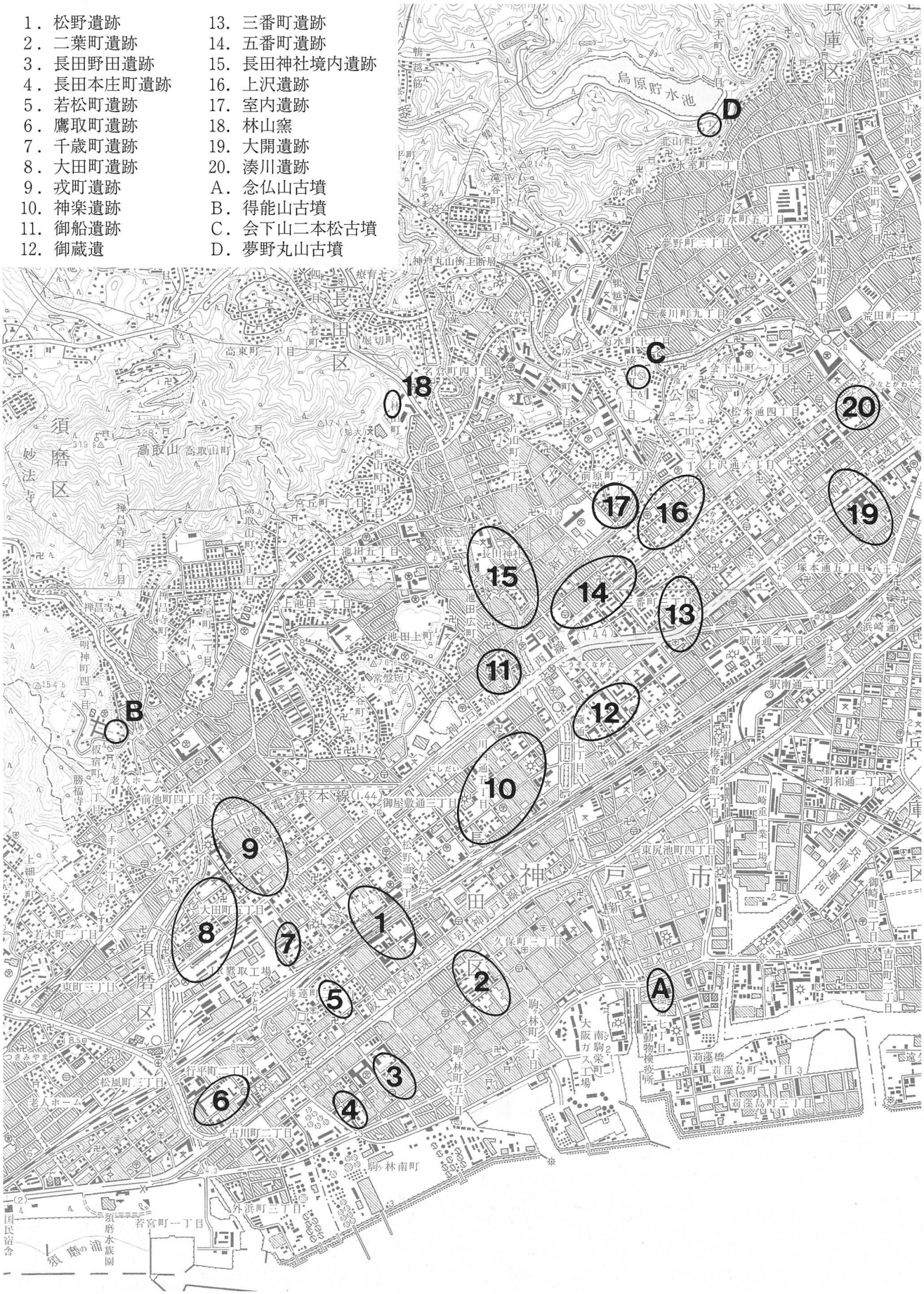


fig.6 周辺関連遺跡分布図

ある。工事中の発見であったためその詳細については不明である。埋葬施設から画文帯神獣鏡と内行花文鏡が出土している。会下山二本松古墳[21]は、標高約85mの丘陵上に存在する全長約50mの前方後円墳である。竪穴式石室から銅鏡・直刀・琴柱形石製品などが出土している。夢野丸山古墳[22]は、標高約110mの丘陵上に存在する直径約20mの円墳である。竪穴式石室から重列式神獣鏡・直刀などの鉄製品が出土している。

中期の古墳では、念仏山古墳[23]が知られている。鰭付円筒埴輪の出土が知られ、地形等から砂堆上に築造された全長100mを越す前方後円墳であると言われている。

後期古墳については[24]は、丘陵上や苅藻川沿いにその分布が知られるが、現状ではその実態を知る手掛かりは少なく、名称のみが伝承するものも多い。

そのほかに、高取山東中腹に位置する林山古窯[25]がある。採集された須恵器から６世紀後半に操業していた窯である。

古墳時代を概観して、ほぼ同時期に存在した集落があれば、ある期間途絶えたかのような集落もある。また、ひとつの要素として外来的な遺物が出土する集落があれば、そうではない集落も存在する。やや乱暴に述べればこれらの集落が、離合集散を繰り返しつつ、一定の地域毎に集落を形成していったと考えられる。

これに続く飛鳥時代は、発掘調査中に断片的にその資料が知られる程度である。

奈良時代には、古墳時代を中心に形成された集落を縫うようにして山陽道が築造され、この地域の陸上と海上の交通路がより充実していく。この時期の遺跡として、長田野田遺跡[26]・大田町遺跡[27]・神楽遺跡[28]・御蔵遺跡[29]・上沢遺跡などがあげられる。

そして平氏政権によって大輪田の泊が修築される前後の時期からさらに遺跡数は増加していく。平安時代末から鎌倉時代にかけての集落は、戎町遺跡・若松町遺跡・二葉町遺跡・長田野田遺跡・御船遺跡[30]・御蔵遺跡・長田神社境内遺跡・上沢遺跡・大開遺跡[31]・兵庫津遺跡[32]などがあげられる。そして、これらの集落が基礎となって近世へ移行していくようである。（口野）

挿図写真９
第１次調査地点と日吉２地区
（1982年１月撮影・北西から）

（註）（1） 藤田和夫・笠間太郎「六甲山地とその周辺の地形」神戸市企画局　1971．高橋学「戎町遺跡の地形環境―湊川・妙法寺川流域の地形環境Ⅰ―」『戎町遺跡第１次発掘調査概報』　神戸市教育委員会　1989

（2） 神戸市立考古館　『縄文人のくらし』　1979

（3） 直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古文化叢考』　1943

（4） 山本雅和編『戎町遺跡第１次発掘調査概報』　神戸市教育委員会　1989

（5） 黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会　1990

（6） 丸山潔・丹治康明「五番町遺跡出土の土器」『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1980、松林宏典『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1997

（7） 口野博史・水嶋正稔『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1994

（8） 阿部敬生・口野『上沢遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1995

（9） 前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1993

（10） 丸山潔・丹治康明『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1980

（11） 千種浩『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1983

（12） 千種編『松野遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会　1983

（13） 菅本宏明『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1986．渡辺伸行・西岡誠司『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1987．河道から弥生時代中期等の土器が出土している

（14） 大平茂編『神戸市鷹取町遺跡』　兵庫県教育委員会　1991

（15） 山田清朝・高木芳史『若松町遺跡』　神戸市教育委員会　2000．神戸市教育委員会『若松町遺跡第２次調査見学のしおり』　1998

（16） 岡田章一・久保弘幸『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2000

（17） 妙見山麓遺跡調査会『神戸市長田区三番町遺跡現地説明会資料』　1987

（18） 富山直人・斎木巌『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1999．斎木・池田毅『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2000

（19） 西岡巧次『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1989

（20） 梅原末治「神戸市板宿得能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯　1925

（21） 吉井太郎他「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯　1923．黒田『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1987

（22） 梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯　1925

（23） 喜谷美宣「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『神戸市立博物館研究紀要』第６号　神戸市立博物館　1989

（24） 森田　稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『博物館だより』No.23　神戸市立博物館　1988．本村豪章「古墳時代の基礎研究稿」『東京国立博物館紀要』16　東京国立博物館　1981

（25） 稲沢正行・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』　３－１　1986

（26） 兼康保明・小林健二『平成７年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1998

（27） 吉川義彦『大田町遺跡発掘調査報告』関西文化財調査会大田町遺跡調査団　1994．口野・川上厚志『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1994．森内秀造・山上雅弘編　兵庫県文化財調査報告第128冊『神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書－神戸市大田郵便局等新築工事に伴う発掘調査報告書－』兵庫県教育委員会　1993．山口英正・東喜代秀『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1997

（28） 菅本『神楽遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1981

（29） 山口・関野豊『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2000

（30） 東『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999．池田『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2000

（31） 富山『平成４年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1995

（32） 兼康・中山・鐵・菊地・神野・半澤・大川・富山・阿部功他『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1999

第２章　調査の概要

第１節　調査の概要

当報告の発掘調査面積は8277㎡である。主な調査成果を略記すると、縄文時代晩期から弥生時代前期の流路、弥生時代後期の溝がそれぞれ１条が検出された。古墳時代では、中期の掘立柱建物25棟・竪穴住居10棟・井戸８基や溝・落ち込み状遺構多数が検出された。また、多数の土師器・須恵器とともに滑石製品が多量に出土した。平安時代末から鎌倉時代初めころの遺構では、掘立柱建物７棟・井戸10基・木棺墓などが検出された。

当調査で検出された遺構面は基本的に１面である。つまり、古墳時代の遺構と中世の遺構は同一面で検出される。また、遺構面を構成する層は一様ではなく、粘土層や砂層・砂礫層が不規則にあらわれる。この遺構面の砂礫層に縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺物を含む部分があり、これが部分的に自然流路状の堆積をなす。

遺構番号は、上記のように古墳時代以前を100番台、古墳時代を200番台、平安時代後期～鎌倉時代を300番台として以下記述する。（口野）

第２節　基本層序

調査対象地は北西から南東方向に徐々に下がる地形である。日吉２地区[1]での遺構面の最高所の標高は7.1mで、南端部の遺構面の標高は6.5mである。若松６地区の南端部の遺構面の遺構面は5.9mである。

因みに第１次調査での遺構面の最高所の標高は8.2mである。これはＪＲ山陽本線を挟んで南北約１mの標高差があり、第１次調査の遺構面が周辺より一段高いことがわかる。現状でも松野通４丁目の南辺の道路は東西が低く尾根状に中央が高くなっている。

各調査区の土層堆積状況の詳細は、各章の基本層序の項に記してあるのでそれに譲り、ここでは、層序の概略を述べることとする。それぞれの調査区の層序は、概ね現代盛土層・黄色砂層（中世洪水層）・茶褐色泥砂層（古墳時代遺物包含層）・黄褐色の砂層から粘土層の遺構面となる。前節でも述べたが、古墳時代と中世の遺構は同一面で検出される[2]。

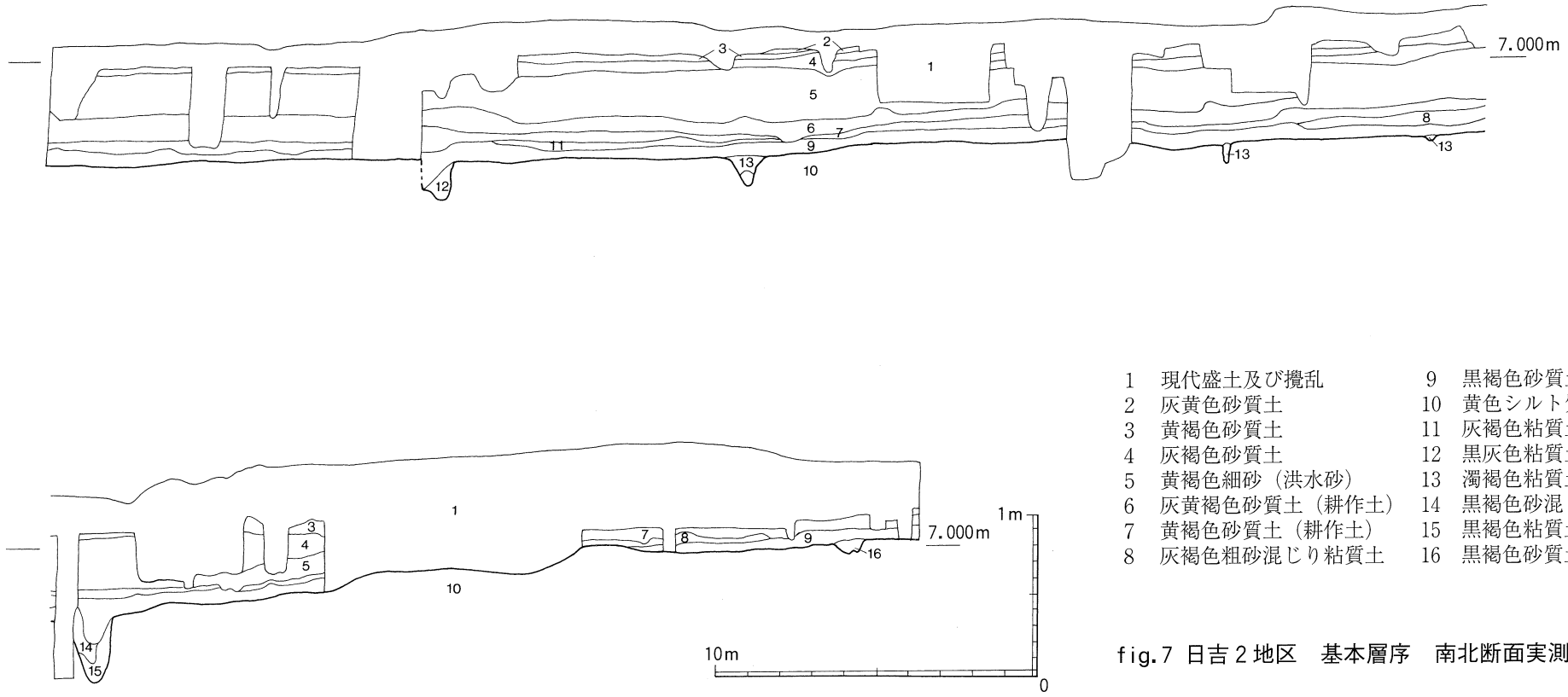
古墳時代遺物包含層は全面にはなく、部分的に存在しない箇所もある。遺物包含層の上面や、遺構面に中世の耕作痕が部分的に検出される。

遺構面の下層は、それぞれの調査区で深い井戸や撹乱坑の断面を利用しながら、下層の遺構面の有無を確認する作業を行った。また、部分的に遺構面の断ち割り作業を実施した。

４－１区では、撹乱坑底面で土壌化層と観察される層が存在した。このため土壌のサンプル採取を行い、プラント・オパール分析を実施し、分析によって下層の生活面の有無を確認した（第６章第５節参照）。弥生時代前期以前の堆積状況は、fig.15などに示すように、0.1～0.3m前後の厚さで順次堆積を繰り返していったようである。（口野）

（註）（１）当報告の調査対象地は大きく３ケ所に分かれる。以下、日吉町２丁目地区・若松町６丁目地区・若松町７丁目地区をそれぞれ日吉２地区・若松６地区・若松７地区と略記する。（fig.５参照）

（２）遺構面は現在の生活面から深い所でも１mに満たない深さに存在し、現代の生活による撹乱を多く受けている。このため、遺構平面図には煩雑さを避けるため、撹乱坑の描線を基本的には省略した。



1　現代盛土及び攪乱
2　灰黄色砂質土
3　黄褐色砂質土
4　灰褐色砂質土
5　黄褐色細砂（洪水砂）
6　灰黄褐色砂質土（耕作土）
7　黄褐色砂質土（耕作土）
8　灰褐色粗砂混じり粘質土
9　黒褐色砂質土（包含層）
10　黄色シルト質極細砂
11　灰褐色粘質土
12　黒灰色粘質土
13　濁褐色粘質土
14　黒褐色砂混じり粘質土
15　黒褐色粘質土
16　黒褐色砂質土

fig.7 日吉２地区　基本層序　南北断面実測図

第３章　日吉町２丁目地区の調査

第１節　調査の概要

日吉２地区は、当報告での最もまとまった調査地区である。しかしながら、調査は４年度に渡り、10数区の小区画での調査を繰り返した接合結果である。

基本層序は、前章で述べたとおりで、古墳時代の遺物包含層は良好な状態では遺存していなかった。中世の洪水砂からは少量の土師器・須恵器などが出土した。遺物包含層上面および遺構面では、中世の耕作痕が部分的に検出された。

基本層序から遺跡の時代変遷を簡略に述べると、まず弥生時代後期までに堆積を繰り返して形成された遺構面に古墳時代の集落が営まれる。次に、平安時代末ころから鎌倉時代初めころの集落が営まれる。古墳時代から平安時代末の間については、調査結果から述べる材料はない。この後、鎌倉時代初め以降の時期に発生した何度かの洪水により、現在の地表面に近い高さまで堆積土が覆うことになるようである。この洪水砂層が戦前までは水田や畑として利用されていたようである。

古墳時代と中世の遺構は、ほぼ同一遺構面で検出され、この遺構面に部分的に、古墳時代以前の遺物を含む堆積層が検出された。(口野)

遺物包含層の遺物　(８～12)は暗褐色細礫～小礫混じり砂質土からまとまって出土した須恵器で、坏蓋・坏身・高坏蓋がある。(13)は完形の釣鐘形の土師器飯蛸壺で、底径3.0cm、器高7.3cm、紐孔径1.2cmで、ナデあるいは指頭圧痕で仕上げられる。

(14～18)はいずれも滑石製の玉製品である。(14)は淡白赤色で、２ケの丸みをもつ突起が削り出されており、大型の子持勾玉片と考えている。右面は平滑に仕上げられるが、左面は細かい凹凸が顕著である。最大幅2.5cm、残存長5.2cm、厚さ1.3cm。(15)は勾玉と考えられ、ほぼ全面に研磨痕が明瞭に遺存する。(16)は勾玉未製品か、(17)は細かく縦方向に面取りされた濃緑灰色の棒材で、両端面も丁寧に面取りされる。長さ2.3cm、直径５mm。(18)は剣形模造未製品で、側面の研磨は全く行われていない。(山本・中居)

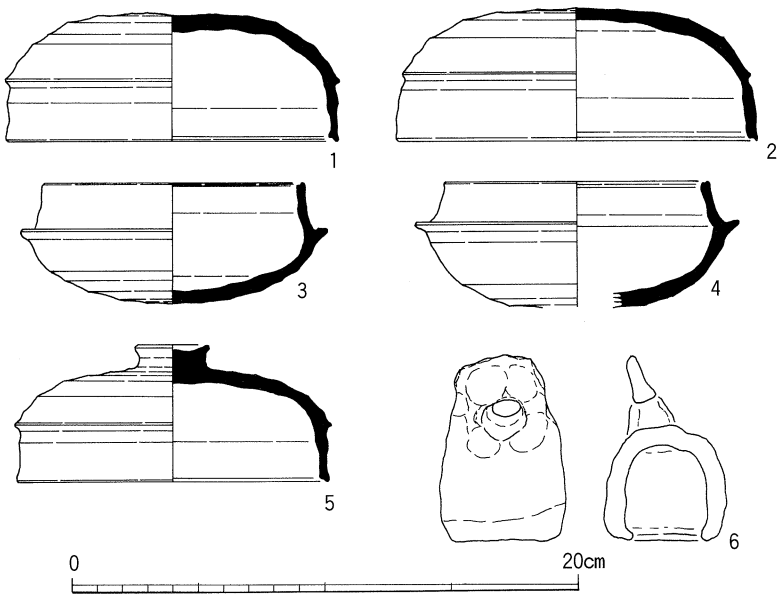


fig.8　遺物包含層出土土器実測図

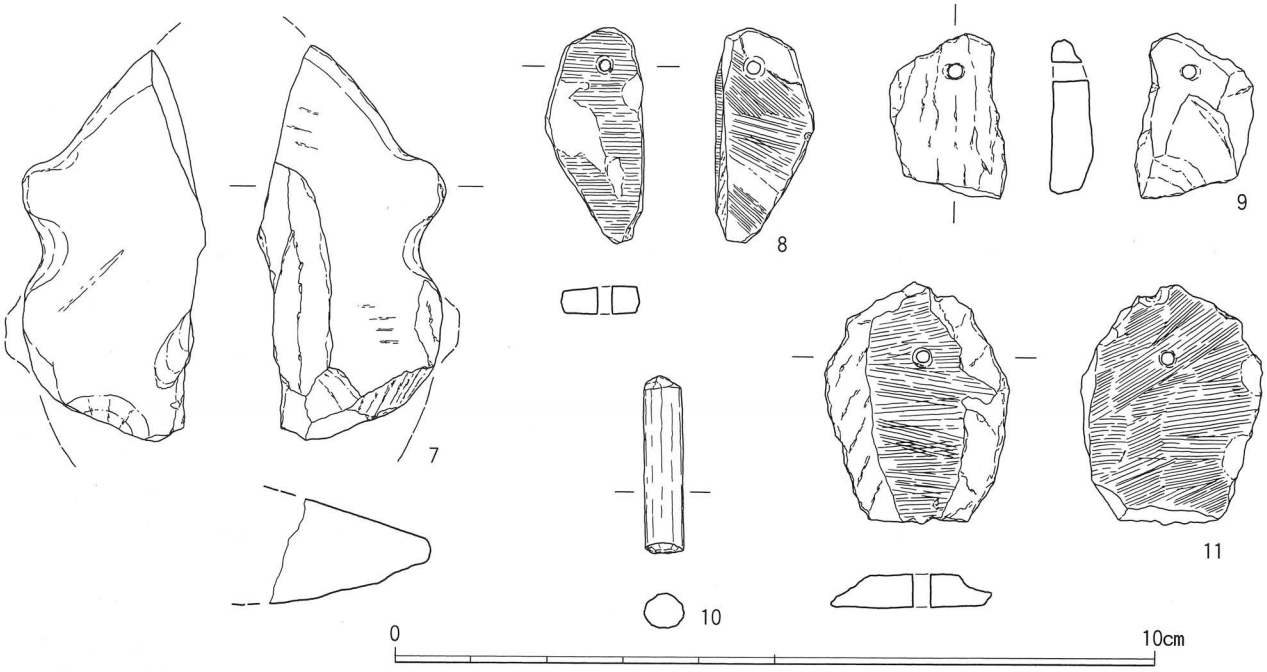


fig.9　遺物包含層出土玉類実測図

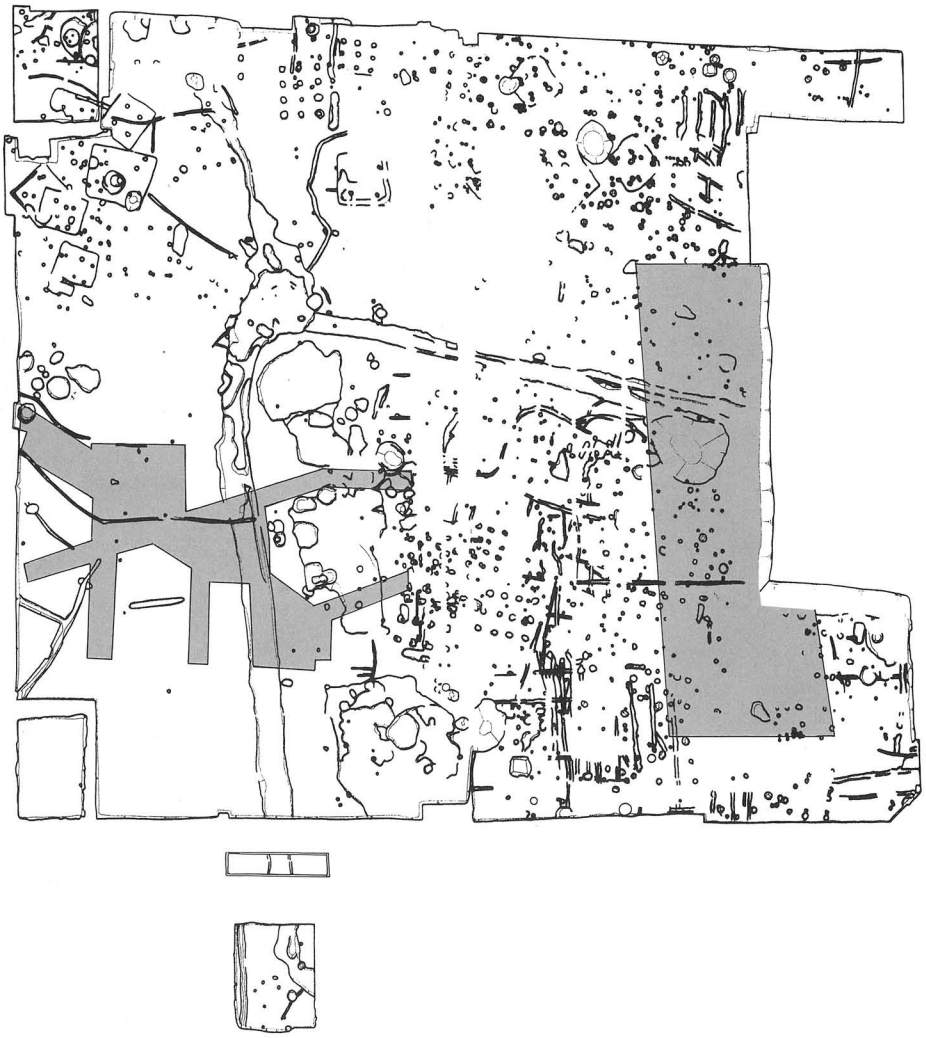


fig.10　縄文・弥生時代遺構検出範囲図　　S＝1：750

第２節　古墳時代以前の遺構と遺物

調査区の北西部あるいは東部では、遺構面を部分的に切って縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を含む自然流路状の堆積が存在した。また、西南側では黄色粘土質の遺構面の下層から微量ではあるが、弥生時代後期の土器を含む層が存在する。この層を掘削した面に溝状遺構が検出される。

北西部の古墳時代の遺構面を形成する層は、黄色の粘土質層がその大部分を占める。この面を切る小礫を含む黄褐色砂層からは、微量の突帯文土器と弥生時代前期土器が出土した。この堆積層は溝状には形成されず、不整形なものとなるため、自然堆積層と考えられる。（口野）

ＳＤ101　東部では、南北約50mに渡って、幅約７～10m、深さ１mの北西方向から南西方向へ流れる自然流路状の遺構が検出された。流路内からは突帯文土器・弥生時代前期土器・凹石が出土した。また、流路中央底面で、偶蹄目の足跡が検出された。（口野・前田）

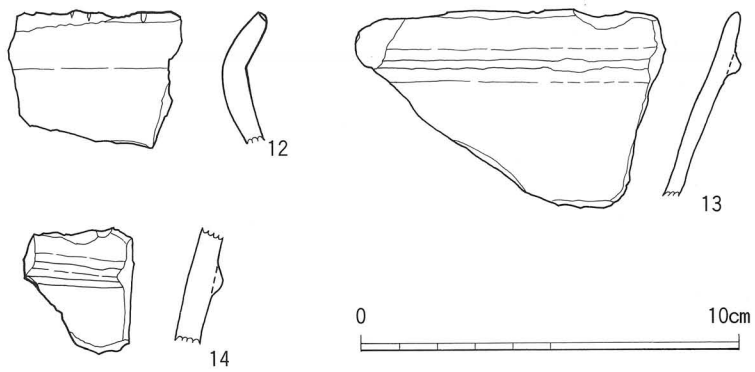
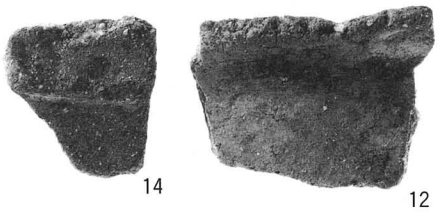
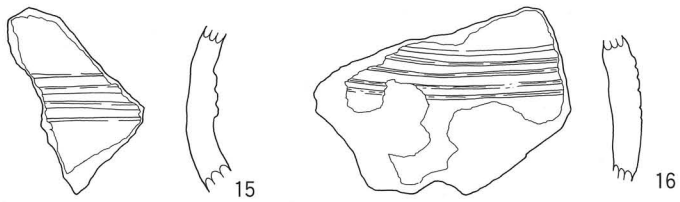


fig.11　北西部断割地区出土遺物実測図



挿図写真10　北西部断割地区出土遺物



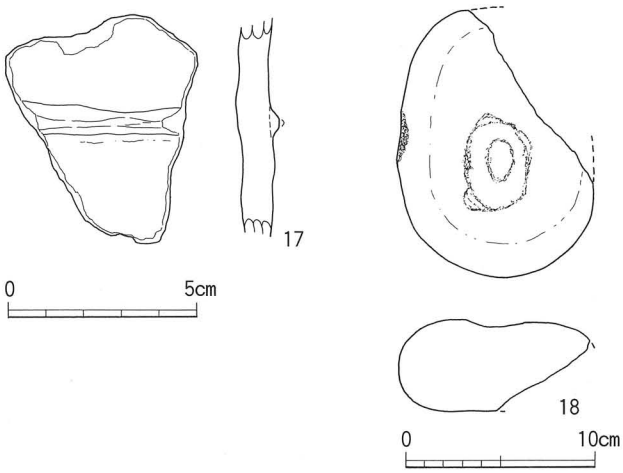
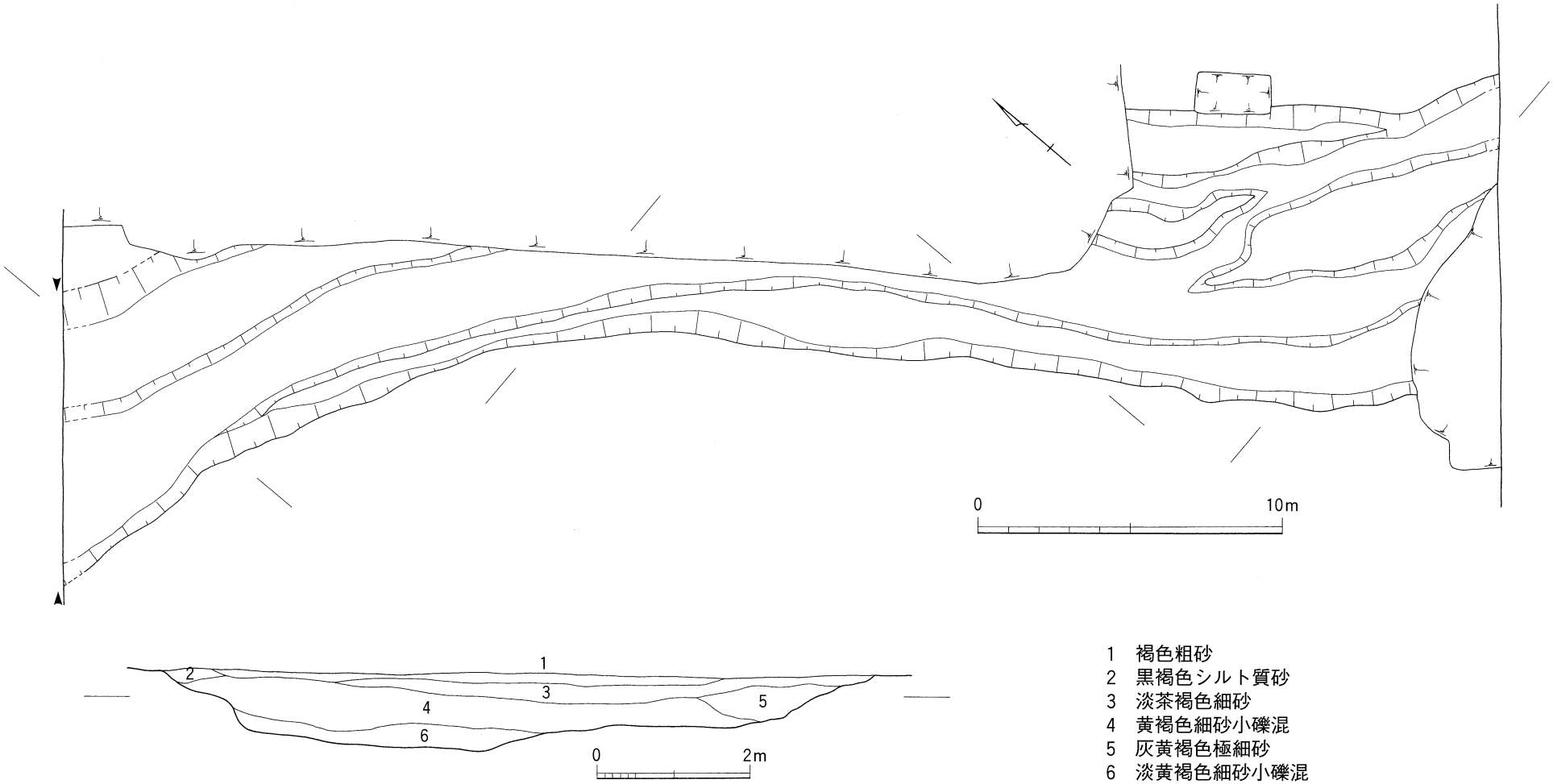


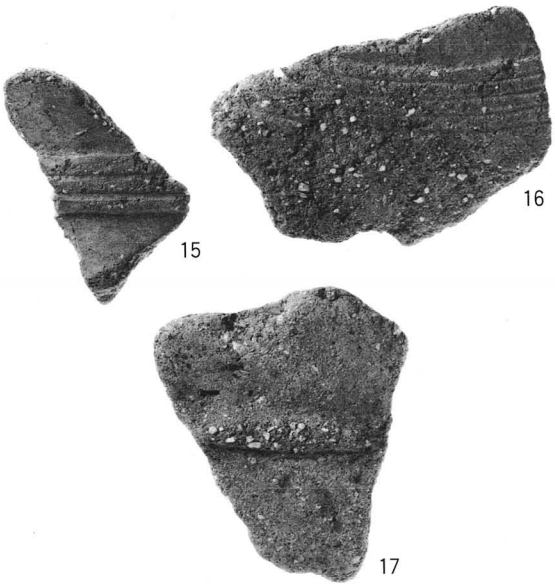
fig.12　ＳＤ101 出土遺物実測図

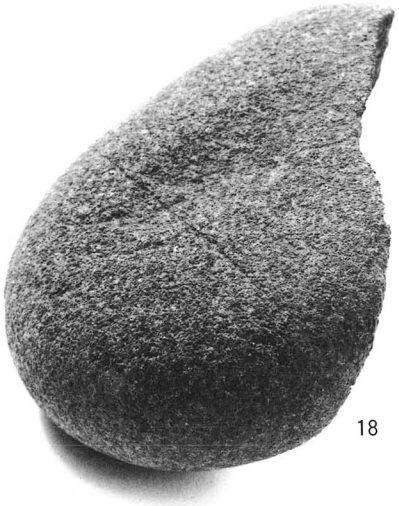


1　褐色粗砂
2　黒褐色シルト質砂
3　淡茶褐色細砂
4　黄褐色細砂小礫混
5　灰黄褐色極細砂
6　淡黄褐色細砂小礫混

fig.13　ＳＤ101 平面・断面図

挿図写真11
　ＳＤ101 検出状況（北から）





挿図写真12　ＳＤ101 出土遺物

第２遺構面　日吉２地区の南西部分の調査対象地区のほぼ中央を占める地点では、第１遺構面の下層についても調査を実施した。

ＳＤ102　北東から南西に向けて幅２ｍ、長さ40ｍの調査区を設定して、断ち割り調査を実施したところ、中央付近の暗灰褐色極細砂混じりシルト層の上面で、幅0.2ｍ深さ0.1ｍの溝状遺構が確認できた。この遺構の拡がりを確認するため、さらに調査区を順次拡張していった結果、白灰色シルトを埋土とするＳＤ102が東西方向に総延長約38ｍで、わずかに蛇行しながら延びるものであることが判った。しかし、溝内の埋土からは出土遺物が全く確認できず、遺構面となる暗褐灰色極細砂混じりシルトの上面でも、周囲に他の遺構も確認できておらず、現状では生活面とは判断していない。直上層にあたる

挿図写真13　ＳＤ102（西から）

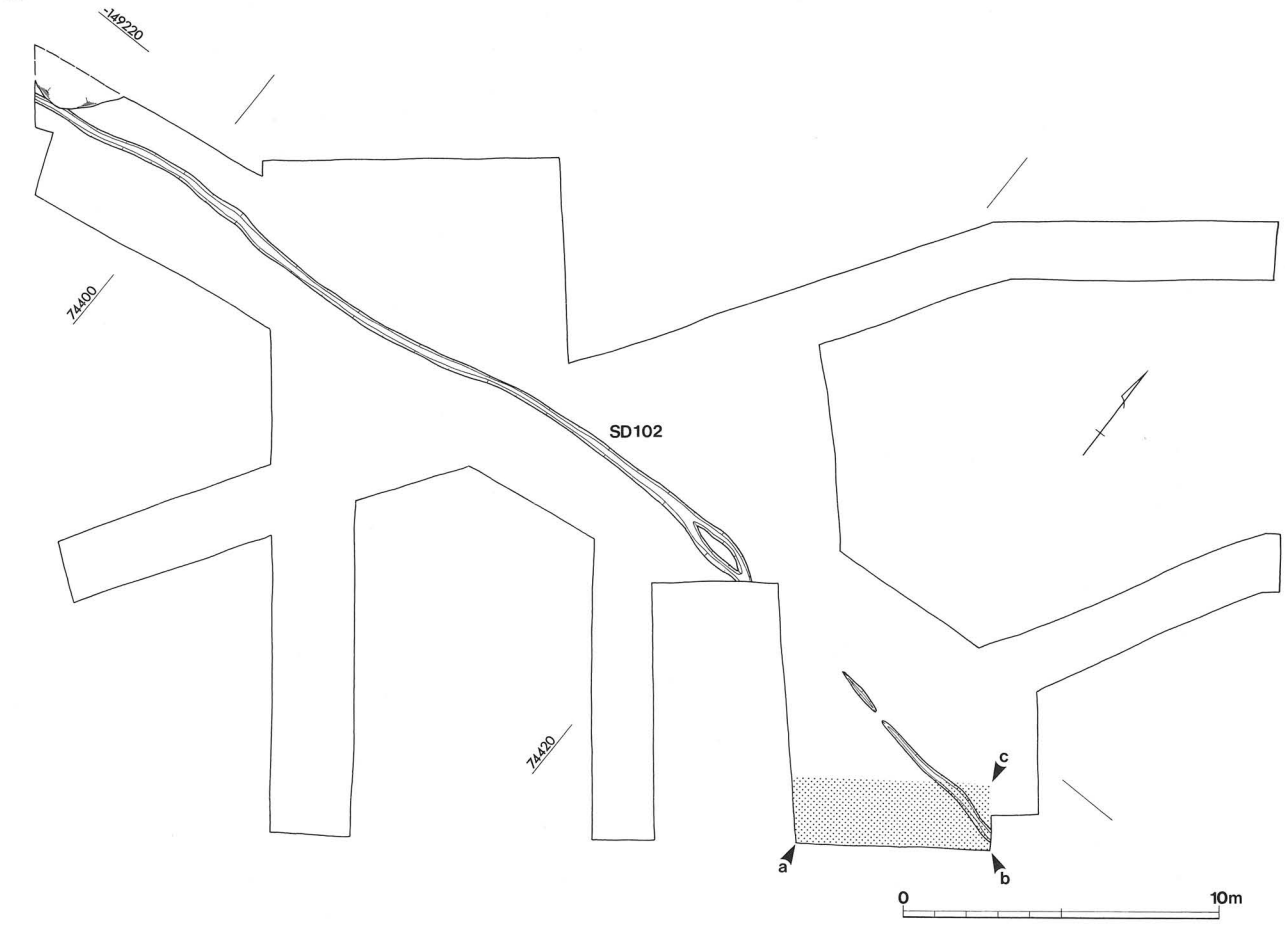


fig.14　南西部　断割調査区およびＳＤ102 平面図

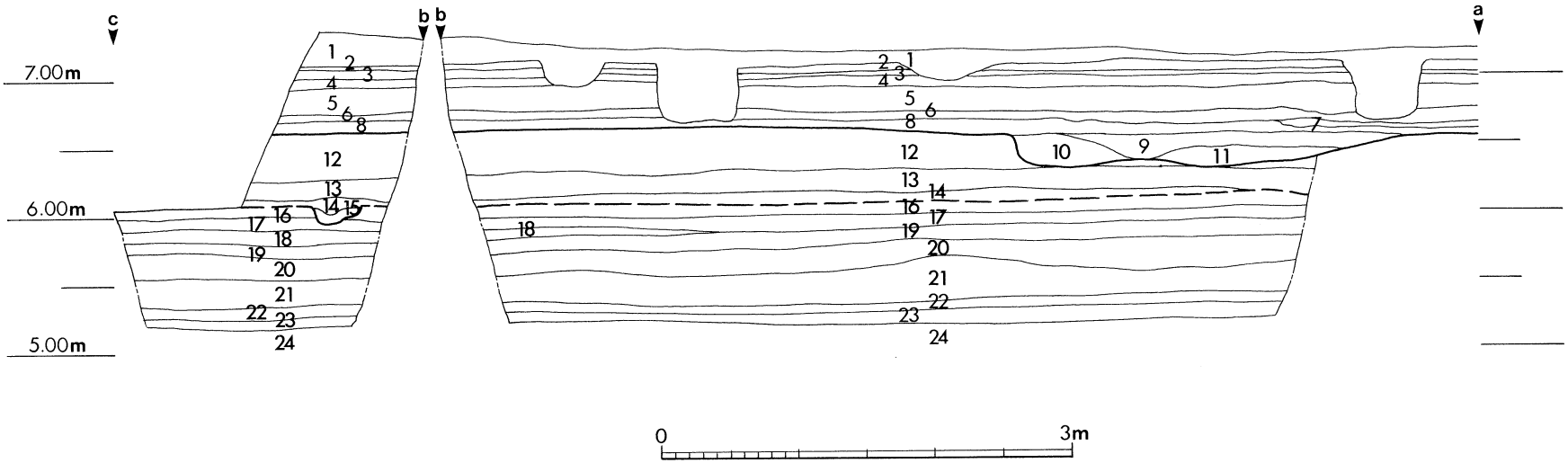


fig.15　南西部遺構面断割土層断面図

1　盛土・攪乱
2　褐灰色シルト質細砂（旧耕土）
3　乳黄色シルト質細砂～中砂（旧耕土）
4　淡黒灰色シルト質細砂（旧耕土）
5　淡褐灰色わずかにシルトを含む極細砂～細砂
6　淡乳灰色シルト混じり細砂（13世紀前半の土器を含む）
7　暗乳灰色シルト質細砂（細礫混じり）
8　暗褐色細礫を含むシルト質極細砂（古墳時代後期の遺物包含層）
9　黒褐色細砂～細礫を含むシルト
10　褐色シルト質極細砂
11　黒褐色わずかに細礫を含むシルト
　　｝ＳＤ204埋土
12　乳黄色シルト質極細砂
13　黄白色粘土
14　淡乳黄色シルト
15　灰色シルト（指頭大の黄白色粘土のブロック多し）ＳＤ102埋土
16　暗褐灰色極細砂混じりシルト
17　黄白色シルト
18　暗褐灰色極細砂混じりシルト
19　暗褐灰色極細砂混じりシルト
20　暗褐灰色わずかにシルトを含む極細砂～細砂
21　淡緑灰色～淡青灰色シルト混じり細砂質
22　灰色シルト
23　淡灰色極細砂～粗砂
24　暗灰色わずかに細砂を含むシルト

わずかに土壌化した淡乳黄色シルト層から弥生時代後期と考えられる土器片やサヌカイトの剥片などがわずかに出土していることから、当該期を下らない時期のものと考えている。

さらに、この下層についても２ケ所に調査区を設定して標高約5.2mまで掘削したが、明確な遺構面や土壌化層は確認できず、第３次調査および第４次調査地点で確認された縄文時代晩期の遺物についても確認できていない。(山本・中居)

挿図写真14　南西部断ち割り状況

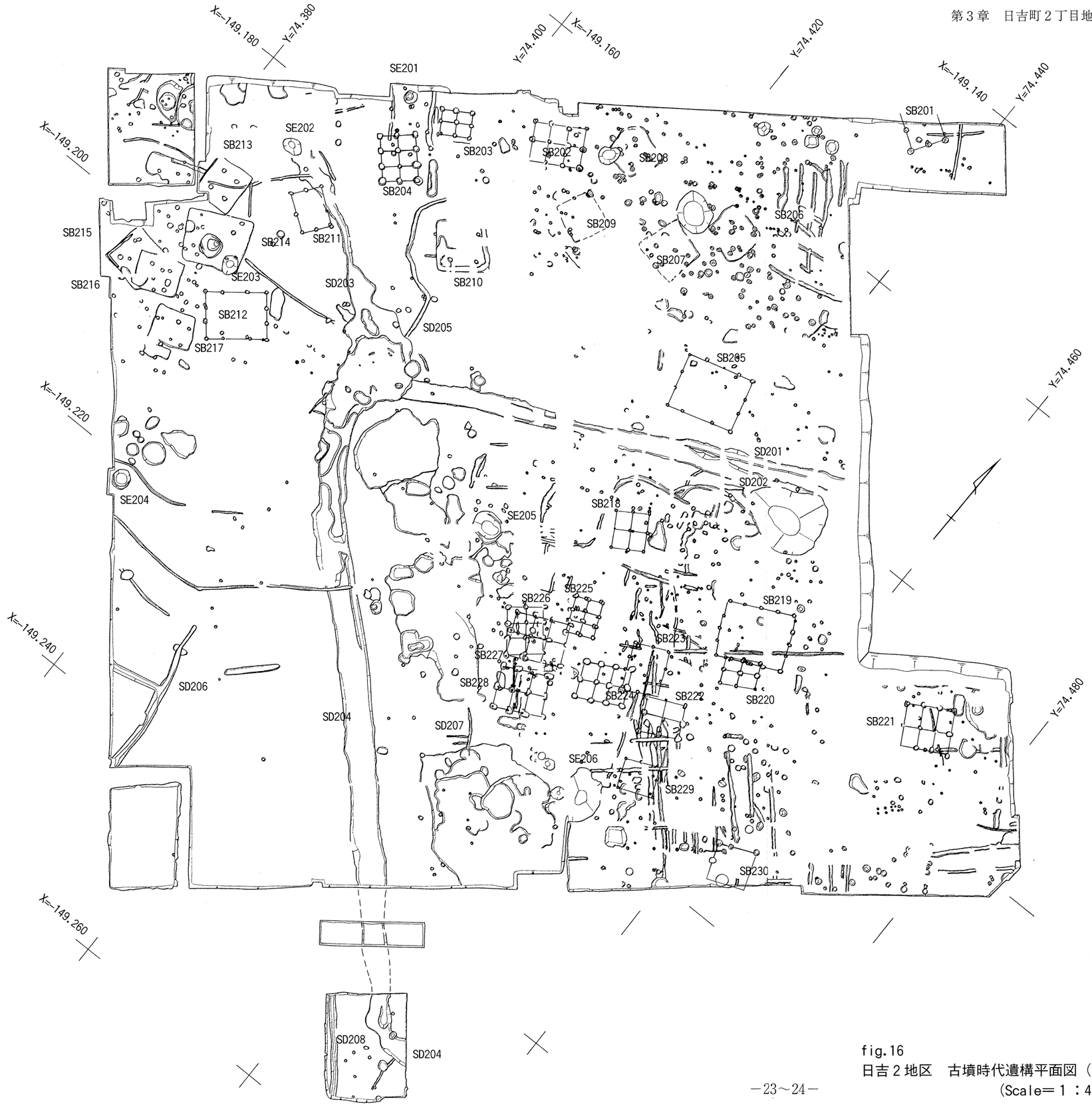


fig.16
日吉２地区　古墳時代遺構平面図（１）
(Scale＝１：400)

第３節　古墳時代の遺構と遺物

南北方向約100ｍの調査区で、北端と南端では遺構面で約0.6ｍの比高差がある。東西方向では、東端と西端では遺構面で約0.4ｍの比高差がある。北に高く、南西に低く傾斜する比較的平坦な面に遺跡は形成されている。遺構面の残存状況は、全面的に現代の撹乱によって非常に悪い状況である。掘立柱建物では撹乱坑底部にわずかな痕跡を留め、柱穴の大半が水道管等の掘形によって損なわれていた。また、竪穴住居でも後世の削平で浅く、床面までもが損なわれていた。この状態で遺構が検出されたため、撹乱坑はできる限り省略し、遺構の状況を簡明に表現するよう努めた。

１．掘立柱建物および竪穴住居

日吉２地区で検出された遺構は、掘立柱建物・竪穴住居をはじめ、井戸・土坑など多岐にわたる。特徴的な点はこれらの建物がＳＤ201・202・203・204によって、区画されたように北西部、北東部、南東部のまとまりをもって検出される。日吉２地区では掘立柱建物20棟、竪穴住居10棟が検出された。以下、述べる各建物については、表２・３にまとめた。（口野）

ＳＢ201　北東隅部に検出された建物である。２間×１間以上の建物と考えられる。柱間は東西1.9ｍ、南北2.1ｍである。側柱建物である可能性が高く、東西方向は２間と考えられるので、南北棟の建物であろうと考えられる。南西隅の柱では柱痕が確認できたが、他の柱穴は不明である。また、柱穴の形状はあまり整っていない。東西方向の柱穴は深く約0.5ｍと深い。北半の大部分が調査区外にあるため、多くは言及できないが、遺跡が北東方向に拡がることが判明した。（口野・川上）

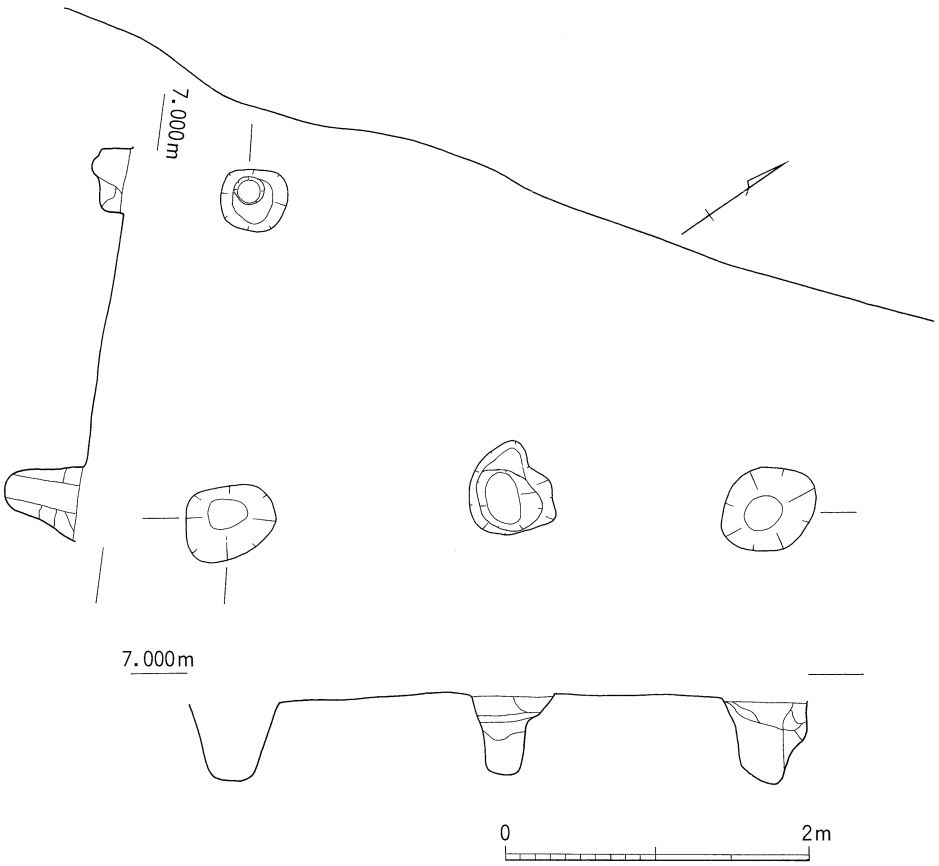


fig.17
ＳＢ201 平面・断面図

ＳＢ202　調査区北部中央で検出された建物である。震災前は道路部分であったため、汚水管・ガス管等の掘形でその多くが損なわれている。

桁行（東西）柱間1.8m、梁行（南北）柱間1.6mで、３間×２間の東西棟の総柱建物である。

柱穴の形状は隅円方形で、一辺0.5mほどである。柱穴の残存状況が悪く、柱痕の検出は非常に困難であった。

柱穴からの出土遺物は微量で、時期を決定できるものはなかった。（口野）

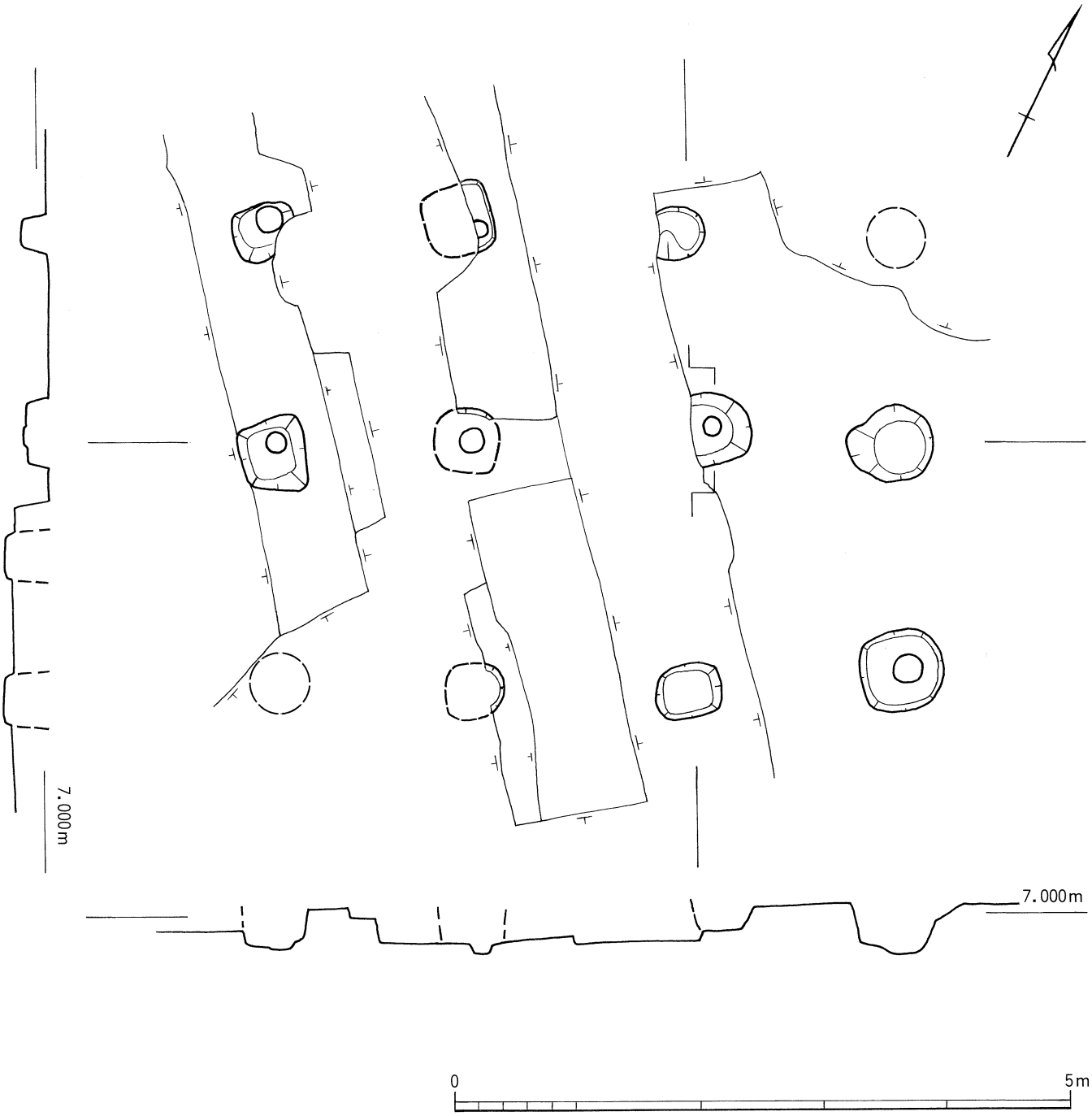


fig.18　ＳＢ202 平面・断面図

ＳＢ203　調査区北部中央、ＳＢ202の西側で検出された建物である。

桁行（東西）柱間1.5m、梁行（南北）柱間1.2mで、３間×２間の東西棟の総柱建物である。建物の全体の状態が把握できたもので、掘立柱建物と竪穴住居すべての中で、7.2m²と最も面積が小さい建物である。

柱穴の形状は隅円方形状のものと円形に近いものとで構成されている。北側の列はやや大きいものの径0.4m前後の大きさである。南東隅の柱穴は0.5mとやや深いが、他の柱穴は、0.3m以下で浅いものである。南西隅の柱穴は、二股に分かれているような状態の柱穴であった。

柱痕はほとんどわからなった。柱穴からの出土遺物も微量で、時期を決定できるものはなかった。（口野）

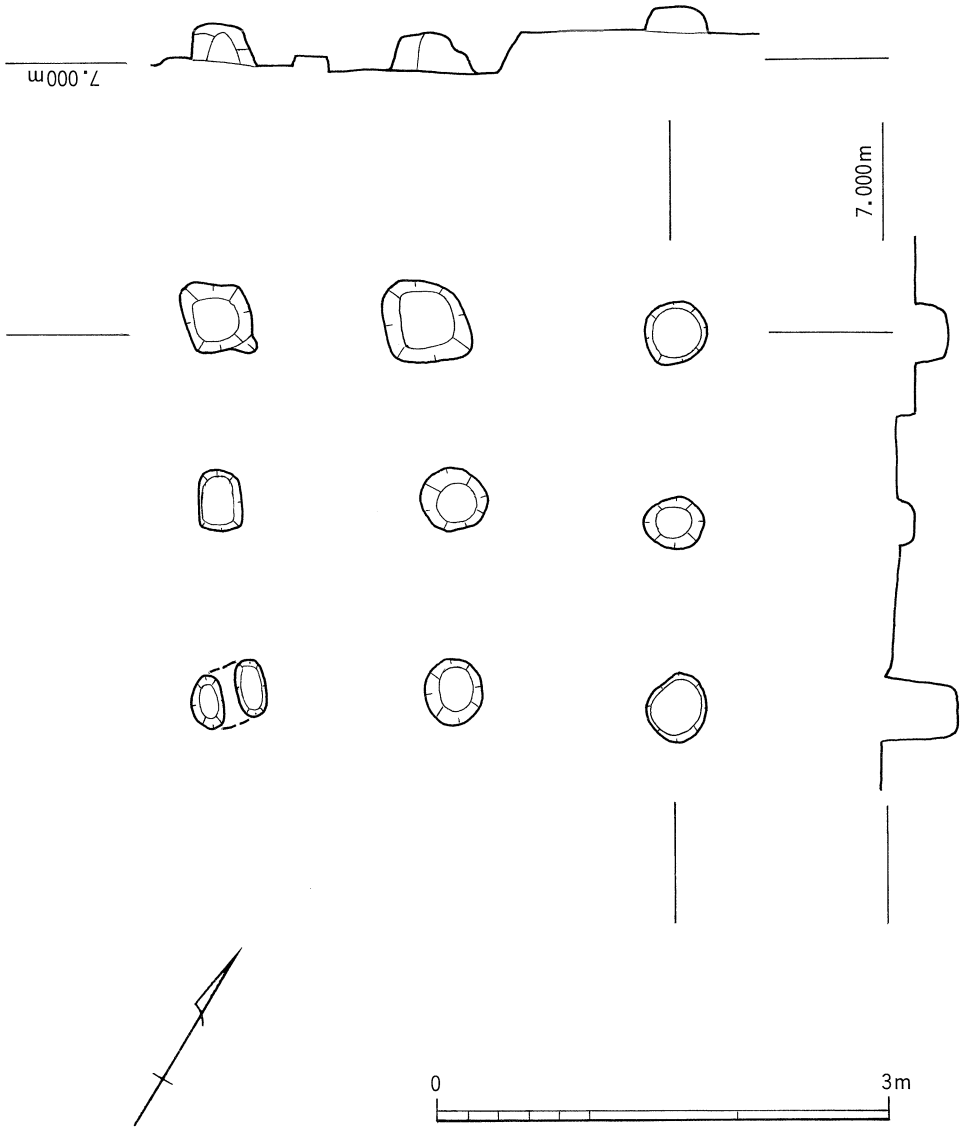


fig.19　ＳＢ203 平面・断面図

ＳＢ204　　ＳＢ202の西側で検出された建物である。梁行（東西）柱間2.0m、桁行（南北）柱間1.6mで、３間×２間の東西棟の総柱建物である。掘立柱建物の面積規模からは平均的な規模の建物である。

柱穴の形状は不揃いで、深さは約0.5mである。柱痕が観察され、柱の沈み込みの判明する柱穴もある。柱穴からの出土遺物は微量で、時期を決定できるものはなかった。(口野)

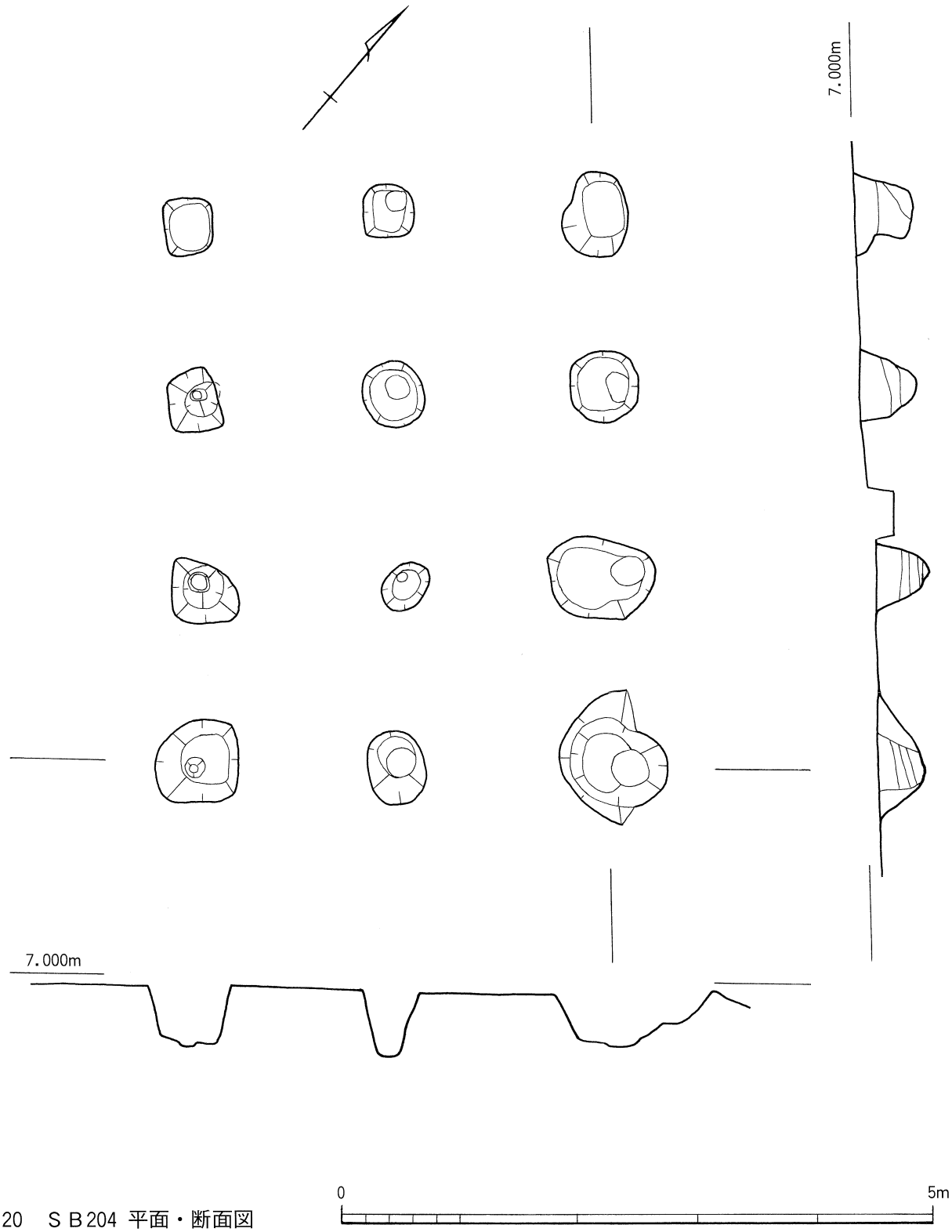


fig.20　ＳＢ204 平面・断面図

ＳＢ205　区画溝ＳＤ201のすぐ北側で確認された建物である。攪乱を受けているため、柱穴を欠く部分もあるが、南北３間（5.6m）×東西４間（6.8m）の側柱のみが確認された東西に長い建物である。今回調査された掘立柱建物の中では、最大の面積を持っている。主軸は真北から西へ約14°30′振っている。

柱掘形は長径0.4m前後のやや小型のもので、平面形は円形のものを中心にしている。柱痕は、確認できたものでは直径約0.2m弱のものが多い。

柱掘形から出土した遺物は古墳時代のものと考えられるが、土師器の小片がわずかに出土しているのみであるため細かな時期を特定することはできなかった。しかし、古墳時代中期末の建物であるＳＢ219に類似した構造であることから、時間的には大きな隔たりがない建物であると推定される。（前田）

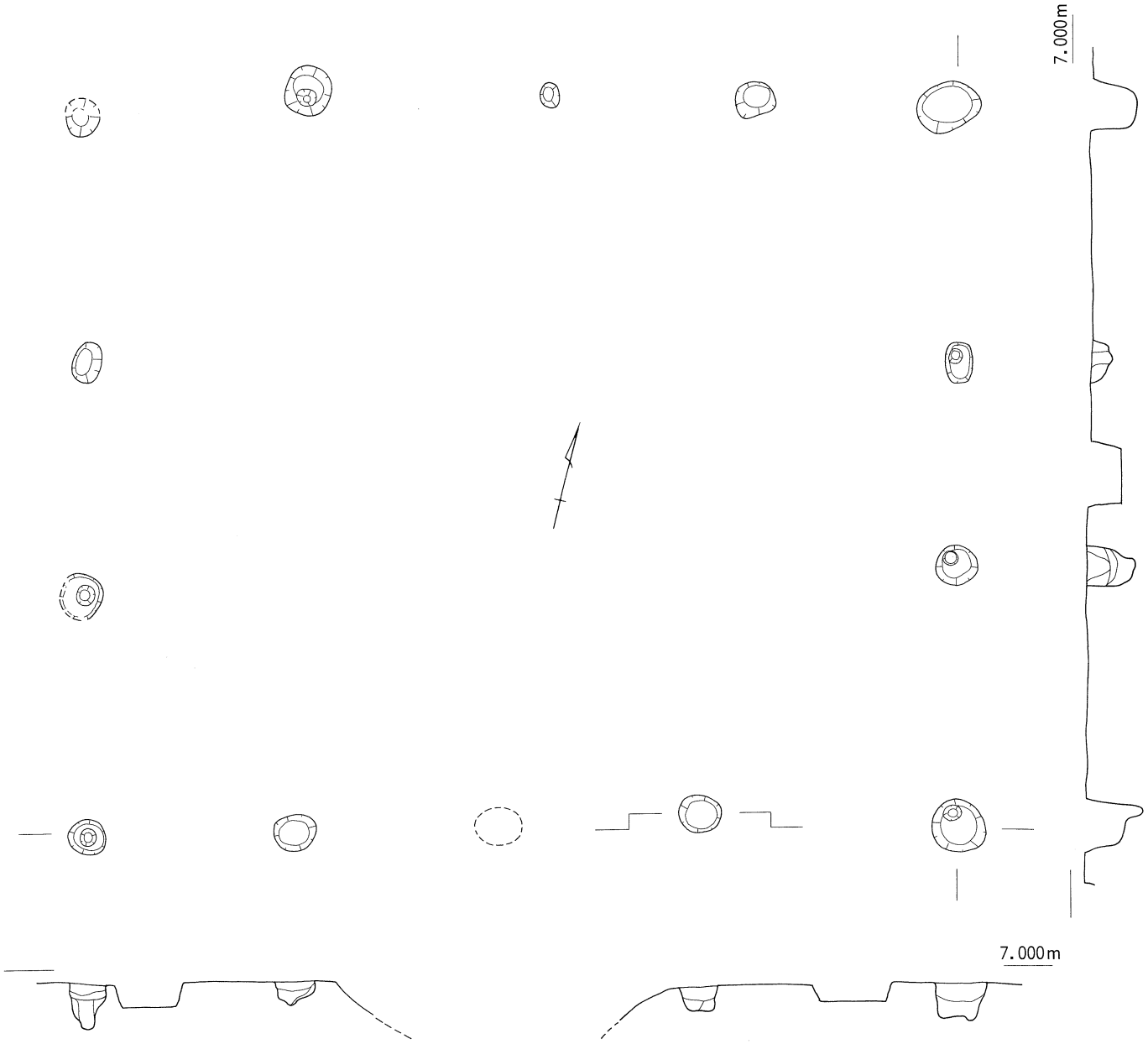


fig.21　ＳＢ205 平面・断面図

0　2m

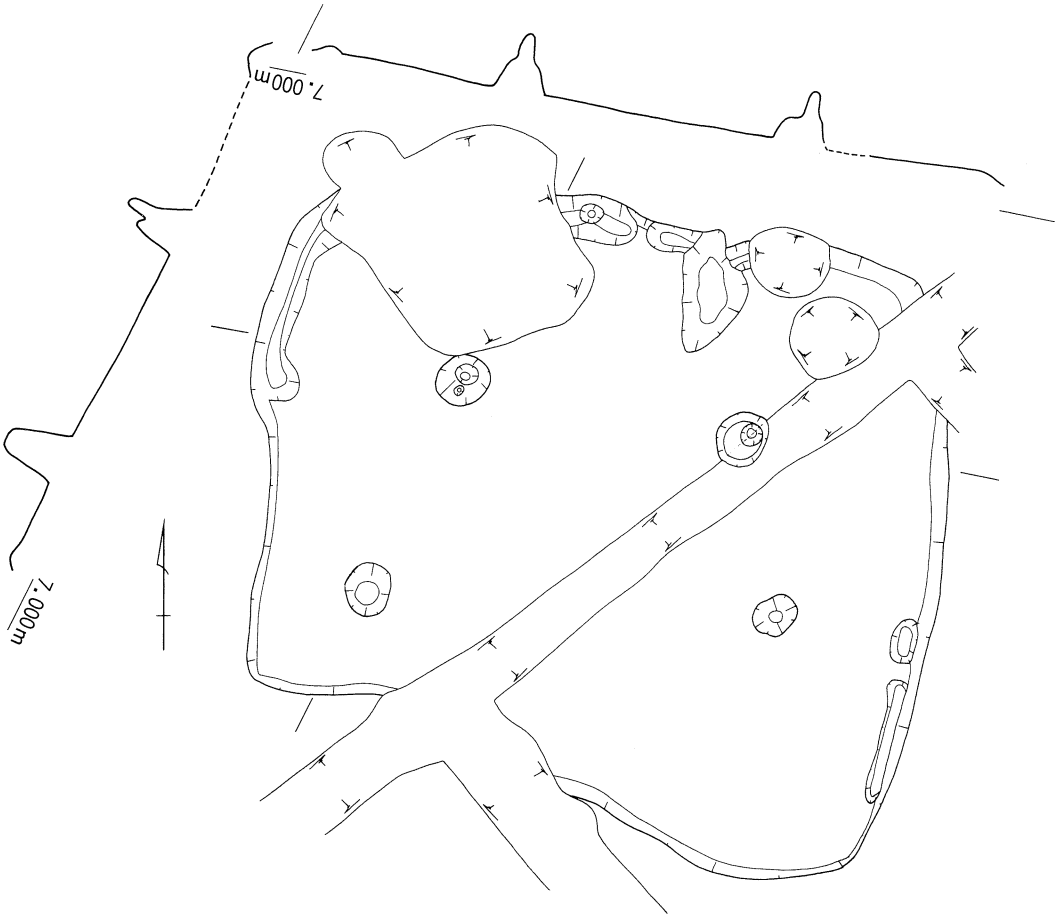


fig.22　ＳＢ206 平面・断面図

0　2m

ＳＢ206・207・208・209の４棟は近接して検出された。建物の方向や復元される面積などもよく似通っている。また、図示した断面図からわかるように竪穴としての深さはほとんどない状況である。

ＳＢ206　東西辺4.2m、南北辺4.0m、面積16.8m²の隅円方形の竪穴住居である。南辺は直線的な辺とはならない。後世の撹乱による影響であろうか。径0.3m、深さ0.3mの４基の支柱穴をもつ。北辺と東西辺には周壁溝の痕跡が検出された。

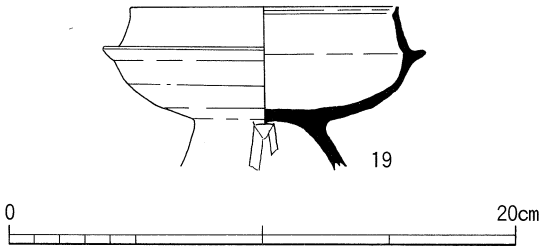


fig.23　ＳＢ206 出土遺物実測図

住居床面中央やや北よりの所で、脚部を欠く須恵器高坏が出土した。ＭＴ15型式あたりが考えられる。

ＳＢ207　東西辺4.2m、南北辺4.2m（復元）、面積17.6m²の隅円方形の竪穴住居と推定される遺構である。床面で３カ所のピットが検出された。遺構の北辺でも0.1mほどで浅く、南側では深さはほとんどなく、南辺部は撹乱坑となる。４基の支柱穴をもつ住居と考えられる。出土遺物はほとんどなかった。

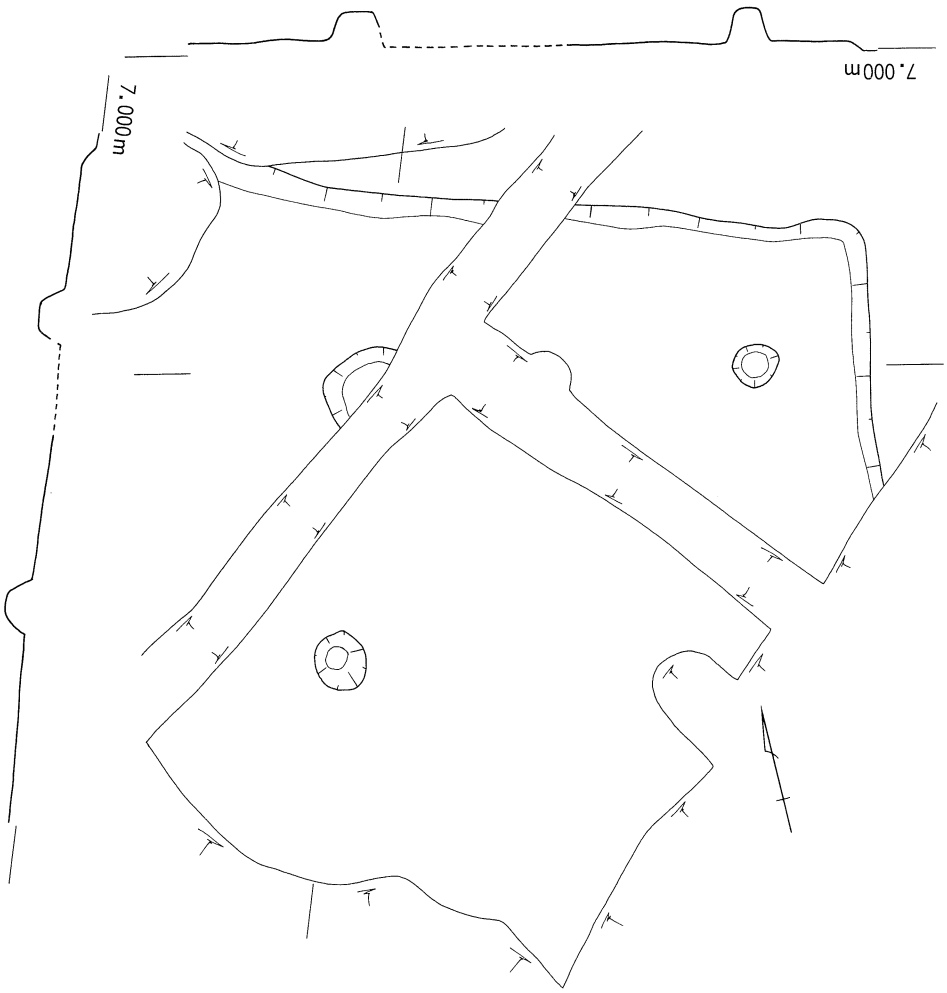


fig.24
ＳＢ207 平面・断面図

ＳＢ208　東西辺4.4m、南北辺4.0m、面積17.6m²の隅円方形の竪穴住居である。径0.4m、深さ0.2～0.4mの４基の支柱穴を持ち、南辺で直径1.3mの土坑を検出した。周壁溝は検出されなかった。南辺の土坑からは土師器甕（20）が出土した。外面の調整はナデで、調整が異なるが、ＳＸ211出土のfig.140の（463）と形態が類似している。（口野・川上）

ＳＢ206～208は先述したように残存状況は非常に悪いが、いくつかの共通点が見られる。まず、支柱穴を南北に結ぶラインの方向性と建物の平面形から、建物の方位が真北方向に近い方向をとり、掘立柱建物の示す方向性とは異なる。また、一辺4.2mでほぼ同規模の隅円方形の竪穴住居である。住居内には、中央炉やカマドを持たないようである。

ＳＤ201・202とＳＤ203で挟まれた空間に、ＳＢ209をも含めてひとつの竪穴住居群を成す。ただし、ＳＢ210はＳＢ206～208とは異なる構造と方向性を持つようである。

ＳＢ209　ＳＢ209の大部分は、現代の攪乱によって損なわれている。南東隅部と西辺の一部が検出されたに過ぎず、住居址の深さも0.05mほどの残存状況である。また、支柱穴と推定されるものが１基検出されている。微量の土師器、須恵器片が出土したにとどまり、時期を決定できるようなものはなかった。復元される一辺は約4.0mである。（口野）

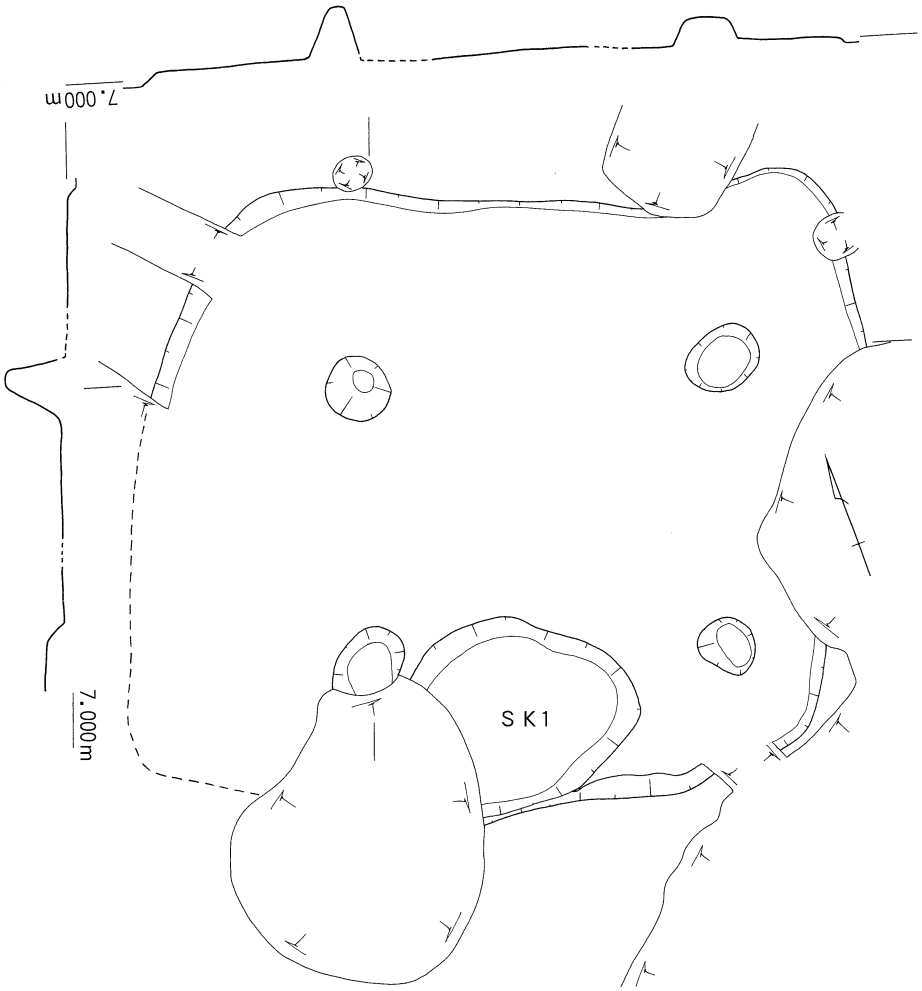


fig.25　ＳＢ208 平面・断面図

0　2m

ＳＢ210　幅0.6m、深さ0.1mの溝状遺構が、一辺約５mで「ロ」字状に巡る竪穴住居と推定される。一巡する溝の内側に、直径0.3m、深さ0.3mの支柱穴と考えられるピットが３基検出された。当初、大壁造り建物の可能性も考え溝状遺構の検出を行ったが、溝内には柱穴もなく、また、溝は浅く溝内の堆積土も壁を構築したような状態ではない。ただし、溝内には径0.1～0.2m、深さ0.05～0.2mほどの小さいピットが数多く検出された。

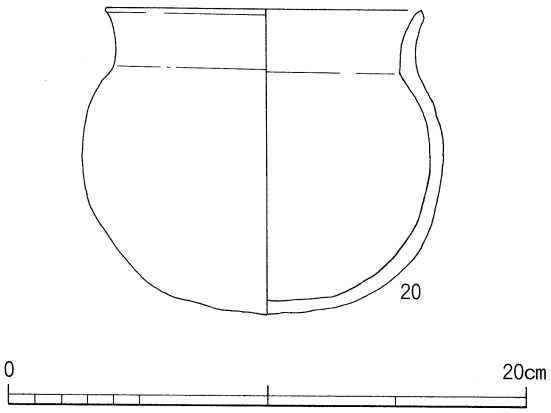


fig.26　ＳＢ208-ＳＫ１出土遺物実測図

住居床面の大半は撹乱を受けており、検出された面には凹凸がない。これは遺構全体が削平を受けていることを示す。遺構が多少深く残存していれば、もう少し多くの情報が得られたであろうと思われる。(口野)

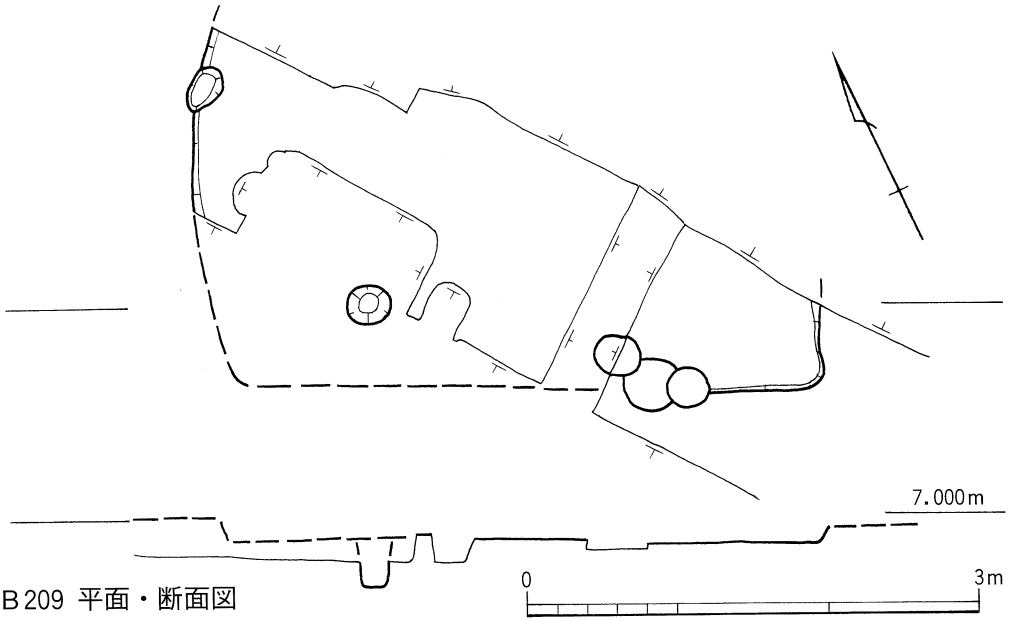


fig.27　ＳＢ209 平面・断面図

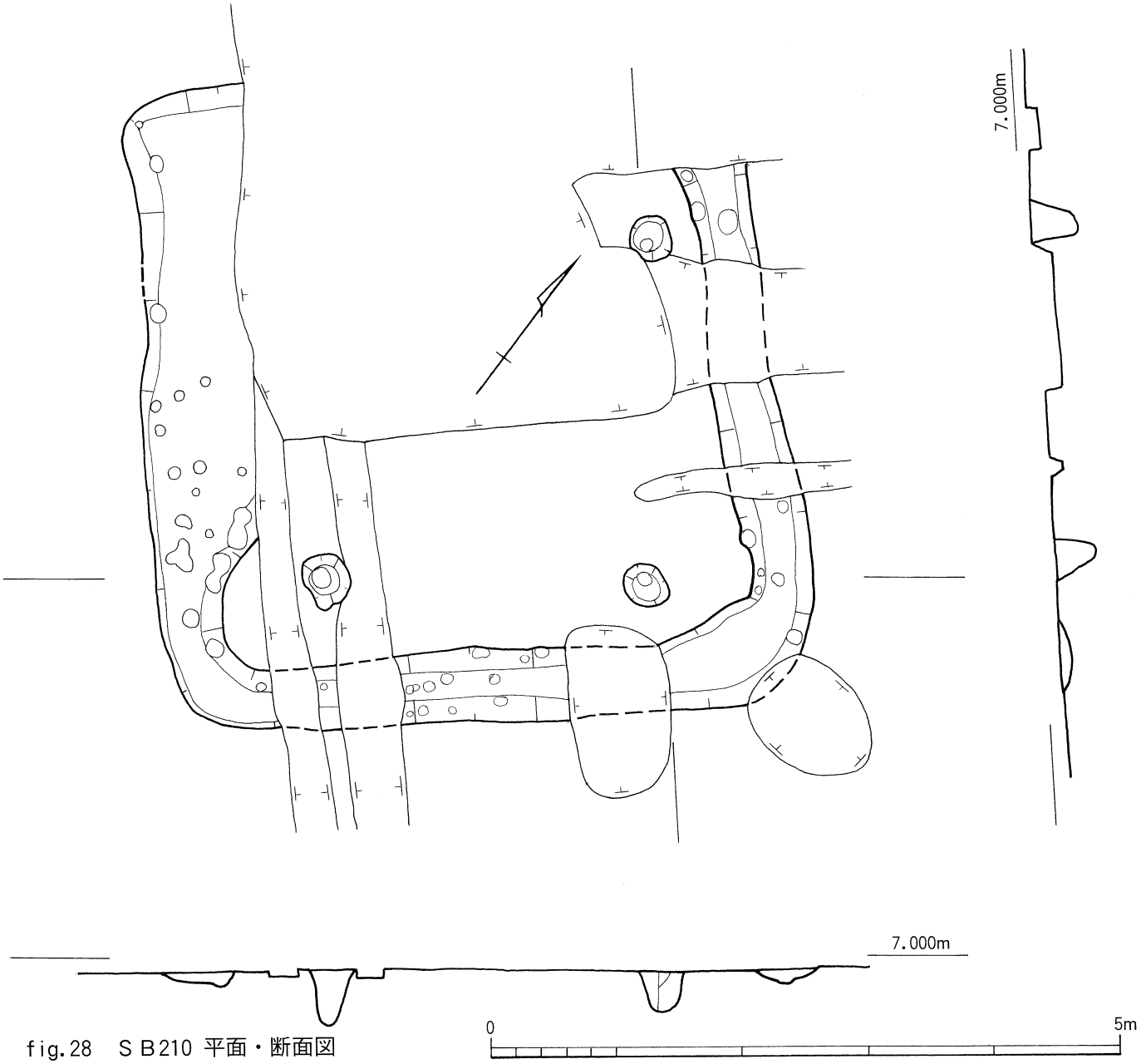


fig.28　ＳＢ210 平面・断面図

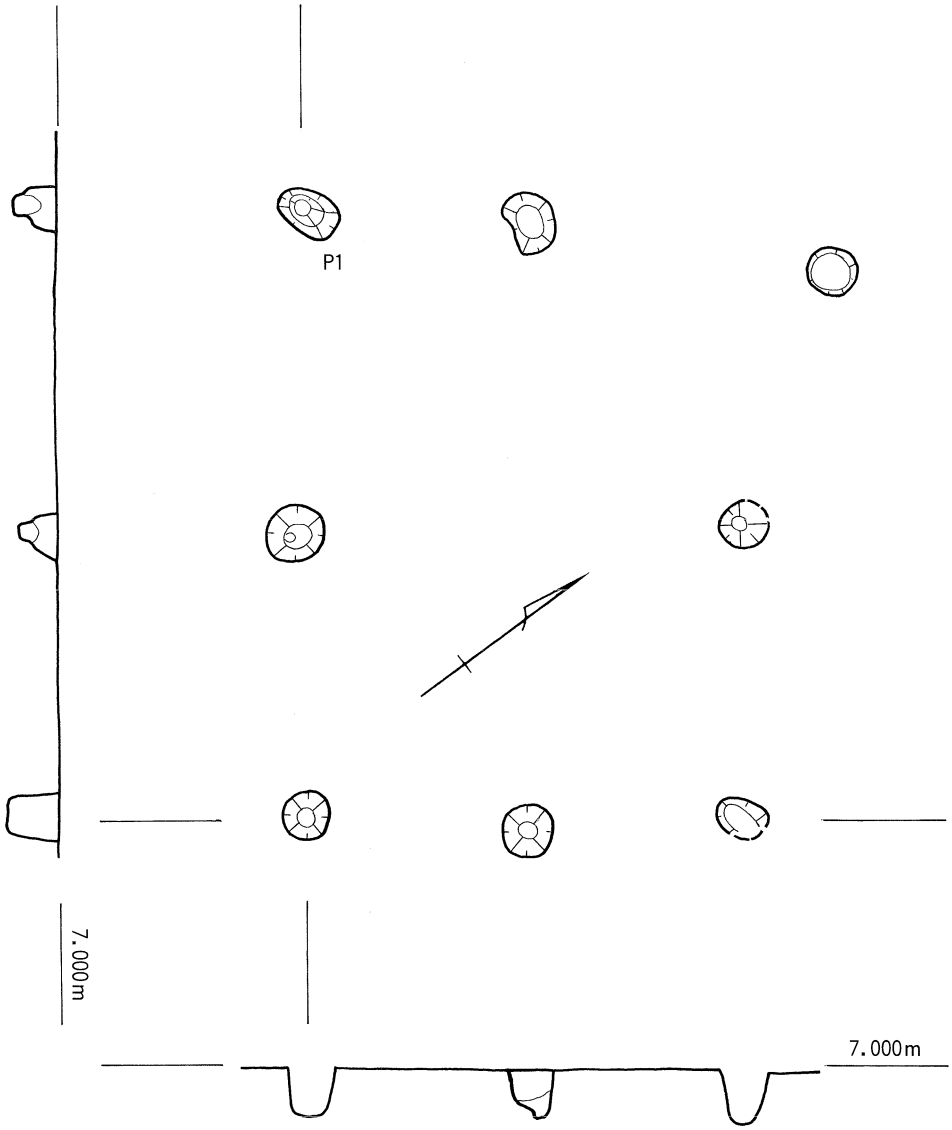


fig.29　ＳＢ211 平面・断面図

ＳＢ211　　北東部で検出された、梁行（東西）柱間距離1.4m、桁行（南北）柱間距離2.0m、２間×２間の南北棟の側柱建物である。建物の主軸は真北から西へ44°振る。面積は13.4m²である。

柱穴掘形は、直径0.3m、深さ0.3mの比較的小さい掘形をもつ。北東隅の柱穴については、柱通りがやや歪む。

北西隅のＰ７からfig.30に示すように、須恵器坏身(21)が出土した。ＭＴ15型式にあたる時期が考えられる。

また、北東部の柱穴は、ＳＤ203を切る。（口野）

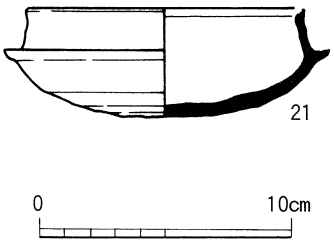


fig.30　ＳＢ211-P7
出土遺物実測図

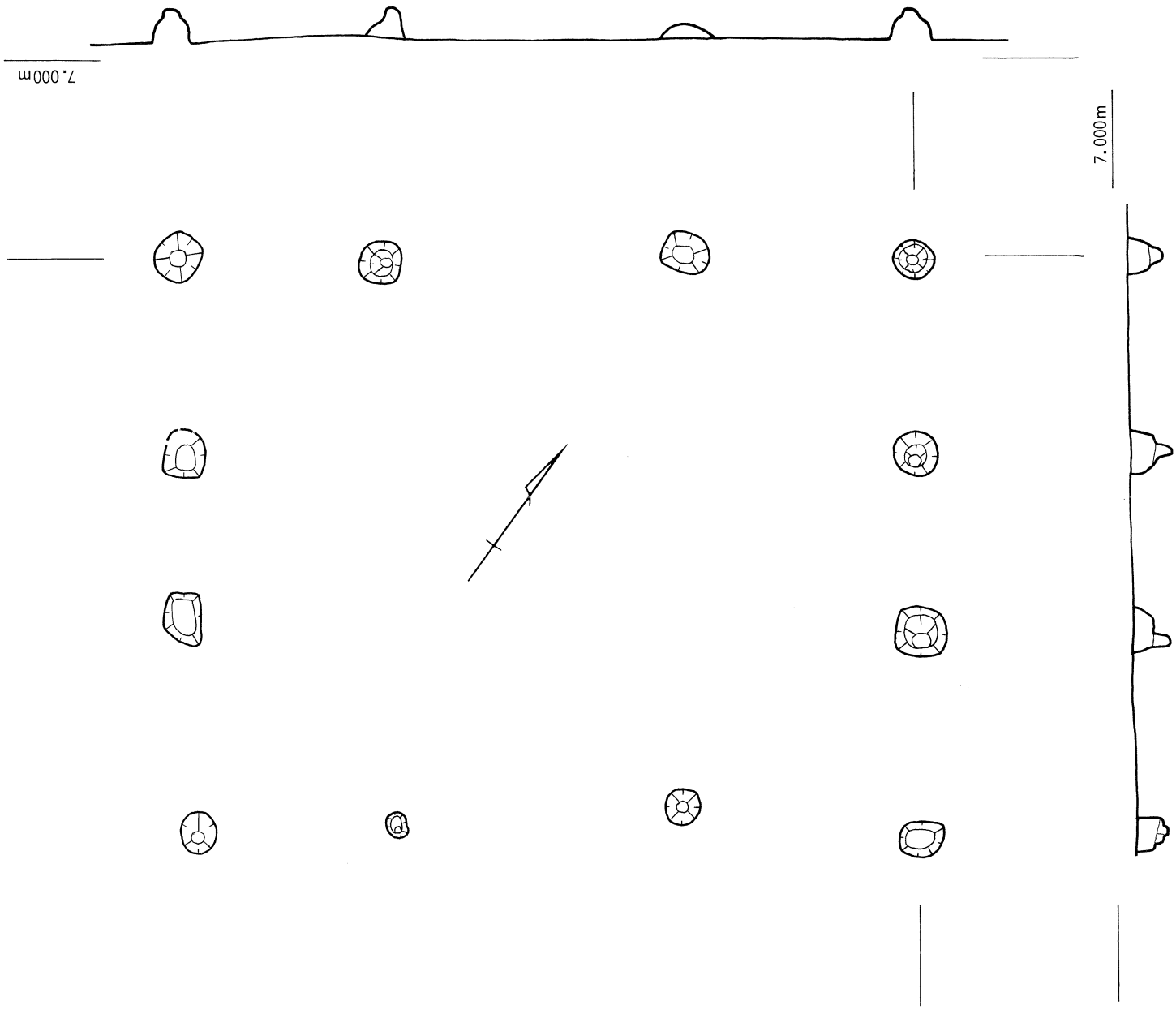


fig.31　ＳＢ212 平面・断面図

0　5m

ＳＢ212　北東部で検出された桁行（東西）柱間距離2.4mと1.8m、梁行（南北）柱間距離1.5m、３間×３間の側柱建物である。形状から東西棟と考えている。

柱穴掘形は、直径0.2～0.4m、0.3～0.4mの規模である。柱通りはほぼ直線的に並ぶが、桁行柱間距離2.4mと1.8mと２種で構成された建物である。

建物の主軸は真北から西へ21°45′振る。面積は31.0m²である。当調査で検出された建物のなかでは３番目の大きさを持つ建物である。面積が30.0m²を越す建物は側柱建物に限られるようである。また、ＳＤ201～204で３分された区画に１棟ずつ検出されている。（口野）

ＳＢ213　北東部で検出された竪穴住居である。南東部は調査区外、北東隅部は攪乱を受け、南西部は一部未調査部分である。以下のＳＢ214・215・216にも未調査部分が存在するが、これは建設工事との関連上、諸般の事情により未調査となった部分である。

東西4.0m、南北4.5m、深さ0.1mで、一部を除き四周に周壁溝をもち、４基の支柱穴をもつものである。周壁溝は床面よりの深さ0.05～0.1mで、断面はＶ字形を呈す。

支柱穴は床面で検出された直径は約0.5m前後で、深さ0.5～0.7mと深く先窄まりでＶ字形の断面形を呈す。

床面では４ケ所の支柱穴以外に、炉などの遺構は検出されなかった。周壁溝は北辺で途切れる。入口の可能性が考えられる箇所であろうか。ＳＢ217も北西側に入口と考えられる段状の切れ目がある。

床面は調査後の断ち割りの結果、粘土質の土が貼ってあることが判明した。この層からは特に遺物は出土しなかった。粘土質の層の下層は砂質層となる。

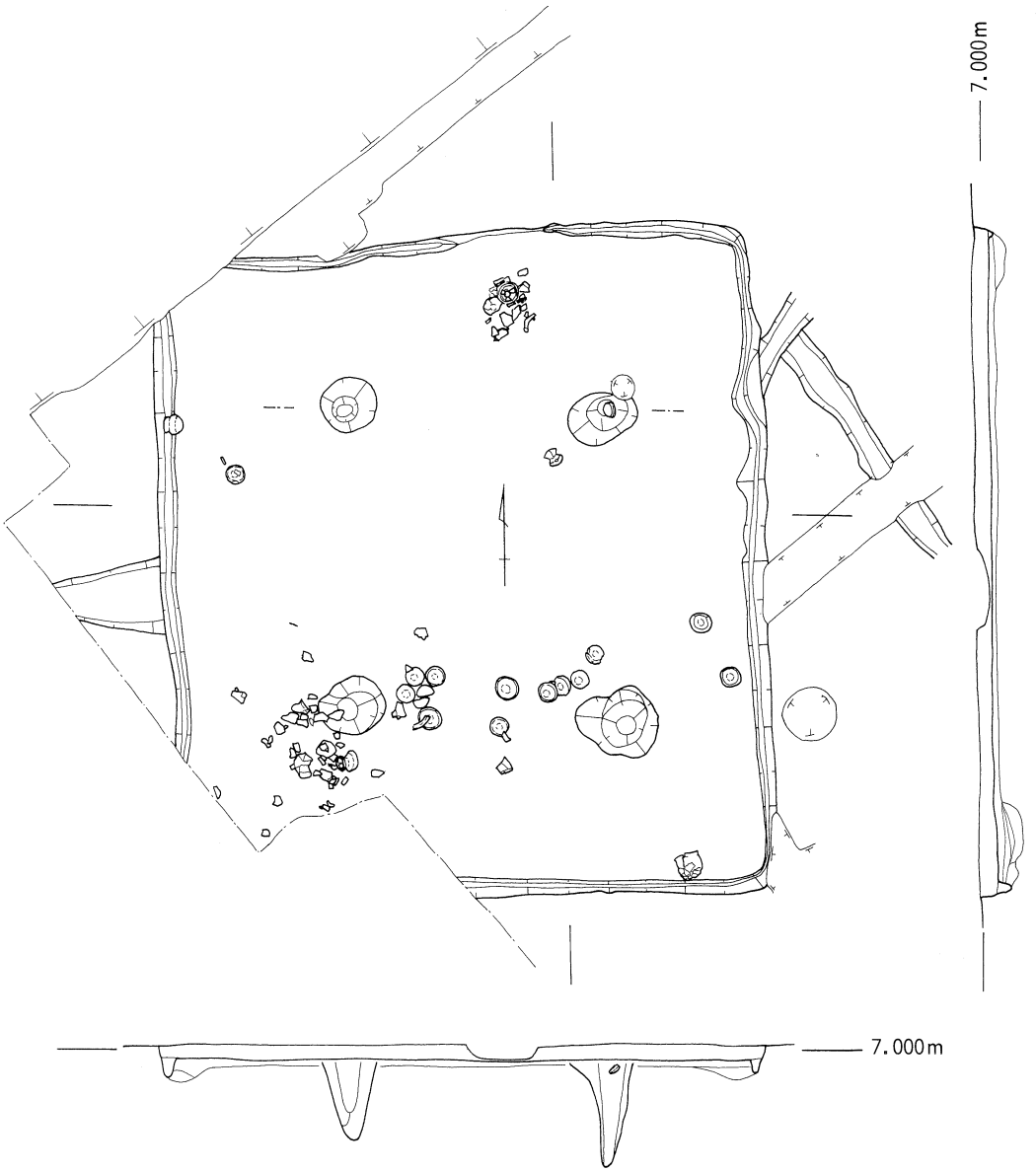


fig.32　ＳＢ213 平面・断面図

0　2m

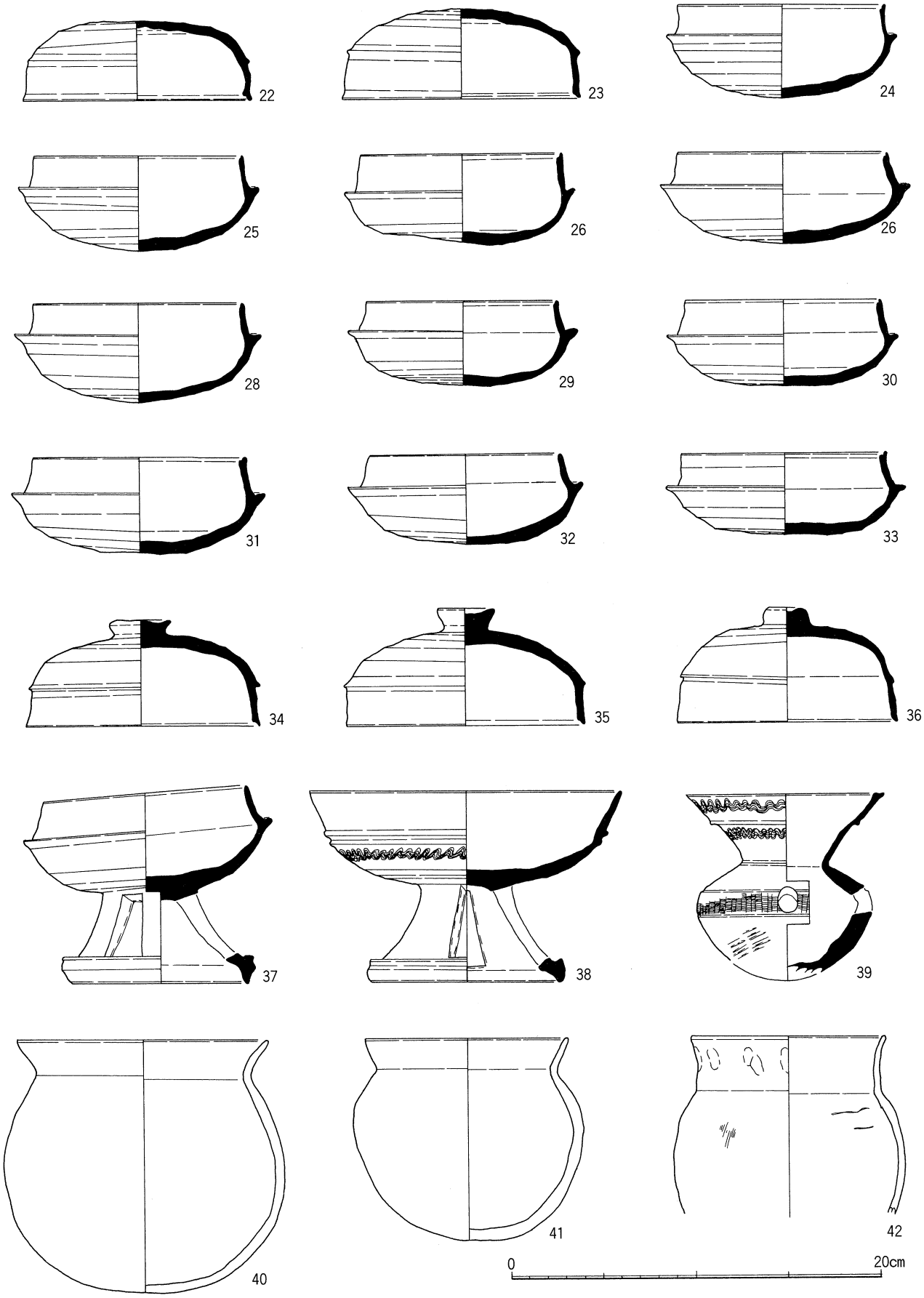


fig.33　ＳＢ213 出土土器実測図

粘土質の貼り床は、竪穴の四周をやや深く幅約0.5m、深さ約0.2mで溝状に掘り、粘土質の土を入れている。住居中央部は約0.1mの厚さで土を入れている。貼り床前の当初の竪穴住居の床面は、かなり凹凸があったようである。住居の南側では、粘土質の土の間に薄く炭を含む層が、観察された。土入れの作業時に火を用いた何らかの行為を行ったことが想起される。

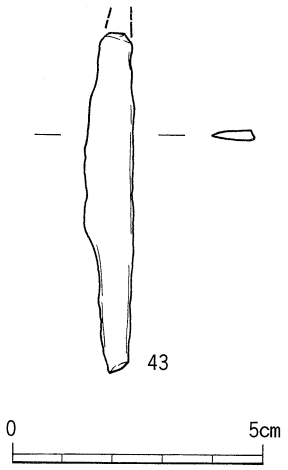


fig.34　ＳＢ213 鉄製品実測図

床面南半部に集中して遺物が出土した。この点からも北側に入口があった可能性は高いと考えられる。須恵器坏身・坏蓋・有蓋高坏や土師器甕片・刀子片などがある。須恵器坏身・坏蓋は完形のものが多い。西辺周壁溝では、完形の土師器甕(41)が検出された。南辺では土師器甕が出土した。この遺物は残存状況が悪く図化できなかった。北東支柱穴の上層からは有蓋高坏蓋(36)が、また、この柱穴南西側には、埦(39)が出土した。北側では、須恵器無蓋高坏や土師器甕片などが検出された。

完形品が多く、また、それが遺棄された状況であるため、この住居址を取り巻く状況に異変があったか、意図的に住居を廃絶したことなどが考えられる。また、他の竪穴住居では残された遺物が少なく、これと比較しても状況が異なる。

出土遺物は、fig.33・34で示すように、須恵器坏蓋２・坏身10・有蓋高坏蓋３・有蓋高坏１・無蓋高坏１・甑１・土師器小型甕３・刀子１である。坏蓋２に比べ坏身10と坏身の個体数が多い。また、小型の土師器甕は出土したが、大型の煮沸具はないようである。

須恵器坏身、坏蓋の天井部もしくは底部は丸みを持つ。坏身のたちあがりは、直立するものとやや内傾気味のものがある。(25)は底部外面に「×」のヘラ記号、(30)は「－」のヘラ記号がある。(34・35)の稜は比較的鋭い。図示しなかったが、口縁端部が欠損した有蓋高坏蓋がもう１点ある。(36)は北東支柱穴で出土した蓋で、焼成が悪い。

(37)は坏身に脚をつけた高坏である。脚には長方形３方スカシを施す。脚端部は下方によく張出し稜をもつ。(38)は無蓋高坏で口縁部はやや外方に開く、脚には長方形４方スカシを施す。坏内面はナデ、外面には体部中央に２条の稜線をもち、稜線の下に波状文を施す。以下はヘラケズリである。脚外面はナデ、脚端部は上下に張出し稜をもつ。

(39)は口縁部と頸部の境に鋭い稜を持つ突帯をもち、その上下に波状文を施す。体部中央を２条の沈線を画し、その間に櫛描列点文を施す。底部はタタキを施した後、ナデを施す。底部外面は欠損している。

(40～42)は、小型土師器甕である。住居から出土した土師器はすべて残存状況が悪く、復元図化できたものはこの３点であるが、調整はほとんど不明である。(41)は口縁部はわずかにナデが観察される。(42)は、口縁部はユビオサエ後ナデを施す。体部外面にはわずかにハケ調整が観察される。(40～42)は外面にはススの付着などは認められない。

(43)は、床面西半中央部で出土した刀子片である。切っ先部分は欠損している。茎の幅は６㎜、刃基部で10㎜である。(口野)

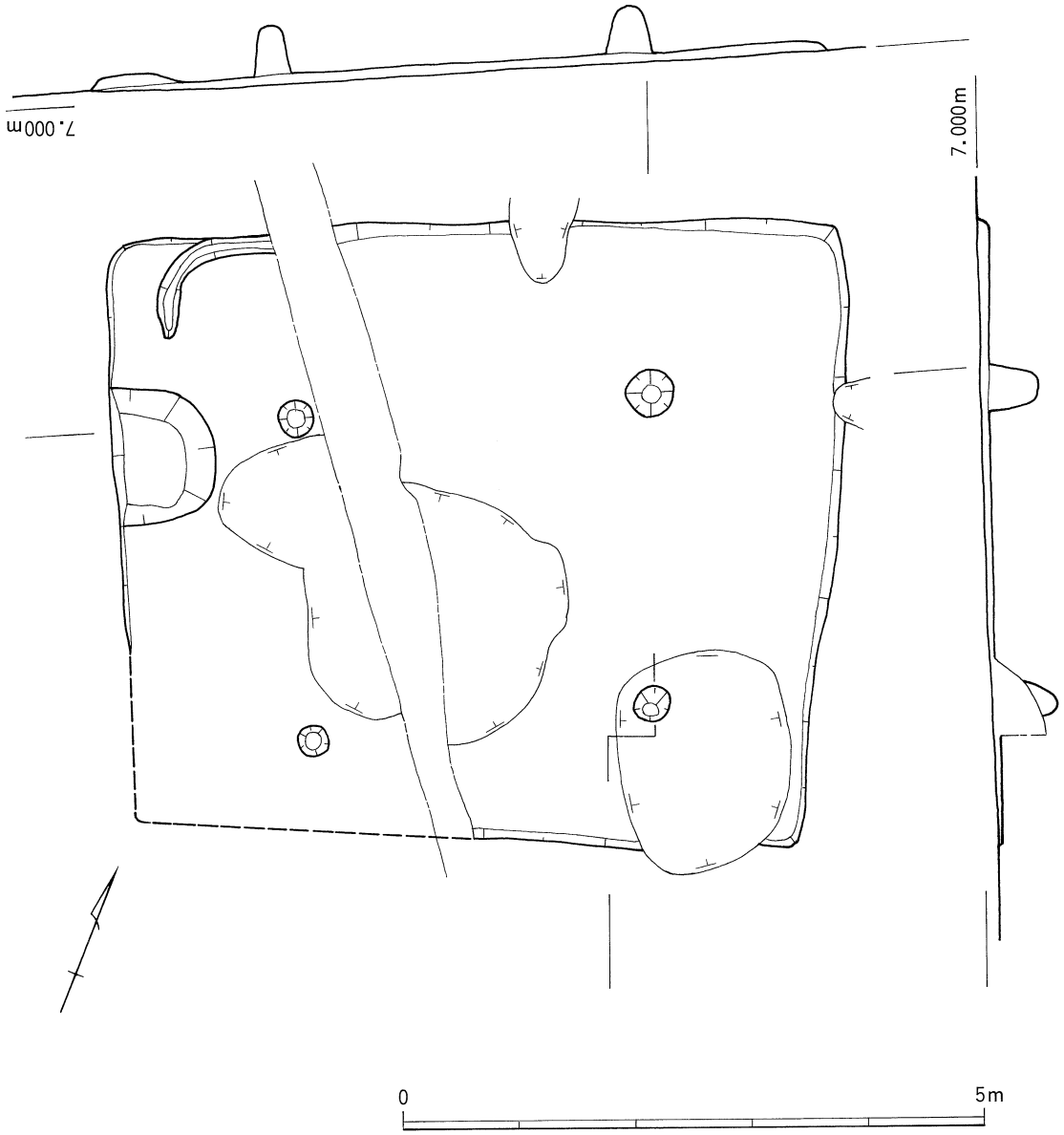


fig.35　ＳＢ214 平面・断面図

ＳＢ214　　北西部で検出された竪穴住居である。東半部は第５次－１－２区で、西半部は第６次－２区で調査した。東西辺6.3m、南北辺5.2m、深さ0.1mで、西辺では径約1.0m、深さ0.1mの浅い土坑が検出された。北西隅部には周壁溝がわずかに残存しており、南西隅部の残存状況は悪い。床面をＳＥ203・303で大きく切られ、中央部は幅約0.6mは未調査部分で、中央土坑の存否は不明である。床面で検出されたピットは10基あるが、図示したピットが0.4～0.5mと深く建物の支柱穴と考えられ、４本の支柱を持つ建物と推定される。住居址内から少量の土師器・須恵器と臼玉15個、径15㎜程の原石１個が出土した。（口野）

ＳＢ215　北西部で検出された竪穴住居である。ＳＢ216と同様に２ケ年度に渡って調査を行い、一点鎖線の部分は未調査部分である。

東西辺4.8m、南北辺4.4m、深さ0.1m足らずで、北辺・西辺と南辺の一部に周壁溝が検出された。南辺には長径1.0m、短径0.5m、深さ0.1mほどの土坑が検出された。東半部は遺構の残存状況が悪く、東辺は復元線である。

支柱穴は西側のみ２基検出された。規模は直径0.5mと0.6mで、深さ0.6mである。片流れの屋根葺きを考えるか、東側の支柱が掘形を持たない支柱であった屋根構造の建物の可能性を考えておきたい。

ＳＢ215はＳＢ216によって切られている。しかしながら、それぞれの建物の残存状況が悪く、明確な切り合い関係は不明である。また、建物からの出土遺物はほとんどない状況であった。(口野・富山)

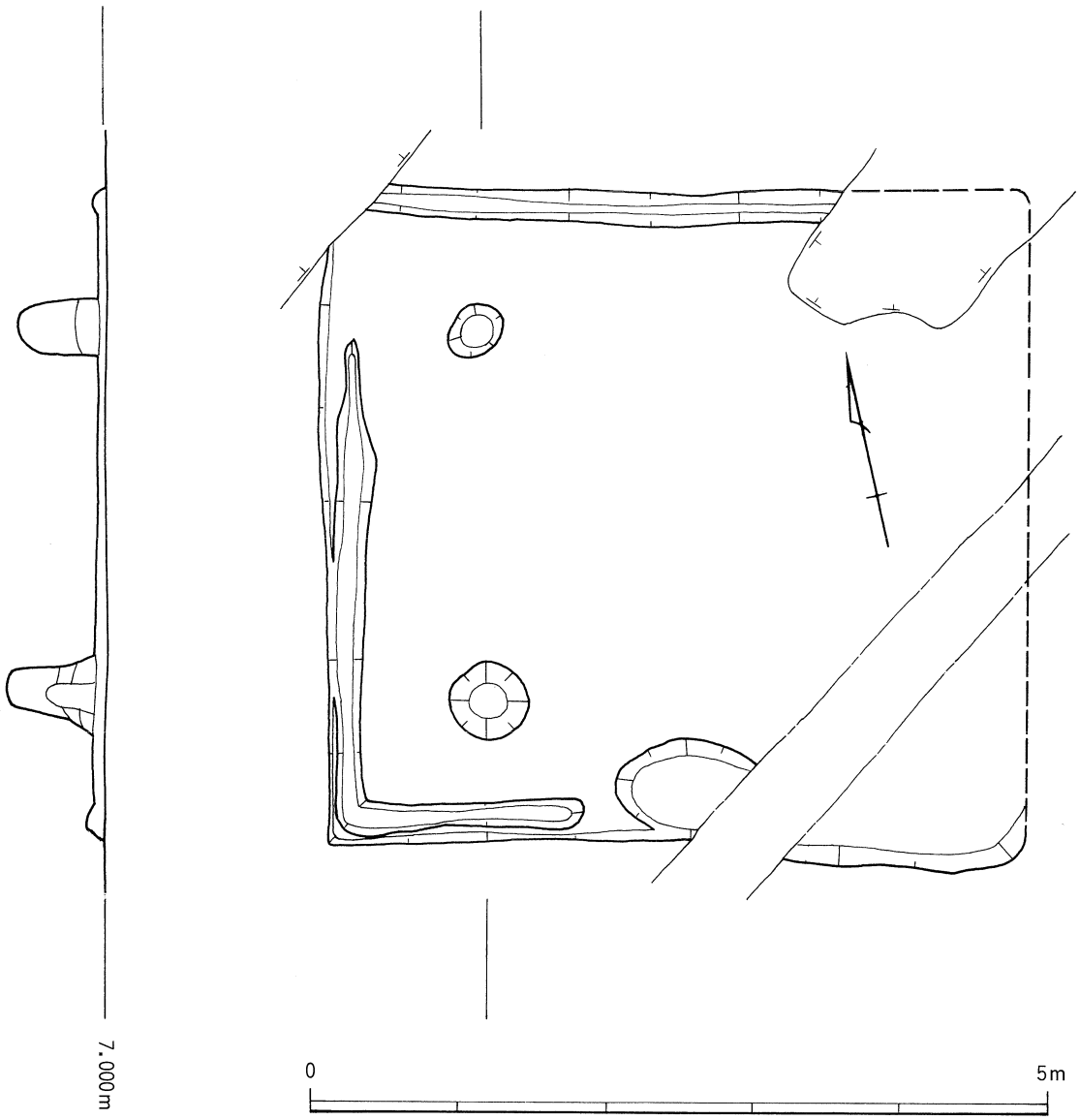


fig.36　ＳＢ215 平面・断面図

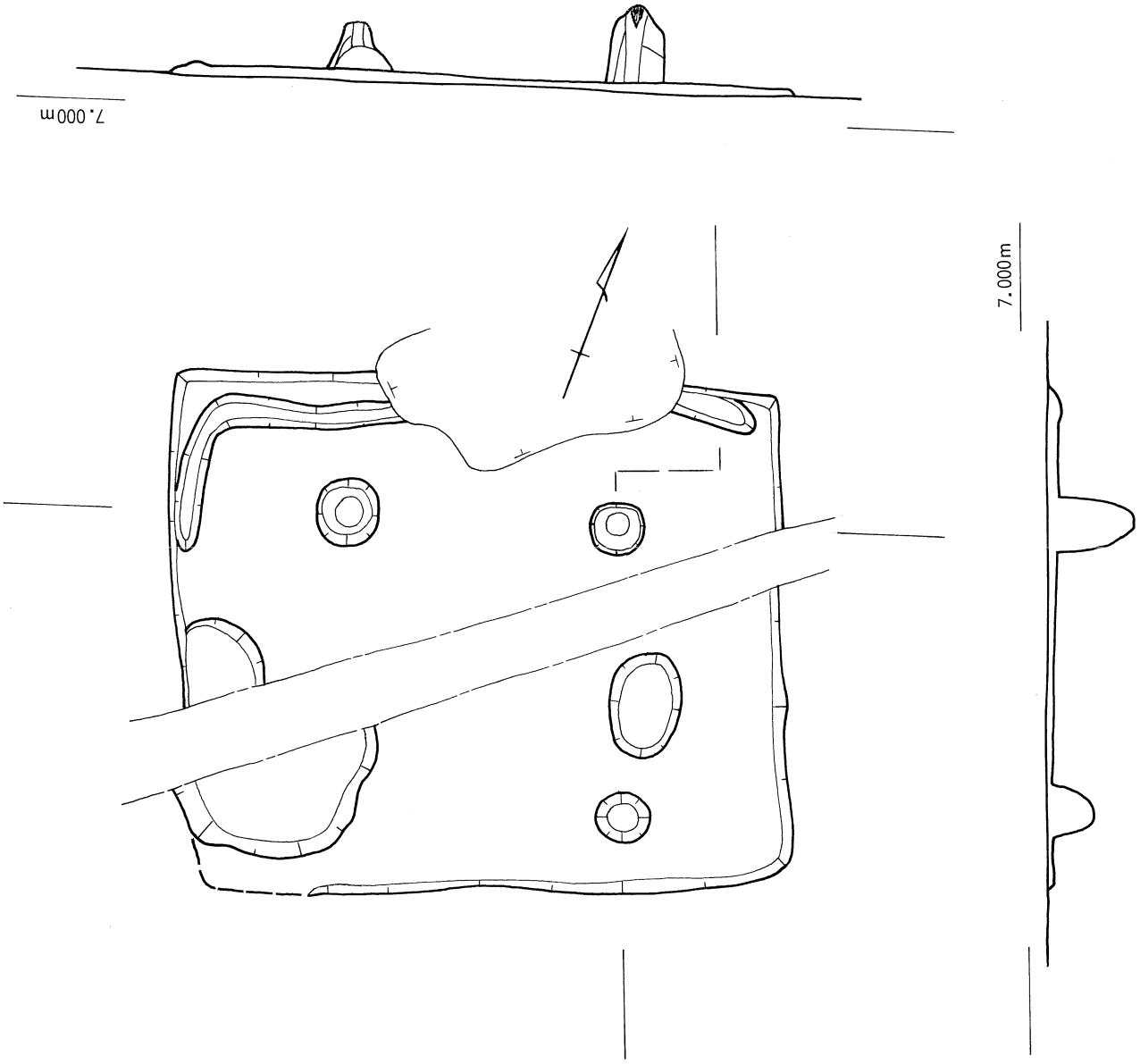


fig.37　ＳＢ216 平面・断面図

ＳＢ216　　北西部で検出された竪穴住居である。北半は第６次－２区で、南半は第５次－１－２区で調査した。中央部は幅0.6m程は未調査部分である。東西辺5.2m、南北辺3.5m、深さ0.1mで、北辺では周壁溝が検出された。南西隅部は残存状況は悪い。また、西辺には不整形の浅い土坑が検出された。支柱穴と考えられるピットは３基しか検出できず、建物の構造を把握しがたい。また、東半に検出された楕円形のピットは、竪穴住居に伴うものと考えられるが、その性格については不明である。住居内の堆積土から少量の土師器・須恵器片が出土したが、特記すべきものはなかった。（口野・富山）

ＳＢ217　北西部で検出された竪穴住居である。東西辺4.2m、南北辺3.8m、深さ0.1mで、周壁溝・炉などは確認されなかった。柱穴は東側に直径0.2～0.3m、深さ0.4～0.5mのやや深い柱穴と考えられるものがある。しかし、支柱としての配置が不明である。北西隅部は段状に検出され、入口としての可能性が考えられる。

住居址内から土師器・須恵器片と臼玉２個・滑石の原石２個出土した。巻頭写真図版８の奥の２個である。右側の長方形の原石は長辺60㎜、短辺30㎜、厚さ10㎜、左側の三角形の原石は底辺45㎜、高さ20㎜、厚さ20㎜の大きさである。

後述するようにＳＸ205・206・207出土の製作過程で生み出されるような、滑石の砕片や未製品の出土はなかった。（口野）

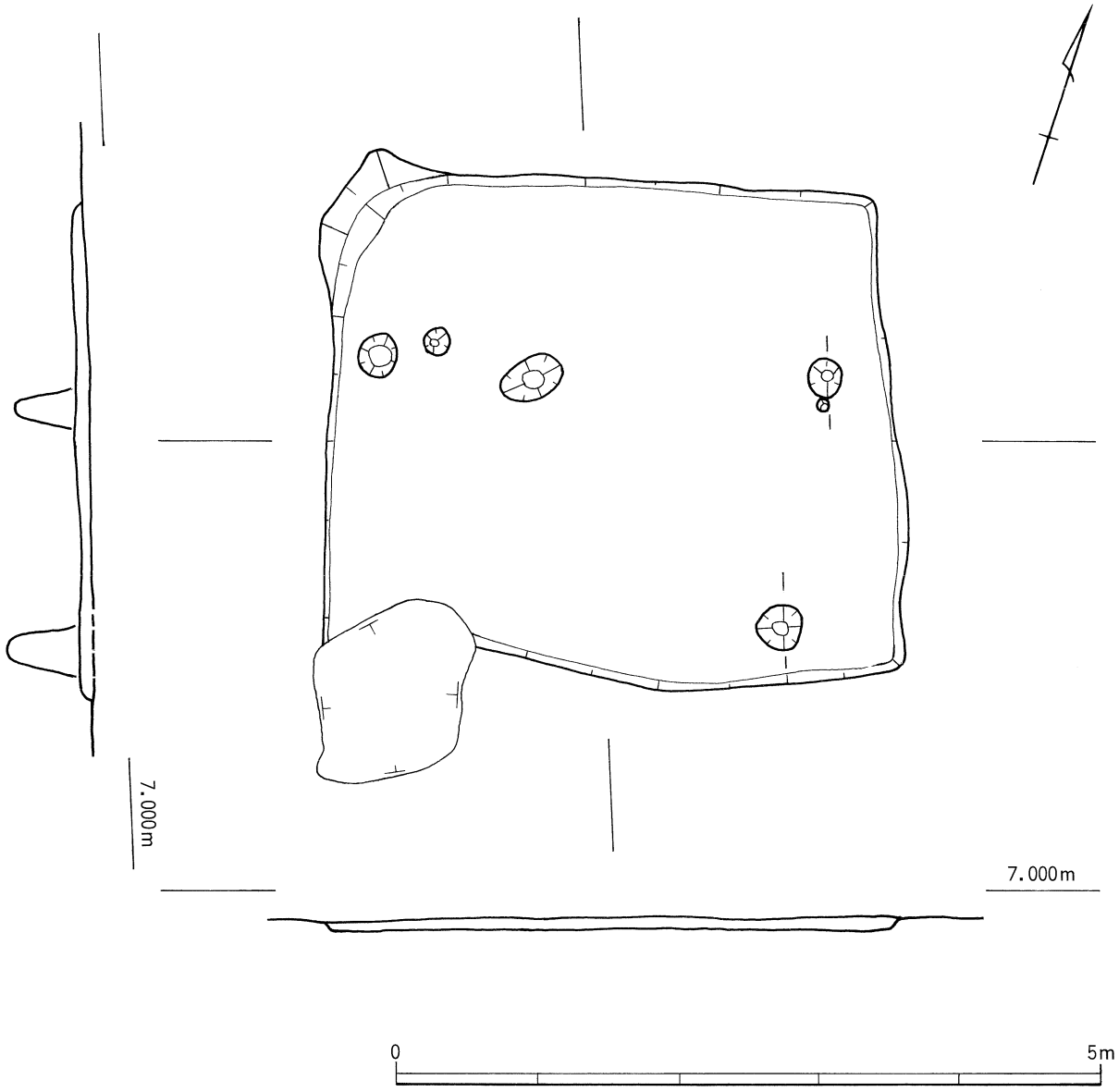


fig.38　ＳＢ217 平面・断面図

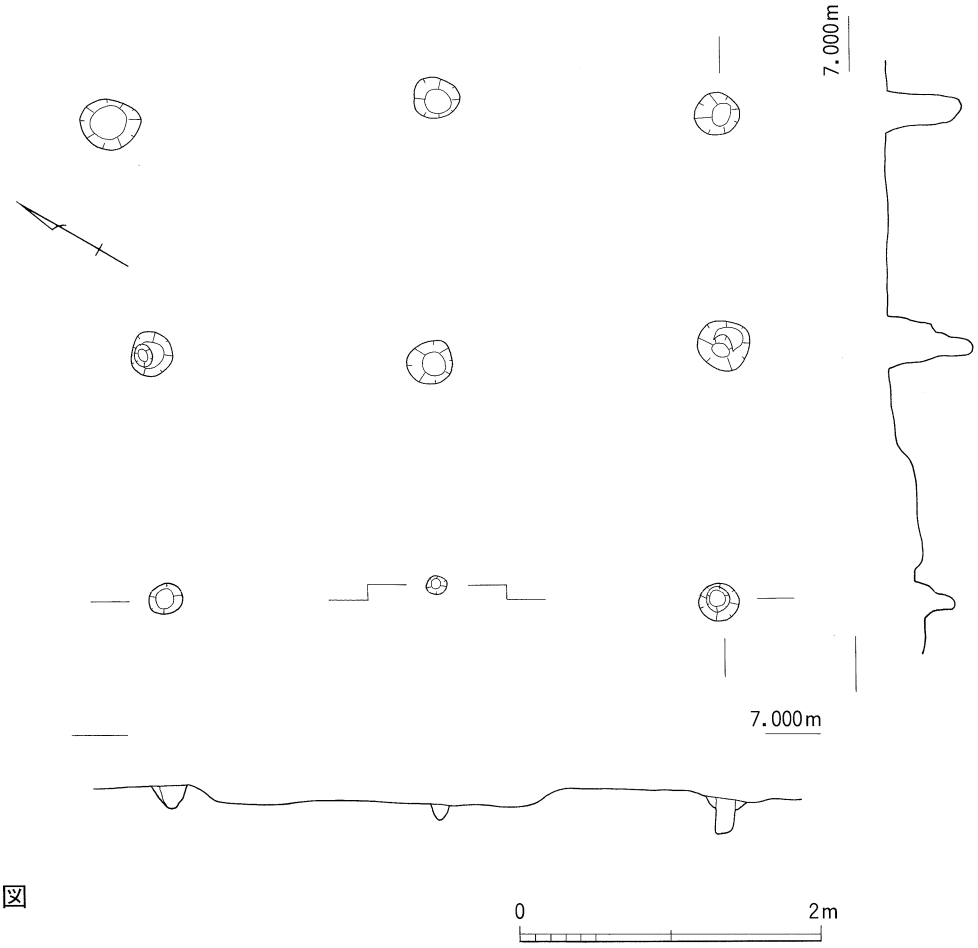


fig.39　ＳＢ218 平面・断面図

ＳＢ218　区画溝ＳＤ201の少し南側で確認された建物である。東西２間（3.2m）×南北２間（4.0m）である。南北にやや長い総柱の小型建物で、主軸は真北から西へ約31°振っている。柱通りのあまりよくない部分も認められる。

削平のため、柱穴の遺存状況はよくないが、掘形は最大で直径0.4m前後を測り、平面形は円形である。深さは深いもので0.6m近くを測る。柱痕は確認できたものでは径0.15m前後である。

柱掘形からは遺物がほとんど出土していないため、時期を決めがたいが、ＳＢ221と建物主軸を同じくすることなどから、古墳時代中期末頃の建物であると推定される。（前田）

ＳＢ219　南北４間（5.6m）×東西４間（6.6m）の側柱構造の東西に長い建物である。ＳＢ209とほぼ同じ規模の建物で、面積もＳＢ209に次いで広いものである。主軸は真北から西へ約24°振っている。柱掘形は最大のもので長径0.5m前後で、平面形は基本的には円形を呈しているが、中には隅円方形の掘形をもつものもある。柱痕の確認できたものでは0.15m前後のものが多くなっている。

柱掘形内からの遺物の出土は少ないが、Ｐ３からは土師質の製塩土器片（44）が１点、Ｐ８からは須恵器の器台の坏部（45）が柱穴底から出土している。須恵器は古墳時代中期末に比定できるＴＫ23～47型式ころの遺物と考えられる。

ＳＢ220と前後関係が認められるが、順序については明確ではない。（前田）

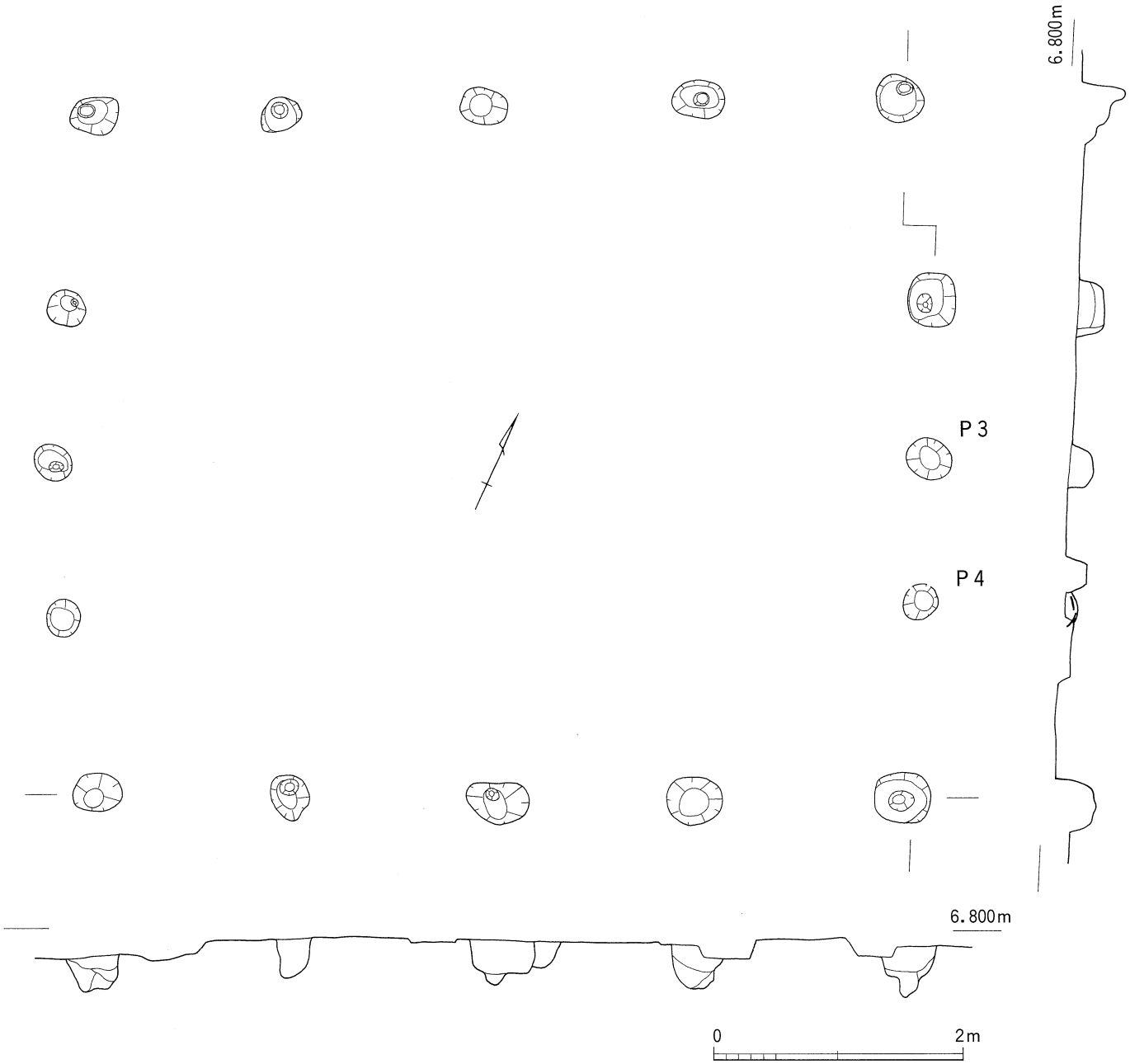


fig.40　ＳＢ219 平面・断面図

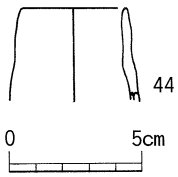


fig.41　ＳＢ219-P3
出土遺物実測図

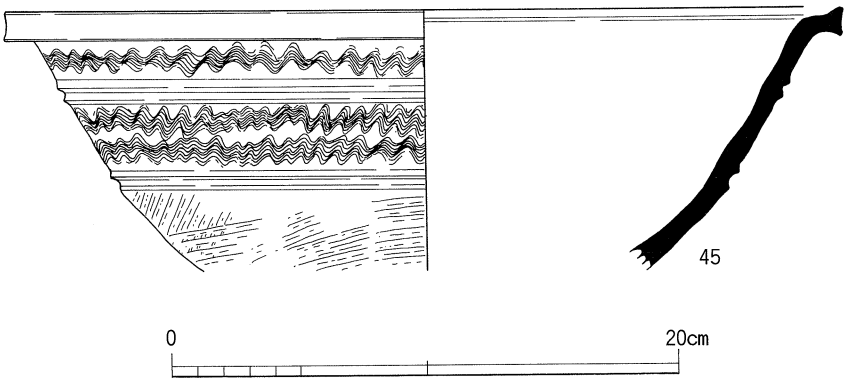


fig.42　ＳＢ219-P4 出土遺物実測図

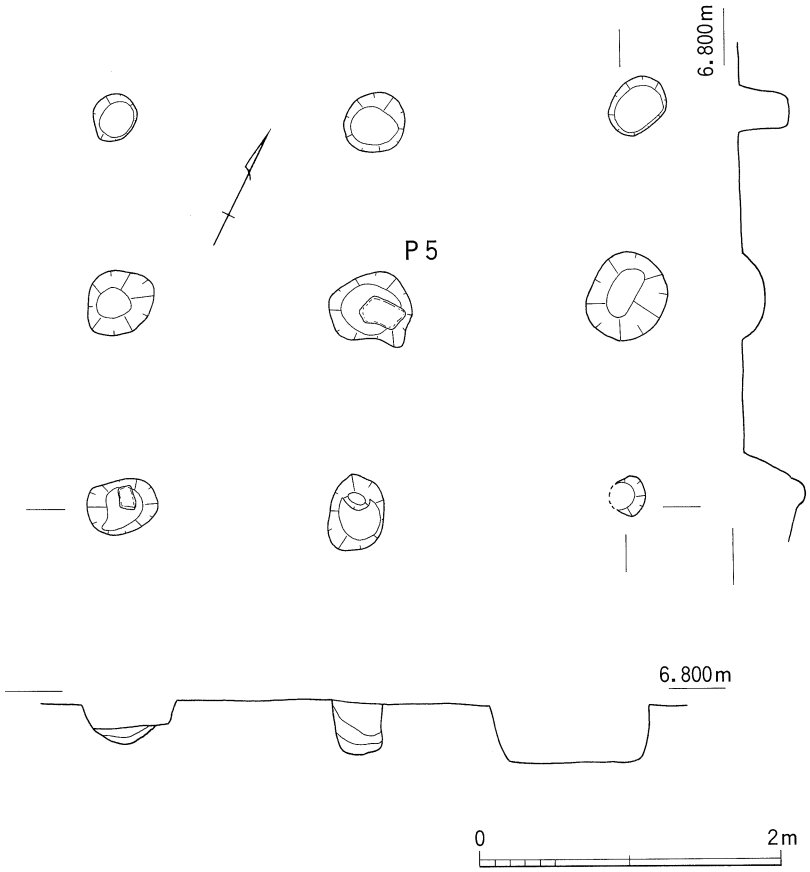


fig.43　ＳＢ220 平面・断面図

ＳＢ220　　南北２間(2.7m)×東西２間(3.5m)の東西にやや長い総柱の建物である。主軸は真北から西へ約28°振っている。

本来はやや大型の柱掘形を持っていたようで、中央東西列では掘形は長径0.6mを測る。平面形は不整円形を呈するものが多い。柱痕は確認できたものでは、直径約0.2mを測る。Ｐ５・９の掘形内には平らな面を持つ石が据えられていた。

柱掘形から出土した遺物は、古墳時代と考えられる土器の細片であったが、中期末ごろの特徴を持つ資料も含まれていることから、他の建物と同時期の古墳時代中期末の建物と推定される。Ｐ９から出土した石はほぼ完形の砂岩製の砥石で、転用されたものであることがわかる。(前田)

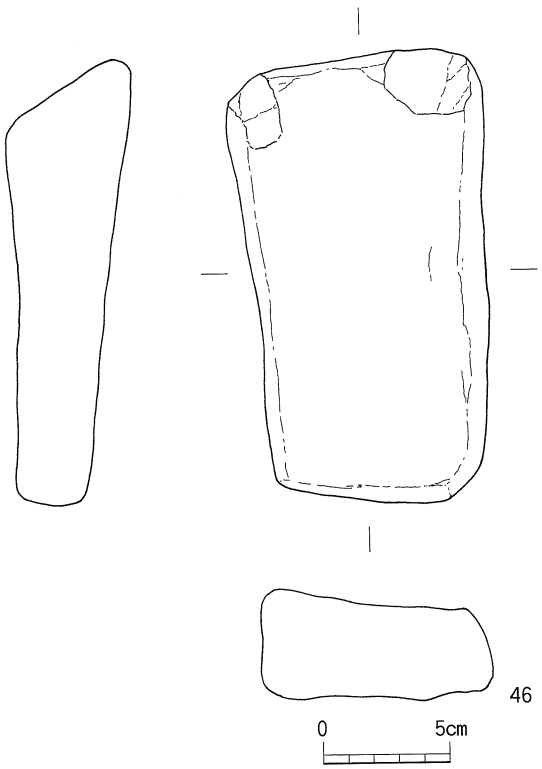


fig.44　ＳＢ220-P5 出土遺物実測図

ＳＢ221　南西隅の柱を攪乱のため欠いているが、南北２間（4.5m）×東西３間（4.8m）の東西にやや長い総柱の建物である。柱通のあまりよくない部分も認められる。主軸は真北から西へ約31°振っている。

やや大型の掘形を持つ建物で、長径0.6m前後の円形もしくは楕円形を呈するものが多い。柱痕は、確認できたものでは径0.2m前後である。掘形の深さも深いもので0.6mを測る。

柱掘形から遺物はあまり出土していないが、古墳時代中期末と推定される須恵器の小片が含まれていることから他の建物と時間的な隔たりは認められないと考えられる。

ＳＢ219と前後関係が認められるが、順序については明確ではない。（前田）

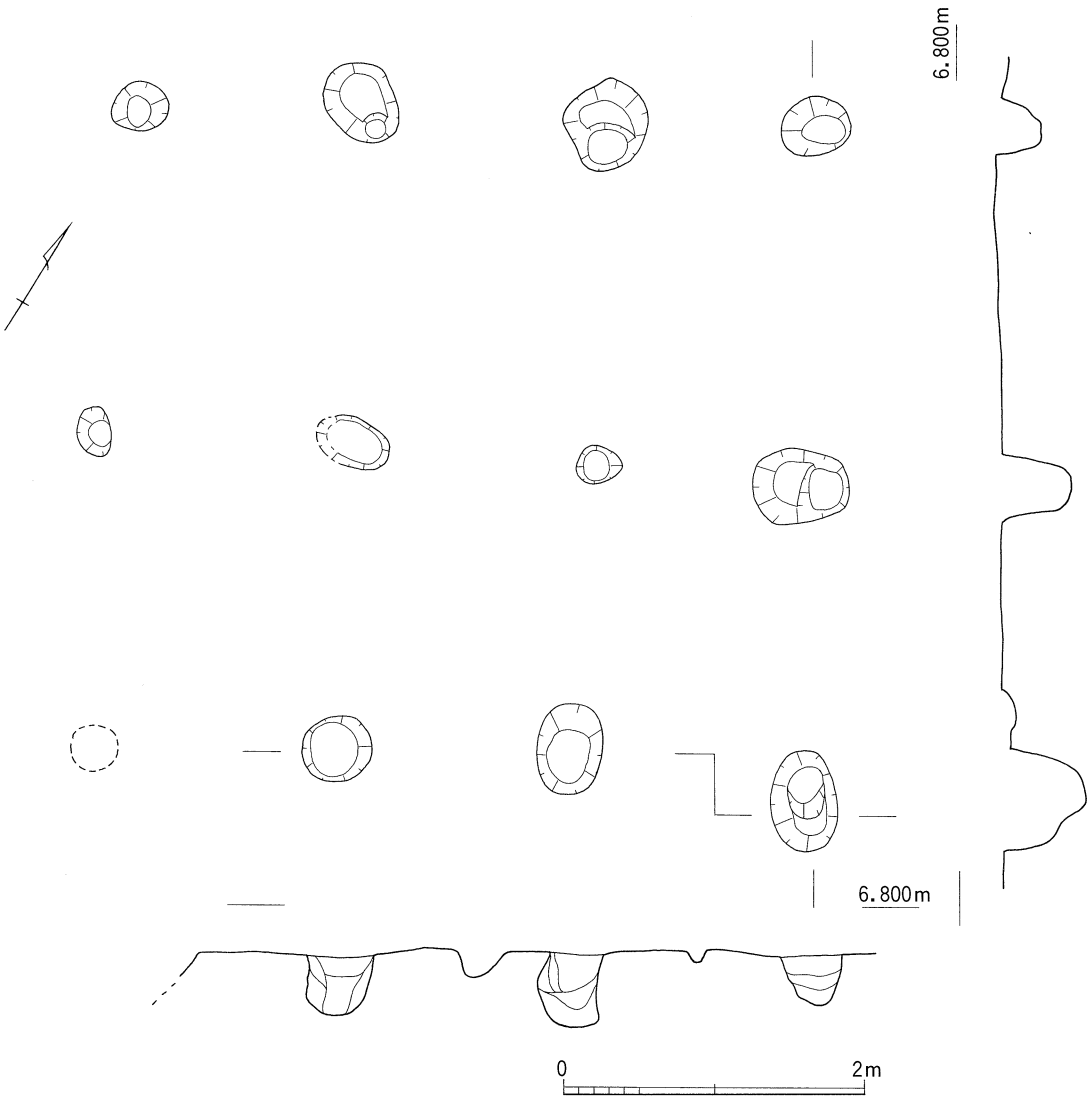


fig.45　ＳＢ221 平面・断面図

ＳＢ222　攪乱の影響を受けているが、南北２間（3.5m）×東西２間（4.0m）の東西にやや長い総柱の建物である。主軸は真北から西へ約27°振っている。

やや大型の柱掘形を持つもので、最大のものは長径0.7mを測る。深さも深く、0.6mを越えるものも確認できる。平面形は不整円形を呈しているが、比較的隅円方形に近いものが多くなっている。柱痕は、確認できたものでは0.2m前後である。

fig.46　ＳＢ222 平面・断面図

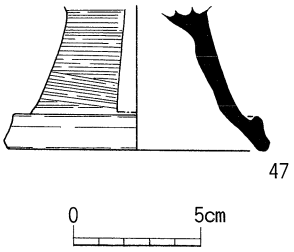


fig.47　ＳＢ222-P3
出土遺物実測図

柱掘形から出土した遺物は多くはないものの、図示できた遺物には須恵器の高坏脚部(47)が１点ある。底径10.0㎝、残存高5.7㎝である。脚部の外面はカキ目調整を施し、長方形スカシを有する。時期的には、古墳時代中期末に比定できるＴＫ23～47型式ころの遺物と考えられる。(前田)

ＳＢ223　攪乱のために南東隅の柱を欠いているが、東西２間（3.5ｍ）×南北３間（4.7ｍ）の南北に長い総柱の建物である。主軸は真北から西へ約22°30′振っているが、柱どおりのあまりよくない建物である。

柱掘形は最大のもので直径0.4ｍ前後を測る小型のものが多い。平面形はほぼ円形を呈している。柱痕は、確認できたものでは0.15ｍ前後である。

柱掘形から出土した遺物には、古墳時代中期末ころと考えられる須恵器の細片が含まれていた。

ＳＢ222・ＳＢ224との間に前後関係が認められるが、その順序については明確にできていない。(前田)

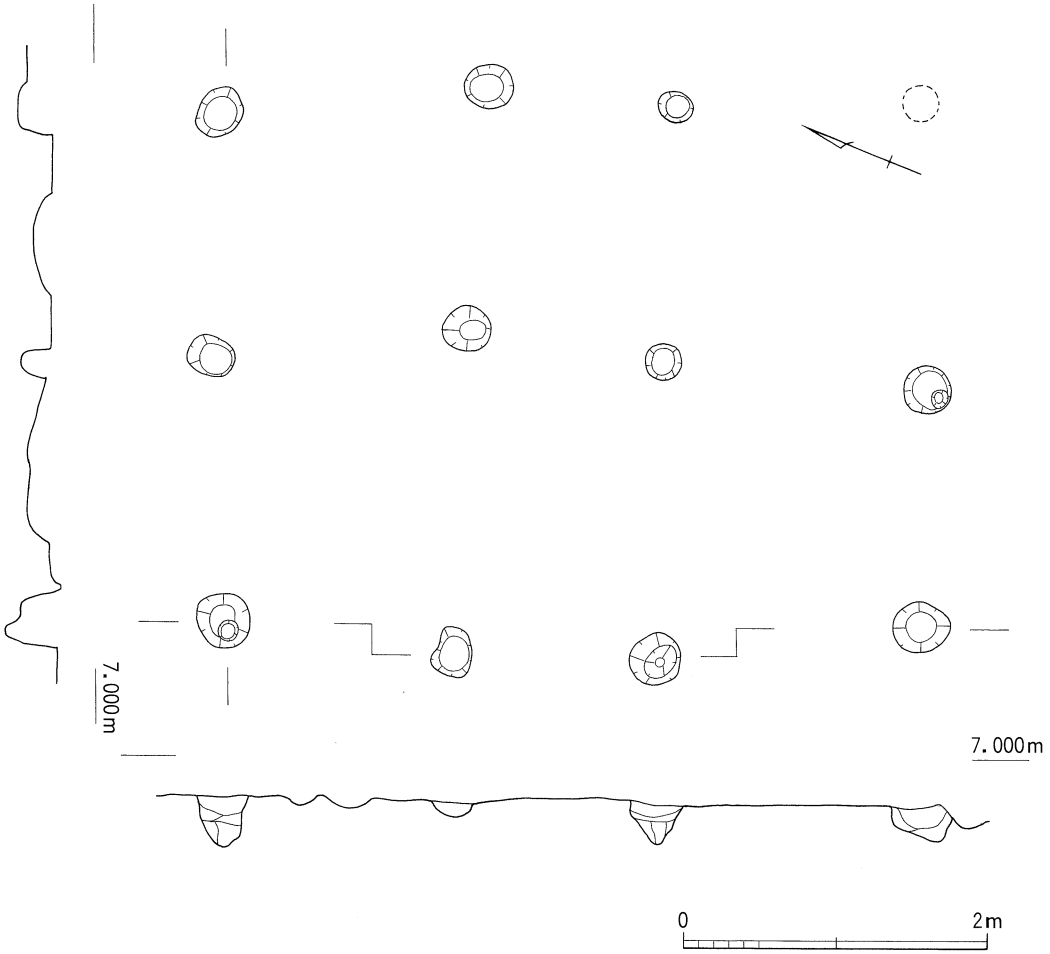


fig.48　ＳＢ223 平面・断面図

ＳＢ224　南北２間（3.8m）×東西３間（4.8m）の東西に長い総柱の建物で、主軸は真北から西へ約25°30′振っている。

柱穴掘形の規模は今回調査された建物の中では比較的大きい部類に含まれ、最大のもので長径0.7m前後を測る。深さも0.6m前後のものが多くなっている。平面形は不整円形を呈するが、隅円方形に近いものもある。柱痕は、確認できたものでは0.2～0.3mである。

柱掘形の中から遺物の出土は多くなかったが、図示できた遺物にはＰ２から出土した須恵器の坏身(48)とＰ４から出土した須恵器甕(49)の２点がある。

(48)は口径11.0cmで、たちあがり端部は内傾する凹状を呈する。(49)は口径25.4cmである。いずれもＴＫ47型式に近い須恵器であることから、古墳時代中期末ころの遺物と考えられる。

ＳＢ223との間に前後関係が認められるが、明確な切り合い関係がなく、その順序については明確ではない。(前田)

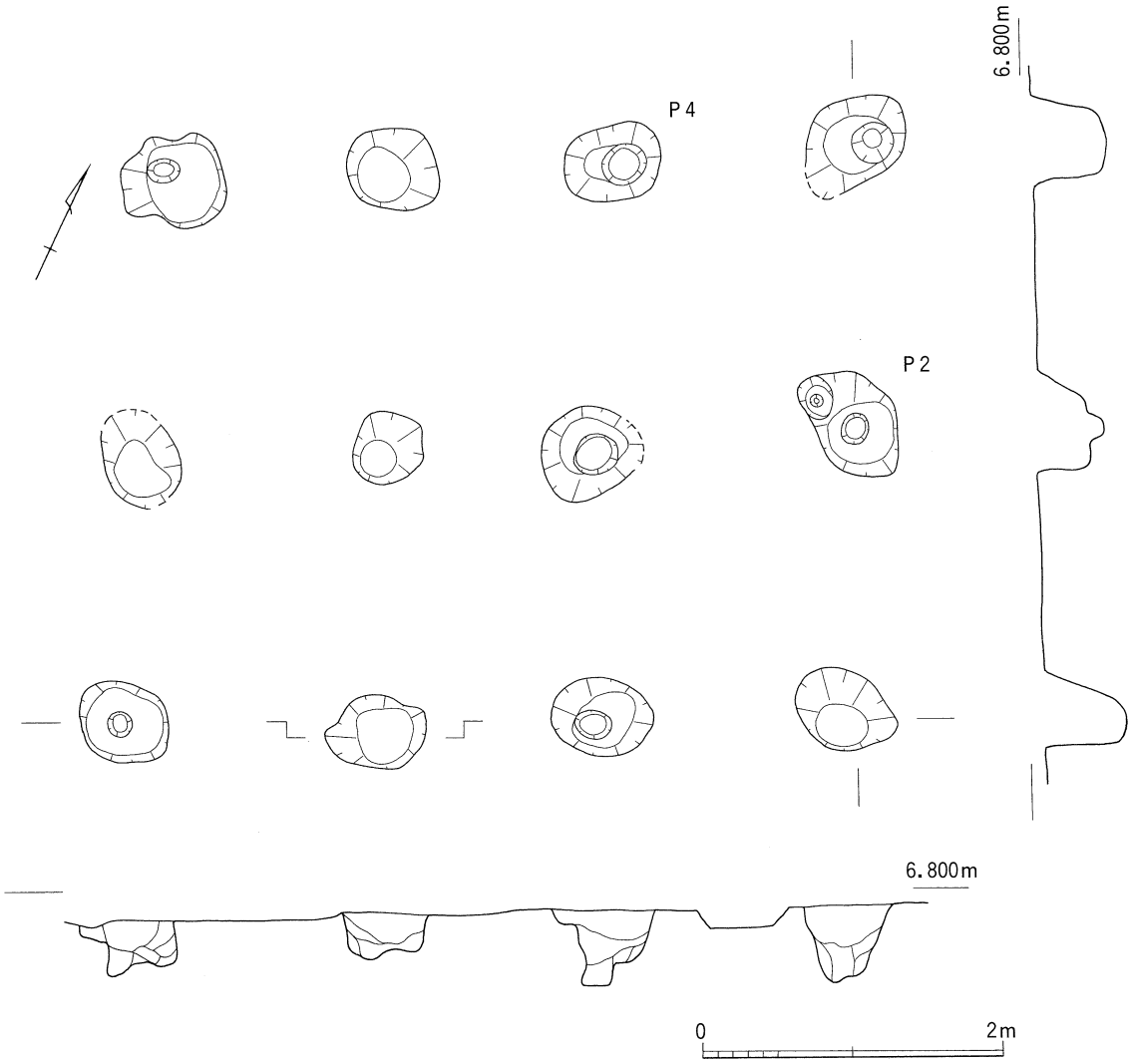


fig.49　ＳＢ224 平面・断面図

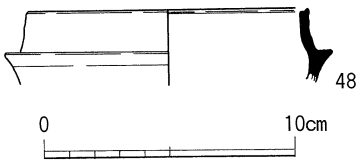


fig.50　ＳＢ224-P2 出土遺物実測図

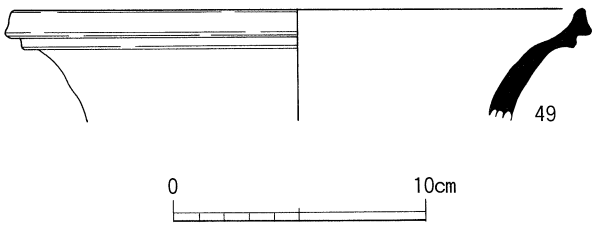


fig.51　ＳＢ224-P4 出土遺物実測図

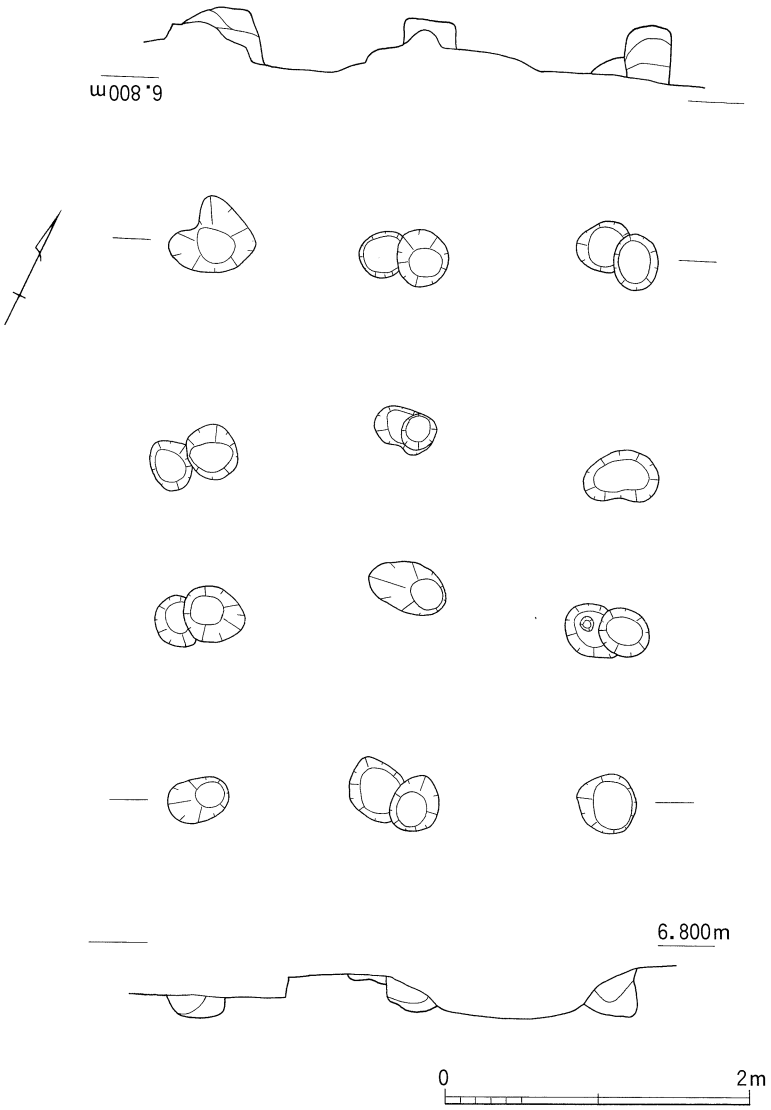


fig.52　ＳＢ225 平面・断面図

ＳＢ225　東西２間（2.7m）×南北３間（3.7m）の南北に長い総柱の建物である。柱間距離の最も短い建物で約1.3m程度である。やや柱通りの良くない部分がある。主軸は真北から西へ約25°振っている。

この建物は、元の掘形から新たに東側に建て替えが行われたようで、東側に平行して柱穴が掘り直されており、基本的に切り合い関係を持っている。平面的に切り合いのみられないものも、断面観察の結果では同じ位置で掘り直されていたことがわかる。

柱掘形は最大のもので長径0.5m前後を測り、平面形は円形あるいは不整円形を呈している。柱痕は、確認できたものでは、直径0.15m前後である。

柱掘形内からは、古墳時代中期末ころと考えられる須恵器の細片が少量出土している。他の建物と大きな時間的な隔たりはないものと推定される。

ＳＢ227との間には前後関係が認められる。（前田）

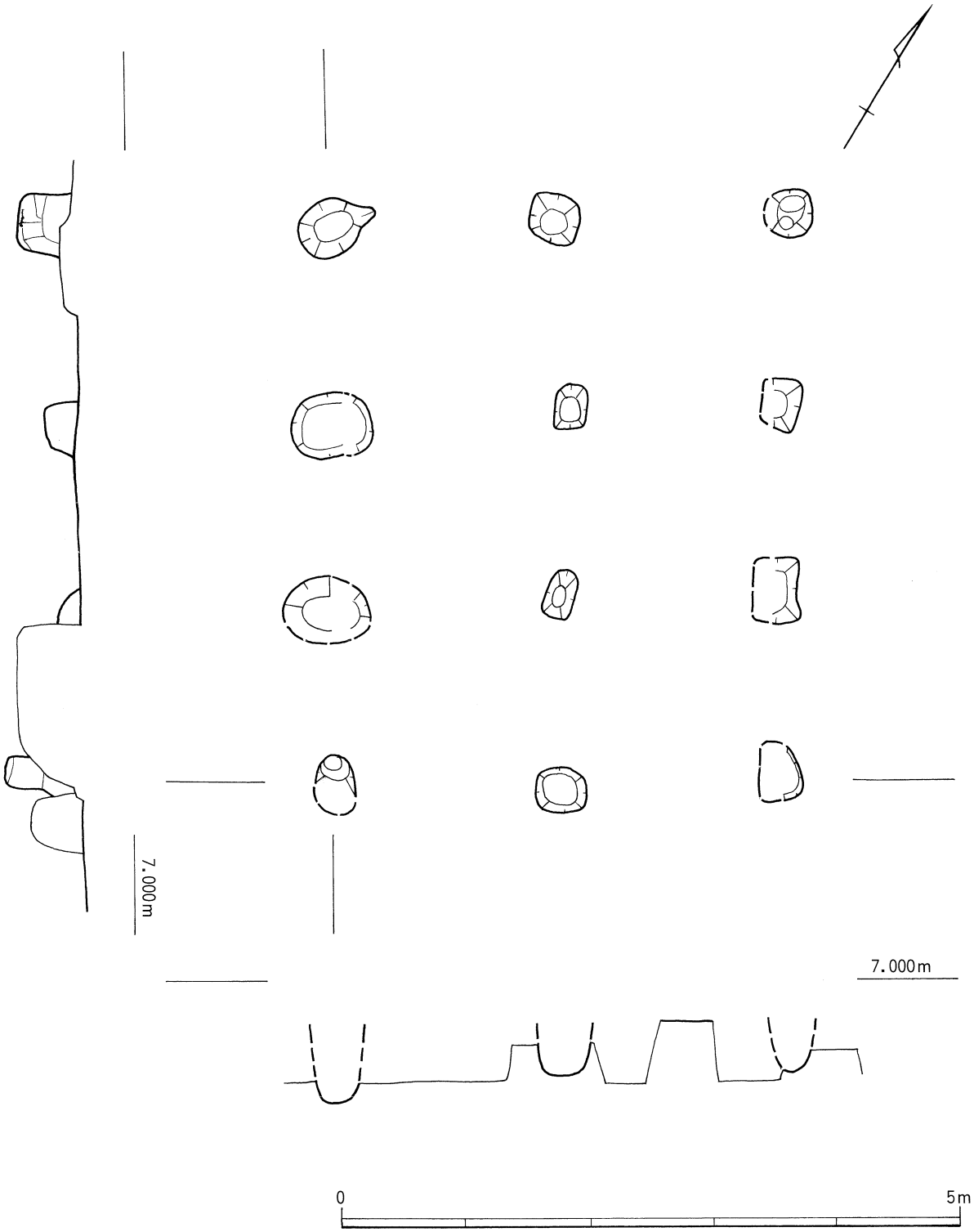


fig.53　ＳＢ226 平面・断面図

ＳＢ226　　梁行（東西）柱間距離1.8m、桁行（南北）柱間距離1.5mの２間×３間の南北棟の総柱建物である。面積16.2m²で、主軸は真北から西へ約36°30′振る。

柱穴の残存状況が良好なものから判断すると、長径0.6m、短径0.6m、深さ0.4～0.6mの楕円形の掘形である。北西隅部の柱穴では柱痕と木質の残存が認められた。

柱穴掘形からの出土遺物は微量であった。（口野）

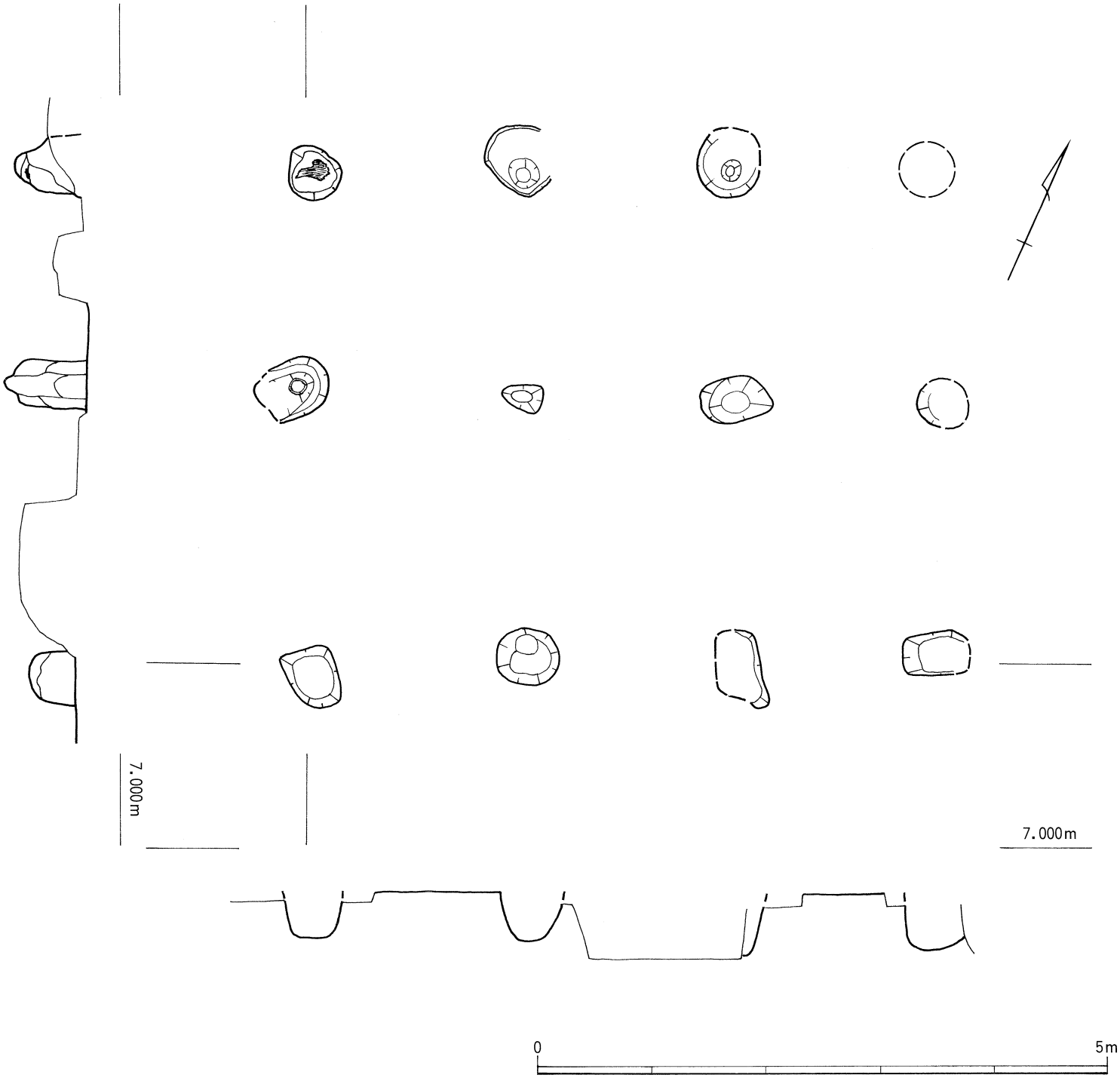


fig.54　ＳＢ227 平面・断面図

ＳＢ227　　桁行（東西）柱間距離1.8m、梁行（南北）柱間距離1.9mの２間×３間の東西棟の総柱建物である。面積20.5m²で、主軸は真北から西へ約29°振る。

柱穴掘形は、円形から楕円形で、径0.6m、深さ0.4～0.7mである。北西部の柱穴では柱痕が見られ、北西隅の柱穴では木質の残存が認められた。

ＳＢ226とＳＢ227の南西隅柱穴で、切り合いがある。ＳＢ227の柱穴がＳＢ226のそれを切り、ＳＢ227がＳＢ226より新しい建物であることがわかる。

柱穴掘形からの出土遺物は、微量であった。（口野）

ＳＢ228　　桁行（東西）柱間距離1.6m、梁行（南北）柱間距離2.1mの３間×２間の東西棟の総柱建物である。面積20.2m²で、主軸は真北から西へ約29°振る。

柱穴掘形は長辺約0.7m、短辺約0.5mの隅円長方形で、柱痕は直径約0.15m、深さ0.4～0.6mである。柱穴掘形は、その長辺を建物の辺にあわせて掘られているようである。このような特徴は、これまでに松野遺跡で確認された掘立柱建物には見られないものである。

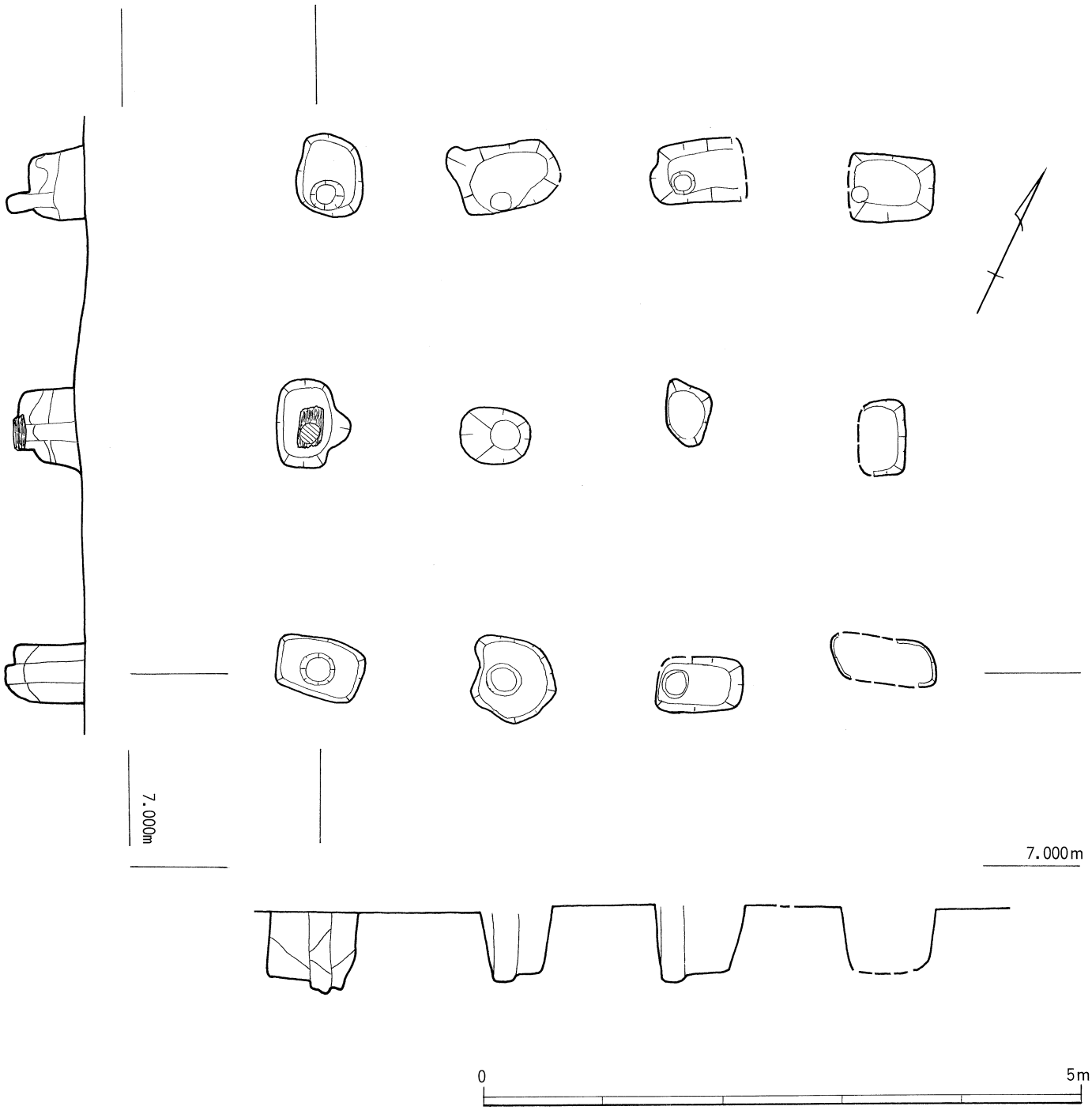


fig.55　ＳＢ228 平面・断面図

Ｐ11では厚さ0.1ｍの板材による礎盤が確認されており、その他柱痕跡材なども検出されており、樹種同定の結果、コウヤマキであることが判明している。

ＳＢ227とＳＢ228の主軸はほぼ同一である。しかしながら、柱穴掘形の距離は2.0ｍ足らずで、軒が接する程の位置関係にある。

柱穴掘形からの出土遺物は、微量であった。（口野）

挿図写真15　ＳＢ228-P11 柱痕と礎盤検出状況

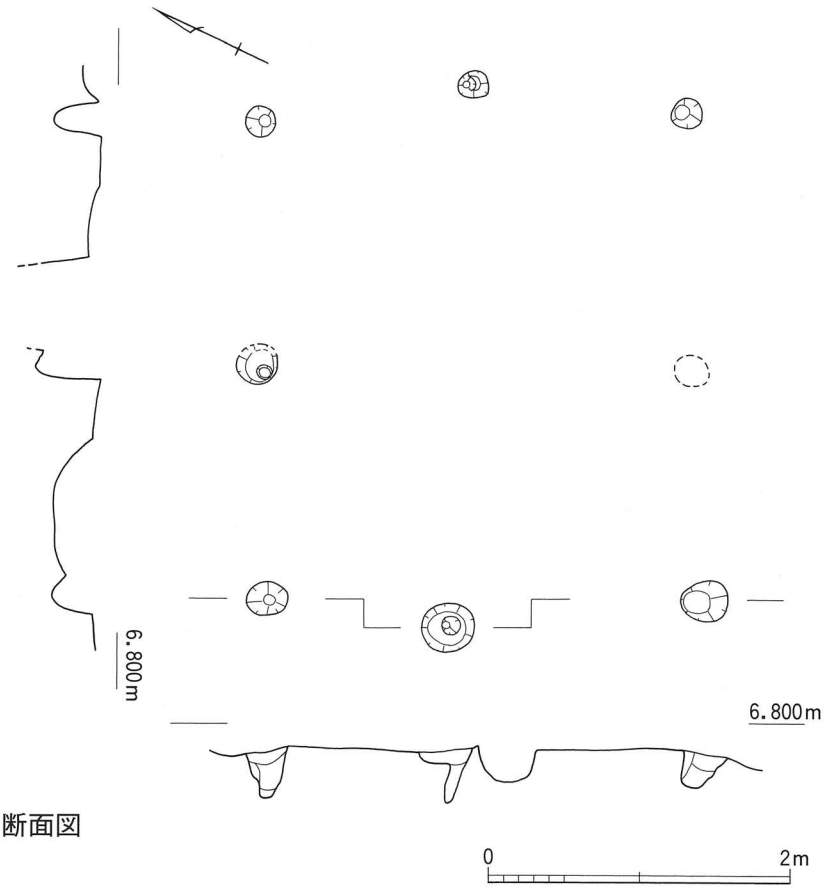


fig.56　ＳＢ229 平面・断面図

ＳＢ229　　攪乱のために南辺中央の柱穴を２基欠いているものの、南北２間（2.8m）×東西２間（3.3m）の東西方向にやや長い建物で、現状では側柱の小型の建物で、柱通りはあまり良くない。主軸は真北から西へ約24°30′振っている。

中央にも柱穴を欠いているが、中世段階の溝のために削られている可能性が高く、総柱の建物であった可能性は否定できない。

柱掘形は最大のものでも長径0.35m前後の小型のもので、平面形はほぼ円形を呈している。柱痕は、確認できたものでは0.15m前後である。

柱掘形からは遺物がほとんど出土していないが、古墳時代中期末と考えられる土器の小片がわずかに出土していることから、他の建物と時間的な隔たりは認められないと考えられる。（前田）

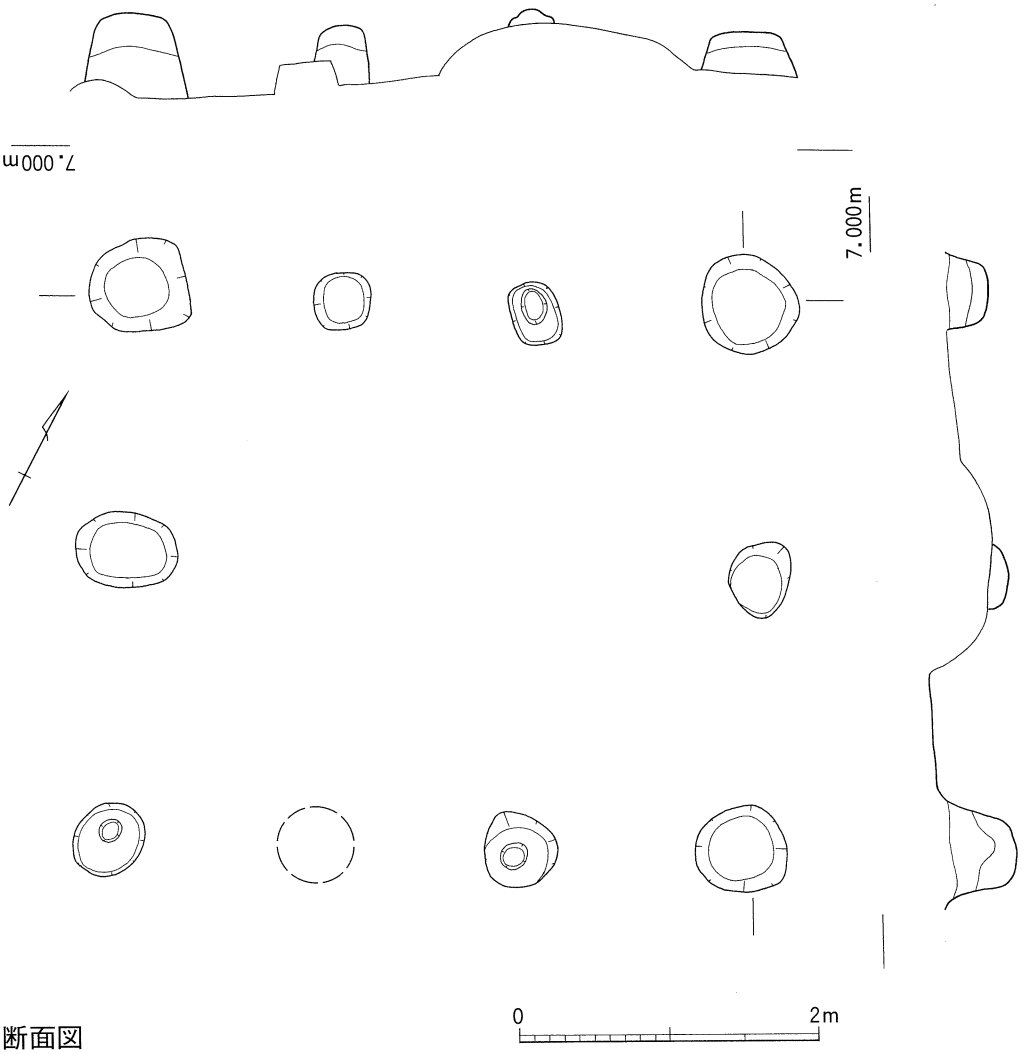


fig.57　ＳＢ230 平面・断面図

ＳＢ230　　調査区の最南端で検出された建物である。梁行（東西）柱間距離1.75m、桁行（南北）柱間距離1.4mの３間×２間の東西棟の側柱建物である。面積は14.7m²である。南東隅で検出された柱穴は、部分的に調査区を拡張して確認した。主軸は真北から西へ約26°振っている。

柱穴の平面形は円形に近く、直径0.6m、深さ0.5～0.6mの規模である。柱痕は判明し

なかったが、柱の沈み込みが柱穴底部で観察されるものがあった。

建物の中央部は、柱穴が損なわれるような撹乱坑は存在せず、柱穴が存在しないことにより、側柱建物と考えられる。

側柱建物としては、他の側柱建物などに比べて、相対的に柱穴の規模が大きい。異なる性質を持つ建物であろうか。

柱穴からの出土遺物は、微量で古墳時代であると確認できる程度のものである。時期を詳細に示すものはなく、また、特記すべき遺物も出土しなかった。(口野・川上)

調査区	遺構名	規模 間数	東西m	南北m	方位	面積 (m²)	備考
日吉2地区	SB201	2×1以上	3.8	−	N56° W		
	SB202	3×2	5.4	3.2	N27° W	17.3	総柱 東西棟
	SB203	2×2	3.0	2.4	N32° W	7.2	総柱 東西棟
	SB204	2×3	4.0	4.8	N43° W	19.2	総柱 南北棟
	SB205	4×3	6.8	5.6	N14° 30′ W	38.1	側柱 東西棟
	SB211	2×2	3.2	4.2	N44° W	13.4	側柱 南北棟
	SB212	2×3	6.2	5.0	N21° 45′ W	31.0	側柱 東西棟
	SB218	2×2	3.3	4.0	N31° W	13.2	総柱 南北棟
	SB219	4×4	6.6	5.6	N24° W	37.0	側柱 東西棟
	SB220	2×2	3.5	2.7	N28° W	9.5	総柱 東西棟
	SB221	2×3	4.8	4.5	N31° W	21.6	総柱 東西棟
	SB222	2×2	4.0	3.5	N27° W	14.0	総柱 東西棟
	SB223	3×2	4.7	3.5	N22° 30′ W	16.5	総柱 南北棟
	SB224	2×3	4.8	3.8	N25° 30′ W	18.2	総柱 東西棟
	SB225	2×3	2.7	3.7	N25° 45′ W	10.0	総柱 南北棟 建替有
	SB226	2×3	3.6	4.5	N36° 30′ W	16.2	総柱 南北棟
	SB227	2×3	5.4	4.6	N29° W	20.5	総柱 東西棟
	SB228	3×2	4.8	4.2	N29° W	20.2	総柱 東西棟 礎盤有
	SB229	2×2	3.3	2.8	N22° 30′ W	9.2	総柱 東西棟
	SB230	3×2	4.2	3.5	N26° W	14.7	側柱 東西棟
若松7地区	SB232	3×3	5.2	4.3	N36° 30′ W	22.4	側柱 東西棟
	SB233	3×1以上	−	−	N26° 30′ W	−	
	SB234	1×2以上	−	−	N33° 45′ W	−	
	SB235	2×2以上	−	−	N26° W	−	
	SB236	2×2以上	−	−	N27° W	−	

表2　松野遺跡第3～7次調査検出の古墳時代掘立柱建物一覧表

調査区	遺構名	規模 東西m	南北m	面積 (m²)	備考
日吉2地区	SB206	4.3	4.0	17.2	4本柱
	SB207	(4.2)	(4.2)	(17.6)	
	SB208	4.4	4.0	17.6	4本柱
	SB209	(3.8)	(4.0)	(15.2)	
	SB210	5.1	5.1	26.0	4本柱
	SB213	4.0	4.5	18.0	4本柱
	SB214	6.3	5.2	32.3	4本柱
	SB215	4.8	4.4	21.1	
	SB216	5.2	3.5	18.2	
	SB217	4.2	3.8	16.0	
若松7	SB231	3.6	3.6	(13.0)	焼失住居

表3　松野遺跡第3～7次調査検出の古墳時代竪穴住居一覧表

２．溝状遺構

ＳＤ201　調査区のほぼ中央部を逆Ｌ字状に屈曲している（ＳＸ204を経由してＳＤ204へつながっている）溝の東西方向部分の溝で、長さ45m以上を検出している。ほぼ並行してＳＤ202があるが、部分的に切り合い関係を持っている。ＳＤ201がＳＤ202に先行して掘削されていたことが土層の堆積状況から窺える。

この溝は、東側が攪乱のために失われているが、ほぼ直線的に延びる溝で、最大幅は約２ｍで、深さは約0.3m程度である。断面形は浅い皿状を呈している。

この溝に囲まれた範囲の中には竪穴住居が見られず、倉庫の可能性の高い総柱の掘立柱建物を主体として構成されていることから、集落内を区画する意味を持った溝ではなかったかと推定される。

溝の中からは土器のほかに滑石製品が多量に出土しており、この溝の性格を考える上で示唆的な遺物である。この溝の中では遺物がまとまって出土するところが２箇所あり、それぞれ東群・西群と呼称する。いずれも溝底から浮いた状態で出土しており、溝がある程度埋まった段階で置かれたものと考えられる。東群は比較的散漫な状態で遺物が置かれて

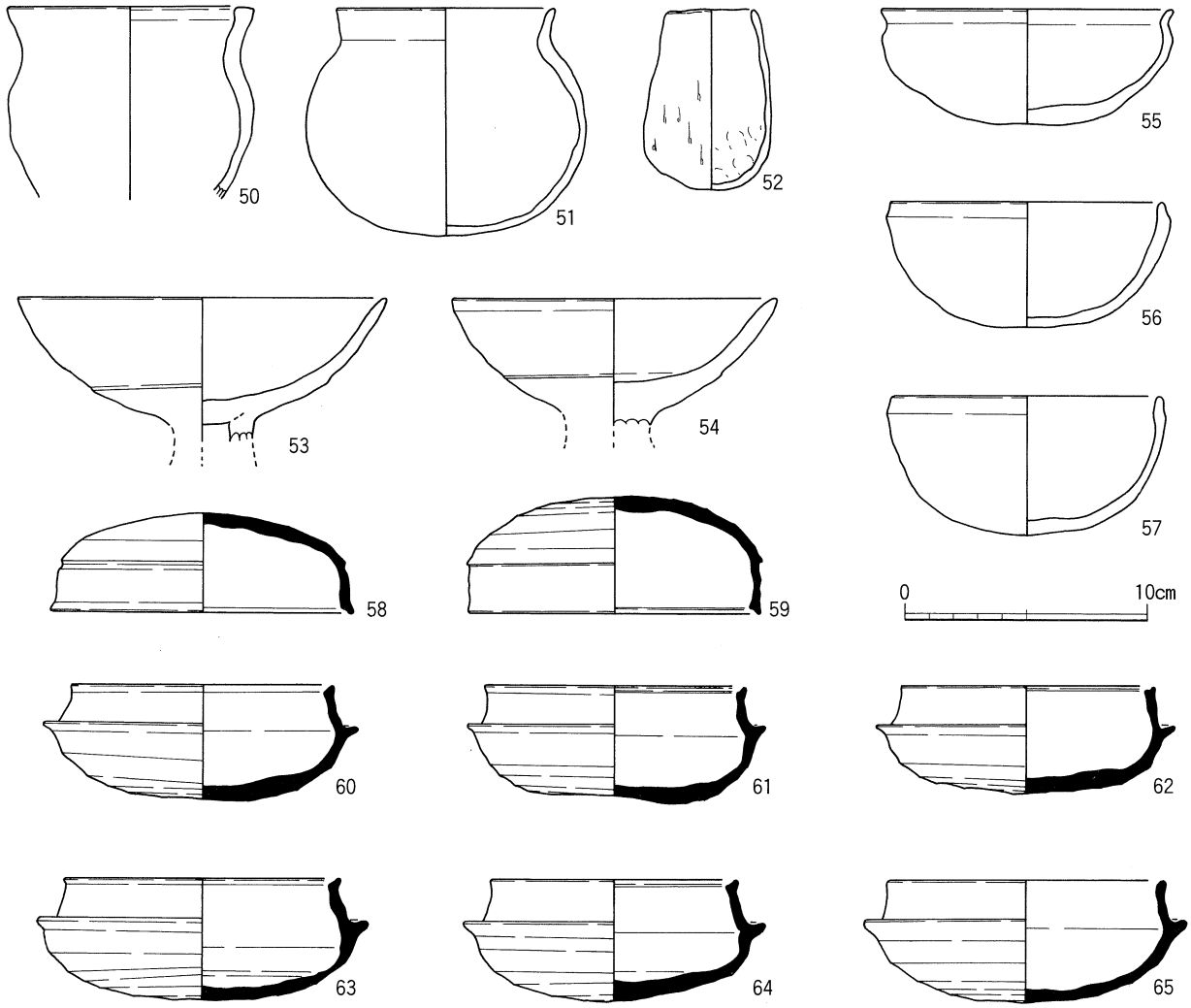


fig.58　ＳＤ201 出土土器実測図

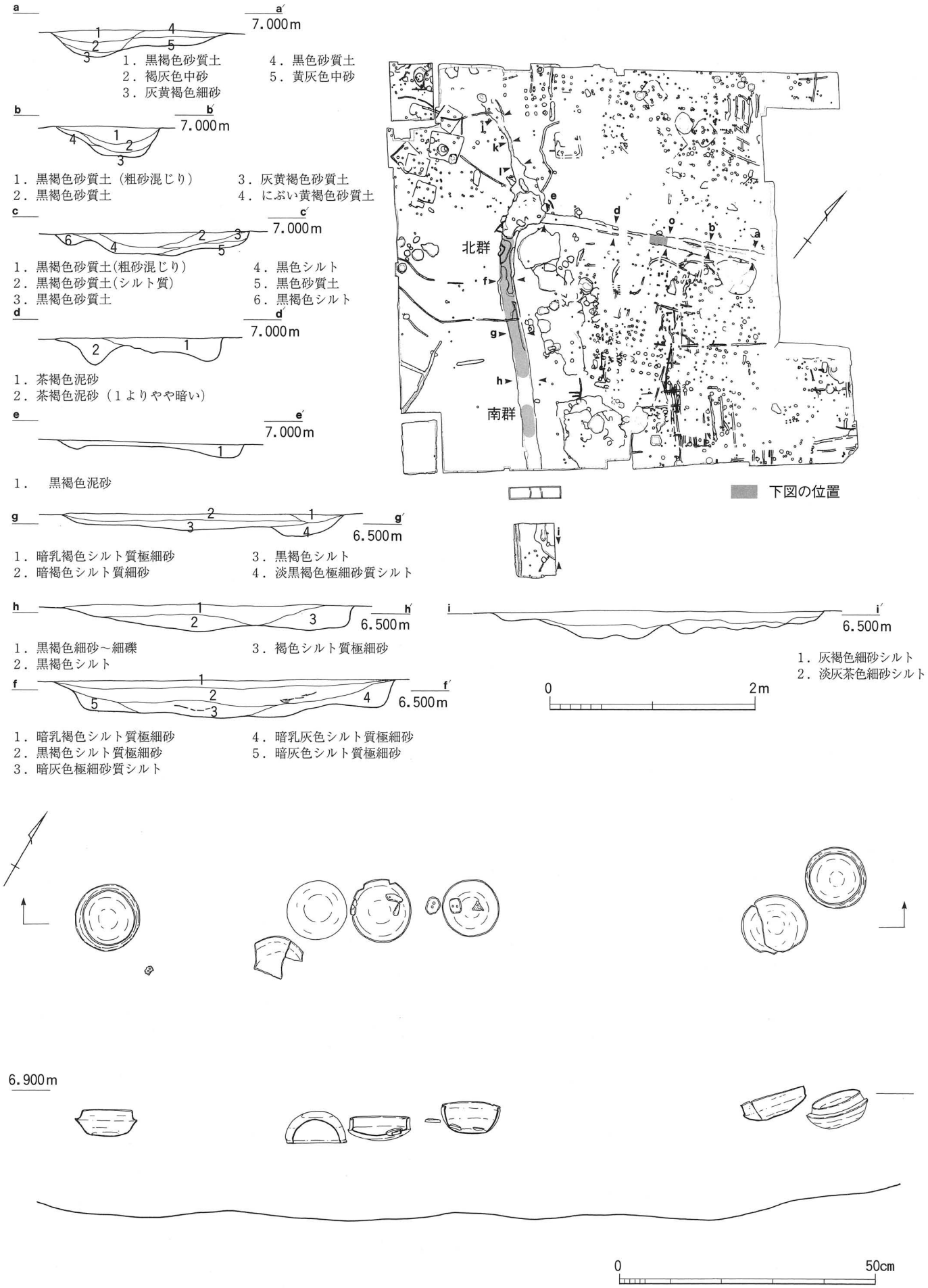


fig.59　ＳＤ201・202・204 断面図およびＳＤ201西群遺物検出状況実測図

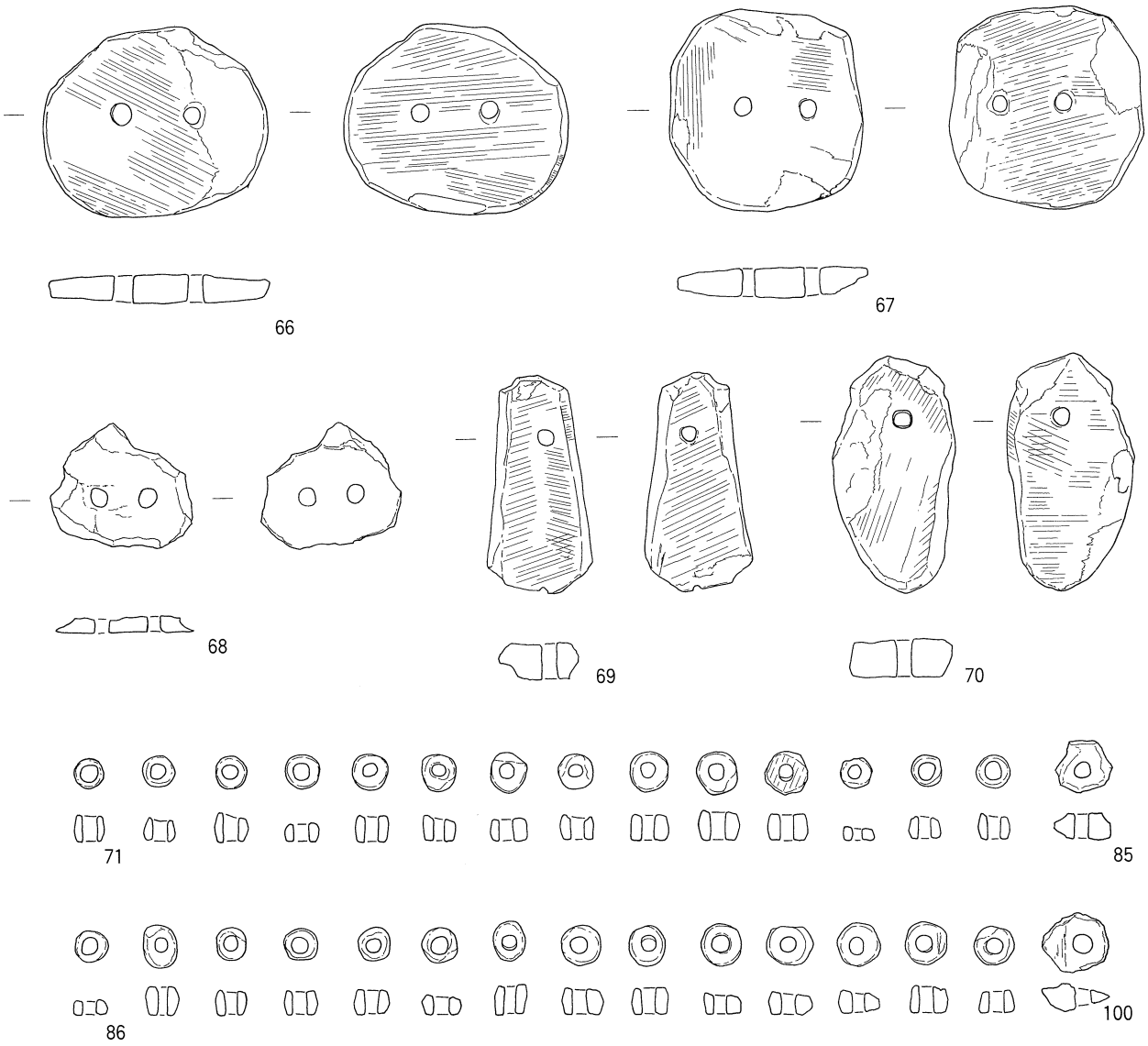


fig.60　ＳＤ201 出土玉類実測図（１）

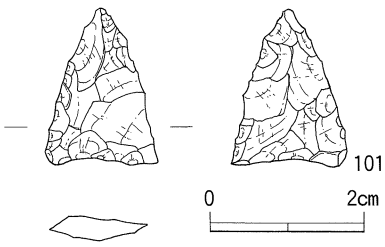


fig.61　ＳＤ201 出土石器実測図

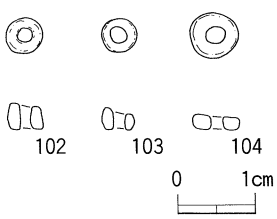


fig.62　ＳＤ201 出土玉類実測図（２）

いたが、土師器の高坏は意識的に脚部を打ち欠いて椀状にして使用されるなど、何か物を入れるような状態での出土であった。西群は東群よりも比較的まとまりをもって並べられていた。並べられた須恵器の坏蓋や坏身、土師器の椀の中とその周辺には滑石製品や石鏃が置かれていた。東群・西群ともに土器周辺の土を水洗いした結果、多量の滑石製の臼玉や臼玉未製品が出土している。(50～55・62～65)が東群の土器で、(56～61)が西群の土器である。

(50・51)は土師器の小型の甕である。磨滅が著しく調整などは不明確であるが、口縁端部の仕上げ方は両者で異なっている。(52)は完形品に復元できた土師質の製塩土器で、器高は7.4cmを測る。２次焼成の痕跡は認められなかった。体部外面下半にはヘラケズリ痕を残し、内底面には指押さえの痕跡を明瞭にとどめている。(53・54) は土師器の高坏の坏部である。いずれも磨滅が著しいが、坏部の立ち上がりの部分に段を持っている。(55～57)は土師器の椀である。(55)のように口縁部が短く「く」の字形に外反するものと、(56・57)のように口縁部のヨコナデによって上方へつまみ上げ気味に端部を収めるものとの２種類に分類できる。後者の方がやや深く仕上げられている。(58・59)は須恵器の坏蓋で、口縁部端部が短く外反する(58)としない(59)の両者が存在する。天井部と口縁部を界する稜はまだしっかりしている。(58)の焼成は甘く、そのため磨滅が進んでいる。(60～65)は須恵器の坏身である。(65)の口縁端部は丸みを持つように仕上げられているが、それ以外の端部は明瞭な段を持っている。受け部端はやや丸みをもつものが多くなっている。(60・63)も焼成の甘い土器である。

須恵器の編年ではＴＫ23型式に相当するものと考えられ、土師器とも合わせて良好な一括資料になると考えられる。

滑石製品は双孔円盤６点、剣形１点、勾玉模造（剣形の可能性もある）１点、臼玉及び臼玉未製品118点が出土している。また、弥生時代のサヌカイト製の平基式無茎鏃１点が須恵器の坏蓋の中に双孔円盤１点とともに入れられていた。(前田)

ＳＤ202　ＳＤ201の南側でほぼ並行するように確認された溝で、部分的に北側に拡がることがあったようで、ＳＤ201と切り合い関係のある部分もみられる。東端は、中世の遺構ＳＸ302付近で途切れており、ＳＤ201のように東へはのびていなかったと考えられる。最大幅は約1.7mで、深さは約0.3mである。断面形は浅い皿状を呈している。

この溝からの遺物の出土は少なく、図示できるものもなかった。また、ＳＤ201のように滑石製品の出土も確認できなかった。(前田)

ＳＤ203　調査区北西方向から南東方向へ流れる溝状遺構である。ＳＸ204でＳＤ201・202と合流し、ＳＤ204として流れが変わる溝状遺構である。断面図にも示すように、幅は0.6～2.3mと変化する。深さは0.2m前後、断面は蒲鉾型を呈す。

ＳＸ204の北側辺りでは部分的に深くなり、この底から径0.2m程の砂岩と石英の礫と径0.15m程の砥石が須恵器片・土師器片とともに出土した。

ＳＤ203はＳＥ205辺りで消滅しているように見えるが、ＳＥ205・ＳＸ201が検出された約100m²ほどは現代の建物の基礎で遺構面そのものが約0.4m削平されており、深い遺構の底部のみが検出された。このため深さが0.2m前後のＳＤ203は検出されなかった。fig.

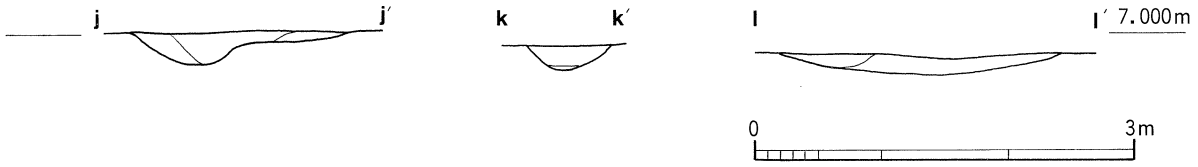


fig.63　ＳＤ203 断面図

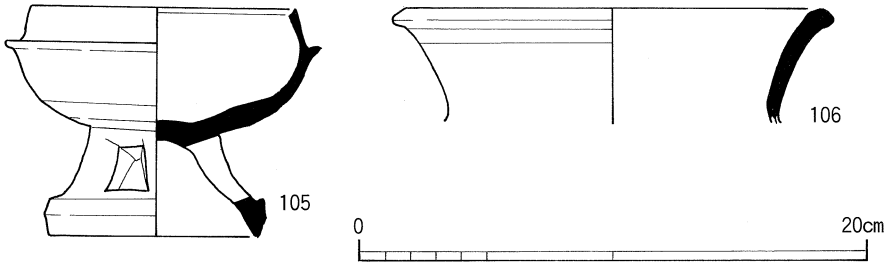


fig.64　ＳＤ203
出土遺物実測図

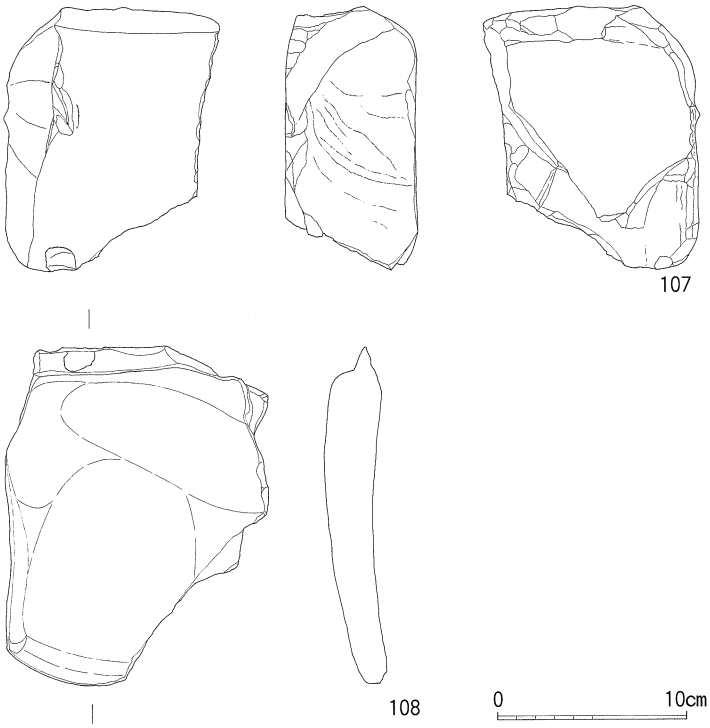


fig.65　ＳＤ203 出土砥石実測図

222で示すようにＳＤ203の方向は松野遺跡第１次調査地点の西側の溝（ＳＤ01）の方向に連続するようにみえる。

（107）は、有蓋高坏でＴＫ47型式と考えられる。（108）は（107）よりも新しい時期の須恵器甕口縁部と考えられる。

（105・106）は砥石である。（105）は比重2.837で石材は輝緑岩と考えられる。上下の二面を使用している。（106）は砂岩で、上面のみ使用している。（口野）

ＳＤ204　北西から南東に向かってまっすぐ走る溝状遺構で、北端ではやや北方向へ曲がり、ＳＸ204を経てＳＤ201に続く。幅３ｍ前後、最大深さ0.2～0.3ｍで、ＳＸ204の南肩部から南端の第６－１次調査地点で確認されたコーナー部までの総延長は東側肩部で約62ｍ、西側

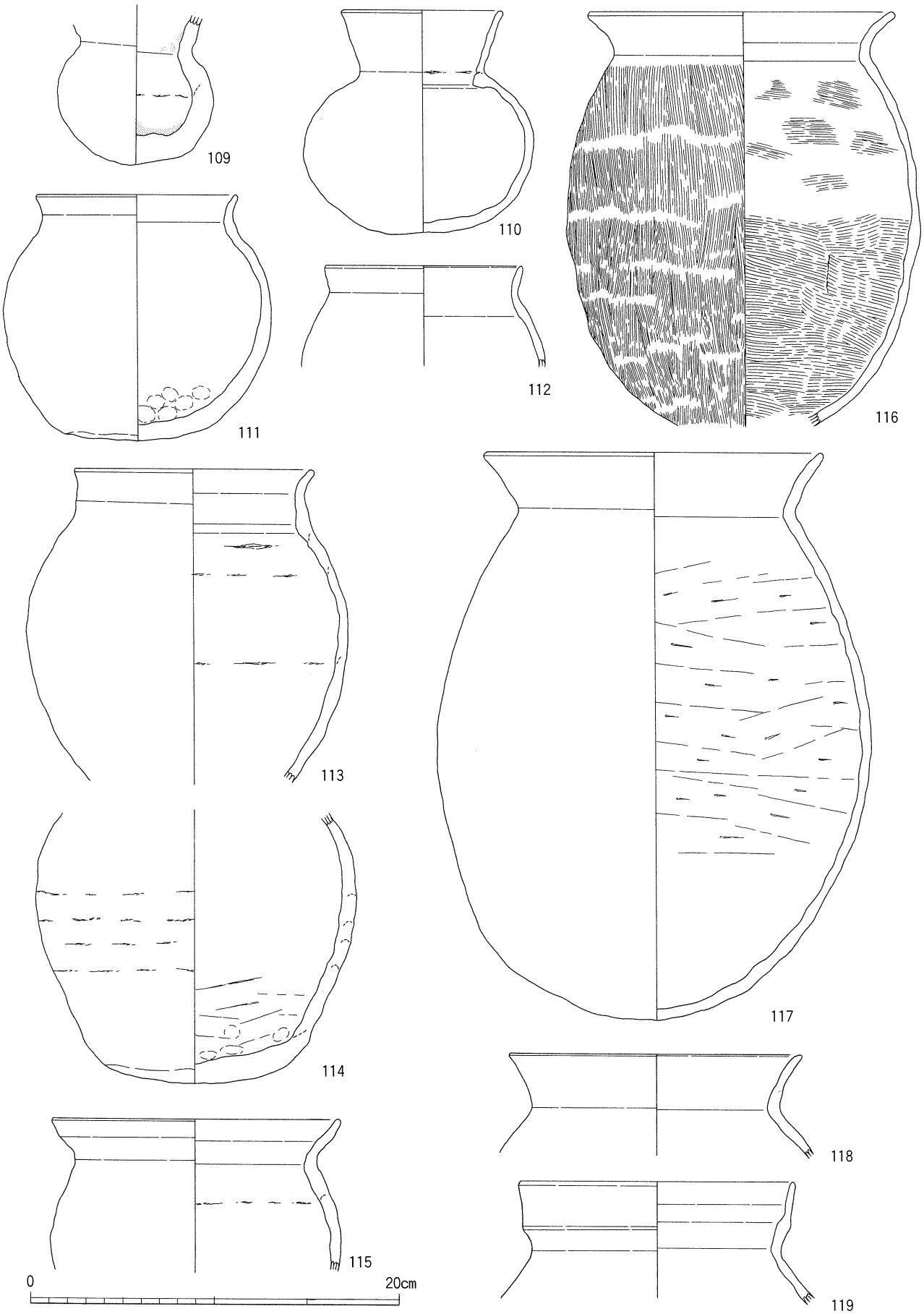


fig.66　ＳＤ204 北群出土土器実測図（１）

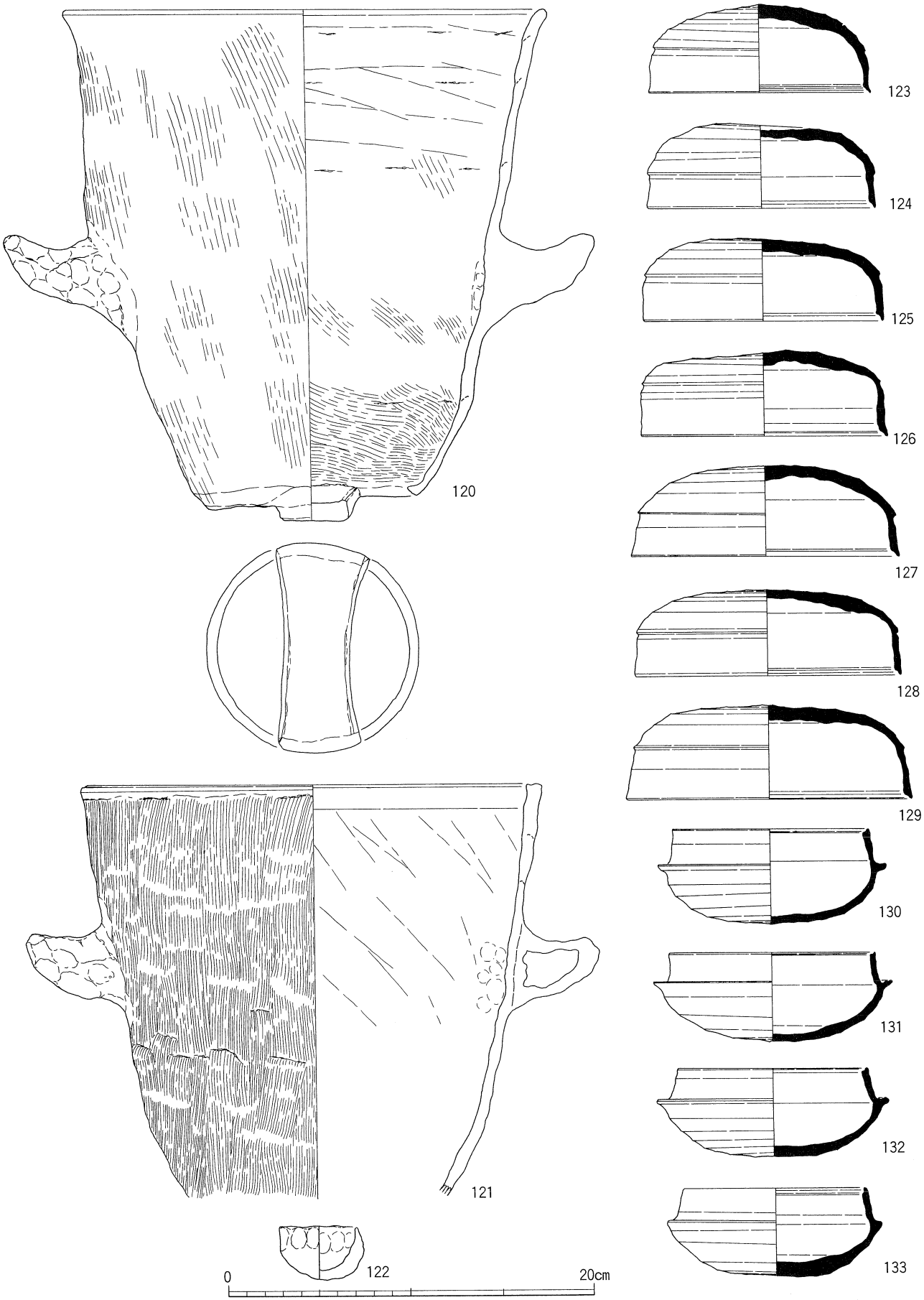


fig.67　ＳＤ204 北群出土土器実測図（２）

肩部で約67mに及ぶ。断面は逆蒲鉾形で、幅に比べて深さが浅い。埋土は概ね2層に分けられ、上層は暗褐色～黒褐色のシルト質極細砂を主としており、下層は黒褐色シルトを主とする。出土遺物は調査区の設定と調査時期から便宜的に北群と南群に分ける。

北群ではいずれの遺物も埋土上層から出土しており、溝底に密着せず、東側の溝肩部から流れ込んだ状態に見える検出状況のものが多い。完形品を含む多量の土師器・須恵器と300点を超える滑石製臼玉を始め、滑石管玉・剣形模造未製品などの滑石製品や碧玉の原石が出土している。但し、これらの玉製品はＳＸ205に隣接する部分の埋土のみの水洗選別作業によって確認できたものが大半である。北群の土師器の器種には、壺・甕・甑・手づくね土器があり、須恵器の器種には、坏蓋・坏身・高坏蓋・有蓋高坏・無蓋高坏・広口壺・短頸壺・瓶・鉢・甕・器台がある。

北群の土師器　(109) は小型で器壁の厚い壺で、内面には赤色顔料がわずかに遺存する。体部最大径8.6cm、残存高8.0cm。(110) は完形の直口壺で、口径8.5cm、器高12.3cm、体部最大径12.6cmで、ナデで仕上げられる。(111・112) は口縁部が短く外反する壺で、(111) は口径10.8cm、器高13.4cm、体部最大径14.5cmで、ナデで仕上げられる。(115～118) は甕で、単純に「く」字形に外反する口縁部とやや長胴の体部をもつ。(116) は体部内外面ともに縦刷毛調整、(117) は内面横方向のヘラ削り調整が施されるが、その他は概してナデ調整である。(119) では二重口縁様の口縁部形態がみられる。(120) はほぼ完形の甑で、口径26.0cm、器高28.2cmで、口縁端部は丸く収める。牛角状の把手は中実で、底部は断面長方形の帯で2分割される。(121) も甑で、口径24.6cm、残存高22.7cm。口縁端部は明確な凹面をもち、把手は中空である。底部は図化できていないものの、多孔式である。(122) は手づくねミニチュア土器で、口縁部の指頭圧痕が顕著である。口径4.2cm、器高3.0cm。

北群の須恵器　(123～129) は坏蓋で、口径12.2～15.6cm、器高4.2～5.2cmと法量はバラエティに富む。形態では口縁端部が内傾する鈍い凹状を呈し、稜は突出しない鈍いものが多い。

(130～141) は坏身で、坏蓋と同様法量・形態ともにバラエティに富む。口径9.6～12.1cm、器高4.0～5.9cm。たちあがり端部は内傾する凹状のもの、段状に仕上げるもの、丸く収めるものなどがある。

(142～148) は高坏蓋で、口縁端部は概して内傾する凹状で、鈍いながらいずれも明確な稜を有する。(149～152) は有蓋高坏で、脚部のスカシが4方向のもの (149) と3方向のもの (150～152) がある。なお、(148) と (151) は器壁肉厚で、胎土や色調の特徴からセット関係になるものと考えられる。

(153) は緩やかに外上方へ延びる口縁部と浅い坏底部に、3方向にスカシのあるやや長い脚部をもつ無蓋高坏で、口径14.2cm、器高11.5cm。坏部外面は鋭い突帯2条と流麗な櫛描波状文で飾る。(154) は坏蓋を天地逆にした形態の坏部をもつ無蓋高坏で、口径12.7cm、器高9.7cm。脚部のスカシは3方向で、坏底部～脚部外面はカキ目調整。

(155～156) は中型壺の口頸部で、頸部中位の突帯の上下を櫛描波状文で飾る。

(157) は完形の小型壺で、口径10.5cm、器高14.0cm。(158) は短頸壺で、口径8.4cm、器高8.7cm。体部下半は回転ヘラケズリ調整。(159) はほぼ完形の中型の広口壺で、口径18.6cm、体部最大径23.2cm、器高25.2cm。口縁端面は凹状で、端部はつまみ上げられる。

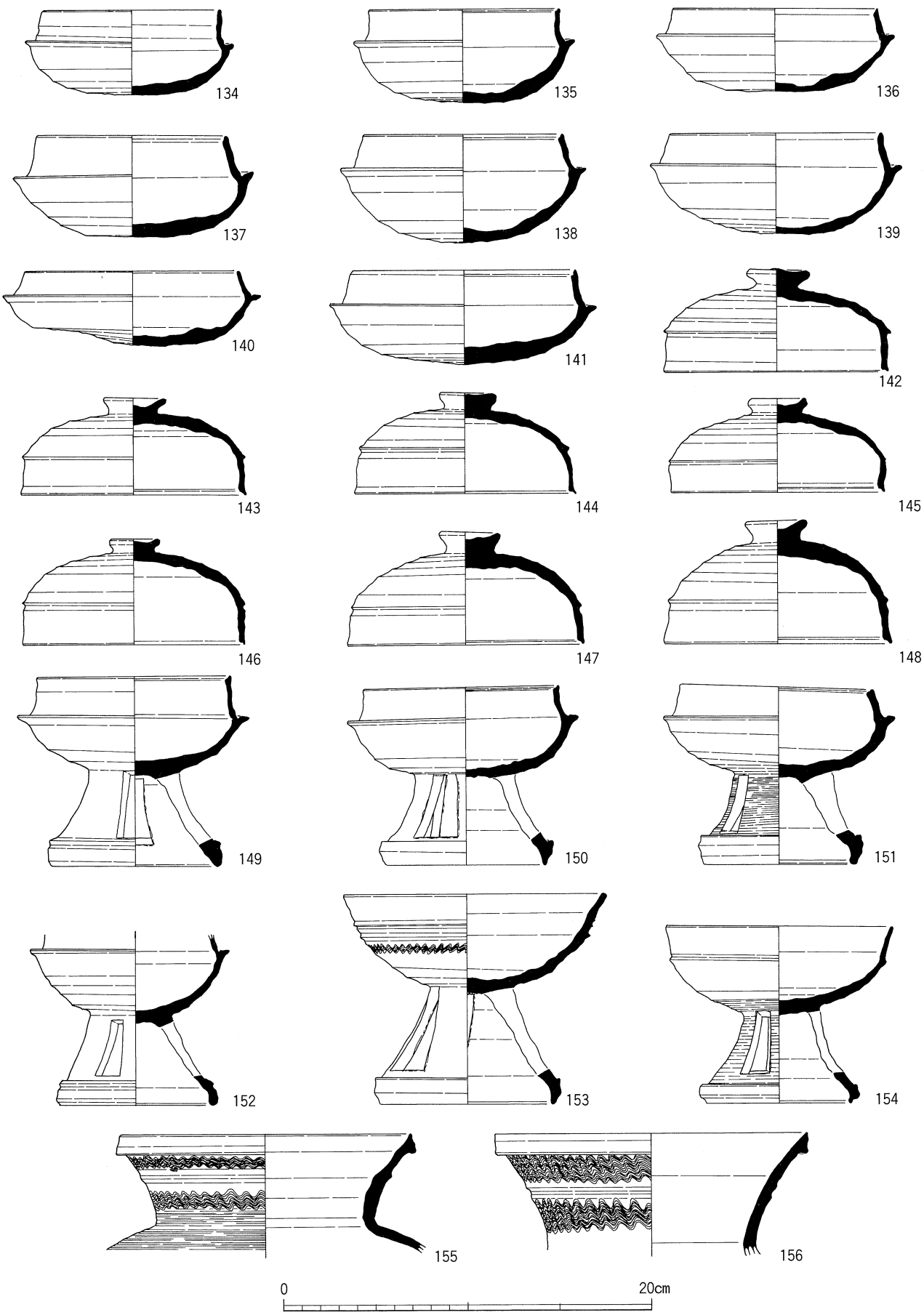


fig.68　ＳＤ204 北群出土土器実測図（３）

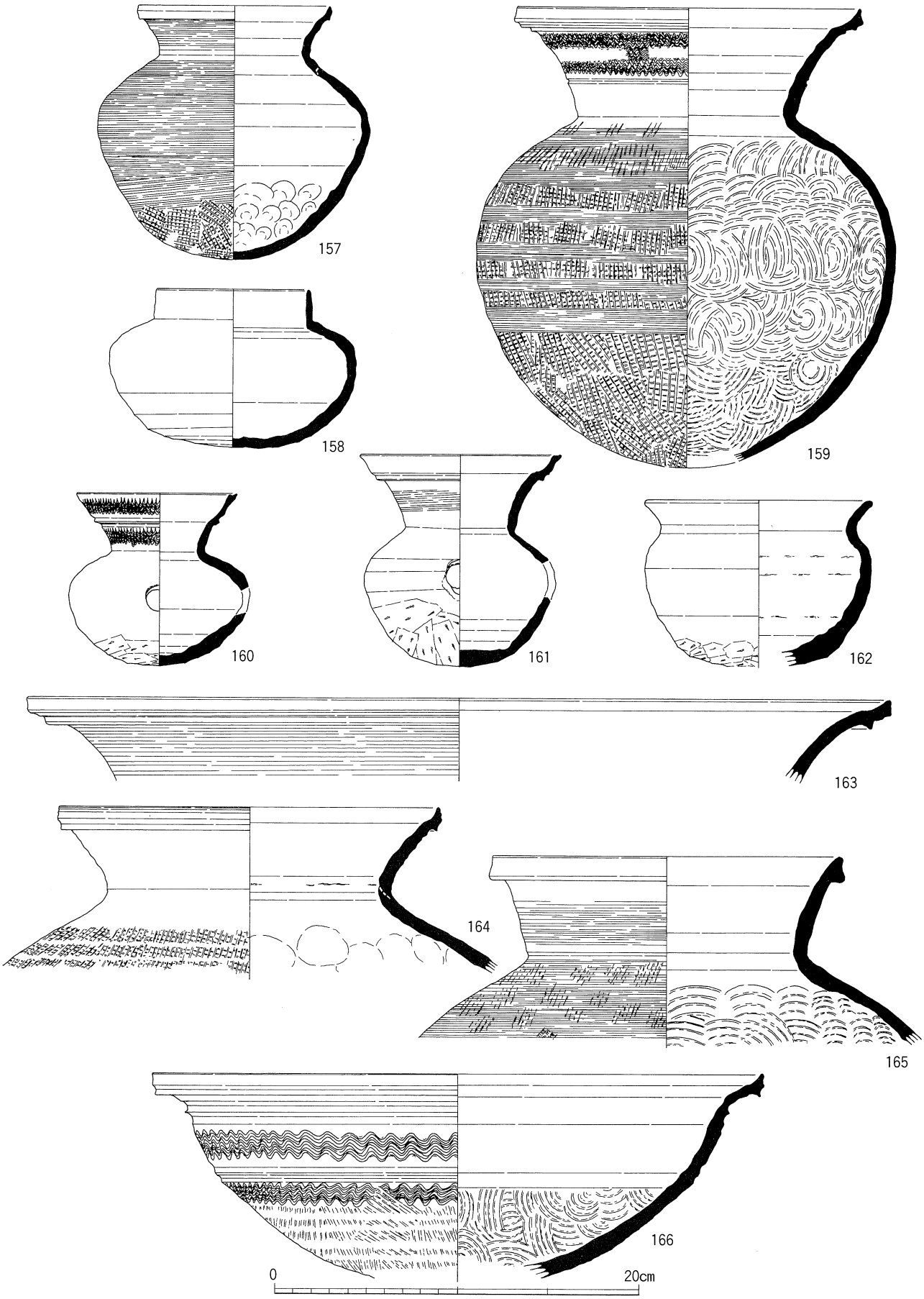


fig.69　ＳＤ204 北群出土土器実測図（４）

端面直下には２段に突帯を付し、その下位を幅の広く櫛描波状文で飾る。体部調整は外面が格子風叩きの後カキ目、内面は円弧状叩き。なお、ＳＸ207出土の破片が接合している。

（160～161）は小型瓹で、底部外面は静止ヘラケズリ調整。（160）は口径8.8cm、体部最大径10.0cm、器高9.5cmで、扁球形の体部に櫛描波状文で飾られた口縁部・頸部をもつ。（161）は口径11.0cm、体部最大径10.6cm、器高11.7cmで、球形の体部に太く長い口頸部をもつ（162）は口径12.2cm、体部最大径12.5cm、残存高9.1cmの鉢で、色調は淡赤紫色～乳灰色底部外面が静止ヘラケズリで仕上げられるほかは回転ナデ調整である。

（163）は口径47.4cmの大型の甕で、口縁端部は鋭く平らに収め、その直下に断面三角形の突帯を巡らす。頸部外面はカキ目調整。（164・165）は中型甕の口頸部。

（166）は口径33.6cm、残存高11.2cmの器台坏部。口縁部は櫛描波状文で飾られ、内湾気味に延びた後鋭い突帯を境に強く外反し、さらに端部が上方へつまみ上げられ、端面直下には鋭い断面三角形の突帯をもつ。底部外面は櫛描波状文で飾られるほかは平行叩きの後一部スリ消し、内面は円弧状叩きの後半スリ消し調整。底部と口縁部との境には鋭い稜をもつ。内面には直径22.5cmの重ね焼きによる無釉部分がある。

北群の滑石製品　（167）は濃緑灰色の管玉で、直径６mm、長さ2.9cm、孔径２mm。（168・169）は剣形模造未製品と考えている。

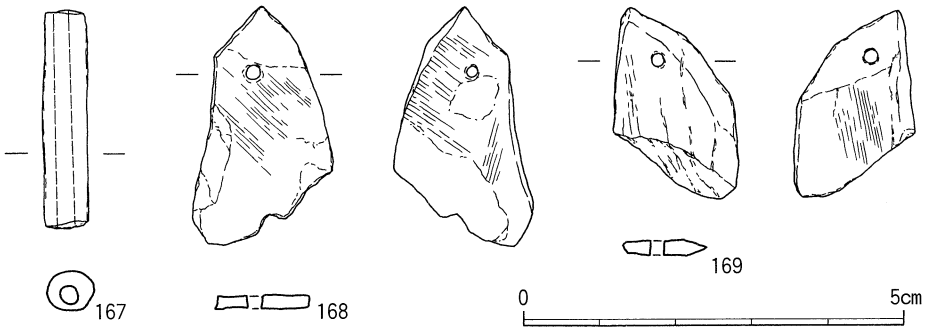


fig.70
ＳＤ204 北群出土
玉製品実測図

一方、南群でも土師器・須恵器がまとまって出土しており、その出土状況から溝内に打ち割って投棄したものと考えられる。なお、南群では滑石製玉製品などが北群ほどは出土していない。南群の土師器には壺・椀・把手付鍋が、須恵器には坏蓋・坏身・高坏蓋・有蓋高坏・瓹・甕（小型・中型・大型）の器種がある。

南群の土師器　（180）は小さな平底をもつ完形の椀で、口径5.7cm、体部最大径7.5cm、器高5.5cm。

（182）は口径8.0cm、体部最大径13.5cm、器高13.2cmのほぼ完形の直口壺で、球形の体部と斜上方へ延びた後端部がわずかに内湾気味の口縁部をもつ。（183）も直口壺で、口径8.4cm、体部最大径14.7cm、器高14.6cmで、扁球形の体部に長くまっすぐ延びる口縁部をもつ。

（189）も壺とも甕とも言える器形で、外湾しながら延びる口縁部とやや長胴の球形の体部をもつ。口径18.7cm、体部最大径29.4cm、器高32.8cm。体部はナデ仕上げ。

（190）は丸みをもつ平底の把手付鍋で、口径32.0cm、器高30.7cm、把手を含めた体部最大径41.9cm。

南群の須恵器　（170～172）は坏蓋で、口径12.4～12.8cm、器高4.3～4.7cmと法量は比較的まとまって

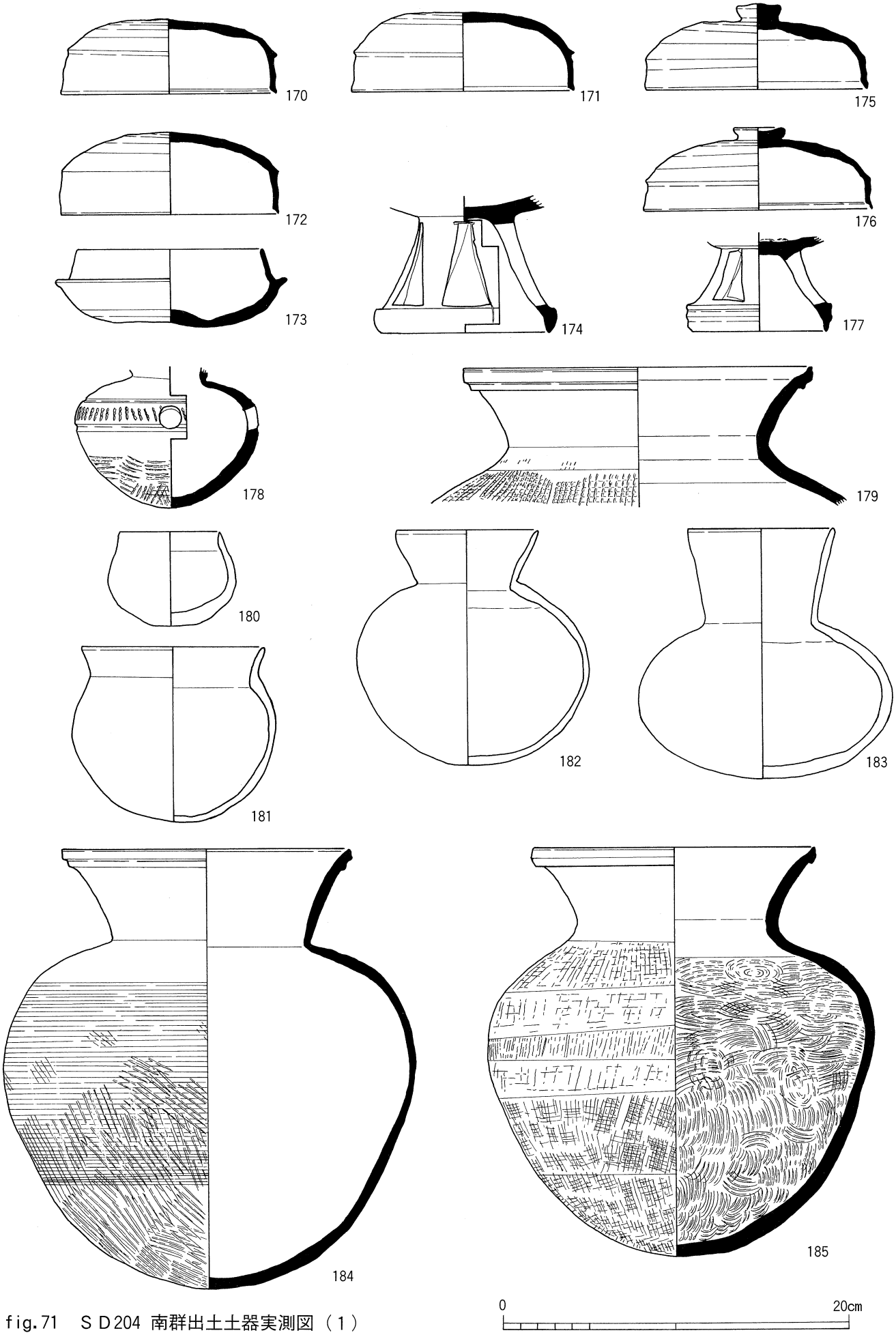


fig.71　ＳＤ204 南群出土土器実測図（１）

いる。形態では口縁端部が内傾する鈍い凹状を呈し、稜はやや突出するものの、鋭さには欠ける。(173) は坏身で、口径10.6cm、器高4.5cmで、内傾して延びるたちあがりの端部は丸く収める。

(175・176) は高坏蓋で、段状に近い内傾する口縁端部と鈍い稜をもつ。(175) は口径12.8cm、器高4.9cm、(176) は口径13.2cm、器高4.7cm。

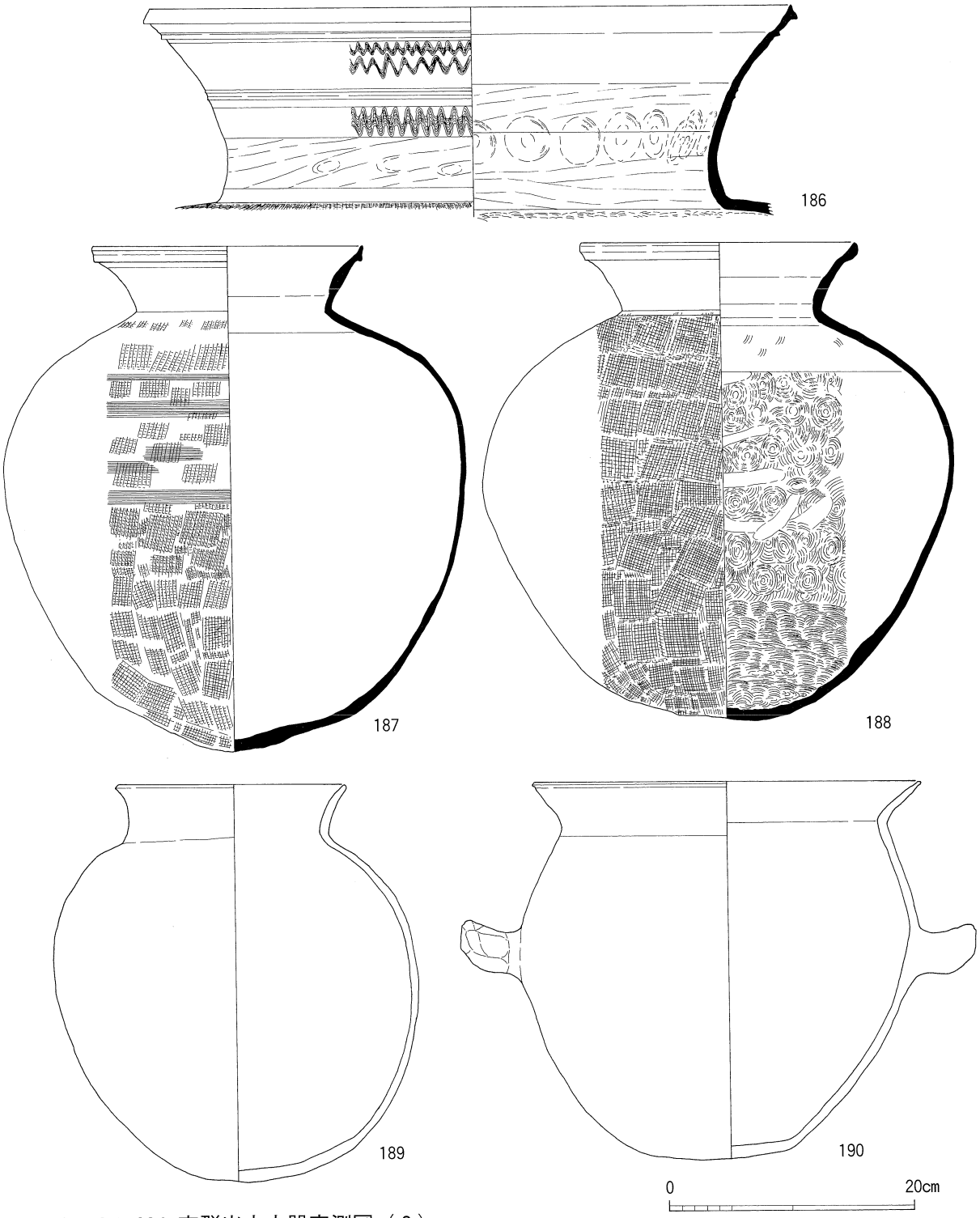


fig.72　ＳＤ204 南群出土土器実測図（２）

（174）は無蓋高坏の脚部で、４方向の三角形のスカシをもつ。底径9.8cm。（177）は有蓋高坏の脚部で、３方向の長方形スカシをもつ。底径7.5cm。

（178）は体部最大径10.6cm、残存高8.2cmの小型甕で、口縁部を欠損する。体部最大径部に凹線で画され、櫛描刺突文で飾られた文様帯をもつ。底部外面は平行叩き仕上げ。

（184・185）はほぼ完形の小型甕で、（184）は口径16.6cm、体部最大径24.0cm、器高25.5cm。口縁部は斜上方に外反して延びた後、端部直下に鈍い断面三角形の突帯を巡らし、凹状の口縁端部に到る。体部は平行叩きの後カキ目調整。口縁部～肩部には自然釉を厚くかぶる。（185）は口径16.1cm、体部最大径22.4cm、器高23.8cm。焼成が甘く、やや軟質である。

（179・187・188）は中型甕。（187）は口径21.8cm、体部最大径37.5cm、器高41.7cmで、口縁端部を上下に拡張し、丸く収める。体部内面は丁寧にアテ具痕がスリ消されている。（188）は口径22.2cm、体部最大径38.4cm、器高39.5cmで、ほぼ完形。口縁端部は外方に拡張し、大きな端面をつくる。

（186）は口径52.6cm、残存高17.1cmの須恵器大型甕の口頸部で、端部は斜下方へ拡張される。外面は３帯の櫛描波状文で飾られ、内面には円弧状叩きがかすかに観察できる。体部は外面格子風叩き、内面同心円文叩きで比較的薄く仕上げられている。当資料はＳＥ204下層出土の資料（251）と肉眼観察では同一個体と考えられることを指摘しておく。

さて、北群の遺物にはＳＤ204の東側に拡がる遺構出土の遺物との接合資料（159）がある一方で、後述するようにＳＸ207を主体とする遺物に接合する資料も含まれている。また、さらに南群には後述するＳＥ204下層・ＳＸ204出土の資料と同一個体と考えられる資料（186）もあり、その出土状況の再考を必要とする資料群である。大型の須恵器甕については、何らかの理由で割られた大型の破片そのものを別途使用した後に、それぞれの検出遺構に投棄したものと考えている。（山本・中居・口野）

ＳＤ205　ＳＤ205は、ＳＤ203とＳＢ210の間で検出された緩やかなＳ字状に蛇行する溝状遺構で、幅0.3～0.4m、深さ0.4mである。溝の断面は逆台形で、幅に比べて深く掘られ、断面形からは人為的に掘削を受けた遺構と考えられる。堆積土は茶褐色泥砂である。溝の北端は撹乱坑で切られている。

当初ＳＤ203への排水溝と考えていたが、断面図に示すとおり、溝底は南の方が高く、北へ低いことから、南から北へ流れる溝と考えられる。溝が掘削された当時と全く同じ高さで、溝底を発掘調査したと仮定できれば、ＳＤ203からの取水溝の可能性も否定できない。しかし、ＳＤ205とＳＤ203との切り合い関係は、遺構平面図には、ＳＤ203が切るように表現しているが、第４次－１調査と第５次－１調査との狭間となる部分で切り合い関係は、不明である。ここでは遺跡の地形と溝の形状から、当初考えていたようにＳＤ203への排水溝と考えた方が妥当と思われる。

溝からは、少量の土師器・須恵器片と図示した須恵器高坏・土師器埦が出土した。（191）はＴＫ47型式前後と考えられる高坏蓋である。天井部と口縁部の境となる稜は、やや鋭さに欠ける。内面は回転ナデ、外面は天井部の３分の２が回転ヘラ削りを施す。

（192）の外面は、粘土紐の接合痕が残る程度の粗いナデ、内面調整もナデである。（口野）

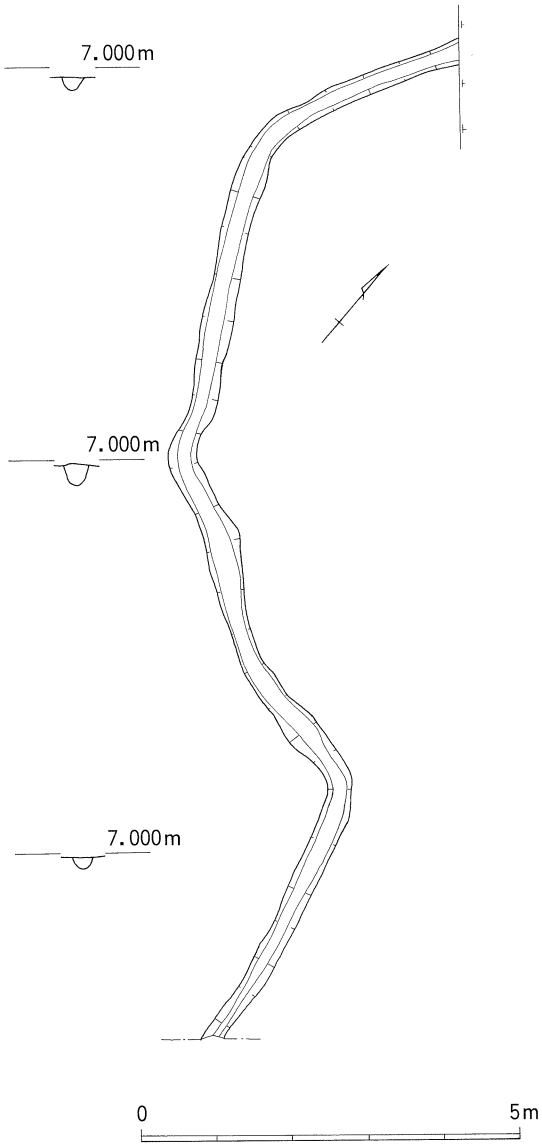


fig.73
ＳＤ205
平面・断面図

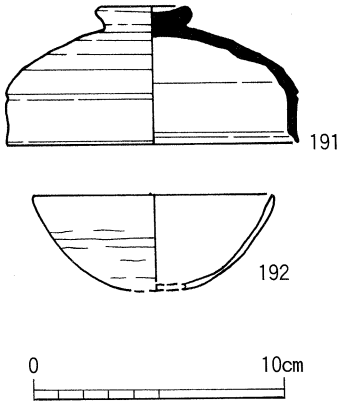


fig.74　ＳＤ205 出土遺物実測図

ＳＤ206　南北方向に走る溝状遺構に、直角に交わる溝状遺構が伴うもので、南端と西端は調査区外に延びる。最大幅約0.9m、最大深さ0.27mで、断面はＶ字形に近い。南北総延長24.1m、東西総延長5.4mである。埋土は上層の暗褐色シルトと下層の暗褐灰色シルトに分けられる。出土遺物には土師器・須恵器の小片がある程度で、上面からはサヌカイト製石鏃が１点出土している。（山本・中居）

3．井戸

ＳＥ201　調査区北辺中央部で検出された井戸状遺構である。平面形は円形で、直径が1.3m、深さは検出面より1.4mの規模である。断面形は、上半は漏斗状に開くＵ字形を呈す。底面には径0.3m、深さ0.1mの窪みがある。

井戸の掘られたベース層は、粘土質層と砂質層の互層で、12層の灰色砂層から調査時にも湧水が認められた。遺構内堆積土は大きく４層に分けられる。比較的短時間に埋まったか、埋められたかのような堆積状況と思われる。

２層目で図示した大部分の遺物が出土した。出土遺物は土師器埦・甕・甑・小型壺・須恵器坏蓋・坏身・有蓋高坏・瓶・砥石・木片などである。また、２層目以下の井戸内堆積土を水洗いした結果、土師器・須恵器片少量と臼玉が計30個検出された。

木片は残存状況が悪く、火を受けたか否かなどの把握もできず、また、取り上げも困難であった。土師器の甕は体部下半身の破片も出土しているが、残存状況は悪い。その他の土師器は完形品である。

須恵器も完形品が多く、臼玉などの出土から井戸を意識的に埋め戻し、その際にマツリを行い、臼玉を撒き、上記の土器類を投げ入れたのではないかと思われる。

(193～196)は、須恵器坏蓋である。天井部はやや丸みをもち、ケズリも１／３程度行うものである。稜も鈍い。

(197・198)は、有蓋高坏蓋で、中央部が凹むつまみをもつ。(197)の口縁部は直立気味、(198)はやや開き気味である。坏蓋同様、稜は鈍い。

(200)は図化できた唯一の坏身である。底部は丸く、ケズリも１／３程度である。

(201)は瓶の口縁部片と考えられる。口縁部と頸部の境に稜のある凸帯をもち、稜を挟んで上下に、

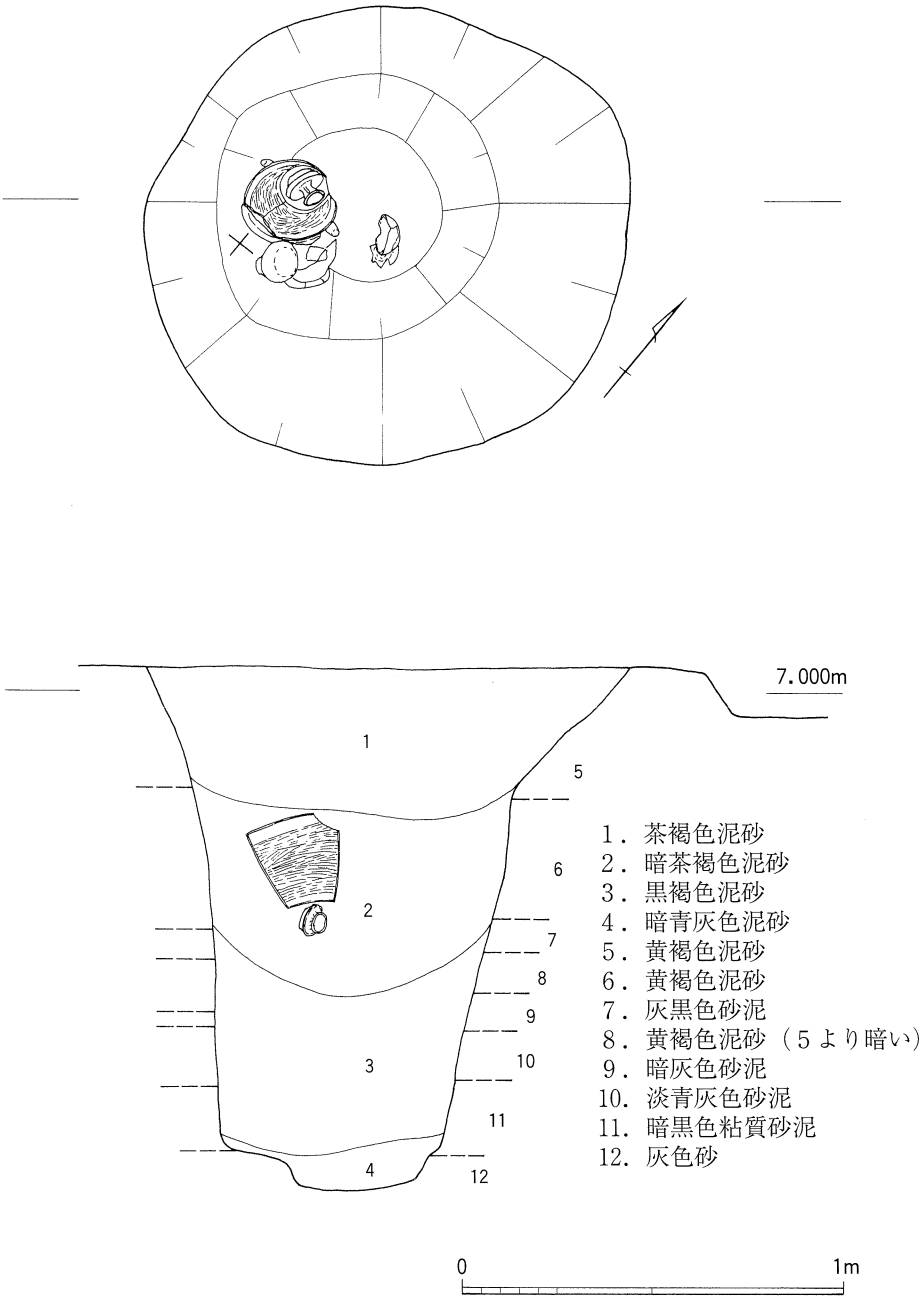


fig.75　ＳＥ201 平面・断面図

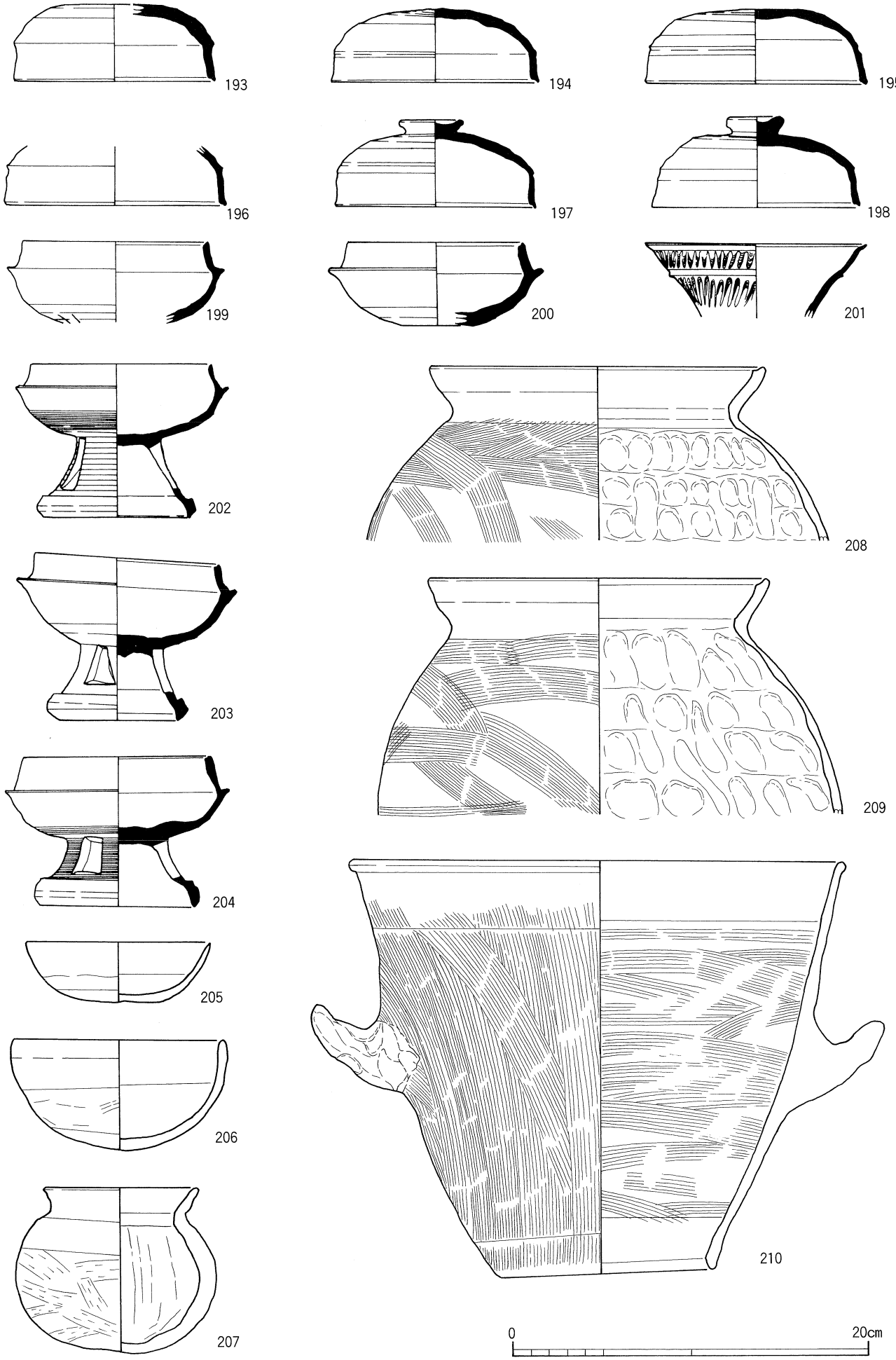


fig.76　ＳＥ201 出土土器実測図

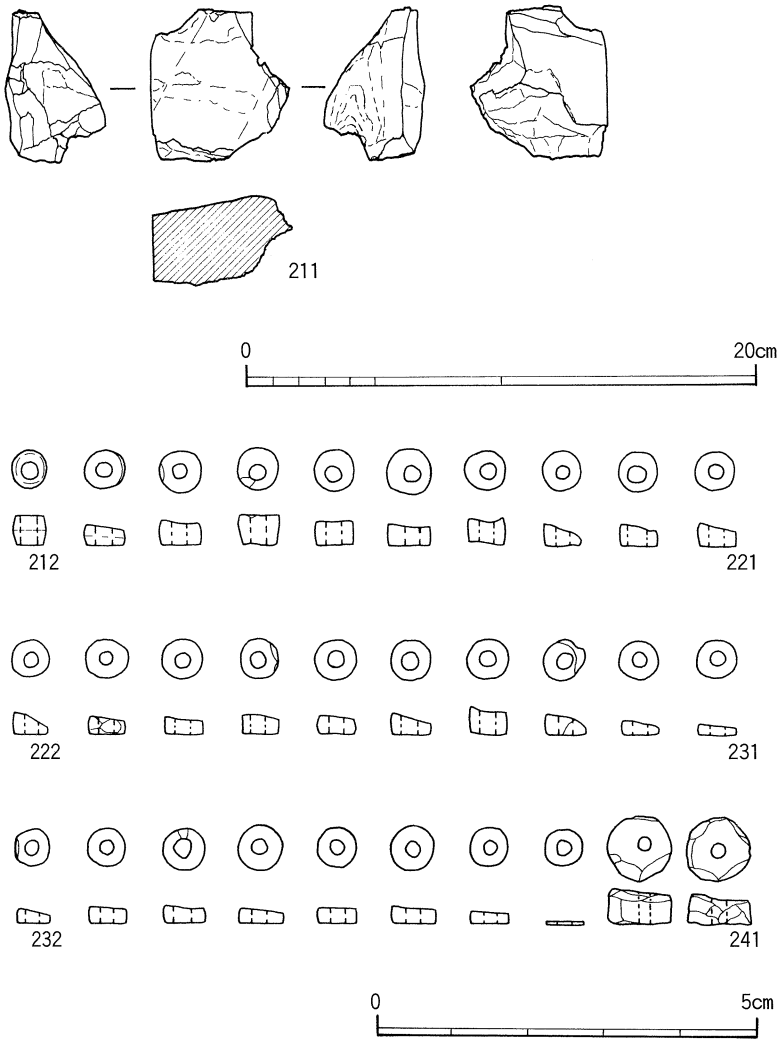


fig.77　ＳＥ201 出土石製品実測図

櫛描波状文を施す。口縁端部はさらに外方へ開くようにつまみだして終わる。全体に器壁は薄い。

(199)は有蓋高坏の坏部分である。有蓋高坏の坏部分は他にもう一個体あり、脚部の個体ももう一個体出土している。(202～204)も有蓋高坏で、３個体ともほぼ完形品である。長方形３方スカシをもつ。(202・204)は脚部から坏下半にカキ目を施す。(202)の脚部のカキ目はやや粗い。(202・203)の脚端部は上下に少し張り出す。

(193～200・202～204)の坏の口縁端部は、水平に終わるものはなくすべて内側へ傾斜している。須恵器からはＭＴ15型式が考えられるが、瑕のようにやや古い傾向をもつものもある。

(205・206)は土師器埦である。(205)は外面に粘土の接合痕が残る。(206)は外面にケズリの痕跡がわずかに残るが、ケズリ後ナデを施す。ともに外面は粗いナデ調整を施し、内面と口縁部はやや丁寧にナデを施す。(205)は薄く仕上げられているが、(206)はやや厚手である。

(207)は土師器の小型壺である。外面は肩部までナデ、体部は乱方向のケズリをした後、粗いナデを施す。内面は、口頸部までヨコナデ、体部はハケ調整後ハケを消すように縦方向のナデを施す。器壁はやや厚みがある。

(208・209)は土師器甕で、それぞれの下半部もほぼ完形に復元できる量が出土しているが、磨滅が著しく復元できなかった。口径18.9cmと19.2cmとほぼ同じ口径で、調整もほぼ同様である。体部外面は特に残存状況は悪いがハケ調整、口縁部は内外面とも丁寧にナデを施す。体部内面は指オサエ痕がよく目立ち、ナデで仕上げる他に粘土紐接合痕も残る。口縁端部は窪みをもち、やや厚い。体部に比べ、口縁部はやや厚く仕上げる。

(210)は角状の把手のつく筒状の甑である。表面の残存状況は悪いが、完形品で、口径28.0cm、底部径12.0cm、器高23.3cmである。口縁部・底部ともに内外面はナデで仕上げる。口縁端部は少し膨らみ気味に丸く収める。体部外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整である。把手は指オサエである。把手の体部接合時の内面への膨らみはほとんどない。

土師器の胎土には、長石・石英のほかにクサリ礫が多く含まれ、特に(207・210)などには５mm大の大きさのものが多く含まれ、よく目立つ。また、色調は赤っぽい。周辺に産する粘土を用いた在地の所産であると考えられる。

(211)は砥石片である。磨り面はよく使用された面とわずかに使用された２面がある。残りは破断面である。15g足らずの小片であるため、元の形状などは不明である。石材は、比重2.249で火成岩と考えられる数値を示す、縞模様のある白い岩石である。

臼玉は製品28個、未製品２個の合計30個出土した。未製品は直径７㎜である。製品28個の臼玉の直径は４～５㎜である。未製品を含めて高さで分けると、５㎜２個・４㎜７個・３㎜14個・２㎜６個・１㎜１個である。色調では、濃緑色24個・緑灰色５個・銀灰色１個である。形状では、未製品２個を除き、算盤玉形はなく、臼形１個（212）・台形20個（臼形の崩れたものを含む213～232）・偏平形７個(233～239)である。

今述べたように、臼玉に色調の相違が見られる。石材の部位による相違か、同一産地での石材の相違か、もしくは石材が複数の産地からもたらされたものかは不明である。

しかしながら、未製品の存在から、完成品が持ち込まれたのではなく、少なくとも持ち込まれた材料を当地で加工し使用したと考えられる。

ここまで未製品と述べてきた（240・241）は、いわゆる完成品とともに出土している。形態的に未製品と捉えられるに過ぎず、その使用状況からは祭祀に利用し得る「製品」であったと思われる。形態的に未製品であっても、使用上差し支えなく井戸の祭祀に利用したと思われる。

ＳＥ202　平面形は、長径2.0m、短径1.4mの東西に長い楕円形である。深さは0.8mで、断面形は緩いＶ字形を示し、途中にわずかに段をもち、最下層はさらに径0.3mほどの窪みがある井戸状遺構である。

掘形は、粘質土と砂質土の互層のベース層を掘り、湧水層と考えられる13・14層の砂質層に達する。

遺構内の堆積状況からは、一気に埋め戻されたようではなく、徐々に土砂が堆積して埋まったようである。出土遺物は全体に少く、土師器・須恵器は小破片であった。最下層からは木片・板状木片・種子類が出土した。

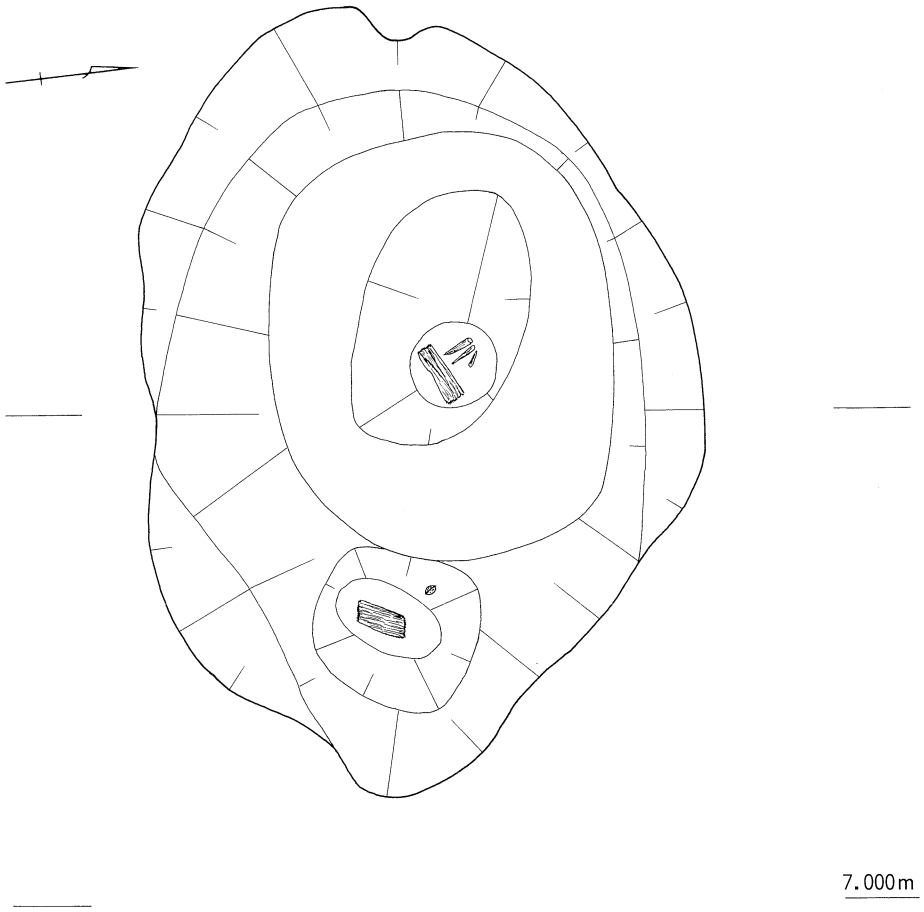
東半には、径0.4m、深さ0.1mほどの浅い凹みがある。この中からは板状木片・桃核が出土した。

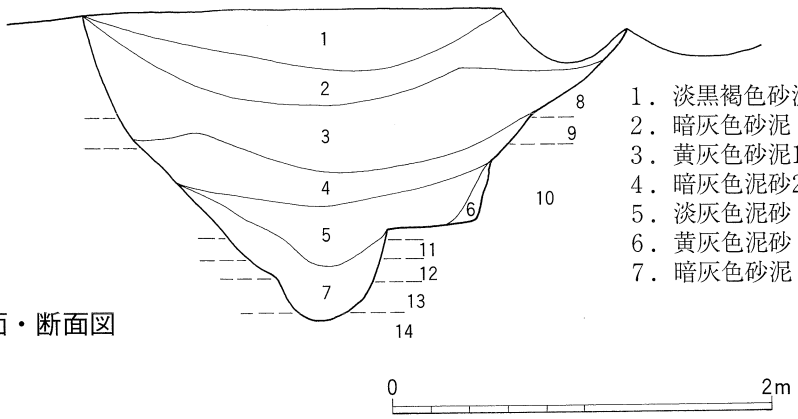
ＳＤ203の項でも述べたが、遺構面が現代の建物基礎により0.3～0.4m削平を受けており、遺構面が周囲と同様の高さで残存していれば、深さ1.2m程の遺構として復元される。またＳＤ203が延びるであろう方向にＳＥ202が検出されており、その切り合い関係などは不明である。さらにこの方向にはＳＸ201が検出されており、ＳＤ203とそれぞれの関係などは不明である。

前述したが出土遺物は、土師器片・須恵器片・板状木片・桃核・種子類などである。土器片は小片が多く、図化できたのは（242）のみである。

（242）は天井部は丸みを持ち、口縁部はやや開き気味である。稜は鈍く、口縁端部は丸く収めるものである。

平面図に図示した板状木片は残存状況が悪く、取り上げは困難であった。





1．淡黒褐色砂泥
2．暗灰色砂泥
3．黄灰色砂泥1＋2＋8
4．暗灰色泥砂2＋8
5．淡灰色泥砂
6．黄灰色泥砂
7．暗灰色砂泥
8．黄色砂泥
9．灰色泥砂
10．黄褐色砂泥（砂質）
11．灰色砂泥
12．青灰色砂泥
13．黒褐色砂泥
14．暗黄褐色泥砂

fig.78
ＳＥ202 平面・断面図

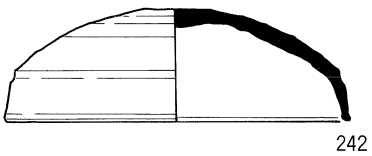


fig.79　ＳＥ202 出土遺物実測図

ＳＥ203　　ＳＢ214の南東隅部を切って検出された井戸状遺構である。平面形は東西方向に長い楕円形を呈す。東西2.0m、南北1.5m、深さ1.6mで、断面形は漏斗状で、底は平らである。また、井戸西部にはＳＢ214の南東隅の支柱穴が検出された。

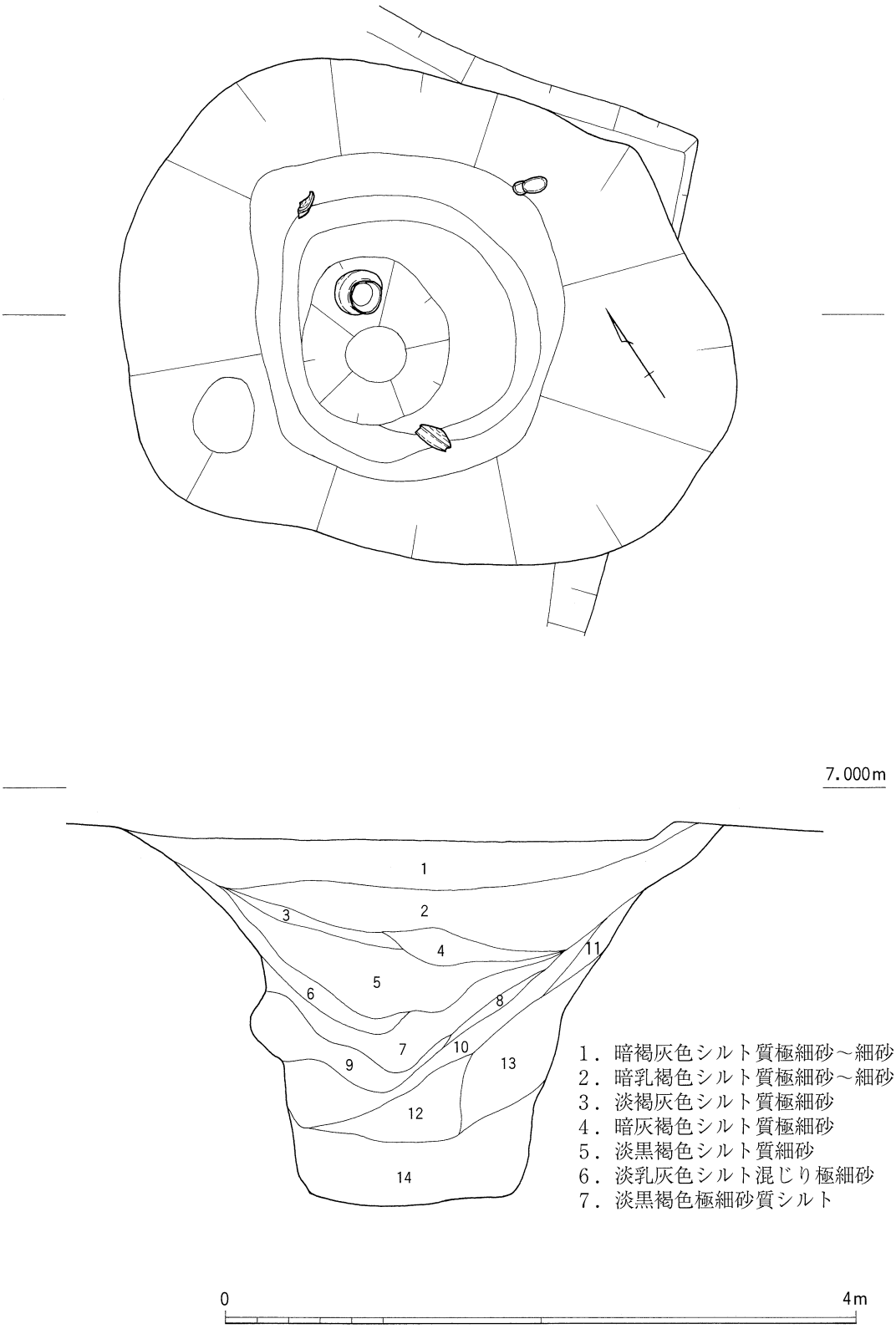


fig.80　ＳＥ203 平面・断面図

井戸の埋没状況は、断面観察から東方向からの土砂で比較的短期間に埋まり、その後埋まった底に雨水が溜まっては乾燥し、また土砂と雨水が溜まりということを繰り返しながら徐々に自然に埋没したようである。

遺物は須恵器坏身・坏蓋、土師器壺と土師器片・須恵器片が出土した。図示した土器は中層から出土し、最下層周辺ではほとんど遺物は出土していない。

また、臼玉などの出土が予想されたため、井戸内の土壌を水洗選別したところ、臼玉などは検出できなかったが、銅鏃（243）が１点検出された。

（243）は長さ34mm、最大幅５mmの磨滅の著しい銅鏃である。先端部には鎬の痕跡がわずかながら観察される。鏃身と茎との境界は磨滅のため判然としない。鏃身の断面はかろうじて菱形を保つ。出土当初は光沢をもつ薄赤色であった。

神戸市内での銅鏃の出土例として、新方遺跡[1]（弥生時代中期）・宅原遺跡[2]（同後期）・森北町遺跡[3]（同後期）など数例が知られている。磨滅状況や弥生時代後期の遺構（ＳＤ102）の存在、他の類例などから弥生時代後期ころの遺物の混入と考えられよう。

（244・245）は１／２弱と１／４弱残存する坏蓋・坏身である。天井部もしくは底部はやや平らなようである。（244）の口縁はやや開き気味である。（245）のたちあがりは直立する。ともに稜はやや鈍いものである。（246）は口縁部が直立する土師器壺で、完形品である。ハケ調整後、ナデで仕上げる。

図示した土器は、井戸が漏斗状に開き始める中層あたりから出土した。土師器壺のみが完形品である。埋没状況や遺物の出土状況などから、井戸の廃棄のためのマツリが行われた可能性は低いように思われる。敢えて供えられた土器として考えられるのは土師器壺のみである。（口野）

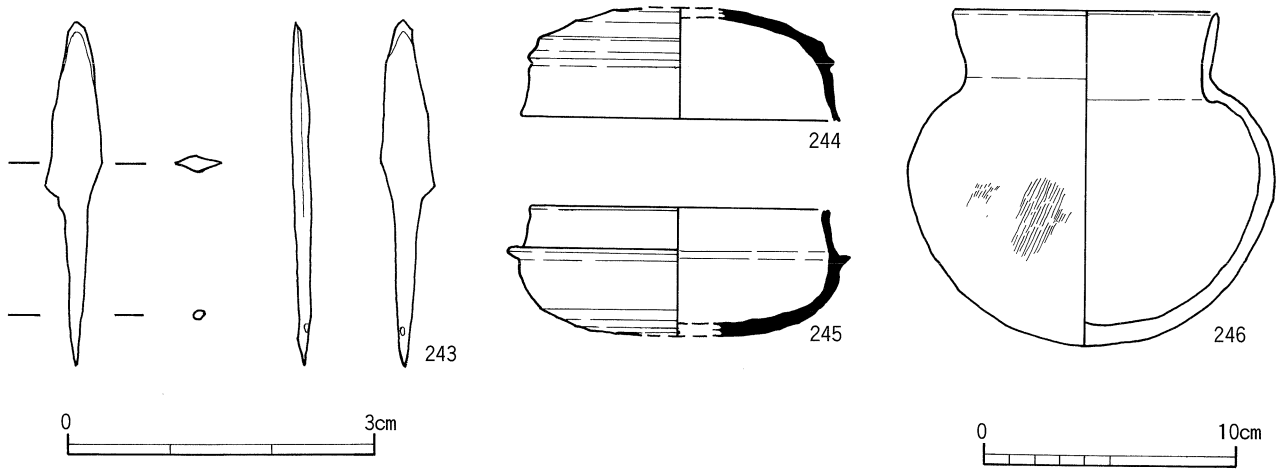


fig.81　ＳＥ203 出土遺物実測図

（註）（１）丸山潔『新方遺跡発掘調査概要』　神戸市教育委員会　1984
（２）神戸市教育委員会『北神中央線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料』　1986
（３）神戸市教育委員会『森北町遺跡第８次調査現地説明会資料』　1989

ＳＥ204　　平面円形で２段に掘り込まれた素掘り井戸で、上面直径2.0m、底面直径1.0m、最大深さ1.3mである。24層とした淡青灰色極細砂～細砂層からの湧水を利用したと考えられる。なお、第６章第２・３節で詳述されるように、埋土土壌からの花粉分析と出土した大型植物化石の同定を実施している。

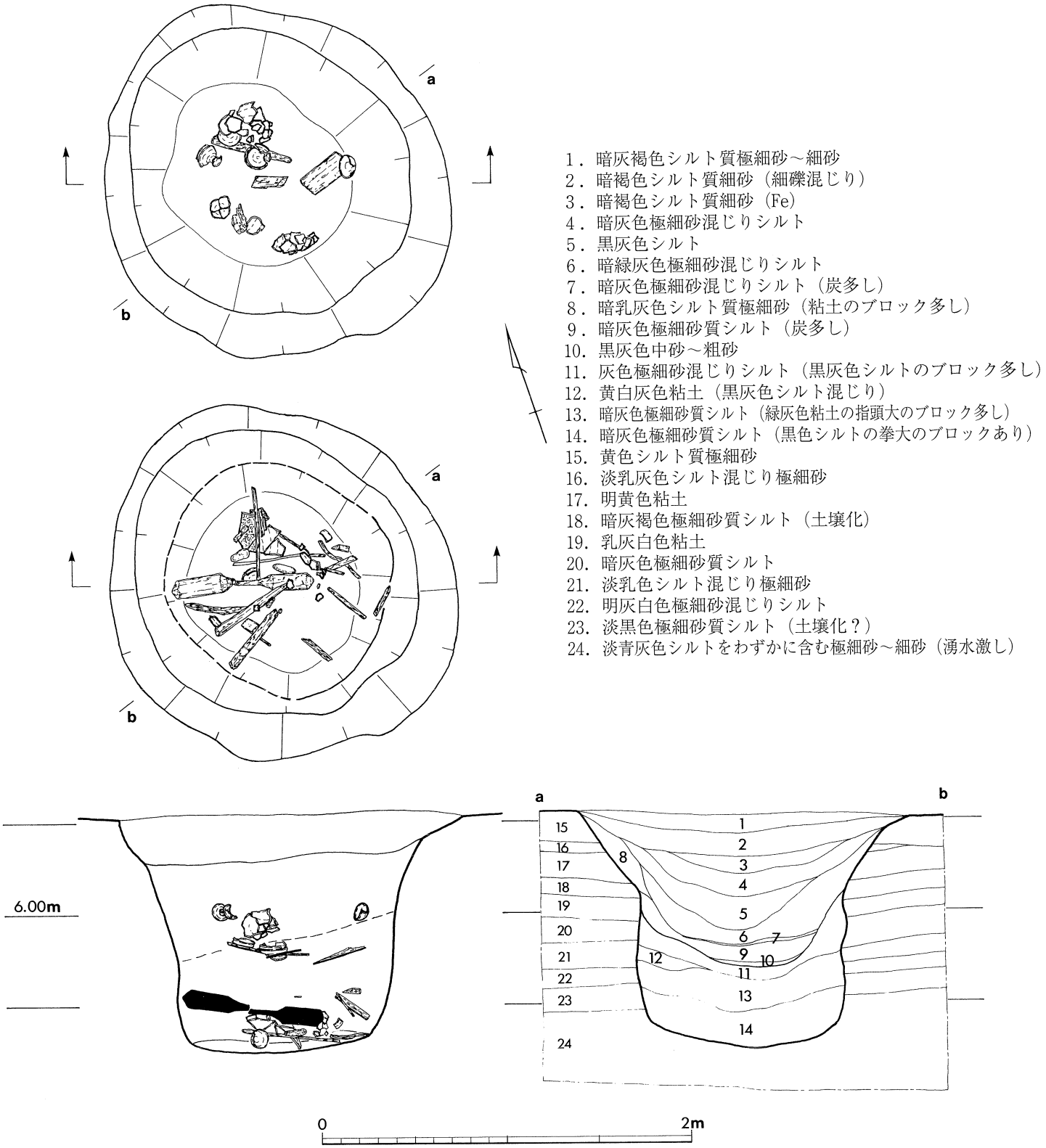


fig.82　ＳＥ204 平面・断面図

出土遺物は下層と中層に二分できる。このうち、下層の遺物は均質でない堆積土層からみて、人為的に埋め戻される以前に投げ入れられたものと考えられる。

下層の遺物　土師器埦と須恵器蓋坏・甕とともに、滑石製円盤・臼玉（洗浄中に破損）、完形の竪杵・鋭い抉りのある加工木・把頭・桜の皮・杭材・枝材などの木製品と自然木がある。

土器　（247）は口径11.4cm、器高7.5cmで内湾する口縁部をもつやや厚手の土師器埦である。（248）は口径13.0cm、器高5.3cmで、重厚なつくりの須恵器坏蓋で、稜は鋭く、口縁端部は内傾する凹状である。天井部外面は自然釉をかぶり、調整不明である。（249）は口径11.0cm、器高4.6cmの須恵器坏身で、たちあがりの端部は鋭い内傾する凹状を呈する。（250）は口径11.6cm、器高5.4cmの須恵器坏身で、たちあがりの端部は丸く仕上げる。２点の須恵器坏身は明らかに２次焼成を受けている。

（251）は口径57.5cm、残存高16.3cmの須恵器大型甕の口頸部で、端部は斜下方へ拡張される。外面は３帯の櫛描波状文で飾られ、内面には円弧状叩きがかすかに観察できる。体部は外面格子風叩き、内面同心円文叩きで比較的薄く仕上げられている。当資料はＳＤ204から出土した資料（186）と肉眼観察では同一個体と考えられるものであることを指摘しておく。

滑石円盤　（252）は直径3.9cm、厚さ0.9cmで、暗黄緑灰色の滑石製の円盤である。研磨によって平滑に仕上げられている。

木製品　特記すべき木製品についてのみ、以下詳述する。

（253）はツゲ材の刀把装具で、残存長7.2cm。佩表の遺存状況が比較的良好で、一部に表面の炭化が認められる。把縁の形態については欠損のため、全く不明である。把頭は長さ約２cmで、厚さ3.2cm、幅4.0cmで、細かいケズリ調整によって断面卵形に仕上げられる。ほぼ中央には佩表と佩裏を貫通する長径９mm、短径５mmの長楕円形の円孔が穿たれる。小口部は長さ８mm、厚さ4.2cm、幅4.3cmで、背・佩表・佩裏の３面を削り出し、腹側がややすぼむ不整形な七角形の断面形状に仕上げられる。なお、腹側は大きな三角形の平坦面を削り残す。把間は残存長約５cmで、腹側が把縁方向に徐々に幅を減じている。背側には残存長4.9cm、幅６mm、深さ1.7cmで、刀茎を差し込む断面矩形の溝が穿たれる。

（254）はほぼ完形のヤブツバキ材の竪杵で、全長78.0cmである。搗き部は円柱形で、上部は直径9.6cm、長さ25.2cm、下部は直径8.9cm、長さ21.0cm、搗き部下部端は使用による磨滅のためか端正な円錐形である。握部は搗き部から屈曲してくびれるもので、節帯はない。最小径3.1cm、長さ31.2cmである。

（255）はヒノキの板材で、各面ともに平滑に仕上げられる。中央付近には横方向に段がつくり出され、左側辺は大きく内湾している。右側辺も平滑には見えるものの、右側辺が欠損しているものと想定すれば、指物腰掛の脚板に最も類似する形態である。最大幅6.8cm、高さ19.0cm、厚さ2.2cm。

（256）は一木式の斧の膝柄であろうか。全面に加工痕が明瞭で、材はアカガシ亜属である。残存長16.0cm、最大径5.9cm。（257）もアカガシ亜属の棒材で、直径1.8cm、残存長13.5cm。下端は丸みをもって仕上げられる。（259）はシイの棒材で、全長25.2cm、直径2.5cm。上端はほぞを削り出し、下端は斜めに切り落とされている。

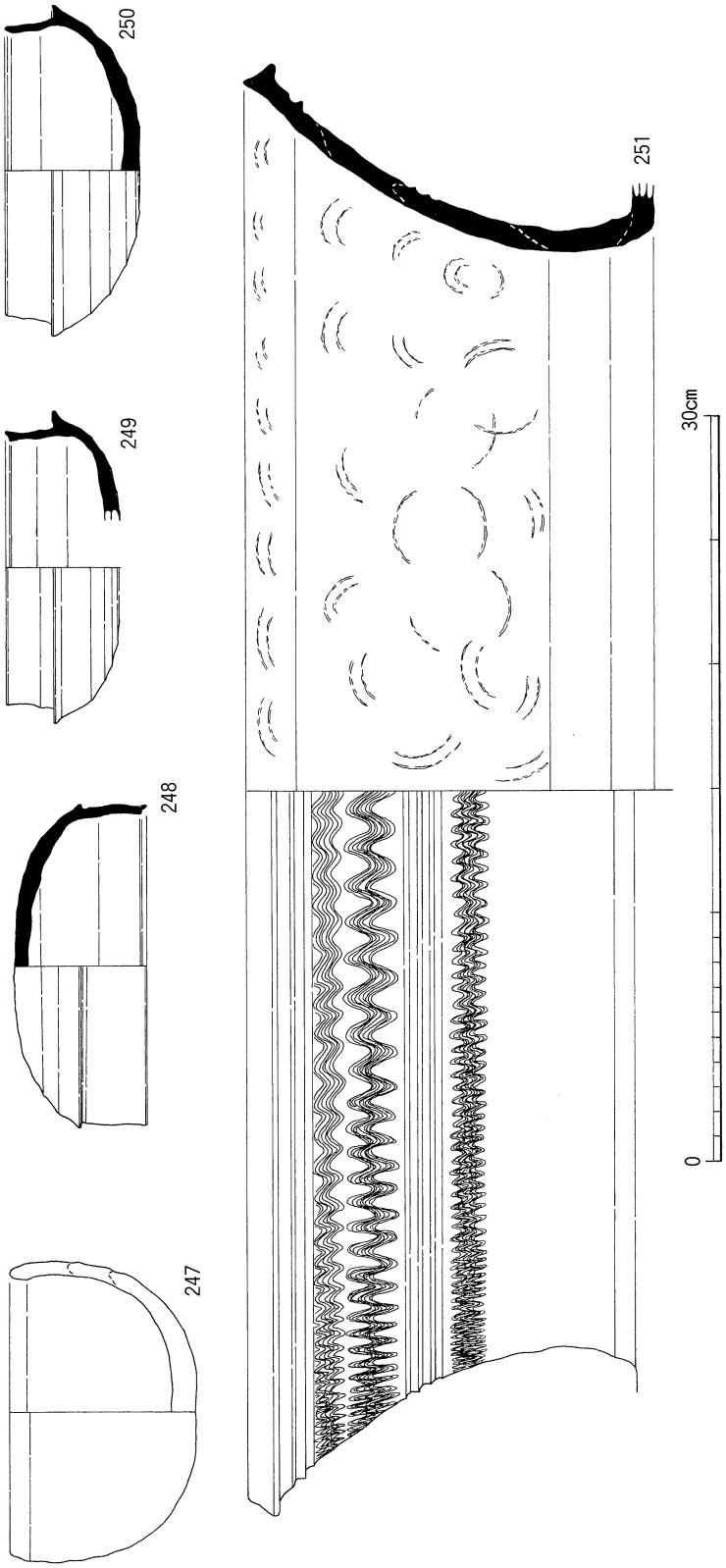


fig.83　ＳＥ204 下層出土土器実測図

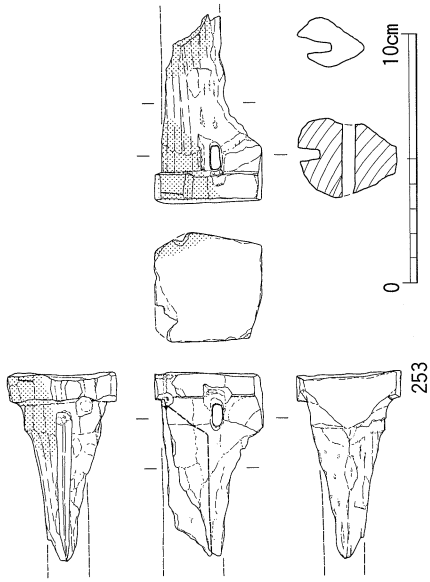


fig.85　ＳＥ204 出土木製品実測図（１）

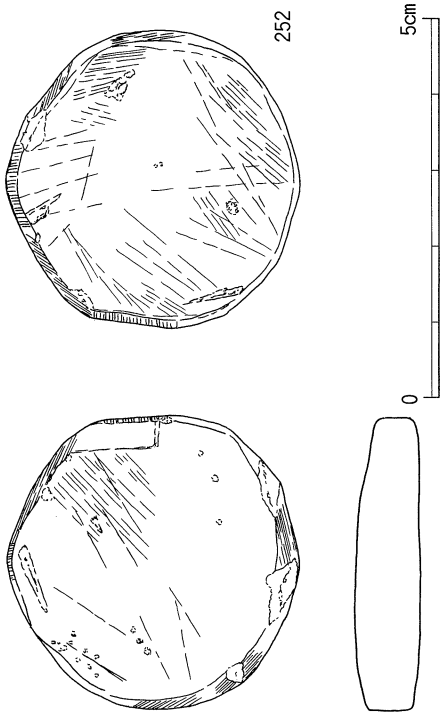


fig.84
ＳＥ204 下層出土
玉製品実測図

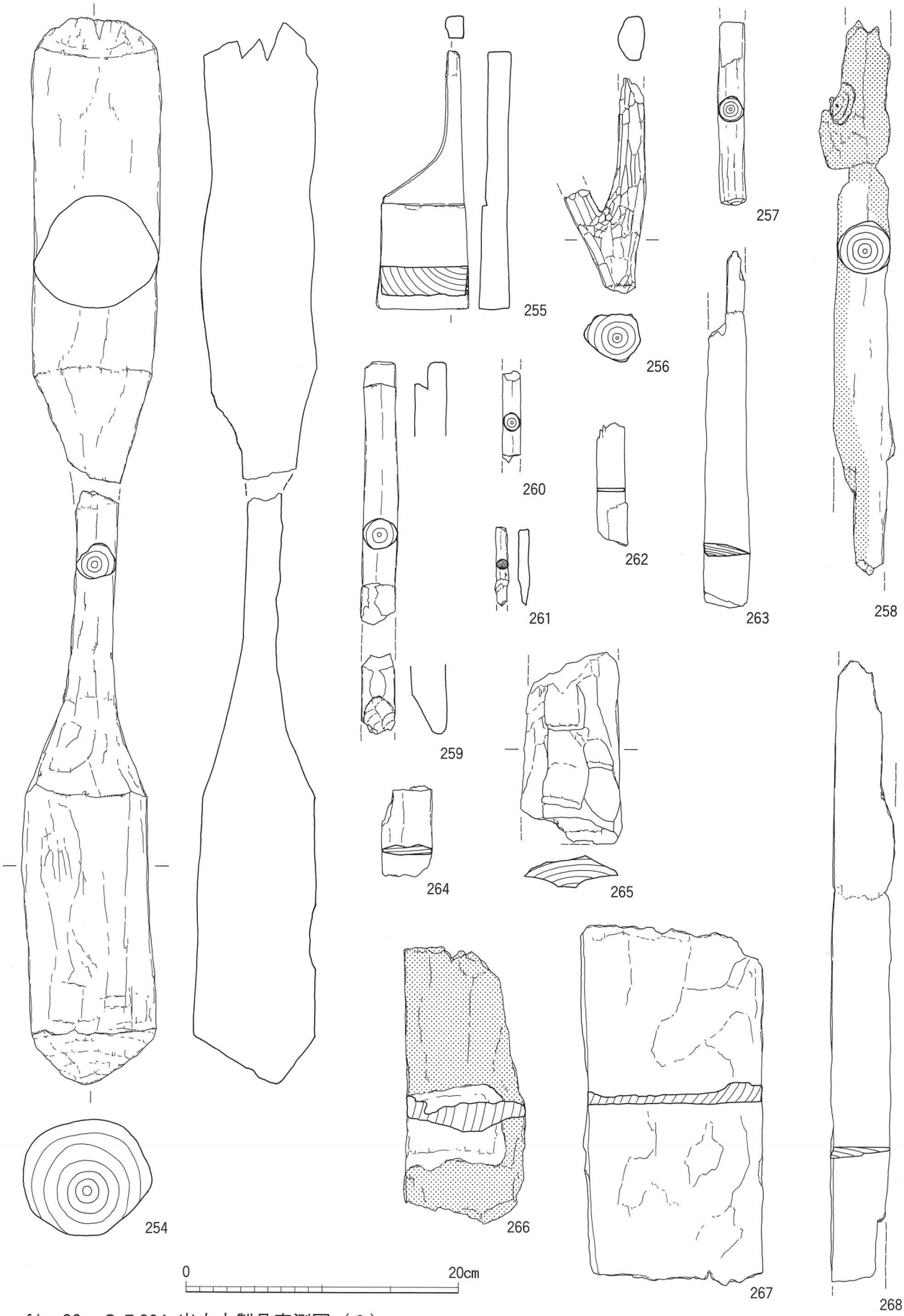


fig.86　ＳＥ204 出土木製品実測図（２）

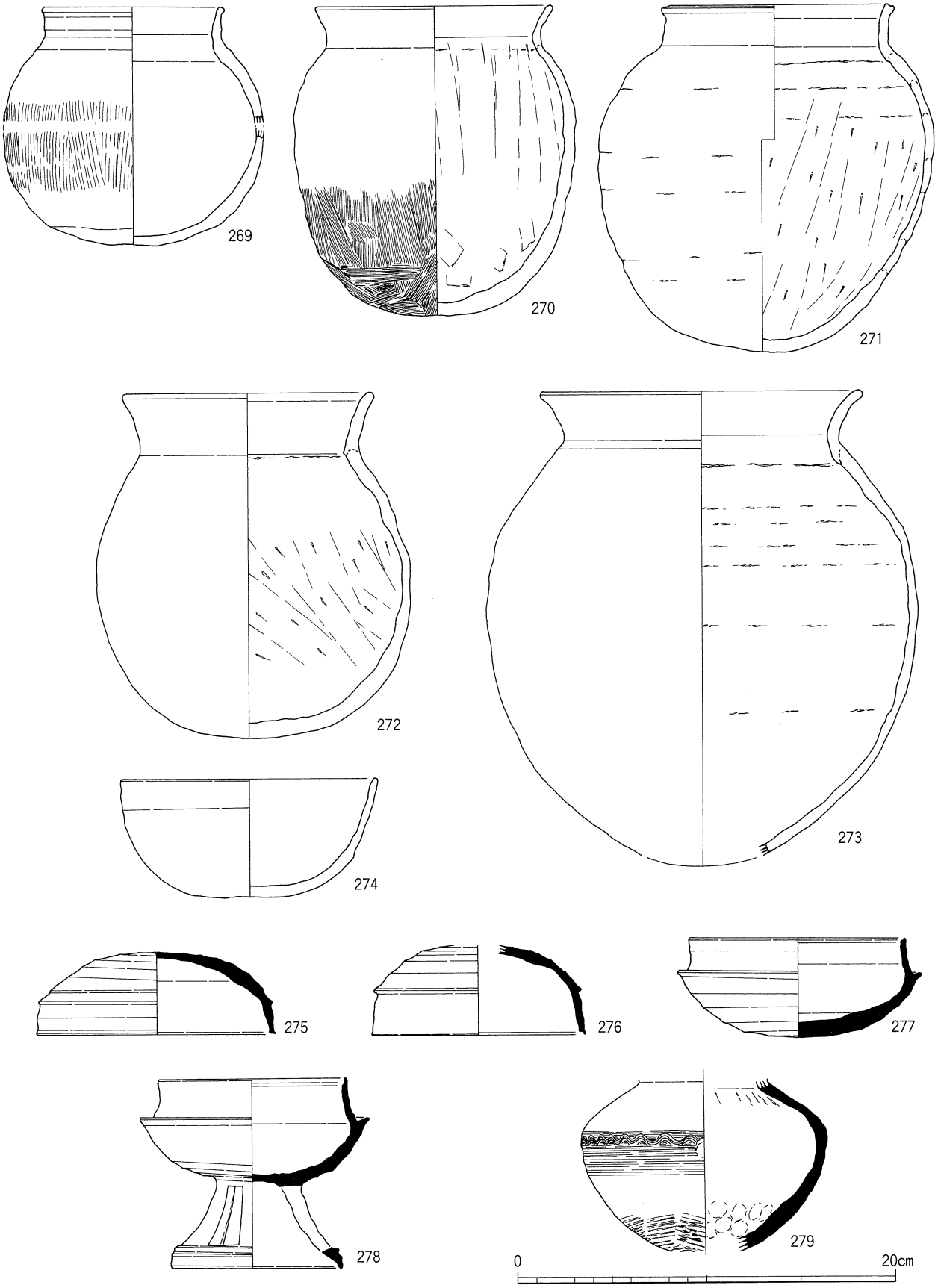


fig.87　ＳＥ204 中層出土土器実測図

中層の遺物　一方、中層の遺物には土師器埦・壺・甕と須恵器蓋坏・有蓋高坏・瓶とともに、板材・株などがある。

土器　(269) は口径9.4cm、器高12.5cmの短い口頸部と丸い体部をもつ土師器壺である。(270～273) はいずれも口縁部が緩やかに外反し、やや長胴で丸底の土師器甕である。内面のヘラケズリあるいは板ナデが顕著である。(274) は丸みをもつ平底から緩やかに内湾しながら延びる口縁部をもつ土師器埦で、口径13.6cm、器高6.2cmである。

(275) は口径12.7cm、器高4.3cmの須恵器坏蓋で、稜は鋭く、口縁端部は内傾する凹状である。天井部外面の回転ヘラケズリの範囲は広い。(276) は口径11.4cm、器高4.7cmの須恵器坏蓋で、口縁端部は鋭い内傾する凹状を呈し、稜はやや鈍い断面三角形状である。(277) は口径11.4cm、器高5.2cmの須恵器坏身で、たちあがりの端面には沈線が巡る。外面にはススが付着している。底部外面の回転ヘラケズリの範囲は広い。(278) は口径10.0

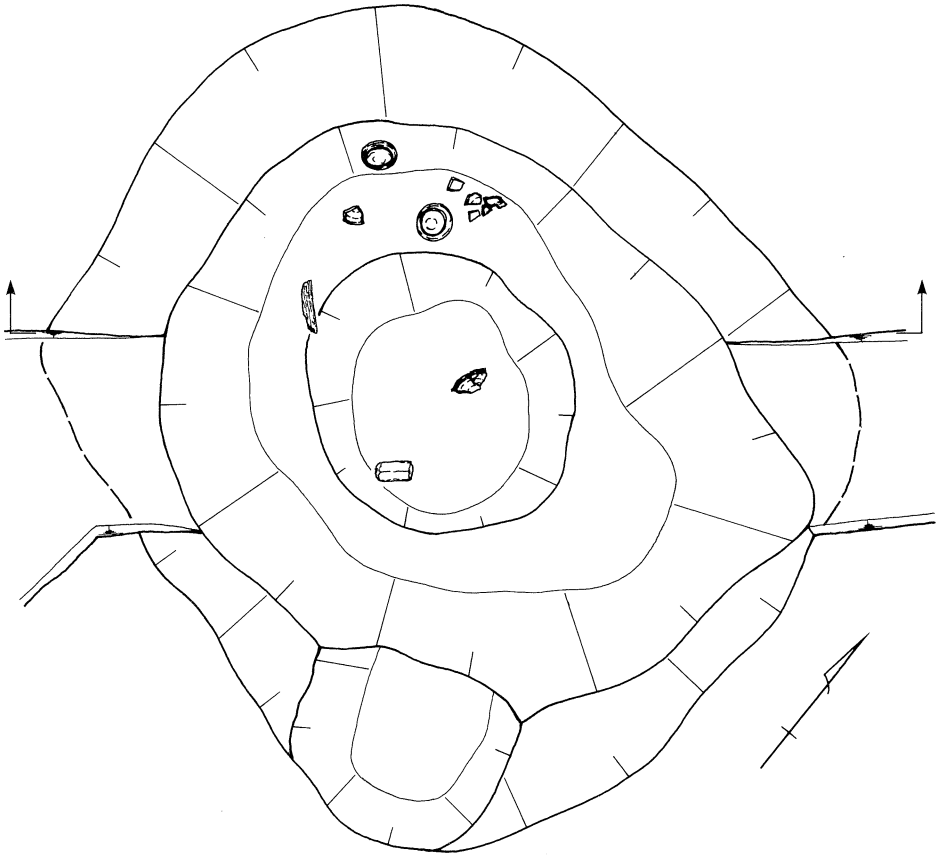
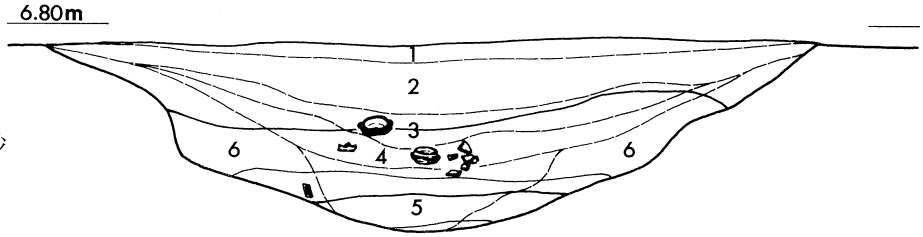
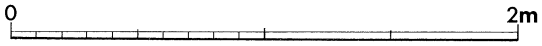


fig.88
ＳＥ205 平面・断面図
1．暗灰色シルト質細砂～細礫
2．暗褐色シルト質細砂
3．暗灰色シルト質極細砂～細砂
4．黒色シルト
5．暗灰色シルト
6．暗褐灰色シルト質極細砂～細砂





cm、器高9.9cmの須恵器有蓋高坏で、長く延びるたちあがりの端面は段状に仕上げられる。底部内面中央には同心円文アテ具痕が見られる。脚の長方形スカシは３方向である。(279)は体部最大径13.2cm、残存高9.1cmの須恵器瓹で、最大径部にはカキ目の後櫛描波状文が施され、底部には外面平行叩きが、内面には無文アテ具痕が観察できる。

中層の木製品（266～268）にはヒノキの板材とコウヤマキの板材がある程度で、いずれも一部炭化している。土師器・須恵器も同様に２次焼成を受けているようで、廃棄物の投棄と考える所以である。

ＳＥ205　平面形が隅円方形で、断面が擂鉢形の井戸状遺構で、長径3.1m、短径2.6m、深さ72cmである。肩部が崩落した後は徐々に埋没したものと考えられる。中層～下層にかけての黒色シルト・暗灰色シルト層から完形の須恵器坏蓋・坏身と砥石がまとまって出土している。砥石の石材は砂岩である。なお、後述されるように（第６章第３節）、ヒョウタン仲間の大型植物化石が下層の暗灰色シルト層に集中して多数出土している。

須恵器は内湾気味に延びる口縁部と丸みを持つ稜と丸みを持った高い天井部をもつ口径13.0cm前後、器高4.5cm前後の坏蓋（280・281）と内傾する長いたちあがり部と丸みを持った深い底体部をもつ口径12cm弱、器高５cm前後の坏身（282～285）である。砥石（286）は４面とも使用による平滑面をもつ砂岩製である。(山本・中居)

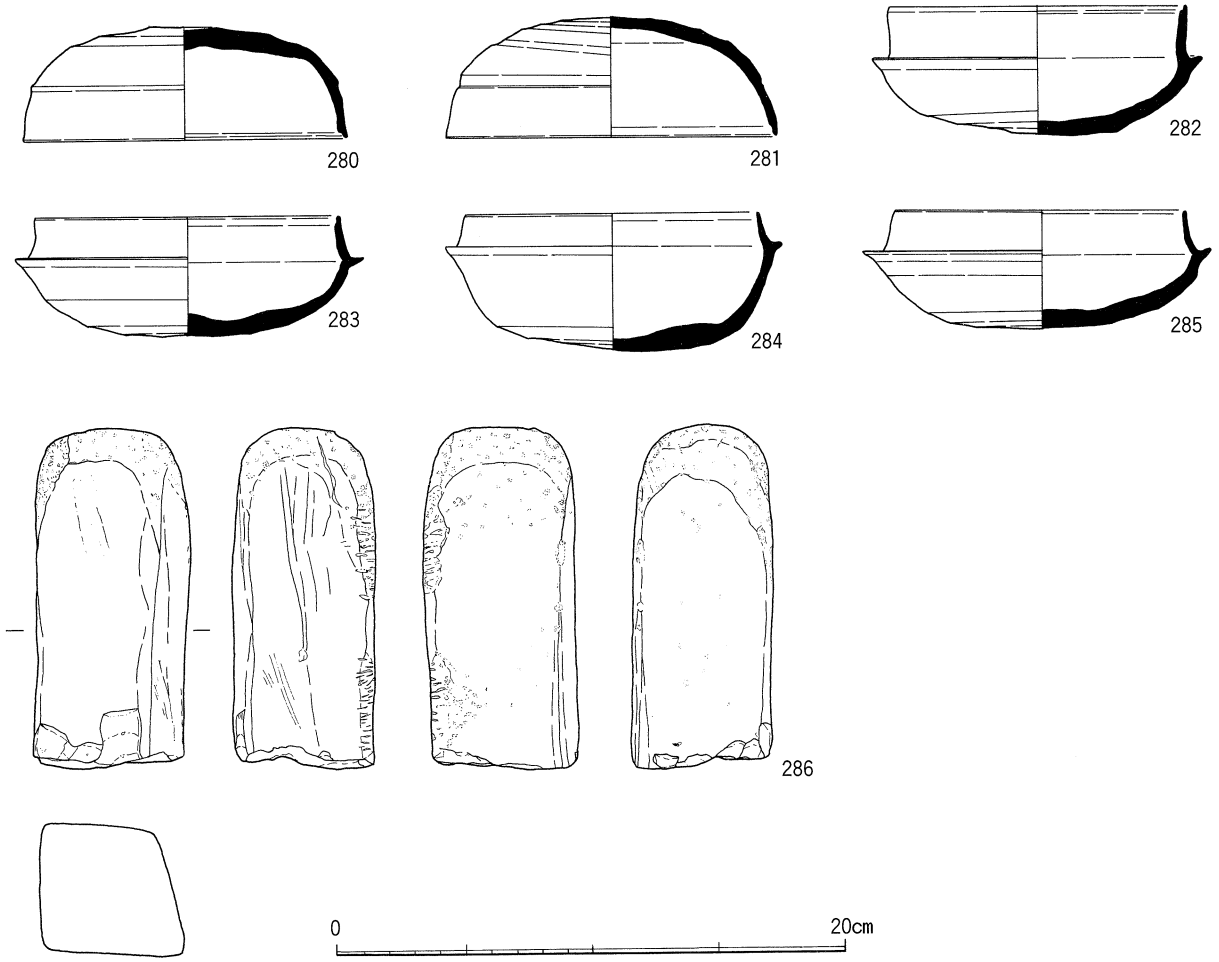


fig.89　ＳＥ205 出土遺物実測図

ＳＥ206　区画溝の内側で、掘立柱建物ＳＢ229の西側で確認された長径5.2m、短径4.2m、深さ2.1mの楕円形の落ち込みである。北側に浅い突出部を持ち、段状に底部に至るように掘られている。埋土は粘質土や粘土・シルトなどで、滞水状況にあったことを示している。現状でも湧水が認められ、土層観察用の畦が崩壊するほどであった。これらのことから、今回井戸として報告することにしたものである。

遺物は須恵器や土師器の細片が多量に出土しているが、図化できるようなものは多くはなかった。底面付近から少し浮いた状態で、杭などの木製品が出土している。また、滑石製品も７点出土している。

図示した遺物は須恵器４点、木製品６点、滑石製品７点である。

（287～290）は須恵器で、（287）は坏蓋で、天井部と口縁部界の稜は甘くなり、沈線化傾向が看取されるが、天井部のヘラケズリの範囲はまだ広い範囲に及んでいる。口径11.6cmを測る。（288）は有蓋高坏の蓋であるが、これも同様に天井部と口縁部界の稜がやや甘くなってきている。つまみは偏平で大きくぼんでいる。口径11.2cmを測る。（289・290）は坏身で、（289）は小型化の傾向がみられるもので、口径は10.0cmである。いずれも口縁

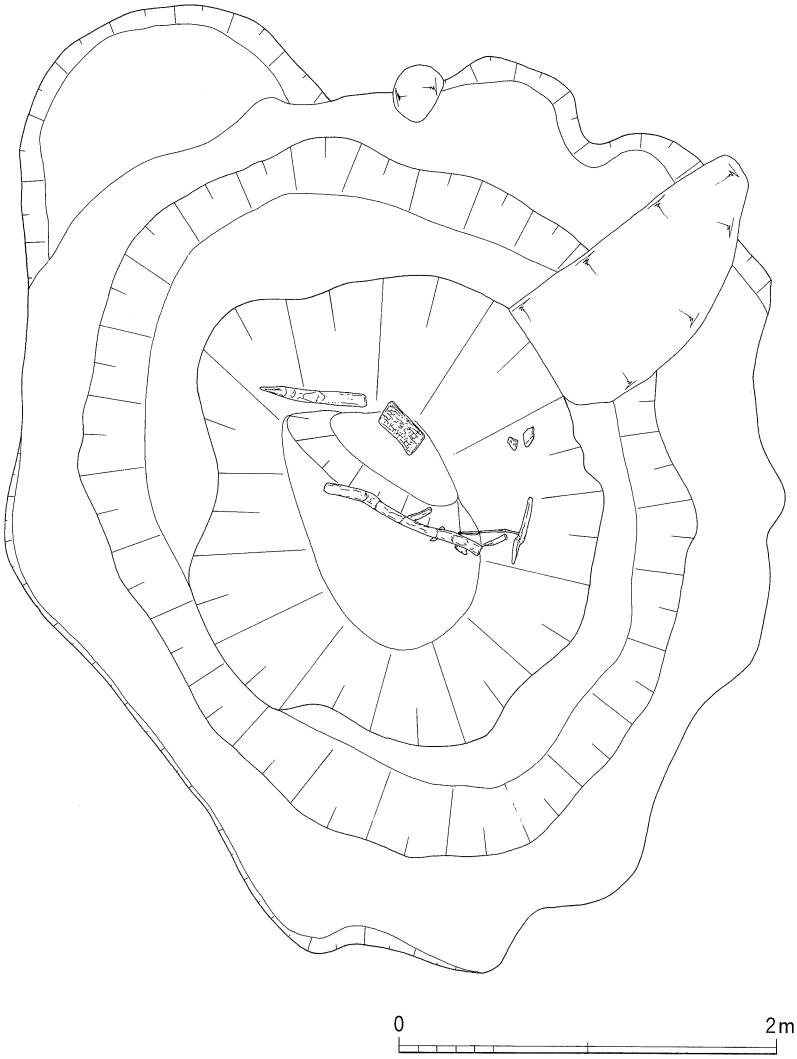


fig.90　ＳＥ206 平面図

端部には段を持っている。(290) は口径12.0cmである。時期的にはＴＫ47型式に相当する古墳時代中期末ごろのものと考えられるが、その中でもやや後出的様相を持つものが含まれる土器群である。

(298～303) は木製品で、(298) は一部を欠損しているが、長方形の板の中央部にＶ字状の切り込みを入れた蝶形の用途不明木製品である。幅5.4cm、長さ10.0cm、厚みは0.6cmを測る。中央部のくびれた部分には２箇所の円孔を持っている。樹種はヒノキである。神戸市西区白水遺跡の古墳時代中期の流路から、ほぼ同サイズの類品が出土している。樹種も同じである。(299) は用途不明の板状の製品である。両端を欠損しているが、中央やや上側に１箇所の円孔を持っている。(301) は小型の鋤状の木製品である。刃部の先端は平坦ではなく、弧を描くように仕上げられており、一部を欠損しているがその中央部を方形にくり込みを入れることで、二股状になるように仕上げている。鉄製の刃先を装着して十能のように使用されたことも考えられるが、現状ではその用途については判然としない。全長約37cmで、軸部の長さは約19cmである。軸部は一部を欠損しているが、ほぼ完存しており、端部近くに一辺2.0cmの方形の孔を穿っている。樹種はアカガシ亜属である。(300) は炭化が著しいものであったが、中央部に長方形のすり鉢状の穴を穿ち、ほぞ穴状の長方形の穴（1.5cm×3.0cm）を貫通させている。残存長約25cmで、厚みは8.0cm以上あったものと考えられる。用途については不明であるが、紡織具の櫓の台である可能性も考えられる。樹種はアカガシ亜属である。(302) は表皮が一部に遺存している杭である。残存長約66cmで、直径は6.2cmである。樹種はアカガシ亜属である。(303) も杭であるが、頭部付近が大きく外反し、くりこみの加工を施していることから再利用されたものと考えられる。残存長約89cm、直径は4.8cmである。樹種はアカガシ亜属である。

(291～297) は滑石製品で、(291～295) は臼玉である。(296) は剣形模造品で、長さは4.0cmである。(297) は有孔円盤である。２箇所の円孔を持つものが多いが、これは１箇所のみを穿っている。最大幅は2.3cmである。(前田)

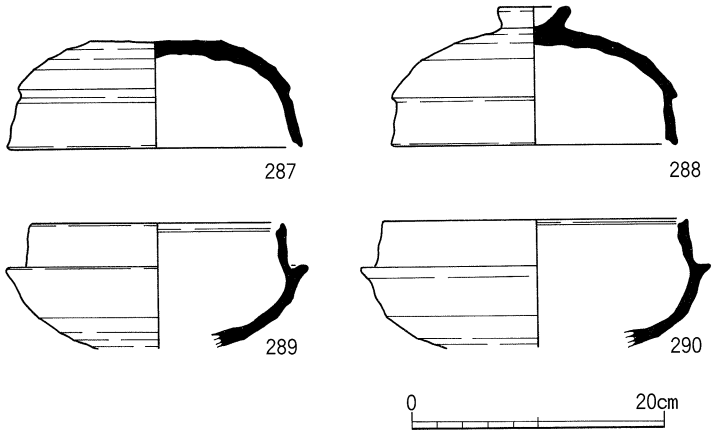


fig.91　ＳＥ206 出土土器実測図

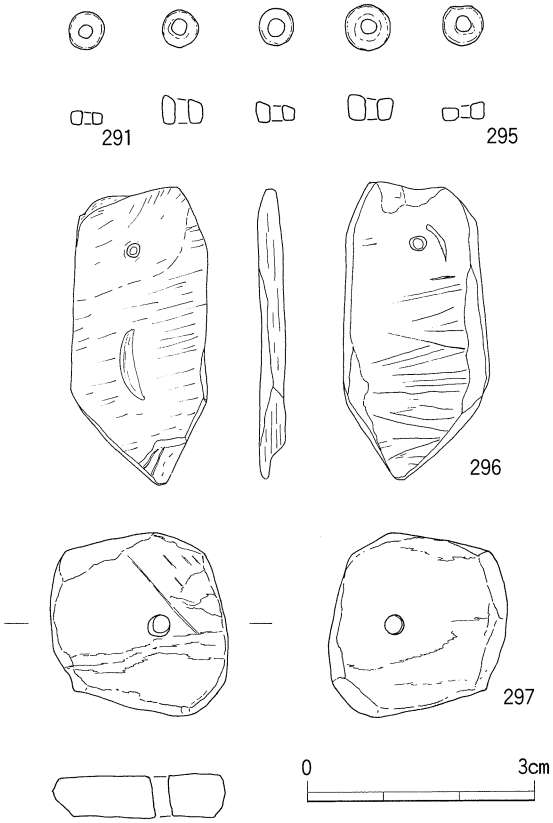


fig.92　ＳＥ206 出土玉類実測図

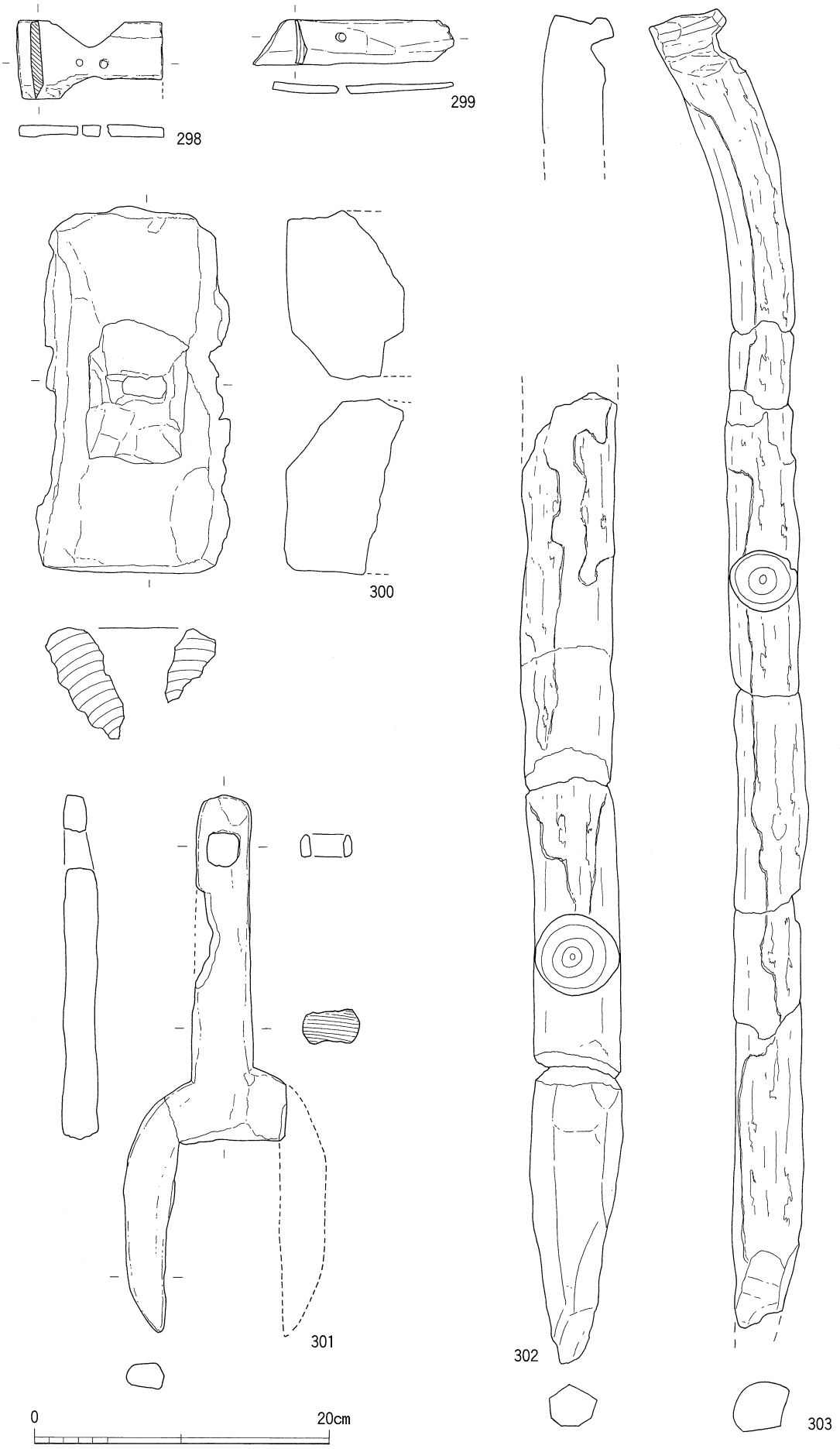


fig.93
ＳＥ206 出土
木製品実測図

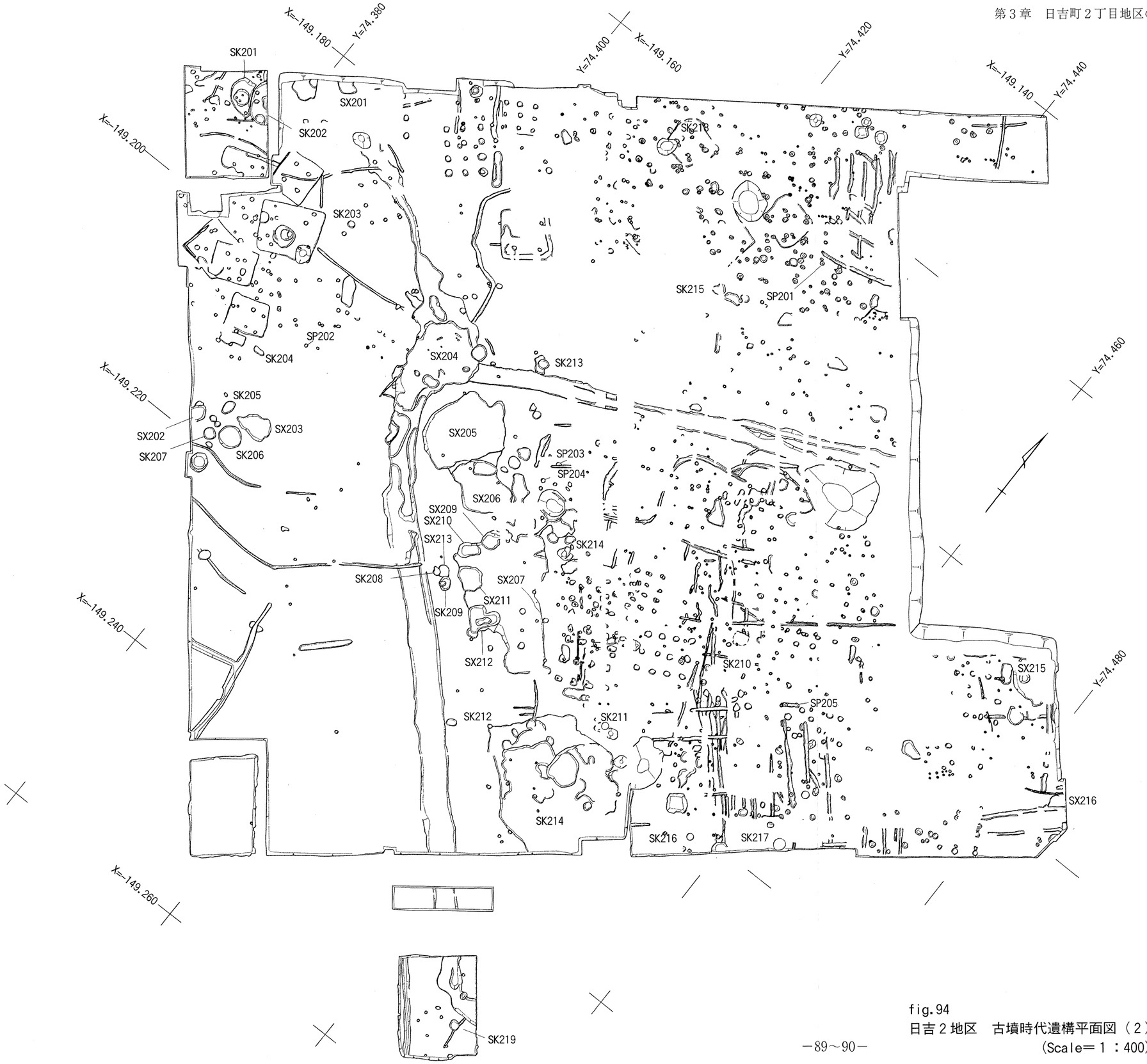


fig.94
日吉２地区　古墳時代遺構平面図（２）
(Scale＝１：400)

４．土坑

ＳＫ201　調査区の北西隅で検出された遺構で、東半部をＳＫ202よって削られた長径約8.0m、短径5.0m以上の楕円形の土坑である。底面はほぼ平坦であるが、西側に寄ったところに直径約3.5m、深さ0.2mの円形の落ち込みを持っている。南側には小ピットが１個ある。この落ち込み内からほぼ完形の須恵器の蓋坏が３個体やや浮いた状態で出土している。

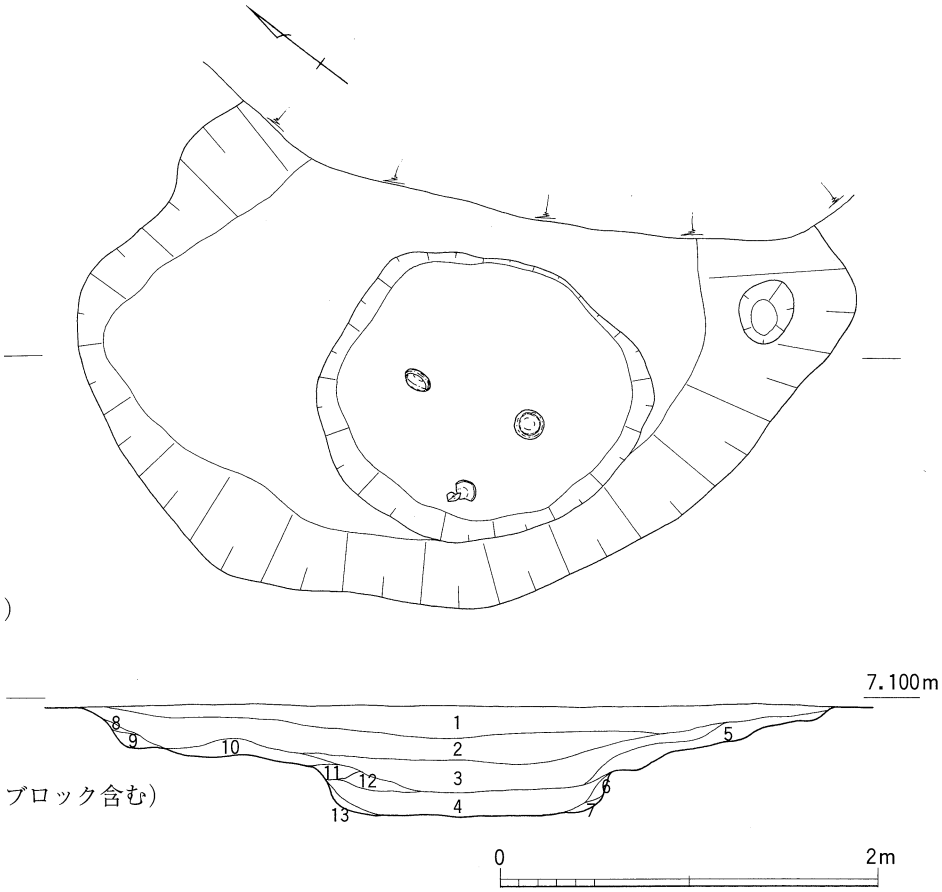


fig.95
ＳＫ201 平面・断面図
1．黒褐色シルト
2．黒色シルト
3．黒褐色シルト
4．黒色シルト
5．褐灰色シルト（砂質）
6．灰黄色シルト（極細砂混じり）
7．黄灰色極細砂
8．明黄褐色シルト
9．黒褐色シルト（炭粒多い）
10．褐灰色シルト
11．灰黄色シルト（黒褐色シルトブロック含む）
12．黒色シルト（粗砂含む）
13．黄灰色極細砂

図示したものは前述した３個体である。(306)は坏蓋で、口縁部端部は段を持っているが、天井部と口縁部界の稜が丸みを持つようになっている。(305・306)は坏身で、(305)は口径の小さなものであるが、受部は端部がやや丸みをおびている。(306)は口径が大きくなり、口縁部のたちあがりは短く内傾している。ともに焼成は甘い。時間的に幅のある資料であるが、古墳時代後期前半のＭＴ15型式～ＴＫ10型式の須恵器であろうか。（前田）

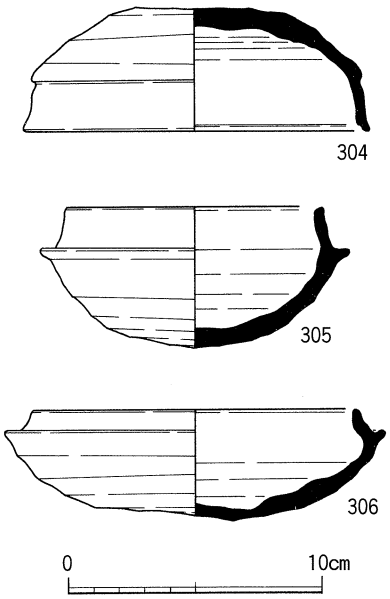
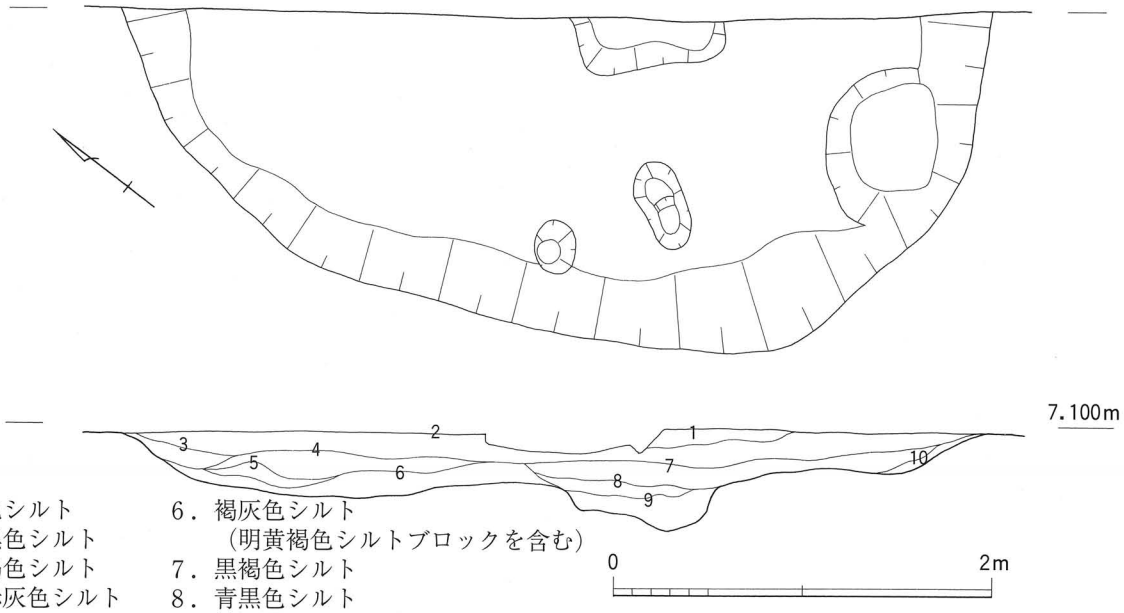


fig.96　ＳＫ201 出土土器実測図

ＳＫ202　東側が調査区外へ広がるため全容は不明であるが、長径約9.0m、短径3.0m以上の楕円形の土坑と推定される。底面には４個の浅いピットが確認できた。遺物は小片が多く出土しているが、図示できるものはなかった。しかし、切り合い関係からＳＫ201よりも後出するものであることから、古墳時代後期前半以降の遺構と判断できる。（前田）



1．黒色シルト
2．赤黒色シルト
3．黒褐色シルト
4．暗赤灰色シルト
5．黒色シルト
6．褐灰色シルト（明黄褐色シルトブロックを含む）
7．黒褐色シルト
8．青黒色シルト
9．青灰色シルト
10．黒褐色シルト

fig.97　ＳＫ202 平面・断面図

ＳＫ203　ＳＢ214の西側で検出された直径0.7m、深さ0.2mの円形の土坑である。土坑内の埋土は、茶褐色泥砂で周辺の包含層と同様の土である。上層から下層までほぼ同一の土で比較的短時間に埋まったものと推定される。微量の土師器・須恵器片と砥石が出土した。

（307）は長さ42mm、最大幅12mmの手持ち砥石で、一面を除いてよく使用されている。使用途中で割れたものであり、この土坑に廃棄されたものと考えられる。

砥石の出土状況は特筆すべきことはないが、単に廃棄されたのではなく、円形に掘られた土坑に意識的に土に返したのではないかと考えられる。（口野）

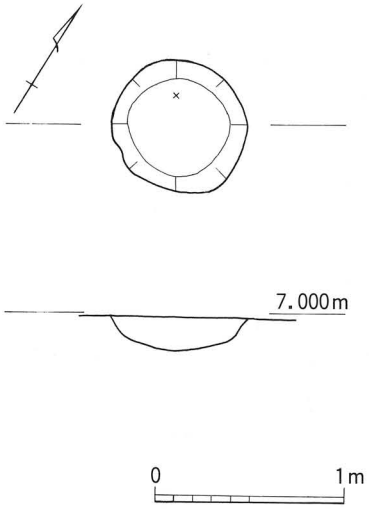
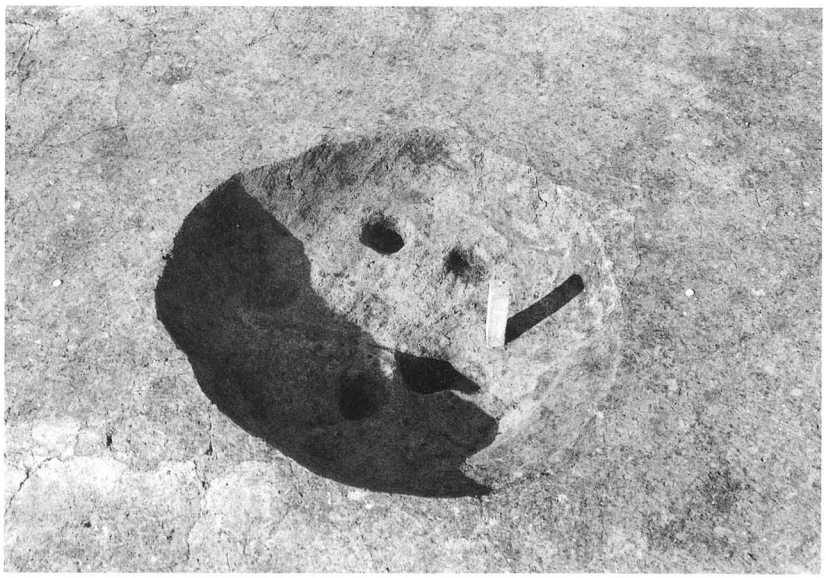


fig.98　ＳＫ203 平面・断面図
（×印 砥石出土地点）



挿図写真16　ＳＫ203 完掘状況（北から）

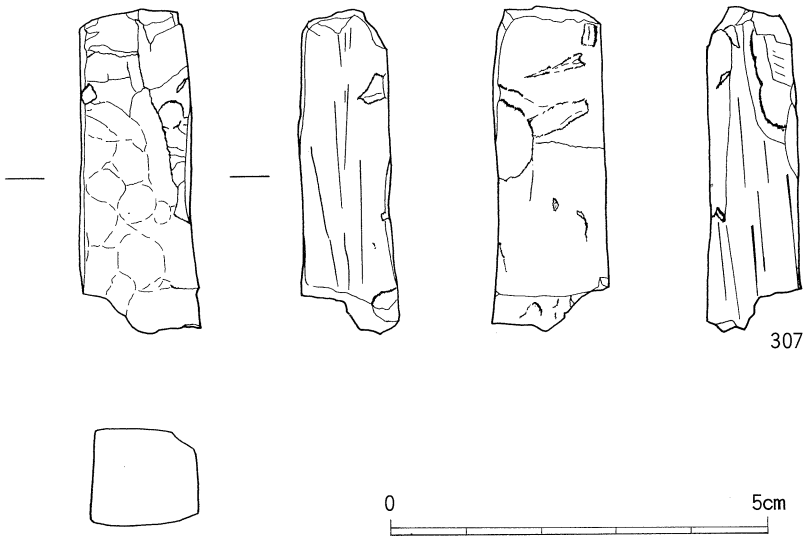


fig.99　ＳＫ203 出土砥石実測図

ＳＫ204　平面楕円形で、長径1.21m、短径0.63m、最大深さ0.18mの２段に掘り込まれた土坑である。埋土は２層に分けられるが、褐色系の粗砂層である。北東肩部から完形の須恵器坏蓋１点が出土している。

（308）は口径11.4cm、器高4.7cmの須恵器坏蓋で、稜は甘く、口縁端部は凹状を呈する。天井部外面の回転ヘラケズリの範囲は広い。

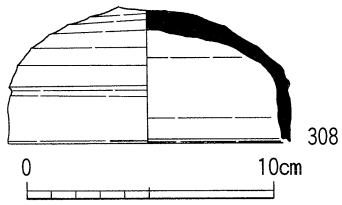


fig.101
ＳＫ204 出土土器実測図

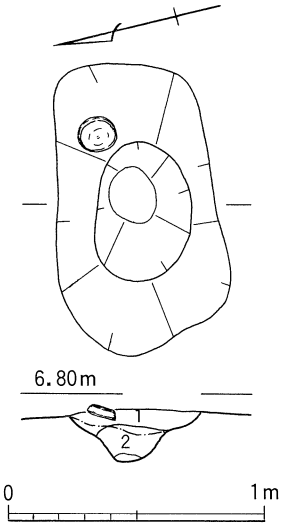


fig.100
ＳＫ204 平面・断面図
1．茶褐色粗砂
2．褐色粗砂

ＳＫ205　平面楕円形で、長径1.57m、短径1.09m、最大深さ0.41mの土坑である。埋土は暗褐色シルト質極細砂～細砂層で、直径10～50mmの炭粒を多く含む。土師器・須恵器が出土しているが、図化できない。（山本・中居）

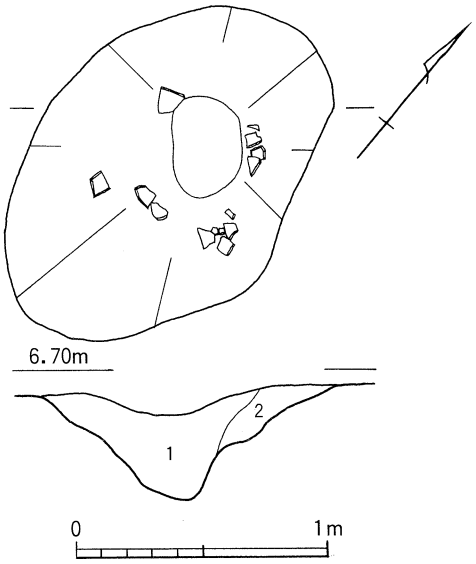


fig.102
ＳＫ205 平面・断面図
1．暗褐色シルト質極細砂～細砂
2．暗褐色シルト質極細砂

ＳＫ206　直径1.18m、最大深さ0.1mのやや歪な平面円形の土坑で、中央部が長径60cm、短径30cmで、底面から高さ６cmで楕円形に掘り残されている。埋土上層の暗褐色シルト質細砂から土師器・須恵器が出土している。

（309）は口径10.2cm、器高4.3cmの須恵器坏身で、口縁端部が内傾する凹状で斜上方に延びるたちあがりとやや浅く平らに近い底体部をもつ。

ＳＫ207　平面円形で、直径0.6m、最大深さ0.15mの土坑で、ＳＫ206の西側に位置する。埋土は２層に分けられ、上層の黒褐色シルト質細砂から土師器・須恵器が出土している。

（310）はＳＫ206とＳＫ207の出土遺物が接合している。口径10.0cm、器高4.4cmで、口縁端面に沈線をもち、まっすぐ斜上方に延びるたちあがりと浅く丸みをもつ底体部をもつ須恵器坏身である。（山本・中居）

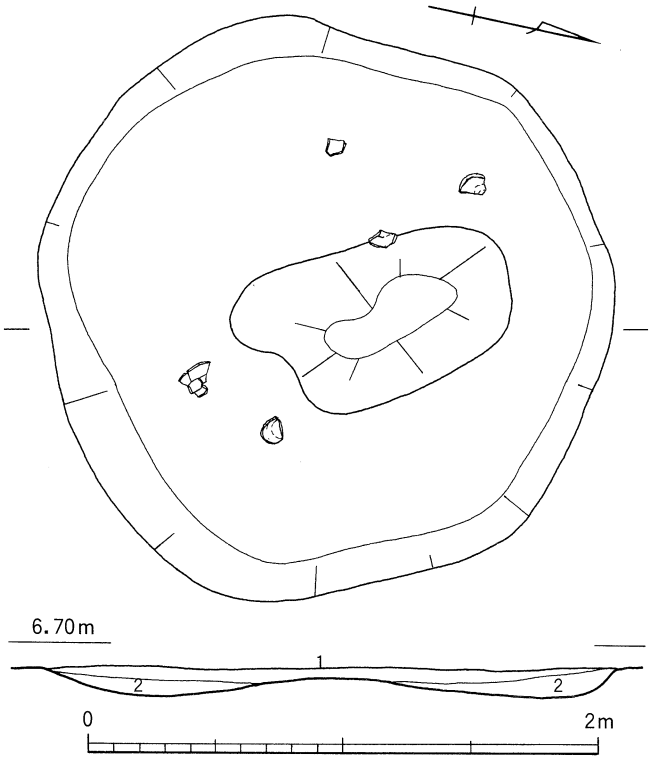


fig.103　ＳＫ206 平面・断面図
1．暗褐色シルト質極細砂
2．淡乳灰色極細砂質シルト

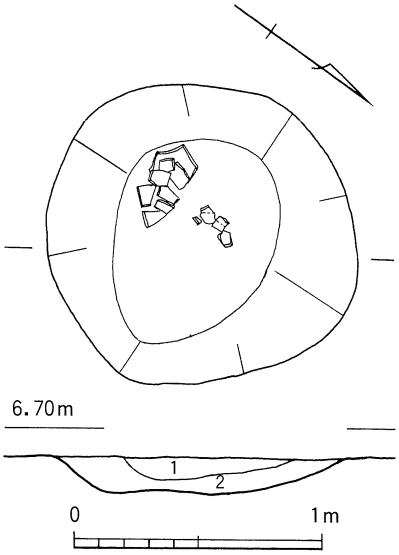


fig.104　ＳＫ207 平面・断面図
1．黒褐色シルト質細砂
2．暗灰褐色極細砂質シルト

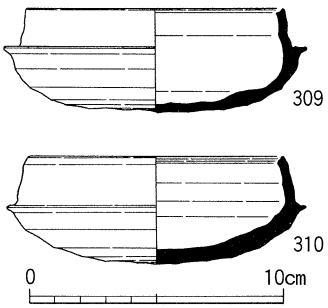


fig.105　ＳＫ206・207
出土土器実測図

ＳＫ208　平面がやや歪な円形で、直径0.8m前後、最大深さ0.25mの土坑で、ＳＫ209の西側に位置し、ＳＸ113を切っている。埋土の大部分は暗褐色シルト質極細砂が占める。遺物は出土していない。

ＳＫ209　長径1.5m、短径1.2m、最大深さ0.4mの楕円形土坑で、さらに坑底に直径60cm、深さ11cmの円形の掘り込みがある。西側坑壁は大きく抉れており、ＳＸ113を切る。埋土は４層に分けられ、下半層の淡褐灰色シルト混じり極細砂層には黄色粘土・黒褐色シルトの小

塊を多く含む。弥生土器あるいは土師器の小片とサヌカイトフレイクが出土している。（山本・中居）

ＳＫ210　区画溝の内側の掘立柱建物ＳＢ223の東側で確認された土坑である。北側の一部に肩部が確認できた以外は、攪乱のため確認できなかった。現存する部分からは、長径2.0m以上の方形あるいは楕円形の土坑と推定される。深さは0.08m程度で、削平を相当受けているものと推定される。底面には直径約0.2mのピットを１個確認しているが、周辺の状況から竪穴住居のような遺構になるものではない。

遺物は底面から須恵器の甕の口縁部（311）が出土している。やや外反しながらたちあがる口縁部で、櫛描波状文で加飾している。時期的にはＴＫ47型式に相当する古墳時代中期末ごろのものと考えられる。（前田）

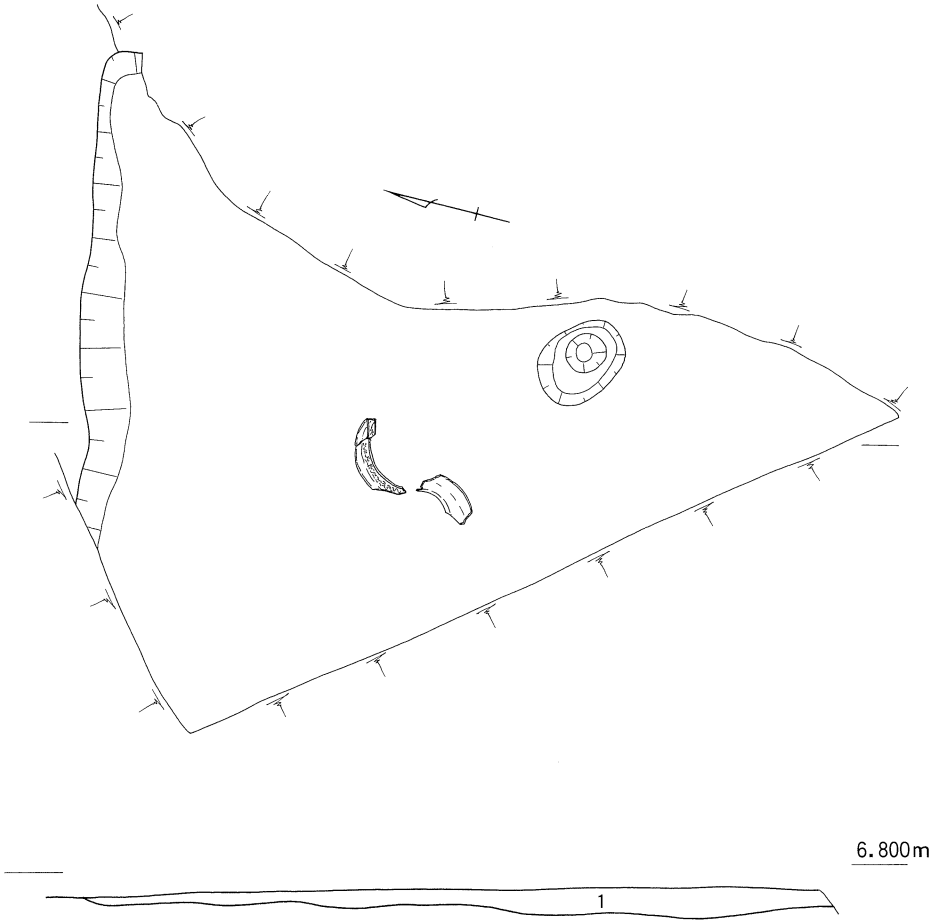


fig.106　ＳＫ210
平面・断面図

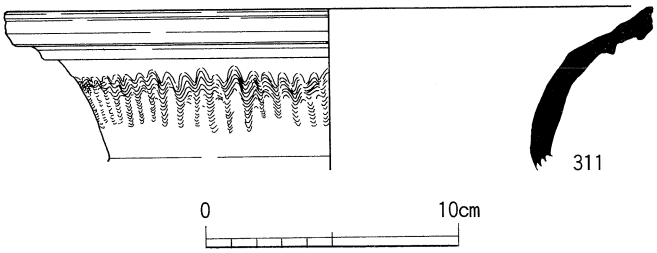


fig.107　ＳＫ210 出土土器実測図

ＳＫ214　長径1.45m以上、短径1.39m、最大深さ0.4mの楕円形に２段に掘り込まれた土坑である。埋土は５層に分けられ、中層の淡黒褐色シルト質極細砂・黒褐色細砂質シルト層には直径３～５㎜大の炭が多く含まれている。

埋土からは土師器・須恵器の小片のほか、須恵器の装飾付有蓋直口壺の口頸部～肩部片（313）が出土している。口縁部のたちあがりは欠損する。口縁受部径10.4cm、残存高8.8cm。頸部は中位の１条の沈線をはさんで上下それぞれで施文角度を違えた櫛描列点文で飾る。肩部には貼り付けられた装飾の剥離痕があり、右側は動物の小像らしき不揃いな４脚分の突起が、左側には円弧を描くナデが施され、小壺が貼り付けられていたと考えられる。また、接合しない水鳥の小像（312）もある。頭部先端の嘴部分を欠損するが、長く延びる首、羽を閉じた胴体とやや跳ねた感じの尾の表現が写実的である。残存高3.0cm。両者とも外面に黄緑色～黒緑色の自然釉をかぶる。（山本・中居）

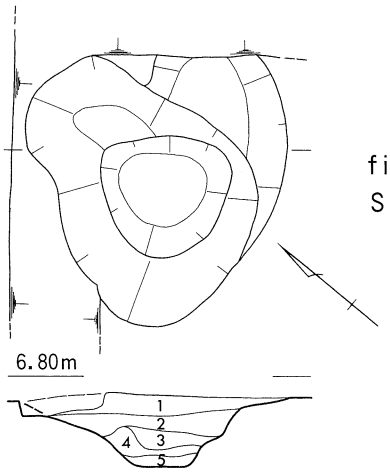


fig.108
ＳＫ214 平面・断面図
1．暗褐色シルト質細砂
2．淡黒褐色シルト質極細砂
3．黒褐色細砂質シルト
4．淡乳灰色シルト
　　混じり極細砂～細砂
5．褐色シルト質極細砂

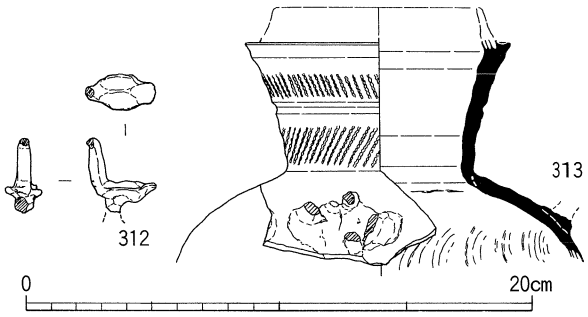


fig.109　ＳＫ214 出土土器実測図

ＳＫ215　ＳＢ207の南で検出された土坑で、最大長1.4mの不定形な平面プランを呈している。

この土坑は、断面観察から最初に水平に堆積もしくは埋められた深さ約10cmのものに、後に深さ25cmの土坑を掘り直した状況がみてとれた。

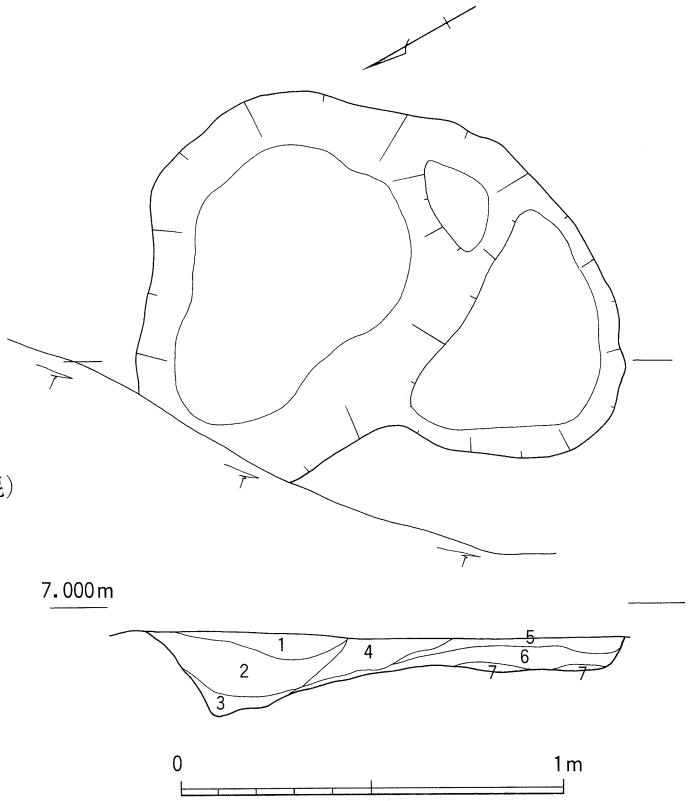


fig.110
ＳＫ215 平面・断面図
1．暗褐灰色シルト質細砂（黄灰色砂質シルト混）
2．黒褐色シルト質極細砂
3．黒褐色砂質シルト（黄灰色砂質シルト混）
4．黒灰色シルト質極細砂
5．暗灰褐色シルト質極細砂
6．　　〃　　（５層より明るい）
7．灰褐色シルト質細砂

ＳＫ216　ＳＥ206の東で検出された土坑で、一辺が１ｍの正方形の平面プランである。遺構面から約40cm掘り込まれており、下端の傾斜変換点はゆるやかなものとなっている。

この土坑の底部には、人間の足跡が足を揃えて立ったような状態で検出された。足のサイズが12cmで幅５cmと小さいことから、子供の足跡と考えられる。足跡が残っていることから、湿った状態での利用が考えられるが、松野遺跡のベース層である黄褐色粘質土層内で遺構の底が止まっていることから、井戸などの湧水を伴う用途は考えにくい。井戸の近くで検出されたことから、水を溜めるような利用が考えられよう。図化できるような遺物は出土しなかった。

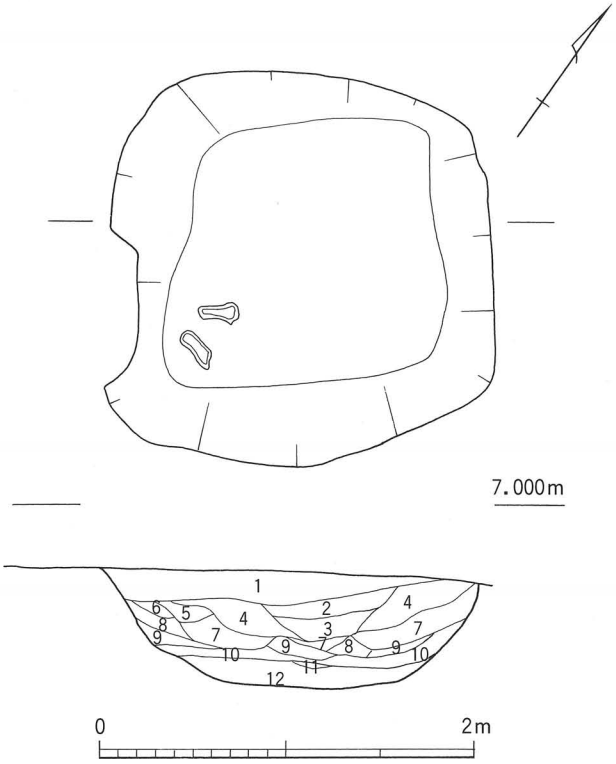


fig.111　ＳＫ216 平面・断面図

1．暗褐色砂質土（黄色粘土ブロック混）
2．茶褐色砂質土（　　〃　　）
3．茶褐色粗砂　（　　〃　　）
4．黒灰色細砂
5．黄色粘土
6．灰色細砂
7．暗灰色細砂（黄色・黒色粘土ブロック混）
8．暗灰色粘質土
9．黒灰色細砂
10．明灰色細砂
11．暗灰色粘土
12．灰色粗砂（黄色粘土ブロック混）

挿図写真17　ＳＫ216（東から）

ＳＫ217　調査区の南端で検出された土坑である。南半分が調査区外に延びるため、全容は不明であるが、平面形は一辺1.8mの隅円方形で、深さは遺構面から約40cmである。ＳＫ216とは南に隣接して存在することと形状が良く似ていることから、これらの遺構は関連したものと考えられる。少量の遺物が出土しているが、図化できるような遺物は出土しなかった。（川上）

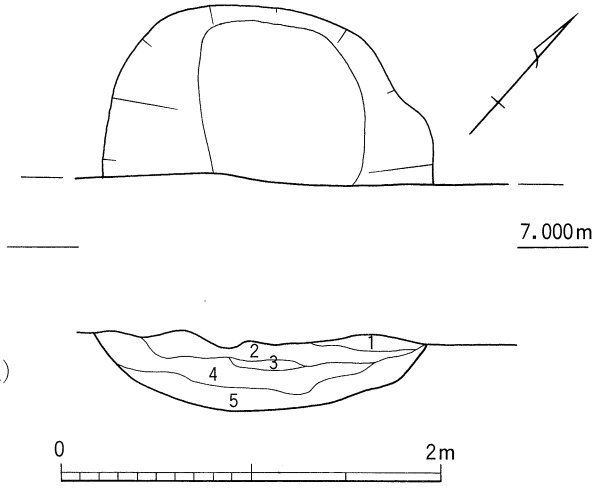


fig.112　ＳＫ217 平面・断面図
1．暗灰色細砂（黄色粘土ブロック混）
2．明褐色砂質土（　　〃　　）
3．明灰色細砂
4．暗灰色細砂（黄色粘土ブロック混）
5．黄灰色粘質土（細砂混・黄色粘土ブロック混）

ＳＫ218　ＳＢ208を切り込む不定形な土坑状遺構で、長径2.1m、短径1.65m、深さ0.4mである。底面には窪み状の落ち込みがあり、深さは一様ではない。埋土は５層に分けられ、古墳時代の須恵器・土師器が出土したが、いずれも図化できなかった。これら遺物の中には、ＴＫ47型式に併行すると考えられる須恵器の蓋坏などがある。（阿部）

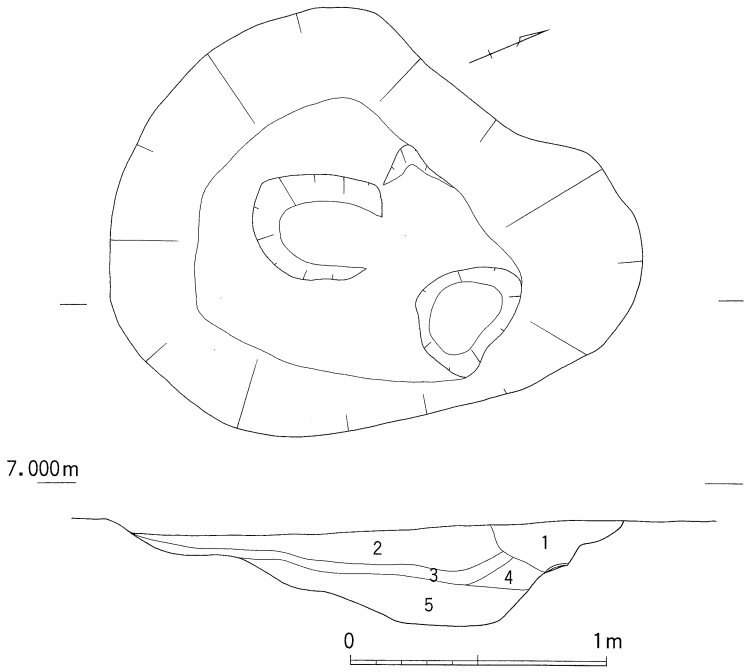


fig.113　ＳＫ218 平面・断面図
1．黒灰色シルト質細砂
2．暗灰褐色シルト質極細砂
3．暗褐灰色シルト質極細砂
4．黒褐色シルト質極細砂
5．暗黒褐色シルト質極細砂

ＳＫ219　直径１ｍ、深さ0.2ｍのこの浅い土坑はＳＤ204のコーナーに位置している。この土坑からはほとんど土器が出土していないが、土師器の直口壺（314）が１点完形で出土している。口縁部は上外方に直線的に延び、胴部は扁球形で、器壁は厚い。口径8.3㎝、器高11.9㎝で、色調は淡橙色を呈している。クサリ礫・金雲母を胎土に含んでおり、調整は内面ナデ、外面は磨滅のため不明。時期はＳＤ204と同時期と考えられる。（中居）

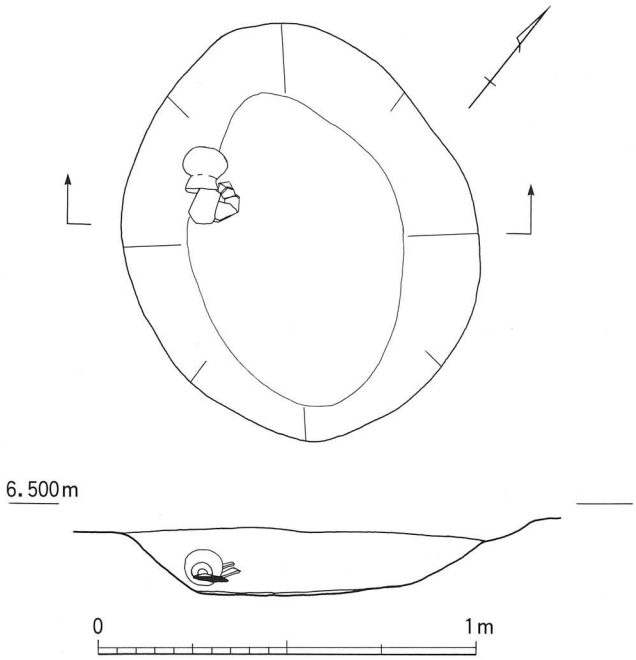


fig.114　ＳＫ219 平面・断面図

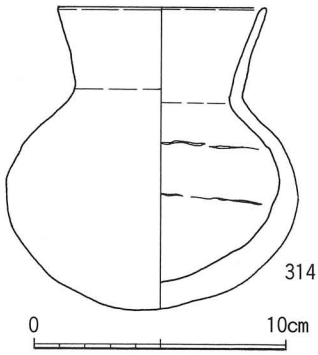


fig.115　ＳＫ219 出土土器実測図

挿図写真18　ＳＫ219（東から）

5．落ち込み等用途不明遺構

ＳＸ201　調査区北西端に検出された、東西2.6m、南北2.2m、深さ0.1mの浅い皿状の不整形の遺構である。土師器片・須恵器片と板状木片・スコップ状の木製品が検出された。

また、ＳＸ201の東側にも、ＳＸ201と同じような浅い不整形の遺構が検出されている。ＳＤ203の項でも触れたが、これらの遺構の周囲は遺構面が全体に約0.4m削平されており、さらに攪乱坑により東西２ケ所に別れて検出されているが、北壁の断面観察と遺構内の堆積土から同一の落ち込み状遺構と考えられる。しかしながら、遺構の全体の形状、規模などは不明である。この遺構からも土師器片・須恵器片が出土した。

出土遺物は、平面図にあるように大きな破片としては須恵器甕片がその多くを占めるが、図化できなかった。

（315）はアカトリと考えられる。現存長27.0cm、現存最大幅7.9cm、受け部の深さ3.0cm、把手部直径2.0cm前後、把手長12.9cmである。遺物の残存状況が悪く、受け部の右側たちあがりや把手基部、先端部は欠損している。

（316・317）は稜線は鈍く、やや厚手のものである。ＴＫ23型式あたりの型式と思われる。他に木製品として、平面図には羽子板状の木製品を図示しているが、残存状況が悪いことから、板状の木製品が羽子板状に検出されたと理解される。（口野）

fig.116　ＳＸ201 遺物検出状況　平面図

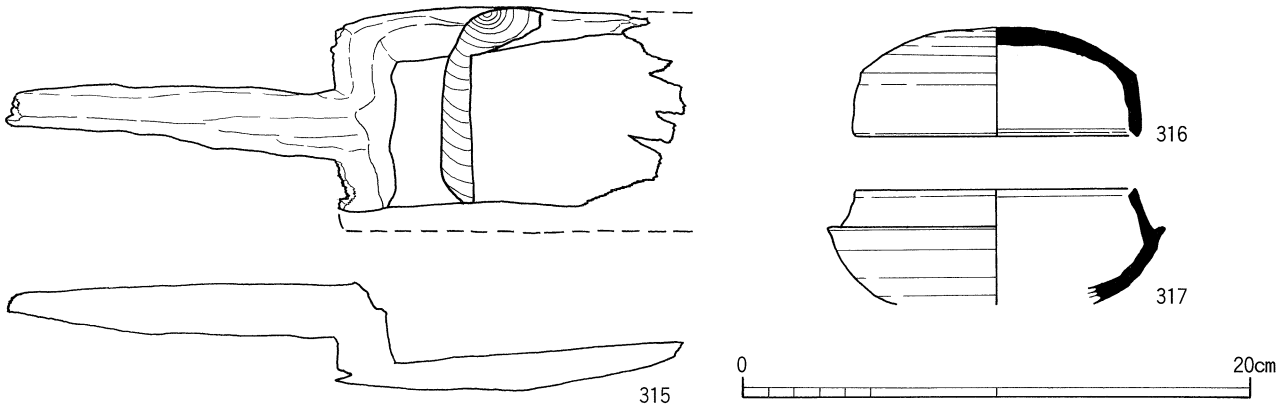


fig.117　ＳＸ201 出土遺物実測図

ＳＸ202　調査区の西辺で確認した長径1.8m以上、短径1.52m、深さ30cmの楕円形に近い落ち込みで、西辺は調査区外へ拡がる。埋土は黒褐色シルト質極細砂を主体とし、土師器・須恵器が比較的まとまって出土している。

(318) は口縁部を欠損する土師器の平底の鉢と考えられる。体部最大径14.8cm、底径7.5cm、残存高8.6cm。外面には粘土紐の接合痕が目立つ。(319) は口径11.2cm、器高4.9cmの須恵器坏身で、やや内傾して長く延びるたちあがりの端部が内傾する凹状を呈し、平らに近い深い底体部をもつ。(320) も坏身で、口径10.4cm、器高4.9cmで、丸みをもった底体部をもつ。

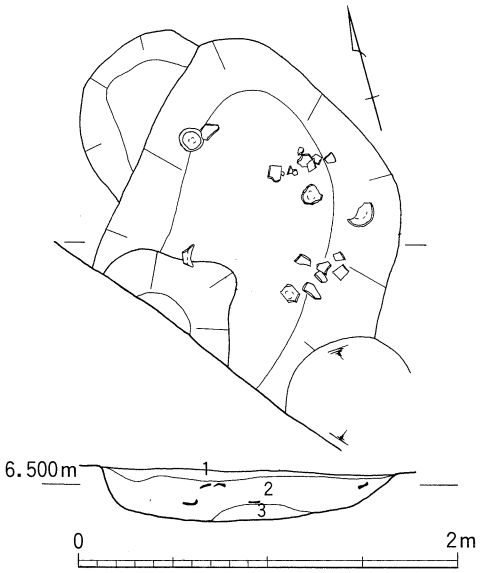


fig.118
ＳＸ202 平面図・断面図
1．暗褐色シルト質細砂
2．黒褐色シルト質極細砂
3．暗乳黄色極細砂質シルト

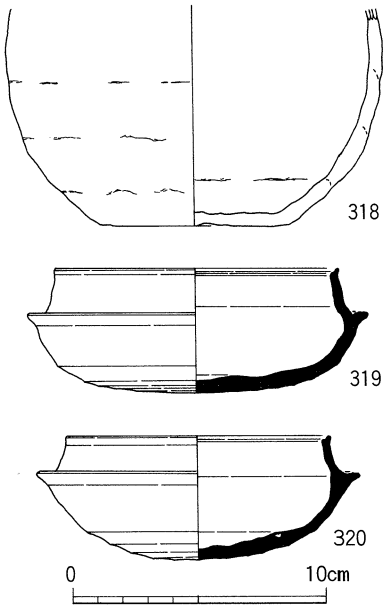


fig.119　ＳＸ202 出土遺物実測図

ＳＸ203　長径3.62m、短径2.21m、深さ0.08mの不整形の落ち込みで、北辺に長径0.95m、短径0.78m、深さ0.04mの浅い土坑が伴う。埋土は直径10mm大の炭粒を多く含む暗褐色シルト質極細砂～細砂で、土師器・須恵器がまとまって出土している。

(321) は球形の体部から単純に外反する口縁部をもつ土師器壺で、口径16.7cm、体部最大径23.4cm、残存高20.9cmである。頸部内面に接合痕が観察できる程度で、２次焼成のためか、調整は不明。体部最大径付近に直径６mmの焼成後の穿孔がある。(322～324) は体部から単純に口縁部が外反する甕。(324) では端部をややつまみ上げ、端面をつくり出す。(325) は口径25.5cmに復元できる大型の鉢であろうか。体部から屈曲してまっすぐ延びる口縁部をもつ。

(326) は須恵器坏蓋で、口径12.8cm、器高5.0cm。口縁部がやや内湾気味に延び、端部はわずかに内傾する凹状を呈する。稜は鋭く突出する。天井部は高く、わずかに丸みをもつものの、平らに近い。(327) は坏身で、口径11.6cm、器高4.7cm。たちあがりは内傾して長く延び、端部は内傾する凹状を呈する。底体部はほぼ平らで、やや深い。(山本・中居)

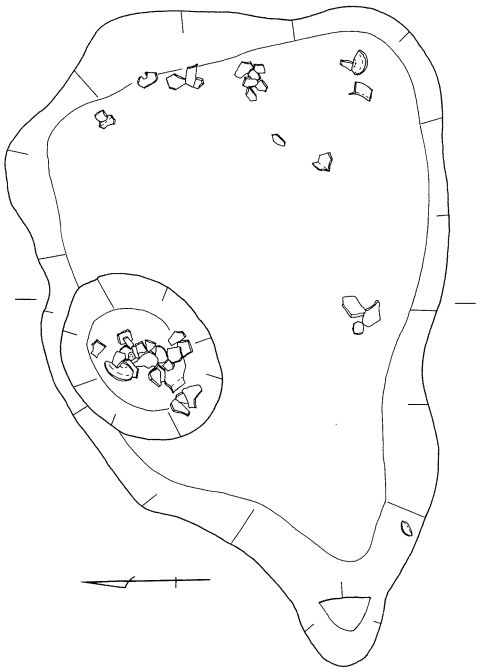
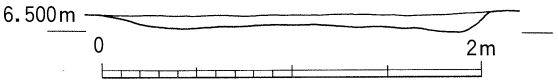
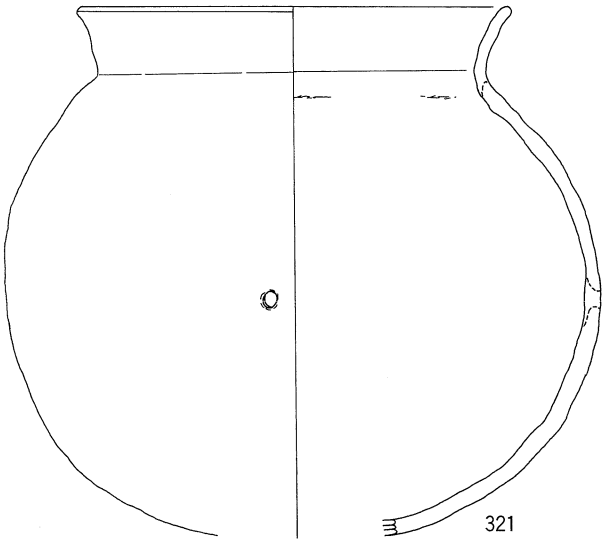
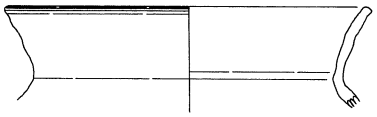
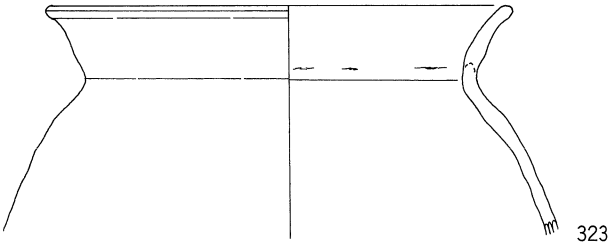


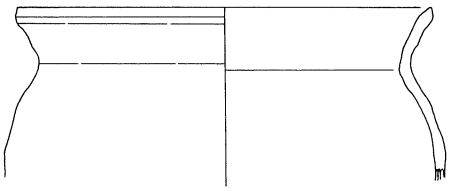
fig.120
ＳＸ203 平面図・断面図

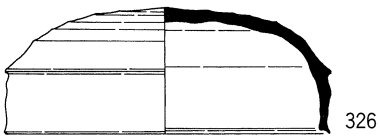


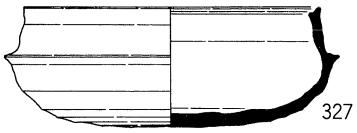


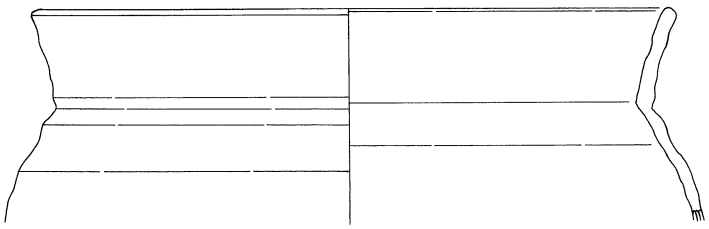












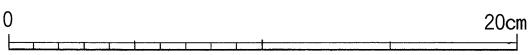


fig.121　ＳＸ203 出土土器実測図

ＳＸ204　　東側はＳＤ201・202、北側はＳＤ203、南側はＳＤ204の溝が合流する遺構で、東西約７ｍ、南北約11ｍ、最深部約0.6ｍの南北にやや長い大きな落ち込み状の遺構である。北側は東西約５ｍ、南北約４ｍに一段深く、南側は0.4ｍ前後とやや浅く窄まりながらＳＤ204

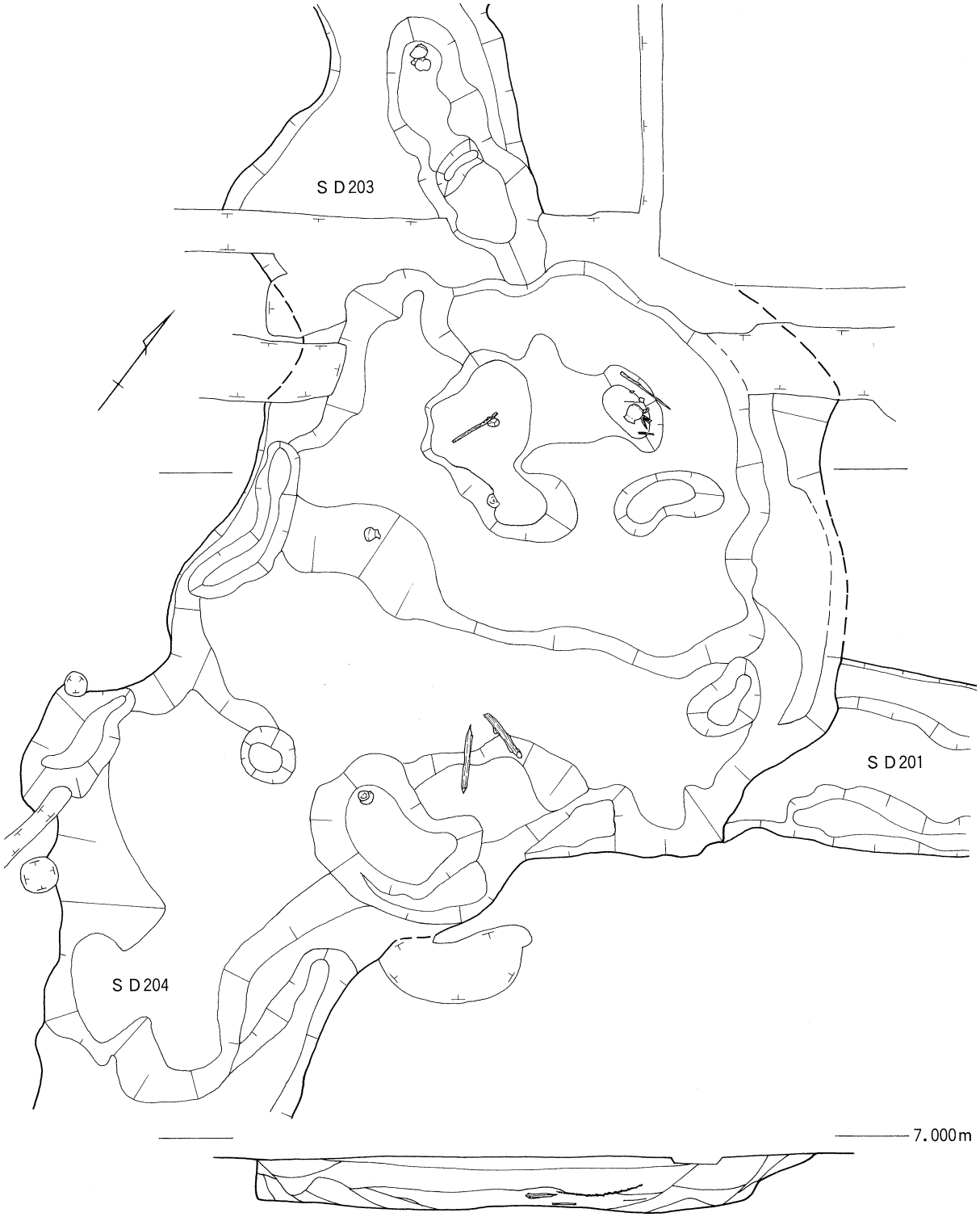


fig.122　ＳＸ204 平面・断面図

0　5m

とつながる。遺構の底は多少の凹凸はあるものの、北側と南側に２段に分かれて、ほぼ平らである。遺構の底面のわずかな凹みには、須恵器坏や土師器壺などと木材片などが出土した。

ＳＸ204とＳＤ201・202との遺構の比高差は約0.4ｍあり、ＳＤ201・202が途切れるようにＳＸ204と合流する。ＳＸ204が切るように検出されているが、遺構どうしの切り合い関係は、検出時での状況は明らかにできなかった。

ＳＤ203はＳＸ204と合流する手前で溝の幅をひろげ、部分的に深い箇所を形成して合流している。

ＳＸ204は断面観察から西辺は垂直気味に落ち込み、意識的に掘削されたように考えられる。東西から徐々に埋まり、埋まった堆積土砂を押し退けるようにさらに中央に新たな堆積土砂が形成されている。埋没の最終時に近い段階で、西辺では幅１ｍ、深さ0.5ｍほどの溝状の堆積が観察される。

中央部の堆積層では、底面に近い箇所で木材片が堆積している。この層の上面では、弧状の炭の薄い堆積層が観察される。この炭層の直上では滑石が出土している。焦げた木片が出土していることから、火を用いる行為を行ったことが考えられる。

遺構からの出土遺物は、土師器・須恵器と剣形滑石製品・線刻穿孔滑石製品・穿孔のある手持ち砥石・臼玉（79個）・枝をはらった程度の木・一部焦げた木・杭状木製品・鉱滓などで、28ℓ入りコンテナに10個分出土した。

土師器　（326～332）は土師器埦である。残存状況はやや悪いが、全体に粗いつくりである。（327・328・330）は粘土紐接合痕が外面に残り、底部外面は指オサエのみか粗いナデで仕上げている。これに比べ内面は丁寧にナデを施している。（329・330）は内面のナデ上げ痕が観察される。（328・330）はＳＥ201の（205）と同様の法量である。（327・329・332）の胎土にはクサリ礫が含まれる。（327・328）は焼成後に熱を受けたのであろうか、赤黒い土器である。

（333・334）はミニチュアと考えられるものである。（333）は壺であろうか、口縁部は横方向、体部は縦方向のナデを丁寧に施す。（334）は底部が欠損している。甑もしくは把手付堝と考えられる。口縁部はナデ、体部外面はハケ調整、体部内面の調整は不明である。把手は指オサエおよびナデで仕上げる。やや偏平で、下方に延びる。表面の残存状況が悪く、熱を受けたと思われるような状態である。

（335）は直口の壺で、ほぼ完形品である。全体に表面の残存状況が悪く、底部内面のみ調整が観察されナデを施す。

（336）は器形から壺と考えられる。外面の残存状況が悪く、調整は不明である。内面の調整は指オサエ痕が残るが、全体にナデを施す。

（337～339）は小型の甕である。（337）の口縁部は外面ナデで、内面はハケ調整である。体部外面はハケ調整後粗いナデで仕上げる。体部内面は縦方向のナデ、底部は横方向のナデである。（338）は口縁部は欠損している。内外面ともにナデで仕上げる。

（339）は口縁部内外面ともにナデ、体部外面はナデである。体部内面はケズリ後、粗くナデを施す。取り上げ後の遺物の水洗作業で、遺物内から26個の臼玉が検出された。

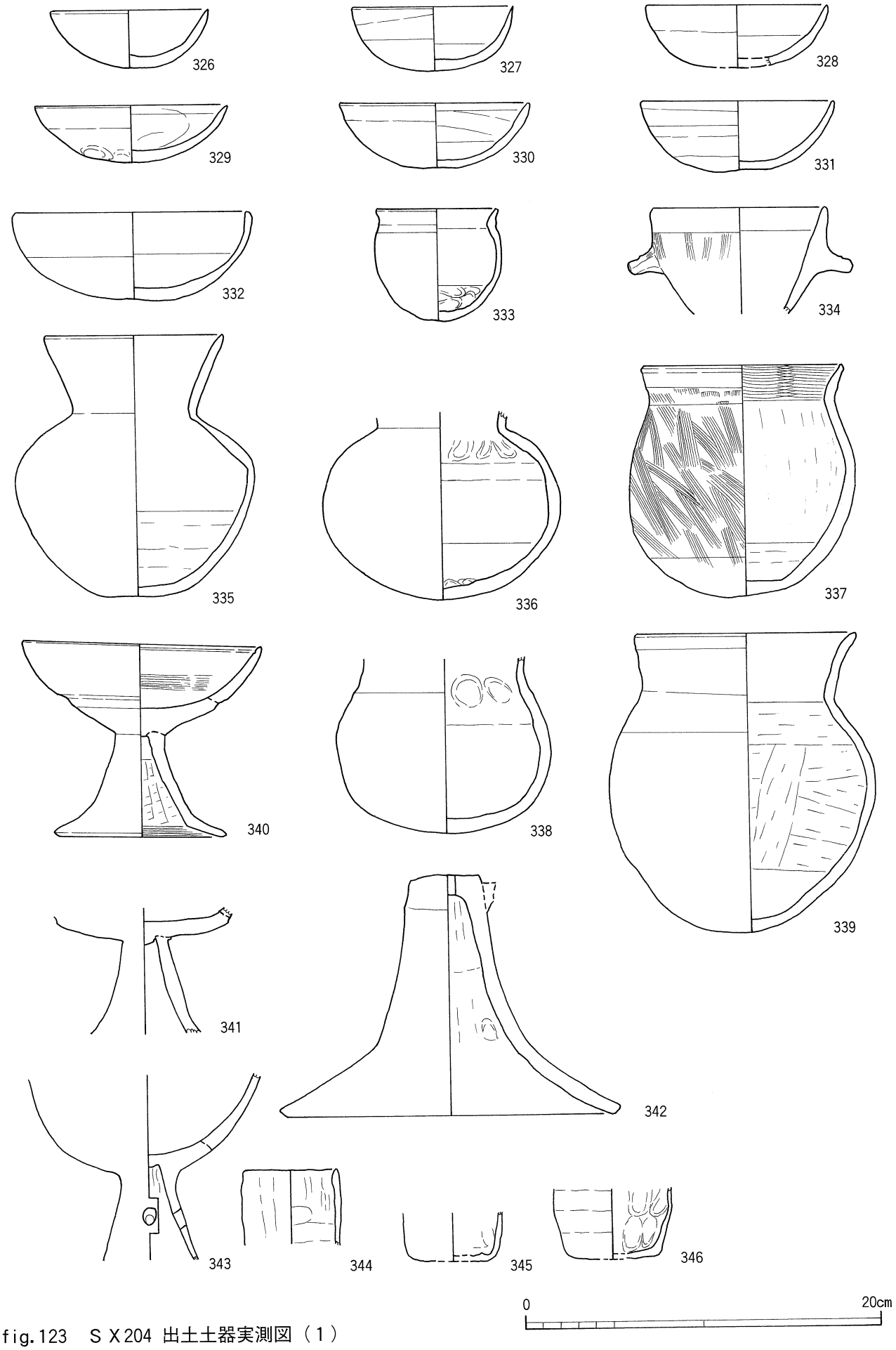


fig.123　ＳＸ204 出土土器実測図（１）

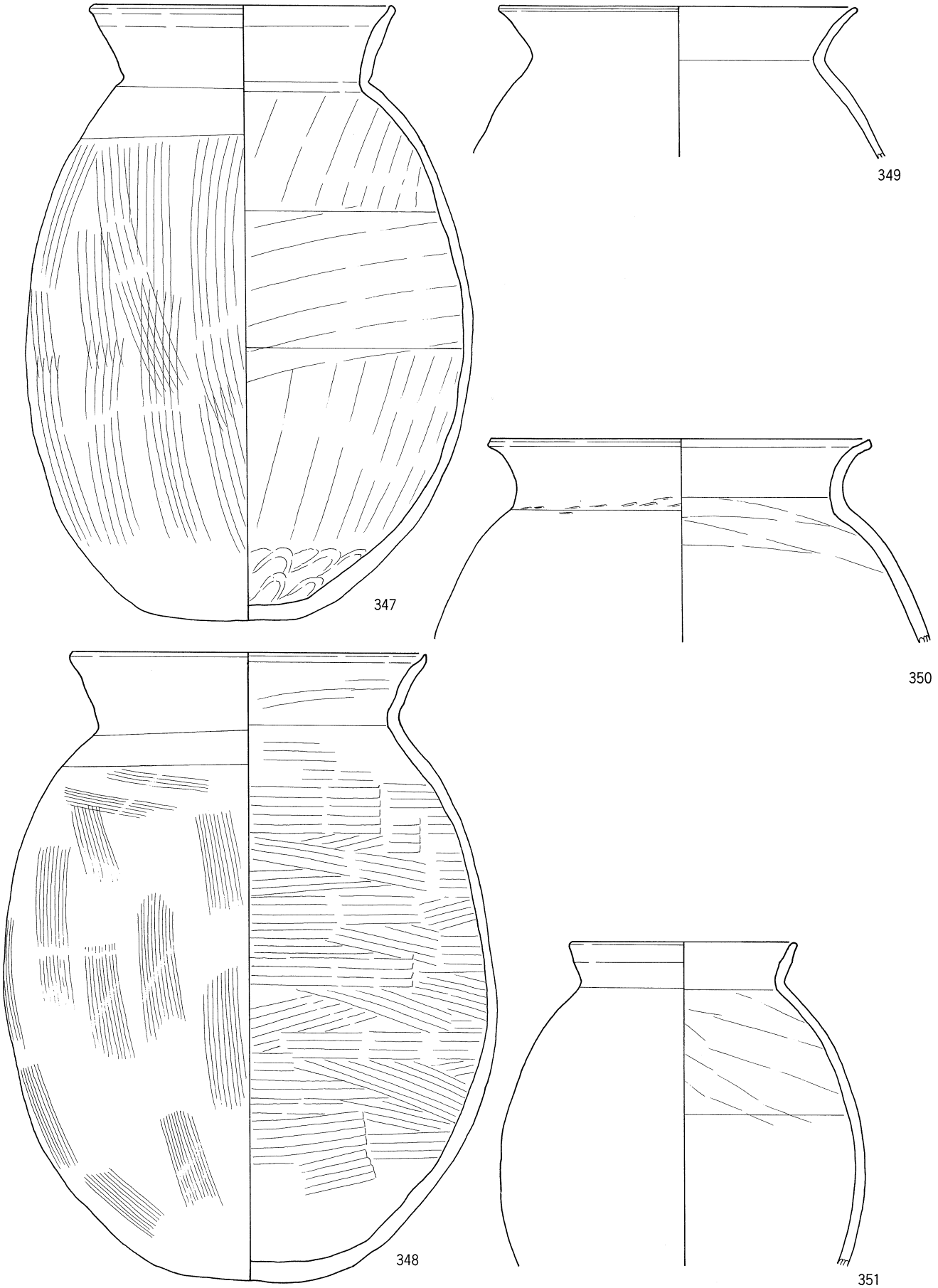


fig.124　ＳＸ204 出土土器実測図（２）

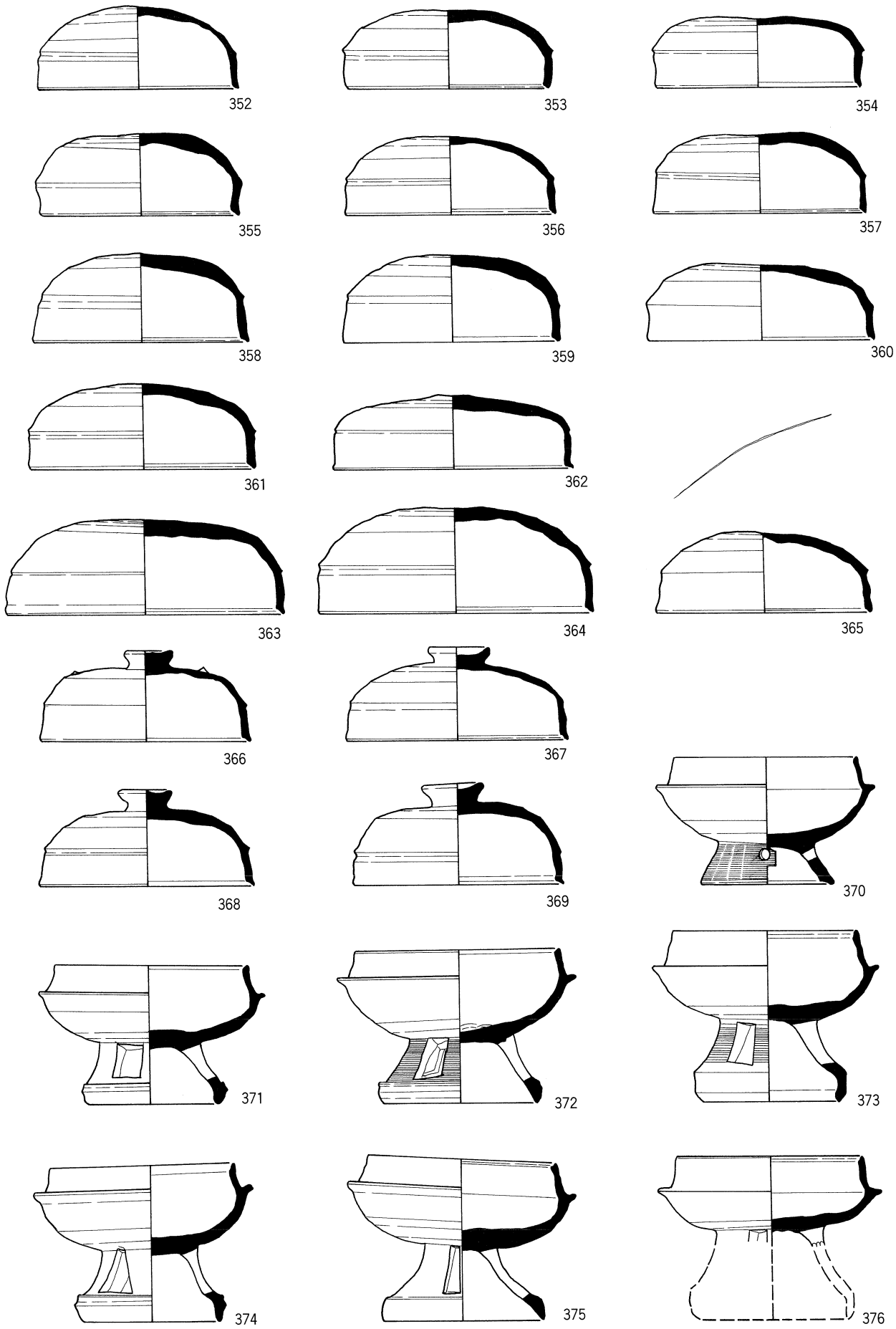


fig.125　ＳＸ204 出土土器実測図（３）

0　20cm

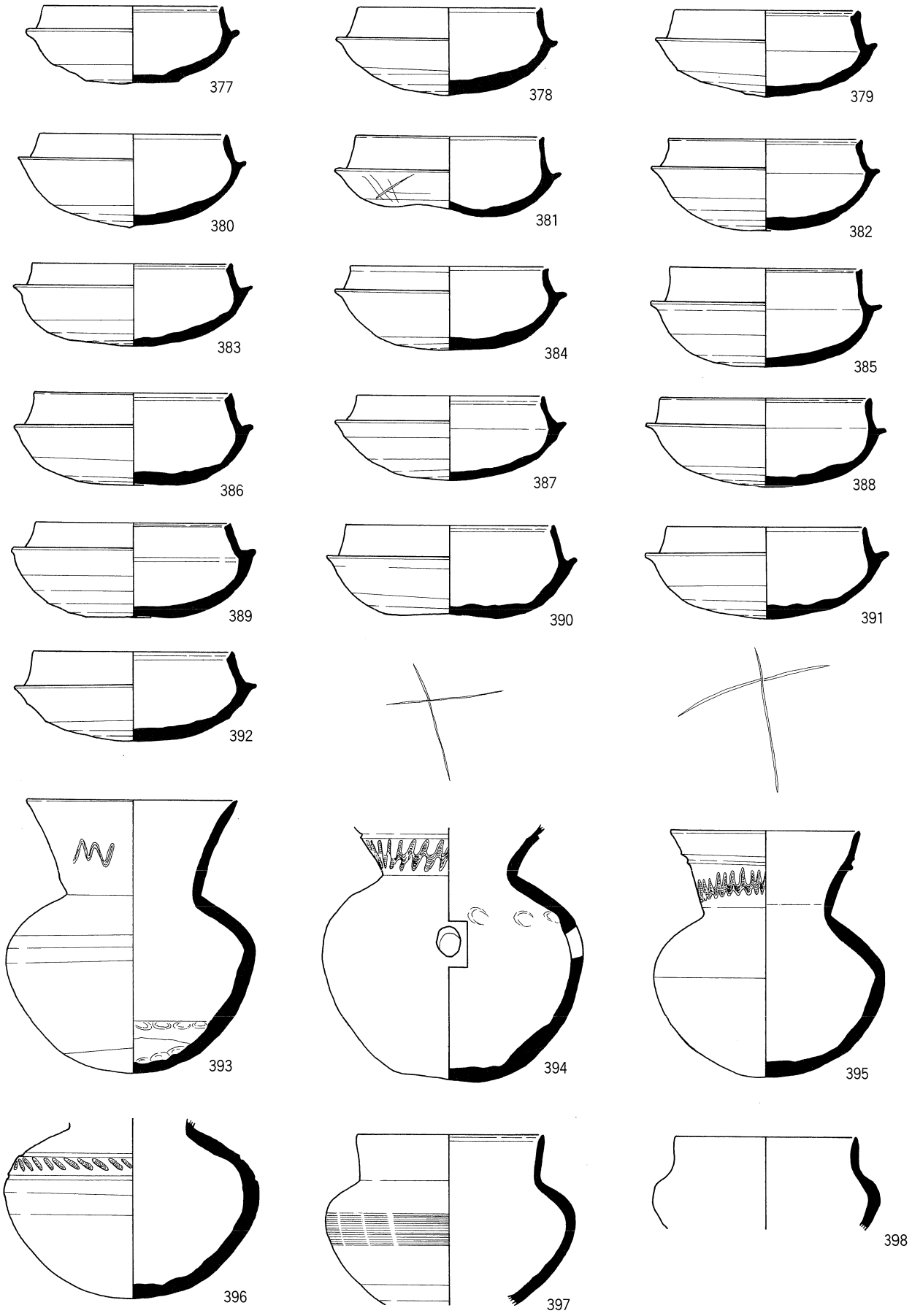


fig.126　ＳＸ204 出土土器実測図（４）

0　20cm

（340～343）は高坏である。完形に復元できるのは（340）のみである。高坏は残存状況が悪く調整は不明なところが多い。（340）の坏部内面はハケ調整後ナデ、外面はナデである。口縁端部内面にはわずかに凹線がある。脚部外面はナデ、脚部内面はケズリを施す。（341）は脚部内面はケズリで、その他の調整はナデである。

（342）は大型の高坏脚部で、脚部底径は18.2cmに復元できる。脚部は少し屈曲気味に拡がる。脚上端には坏部の粘土が残存する。（343）は半球に近い坏部をもつ。

（344～346）は製塩土器である。（344）は口縁部にはシボリ目が残る。いずれも粘土紐の接合痕が残り、指オサエと粗いナデで仕上げる。

（347・348）は粗いハケ調整を粗くナデを施し、口縁端部の仕上げ方などよく似たものである。底部はやや平らである。（349）は内外面とも調整不明である。（350）は頸部外面に工具痕が残る。外面は縦方向、内面は斜め方向のナデである。（351）は口縁部はやや短く立ち上がり気味である。体部外面は不定方向、内面は上半斜め方向、下半横方向のナデを施す。

須恵器　（352～364）は坏蓋で、法量に歴然とした差がある。（354）は口径11.2cm、高さ3.9cmで器高4.0cmを測る。（355）は口径10.8cm、高さ4.4cmで、口径11.0cmを測る。（365）は口径15.2cm、高さ5.2cm、（364）は口径15.0cm、高さ5.9cmである。坏身については図示したように坏蓋ほどの法量の差はあまりない。（365）には天井部に１条のヘラ描きがある。全体に天井部は丸く、稜はそれほど鋭くない。

（366～369）は有蓋高坏蓋である。中央がへこむツマミをもつ。法量の差はあまりない。

（370～376）は有蓋高坏である。（370）はやや低い脚部をもち、円形のスカシは１箇所のみである。脚外面にはカキ目のような強いナデを施す。（372）は坏部から脚部にかけての外面に、赤色顔料が付着している。

（377～392）は坏身で、たちあがりはほぼ全体に内傾する。（381・390・391）にヘラ描きがある。

（393）は壺である。口縁部外面には波状文が途切れたように描かれる。棒状のもので施文したと思われる。胴部最大径の部分にはケズリの痕跡が残るが、内外面ともにナデで仕上げる。（394）は大型瓹である。口縁部は欠損している。（339）と同様に遺物内から24個の臼玉が検出された。（395）は内外面ともにナデで仕上げる。（396）は大型瓹であろうか。櫛描列点文を沈線の間に施す。（397・398）は短頸壺である。（397）の体部はカキ目とナデ調整で、下半はケズリである。

（399～401）は無蓋高坏である。（399）は長方形３方スカシ、（401）は２条ほどの櫛描波状文をもつ。胎土には砂粒を多く含む。

（402～404）は高坏脚部で、（403・404）は低い円形３方スカシを施す。

（405）は器台で３条の沈線の間にスカシを施し、ヘラ描直線文で埋める。長方形４方スカシで、縦に直線に並ぶものである。

（406・407）の口縁部の稜は鈍い。頸部にわずかにタタキが残るが、ほとんどナデで消す。

須恵器は新旧の要素があり、ＴＫ47型式からＭＴ15型式にかけての時期が考えられる。

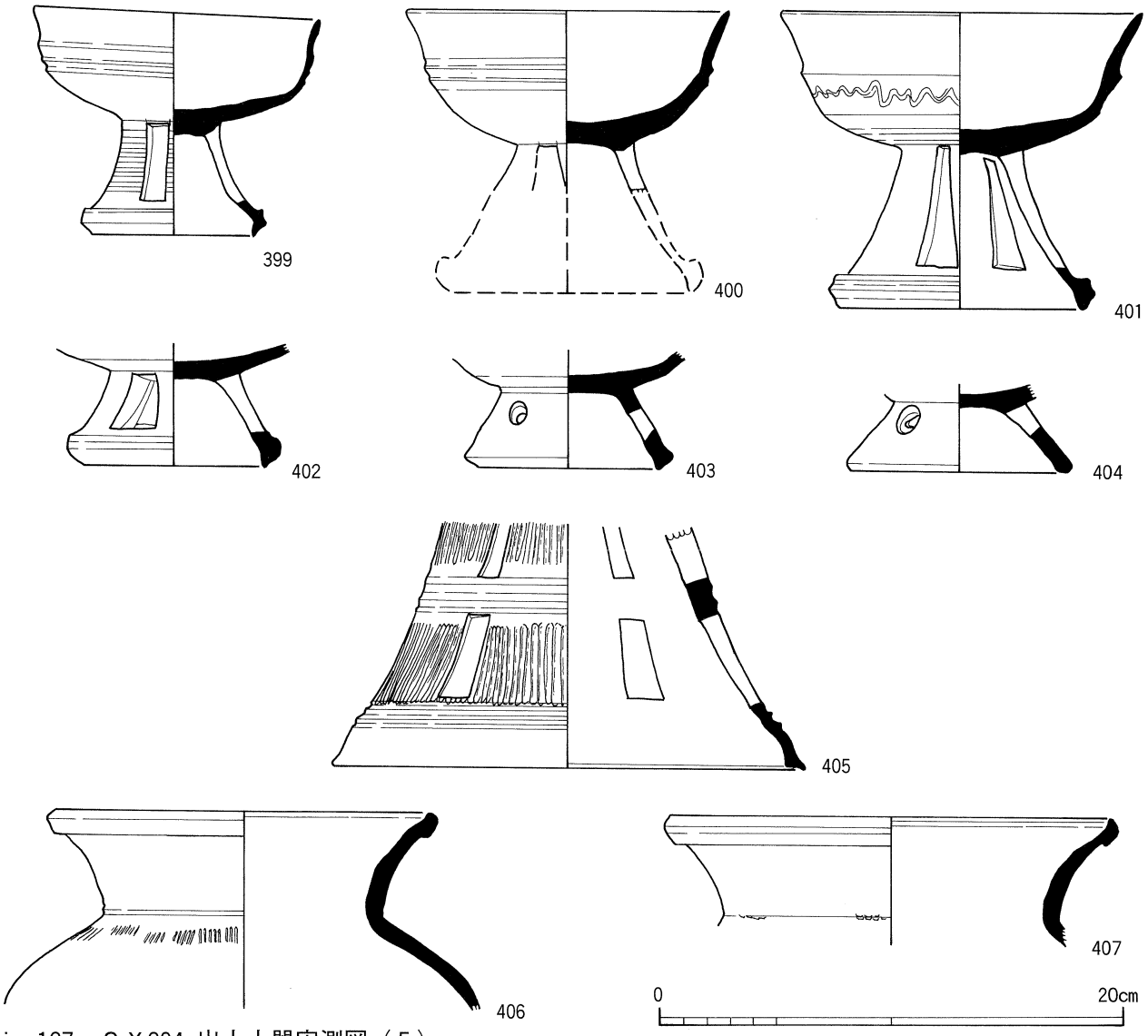


fig.127　ＳＸ204 出土土器実測図（５）

石製品　(408) は線刻穿孔滑石製品と仮に呼称するものである。遺構の北東部の２カ所で出土したものが接合した。破砕して投棄した可能性も考えられる。

側面には線刻をもち、下辺は鋭角に刃をもつように研磨する。上辺は丁寧に平らでやや弧を描くよう仕上げる。破断されていない一方の端部は魚の口のような切れ込みがある。上辺から下辺に穿孔されている。たとえば三日月状に復元すれば、一対の孔によって縣垂して用いたものではないかと思われる。いずれにせよ現状では類例が見当たらない。

(409) は形状より剣形石製品としたものである。上面・下面のほかに側面にも研磨痕がある。

(410) は穿孔手持砥石と呼称すべきものであろうか。６面とも砥石としての面をもつ。白い石で、比重は2.222を示し、火成岩と考えられる。

(411・412) は砥石である。(411) は図左側に示した面のみを使用している。石材は砂岩と考えられる。(412) は４面の使用が認められる。側面には敲打痕もしくは被敲打痕が観察される。(口野)

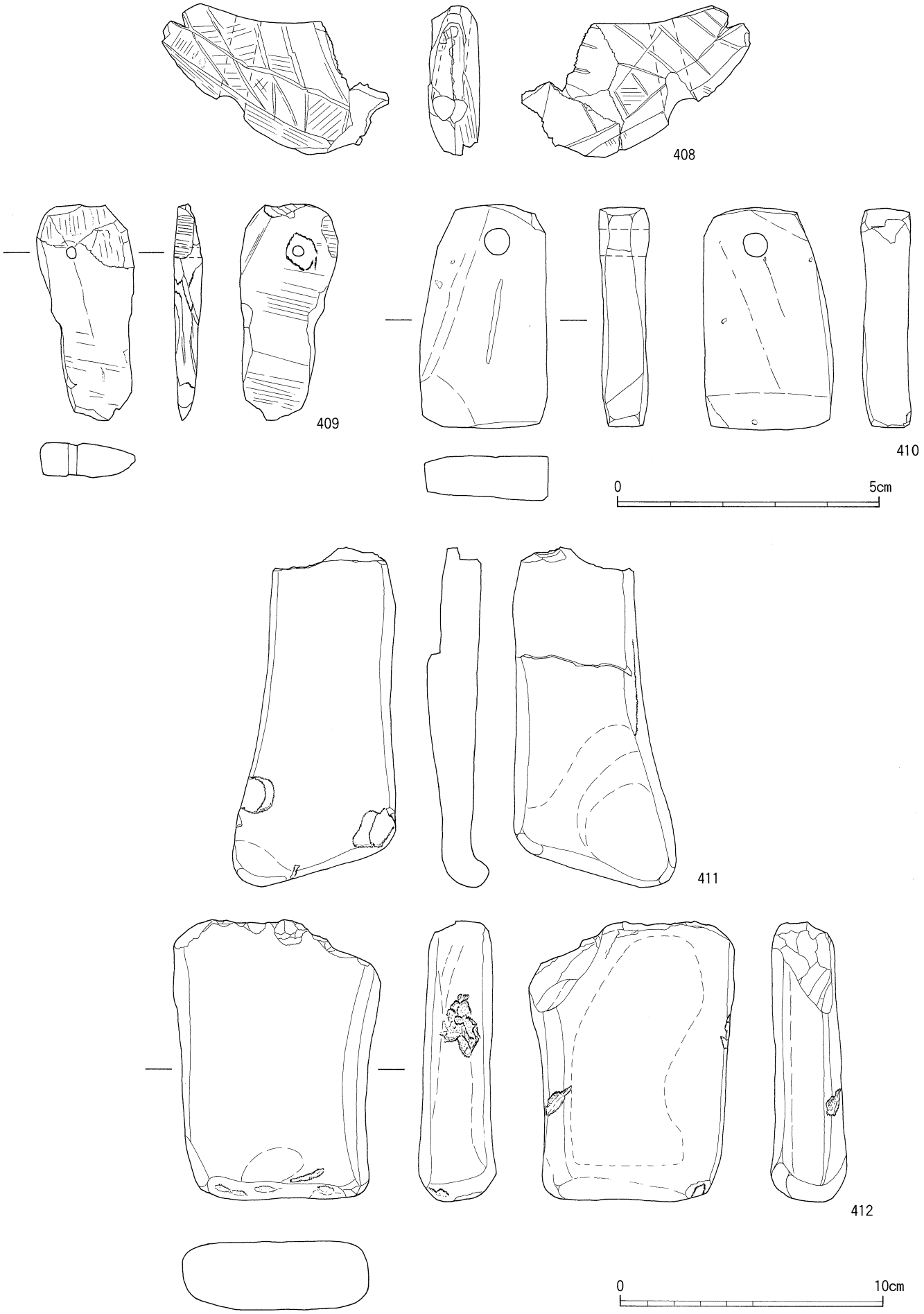


fig.128　ＳＸ204 出土石製品実測図

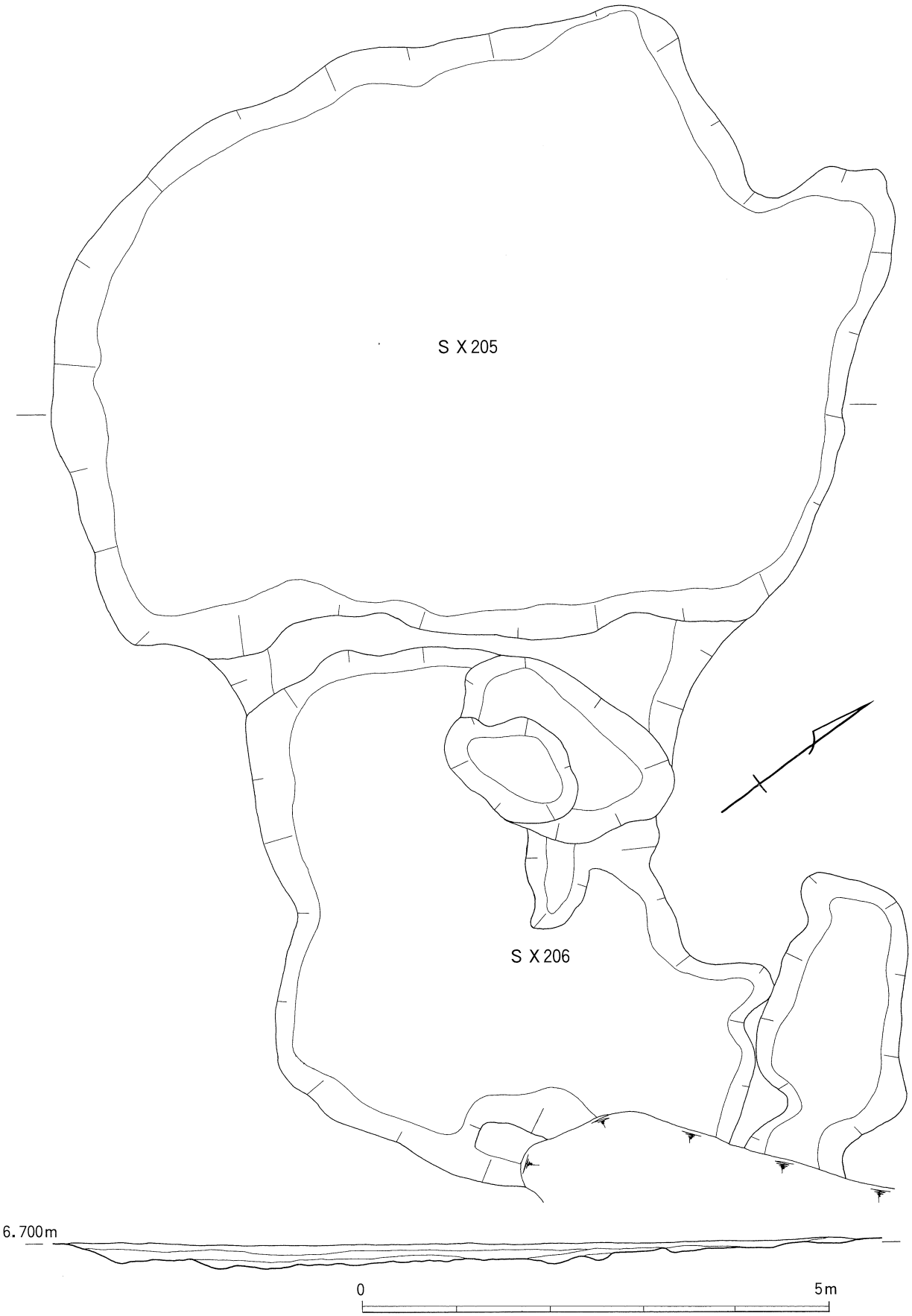


fig.129　S X 205・206 平面・断面図

ＳＸ205　　ＳＸ204の東側に営まれた長径8.6m、短径6.4m、深さ0.25mの不整形の落ち込みである。床面には細かい凹凸が顕著ではあるものの、周壁は緩やかなたちあがりで、当初竪穴住居が想定されたが、床面には柱穴・周壁溝は確認できていない。上屋構造は全く不明である。埋土は３層に分けられ、下層から順に暗灰色～淡乳灰色シルト混じり極細砂～粗砂、淡乳灰色シルト質極細砂、黒褐色極細砂質シルトである。

出土遺物には、須恵器・土師器のほか、管玉・ガラス小玉・臼玉などの玉製品に加え、碧玉の剥片や滑石製臼玉の未製品・滑石原石などが出土している。柱穴が全く確認されていないが、出土遺物の内容からみて、玉製品の工房址の可能性を指摘しておきたい。

(414) は土師器のミニチュア壺で、口径6.4cm、体部最大径7.5cm、器高6.7cm。(415) は口径14.1cm、残存高8.7cmの甕。口縁部は単純に外反し、丸く収める。(416) は甑で、復元径25.0cm、残存高22.0cm。口縁部は外上方へ折り曲げた後上下に若干拡張する。把手は体部に挿入されており、指頭圧痕で仕上げられる。(417) は須恵器坏身で、口径12.4cm、器高4.9cm。たちあがりは内傾して斜め上方に長く延び、端部は内傾する鈍い凹状を呈する。(418) は把手を欠損する把手付埦で、口径9.0cm、器高6.7cm。底体部下半は不整方向静止ヘラケズリで仕上げられ、上半にはカキ目がわずかに施される。中位には凹線が１条巡り、口縁部は内湾気味に上方へ延び、端部は丸く収める。(419) は口径16.5cmの中型甕の口縁部。口縁部外面中位に凹線を巡らし、二重口縁様に仕上げる。端部はやや内傾する凹面をもつ。体部外面はカキ目調整、内面は円弧状あて具痕が明瞭である。

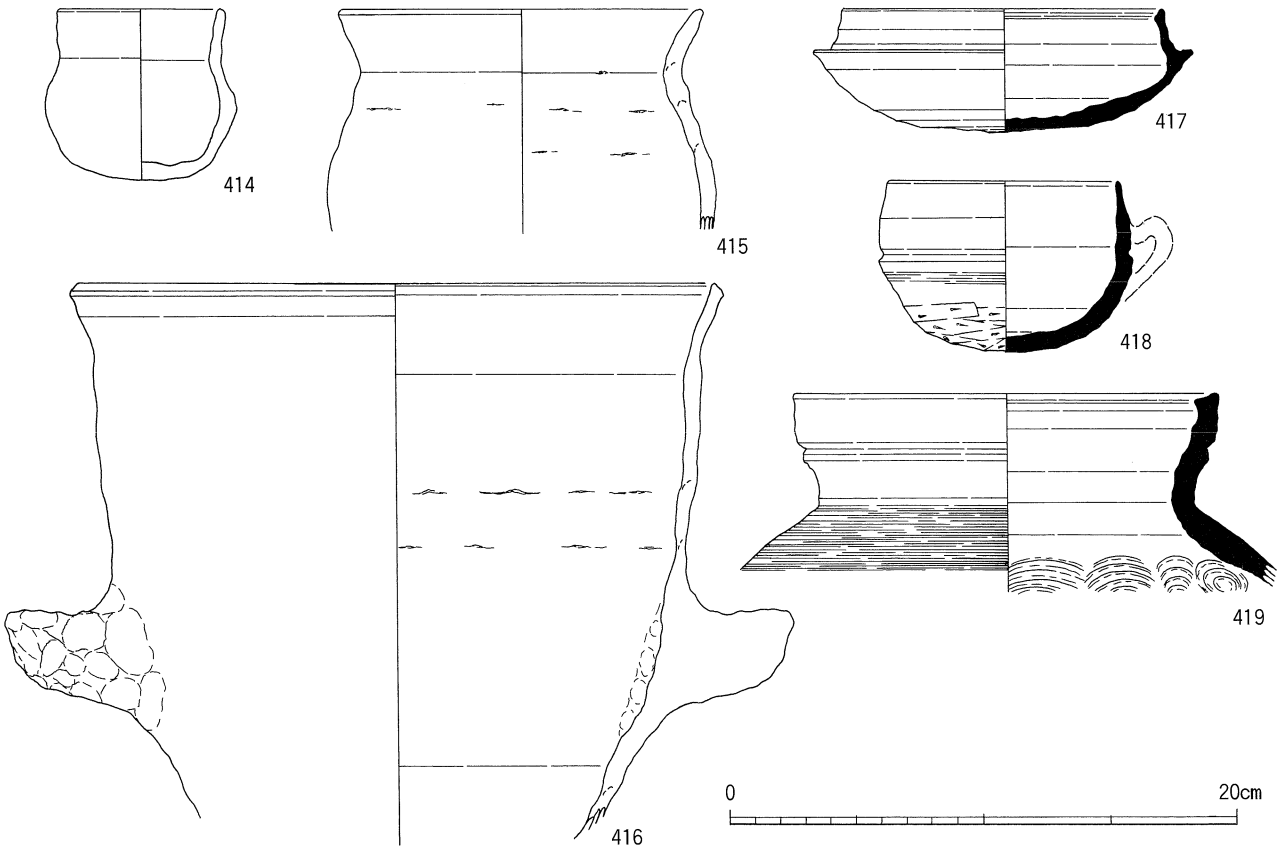


fig.130　ＳＸ205 出土土器実測図

(455) は濁スカイブルーのガラス小玉で、直径6㎜、厚さ3㎜、孔径2㎜で、わずかに気泡が観察できる。(421) は淡褐色の石材で製作された管玉の破片。直径6㎜、残存長10㎜、孔径3㎜。(422・423) は双孔円盤で、(422) は直径2.25㎝で、側面も含め研磨によって平滑に仕上げられている。なお、孔穿孔時の孔ずれが認められる。(424) は勾玉と考えている。長さ4.0㎝、幅1.5㎝で、表面は研磨によって平滑に仕上げられるが、側面は研磨が十分には施されていない。(425～428) は勾玉あるいは剣形模造品の未製品と考えている。一部研磨痕が認められるが、自然面を残すものが多い。(429～431) は臼玉未製品で、(429・430) では穿孔が完了しているが、(431) では穿孔途中で破損したのか、貫通していない。(432) は土玉で、直径7㎜、長さ8㎜で、直径1㎜の貫通孔をもつ。

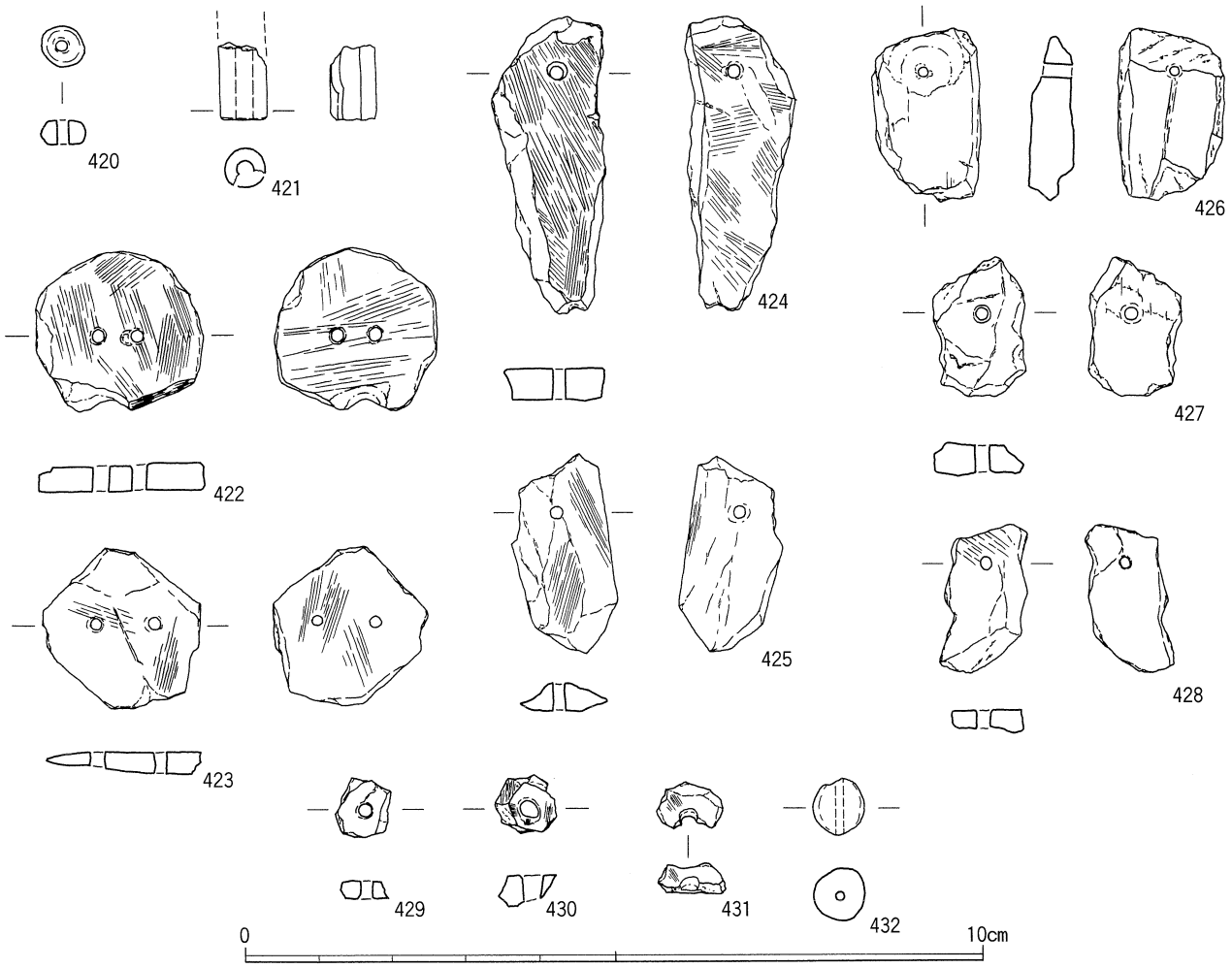


fig.131　ＳＸ205 出土玉類実測図

ＳＸ206　　ＳＸ205の東側に隣接して確認された落ち込みで、長径5.78m、短径4.52m、最大深さ0.22mである。底面の北辺には、長径2.46m、短径1.65m、最大深さ0.05mの楕円形の土坑が伴う。東辺は攪乱のため、削平されている。埋土は暗褐色シルト混じり細砂を主体とする。出土遺物には土師器・須恵器と滑石製の玉製品がある。

(433) は須恵器坏蓋で、口径12.4㎝、器高5.0㎝。口縁端部は丸く収め、内面は内傾する鋭い凹状を呈する。稜は鋭く突出し、天井部は高く、やや丸みをもつ。(434) は高坏蓋で、口径12.3㎝、器高5.3㎝。口縁端部を強く外反させ、内面は鋭い凹状を呈する。稜は

鈍く、沈線を伴う。天井部は丸みをもって低い。(435) は有蓋高坏で、口径9.6cm、底径7.6cm、器高9.6cm。たちあがりは内傾してまっすぐ延び、端部は段状に近い鈍い凹状である。底体部は深く、丸みをもつ。脚端部は強く内湾するもので、端部は丸く収める。スカシは３方向で、外面にはカキ目調整が施される。

(436) は淡黄緑灰色の双孔円盤で、約２／３を欠損する。表面の研磨が明瞭。(437) は暗緑灰色の勾玉模造品で、長さ3.0cm、幅1.4cm、厚さ４mm。左面と側面頭部・尾部は研磨によって平滑に仕上げられるが、その他は自然面を残す。(438) は剣形模造品の未製品か。(439・440) は直径８mmの穿孔前の臼玉未製品で、(440) では側面の細かい研磨痕が明瞭である。厚さ5.5mm。(441) では穿孔は施されているが、側面の研磨は一部で観察できる程度である。

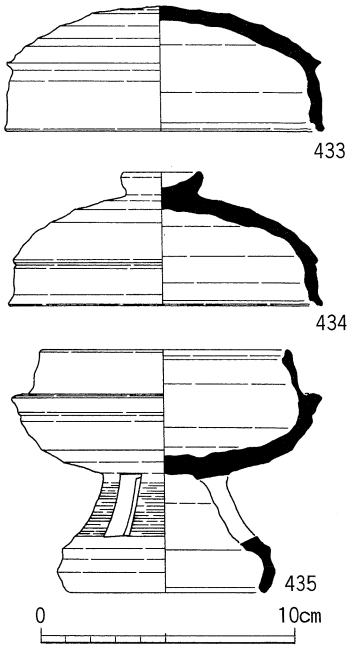


fig.132　ＳＸ206 出土土器実測図

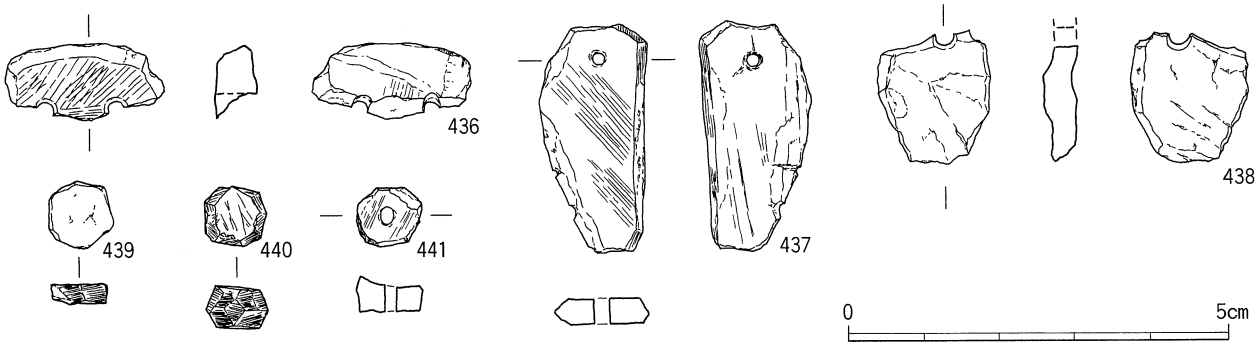


fig.133　ＳＸ206 出土玉類実測図

ＳＸ207　区画溝の内側で、掘立柱建物群の西側とＳＤ204の東側の空間を埋めるように確認された規模の大きな落ち込みで、長径14.8m、短径7.2mに及び、最大深さは約20cmである。東側の肩部は概して明確に落ちるが、西側では不明瞭で、緩やかに落ちる。底面は比較的なだらかで、埋土が暗褐色系のシルトを主体としており、澱みのような遺構であったと考えられる。

(442) は土師器の小型丸底壺で、口径8.6cm、体部最大径10.2cm、器高8.4cm。やや偏平な球形の体部から斜め上方に口縁部が短く延びる。体部外面の調整は横方向のヘラ磨き。口縁部外面は縦方向のヘラ磨きが若干みられる。(443) は高坏脚部で、底径10.3cm。外面が縦方向のヘラ磨き調整の脚柱部から大きく開く端部をもつ。内面はヘラケズリである。

(444～447) は須恵器坏蓋で、法量・形態とも多様である。(444) は口径12.1cm、器高4.8cmで、まっすぐ延びる口縁部の端部は内傾する鋭い凹状である。稜は断面三角形で鋭く突出し、天井部は高く、丸みをもつ。回転ヘラケズリの範囲は約２／３である。(447) は口径12.9cm、器高5.3cmで、天井部外面ほぼ全面にヘラ記号が刻まれる。(448) も坏蓋で、口径15.6cm、器高5.3cm。口縁端部は段状に仕上げられ、稜は甘く、凹線を伴う程度。

天井部は低く、平らに近い。(449) は坏身で、口径14.0cm、器高5.7cm。たちあがりは内傾して延び、端部は小さな平坦面をもつ。底体部は浅く、やや丸みをもつ。底体部内面中央には同心円文のアテ具痕があり、受部には別個体の熔着痕が残るほか、底体部外面には火だすき痕が明瞭である。(450) は高坏蓋で、口径12.1cm、器高5.2cmで、偏平なつまみをもち、稜は甘い。(451) は有蓋高坏で、口径9.6cm、底径7.0cm、器高7.9cm。たちあがり端部はつまみあげて鋭く収める。脚部は短く、外面がカキ目調整である。(452) はつまみを欠損する高坏蓋で、口径11.9cm。口縁端部は丸く収め、凹線が巡る。(453) は口径17.6cmの中型甕の口縁部で、端部を拡張し、大きな端面をつくり出す。(454) は口径12.6cmの直口壺の口縁部で、中位には上下に鈍い突帯を巡らせた文様帯をもち、櫛描波状文で飾る。(455) も壺で、体部最大径15.0cm、残存高13.4cm。算盤玉形の体部外面の２／３はカキ目調整である。

(456) は器台で、大半はＳＸ207 より出土しているが、ＳＤ204、ＳＸ204・210・212

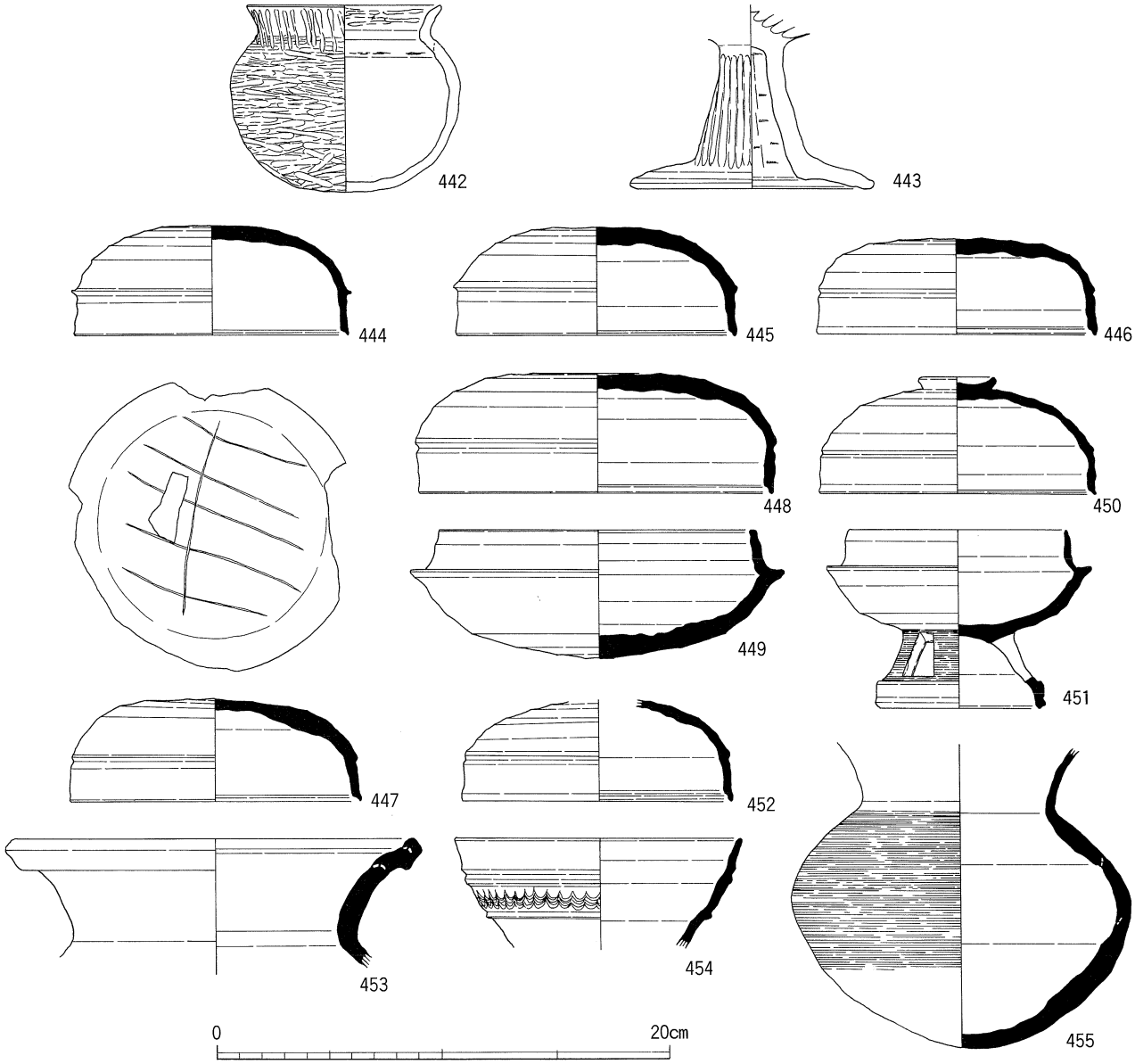


fig.134　ＳＸ207 出土土器実測図（１）

から出土の破片が接合している。坏部径34.6cm、脚部底径22.2cm、復元高33.2cm。坏部は緩やかに外上方へ延びるもので、外面下半は横位の格子風叩きで、突帯を有した後８条１帯の櫛描波状文を３段に施し、さらに３条の突帯を有した後、やや外傾し、平坦面をもつ口縁端部に到る。脚部は中位をわずかに欠損する。基部に甘い突帯を有した後斜め下方に延び、端部は外方へ若干拡張される。スカシは５方向で、基部より順に長方形、長方形、三角形で、直線配置である。また、基部から３帯の文様帯が形成され、いずれも８条１帯の櫛描波状文が４段施文されている。

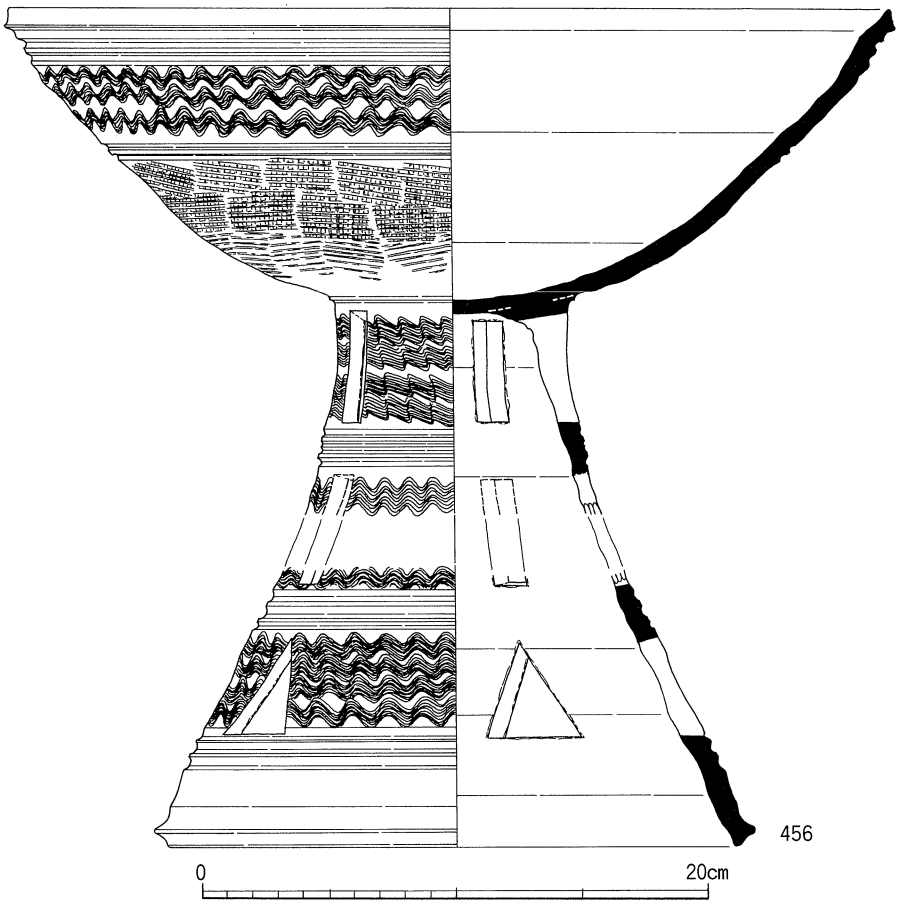


fig.135　ＳＸ207 出土土器実測図（２）

ＳＸ208　　ＳＸ207の北辺で確認された落ち込みで、長径9.8m、短径5.2m、最大深さ0.21mの長楕円形の落ち込みで、中央部には底面を抜く攪乱が南北方向にある。埋土は暗褐色シルト質極細砂を主としている。出土遺物には、土師器・須恵器がある。

（457）は須恵器の無蓋高坏で、口径13.4cm、底径7.8cm、器高10.0cmである。坏部は丸みをもった底部から直立気味に延びる口縁部をもち、中位の鈍い突帯で形成された文様帯を、櫛描波状文で飾る。脚部は緩やかに外下方へ延び、端部はやや内湾しながら丸く収める。スカシは３方向である。外面では坏底部から脚部にかけての外面の調整はカキ目が施される。

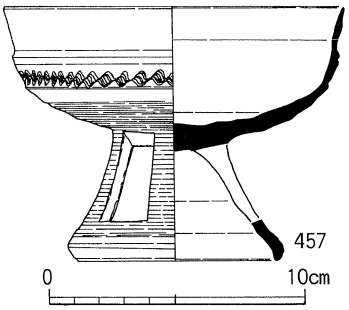


fig.136　ＳＸ208 出土土器実測図

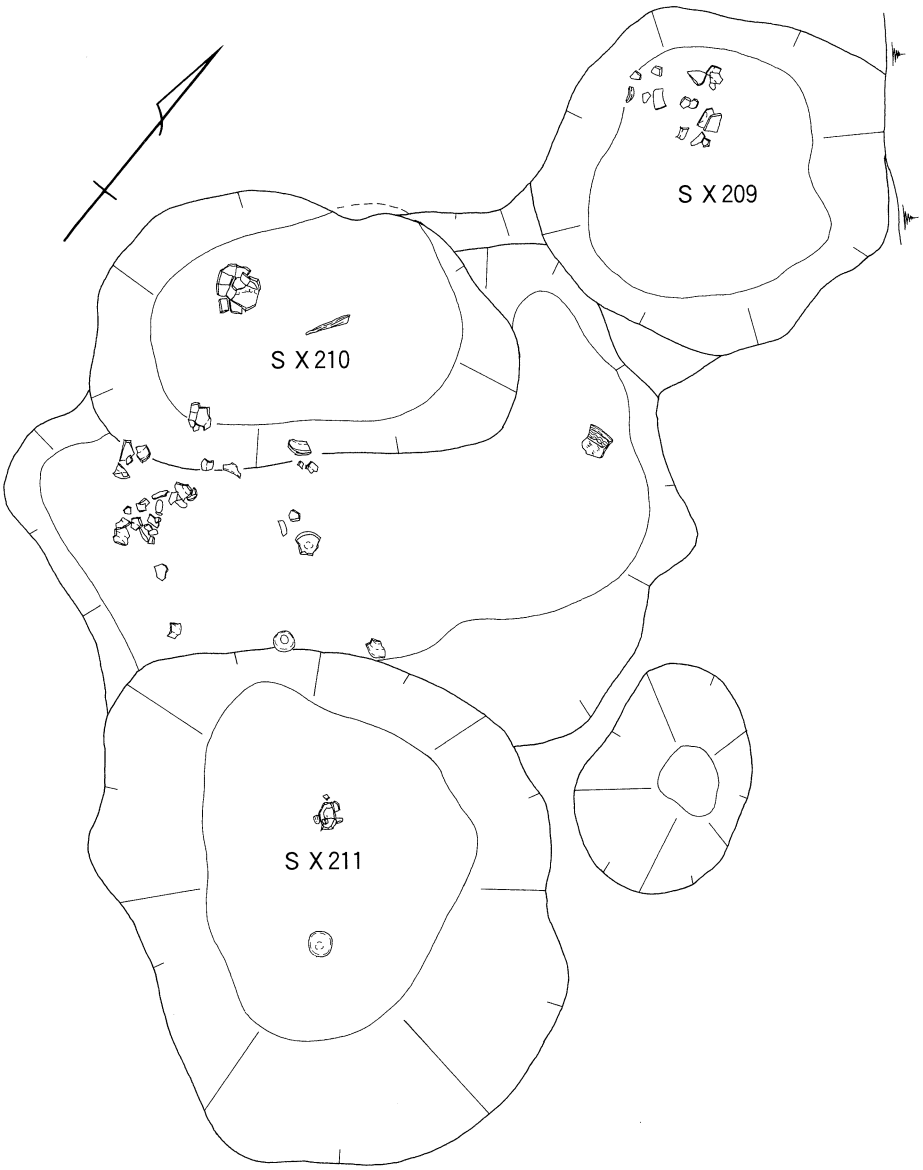


fig.137
S X209・210・211 平面図

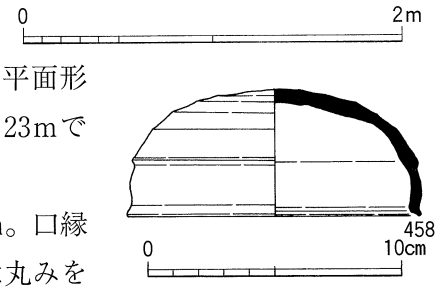


fig.138　S X209 出土土器実測図

S X209　　S X207の西辺で確認された落ち込みのひとつで、平面形態は楕円形で、長径2.19m、短径1.73m、最大深さ0.23mである。埋土は暗褐色シルト混じり細砂である。

(458) は須恵器の坏蓋で、口径11.4cm、器高5.0cm。口縁端部は内傾する鈍い凹状で、稜は鈍い。高い天井部は丸みをもつ。

S X210　　S X207の西辺で確認された落ち込みのひとつで、平面形態は楕円形で、長径2.24m、短径1.46m、深さ0.45mである。さらに底面の中央には直径0.51mのピットがあり、頭が南へ倒れた状態で、長さ25cmの割木材が確認されている。埋土は上層が暗褐色シルト混じり細砂で、下層は黄色粘土塊を含む淡黒灰色シルトである。

(459) は土師器甕で、口径12.4cm、体部最大径14.7cm、器高12.4cm。外面を縦刷毛調整するやや偏平な球形の体部から「く」字形に単純に外反する口縁部をもつ。

（460）は須恵器坏蓋で、口径15.0cm、器高5.1cm。口縁端部は丸みをもつ段状の仕上げで、稜は鈍く突出する。天井部は低く、平らに近い。（461）は坏身で、口径11.2cm、器高5.0cm。たちあがりは内傾してまっすぐ延び、端部は丸く収める。底体部は浅く、わずかに丸みをもつ。（462）は小形瓹で、口径11.2cm、体部最大径10.9cm、器高12.2cm。無花果形の体部の外面下半は静止ヘラケズリ調整。頸部は太くて短い。口縁部は突帯を有した後内湾気味に延び、端部は凹状の端面をもつ。

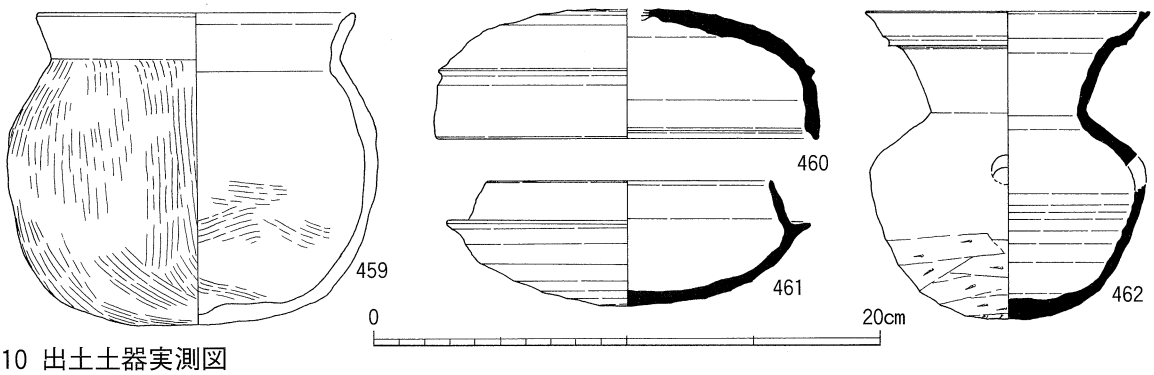


fig.139　ＳＸ210 出土土器実測図

ＳＸ211　　ＳＸ207の西辺で確認された落ち込みのひとつで、平面形態は不整な卵形で、坑壁はゆるやかなたちあがりである。長径2.82m、短径2.26m、深さ0.17m。埋土は暗褐色シルト混じり細砂である。

（463）は（459）と形態が類似する土師器の甕で、口径11.4cm、体部最大径13.0cm、器高11.2cm。下半を縦刷毛調整するやや偏平な球形の体部から「く」字形に外反する口縁部をもつ。

（464）は口縁部を欠損する須恵器の壺で、体部最大径11.6cm、残存高9.0cm。底部は丸みをもつが、中央部はくぼんでいる。

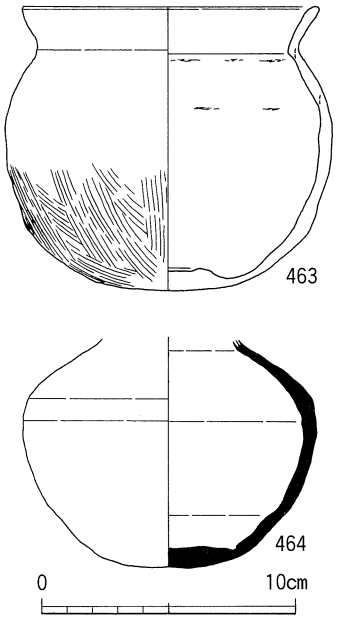


fig.140　ＳＸ211 出土土器実測図

ＳＸ212　　ＳＸ207の南西辺の中央付近で確認された歪な平面形の落ち込みで、長径3.15m、短径2.69m、深さ0.15mの底面に、さらに長径1.61m、短径0.89m、深さ0.19mの隅円長方形の土坑が掘り込まれる。埋土は下半層が暗褐色極細砂質シルトと淡褐灰色シルト質極細砂で、上層が暗褐色シルト質極細砂である。厳密には上半層はＳＸ207と共有するものかもしれない。出土遺物には完形品を含む多量の土師器・須恵器があり、北側から流れ込んだような状態で確認されている。

（465）は土師器甕で、口径13.1cm、体部最大径23.8cm、器高30.9cm。器壁が厚い丸底の卵形の体部に単純に外反する口縁部をもつ。体部内面の粘土紐接合痕が目立ち、ほかには体部の内外面の一部に刷毛調整がみられる。

（466）は甑で、口径27.2cm、残存高21.6cm。底部と牛角形の把手は欠損する。口縁部

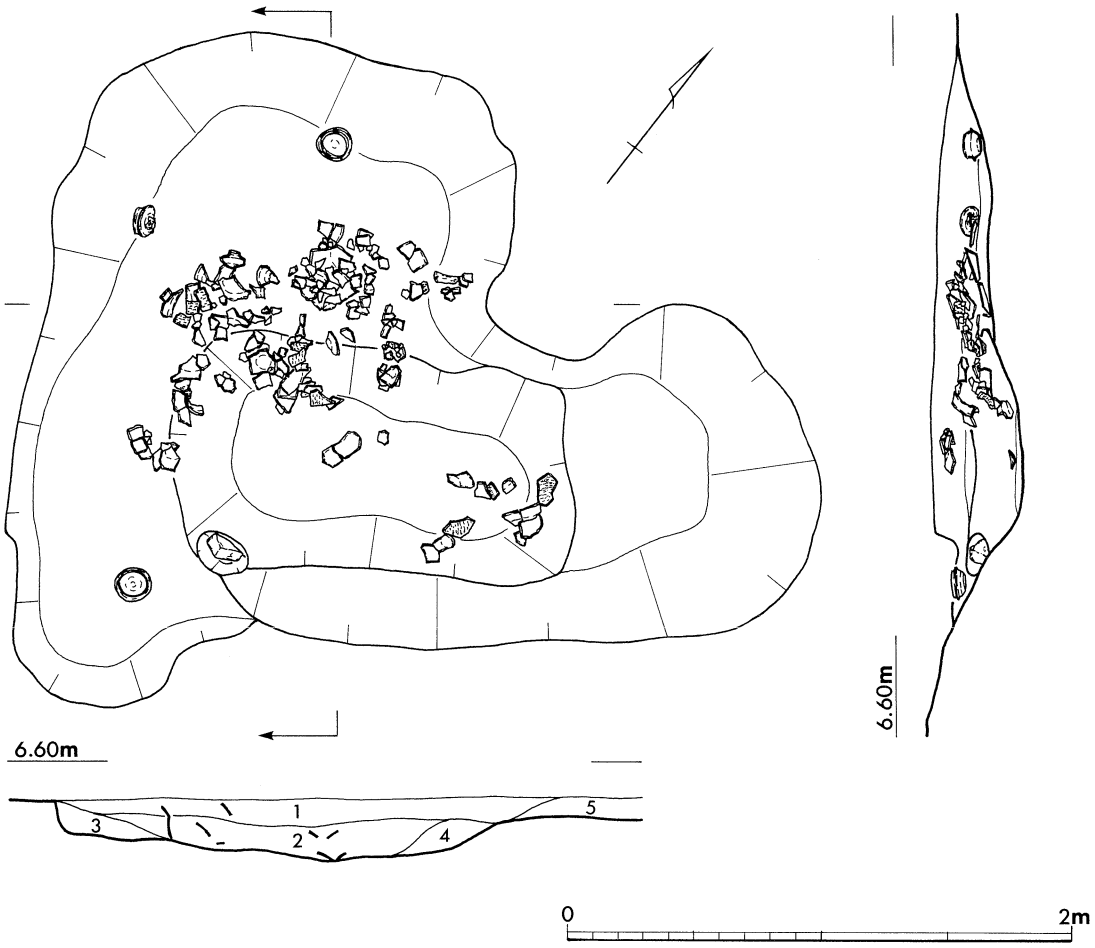


fig.141　ＳＸ212 平面・断面図

1．暗褐色シルト質極細砂
2．暗褐色極細砂質シルト
3．褐色シルト質極細砂
4．淡灰褐色シルト質極細砂
5．淡灰褐色シルト質極細砂

はわずかに外傾して延び、端部は凹面をもつ。内面の中位にヘラケズリが施される。

（467）は須恵器坏身で、口径10.7cm、器高4.4cm。やや内湾しながら延びるたちあがりの端部は内傾する平坦面である。底体部は浅く、平らに近い。（468）も坏身で、口径10.9cm、器高5.1cm。たちあがりが薄く仕上げられ、端部は丸みをもって仕上げられる。底体部は深く、丸みをもつ。受部が重厚なつくりである。（469）はつまみを欠損する高坏蓋で、口径12.0cm。口縁端部は内傾する鈍い凹状で、稜は沈線を伴う程度。（470）は脚部を欠損する有蓋高坏で、口径10.4cm。たちあがりは内傾して延び、端部は鋭く、段状を呈する。底体部は浅い。（471）は脚部を欠損する無蓋高坏で、口径13.6cm、残存高5.4cm。中位の凹線を伴う鈍い突帯から口縁部が斜上方に延びるもので、端部は丸く収める。（472）は口縁部が直立する短頸壺で、肩部が強く張っている。口径6.2cm、体部最大径12.0cm、残存高7.9cm。体部下半回転ヘラケズリ、上半はカキ目調整である。（473）は口径18.8cmの中型甕の口縁部。外面に「へ」の字のヘラ記号がみられる。

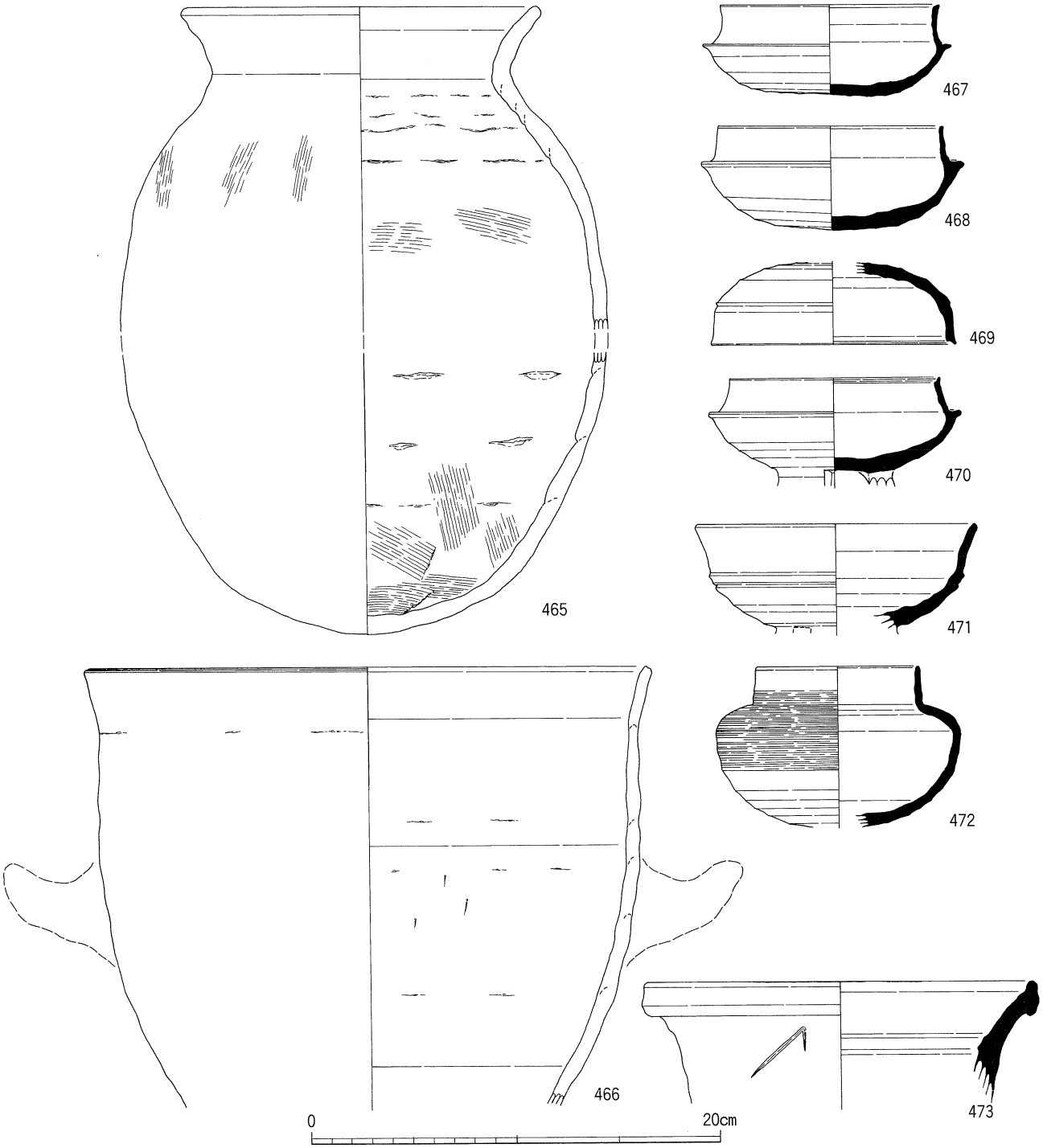


fig.142　ＳＸ212 出土土器実測図

ＳＸ213　　ＳＸ207とＳＤ204に挟まれた遺構面で確認された長径1.31m、短径1.12m、深さ0.08mの落ち込みで、南辺をＳＫ208・209に切られている。埋土は淡褐灰色シルト質極細砂である。遺物が出土していないため、時期は不明である。（山本・中居）

ＳＸ214　調査区南辺中央で検出された、東西約12m、南北14m以上、深さ0.6m、面積約170m²におよぶ大きな落ち込み状遺構である。中央では４層ほどの大きな堆積がみられ、いずれも砂泥の堆積で、水が流れたような痕跡はなく、湿地もしくは沼状の遺構と考えられる。

ＳＸ214の形状は、東辺は後世の攪乱によって不明瞭で、南辺は調査区外となる。北辺約６ｍと西辺約10ｍは直線的でほぼ直角に交わる。北辺から120°ほどの角度で一部ふくらむが東へ８ｍ、また西辺から120°ほどの角度で東へ５ｍ以上拡がり、多角形の形状を示すように思われる。各辺の周辺は浅く、遺構中央に向かって深くなる。遺構の底の状態は不整形で凹凸が多い。

ＳＸ214の周辺状況は、西側５ｍにはＳＤ204が、ＳＸ214の西辺に平行して走る。ＳＤ204のこの部分には、溝底に破砕して投棄されたような遺物が多く出土している。ＳＸ214とＳＤ204の間から北西部にかけて、ピットや土坑が散在する。ＳＸ214の北側からＳＤ209が唯一流れ込むように１条検出されている。幅約0.3m、深さ0.2mの溝状遺構である。耕作に伴う鋤溝とは区別される遺構である。ＳＤ209の北東側にはＳＢ228が、浅い落ち込み状遺構やピットを挟んで存在する。東側にはＳＥ206や土坑などが検出されている。ＳＥ206からは、剣形模造品や単孔盤・臼玉が出土している。

ＳＸ214の東側では、遺構検出時に東西3.5m、南北2.0mの楕円形に、ＳＸ214の中央部とは異なる堆積土が観察されたため、当初は別の遺構（旧遺構名ＳＤ115）として、遺物（540～543・544・545）の取り上げを行った。最終的にはＳＸ214の堆積土の一部であると判断した。

出土土器は、須恵器坏身・坏蓋・無蓋高坏・有蓋高坏・壺・甕・甑・器台、土師器埦・壺・甕・高坏・製塩土器などで、28ℓ入りコンテナに10個分出土した。土器は遺構内堆積土からほぼ満遍なく出土した。遺構の底面の窪みからは完形の須恵器壺・高坏、土師器壺などが出土した。

また、滑石製品がＳＸ214とその周辺から多数検出された。ＳＸ214の北辺の包含層・ＳＸ214に流れ込むＳＤ209やＳＸ214の堆積土上層から、臼玉・有孔円盤・剣形石製品・勾玉模造品、これらのほかに未製品・滑石原石が数多く検出された。

臼玉等の出土位置は大きくＳＸ214の西北部・ＳＤ209東側・ＳＸ214内北辺部・ＳＸ214内東北部（fig.143参照）の４群に集中している。臼玉等の出土位置はすべて浅い位置であった。有孔円盤などを置いたり、臼玉を撒いたりしたような結果なのであろうか。４群の石製品の組み合わせには規則性はなく、平面的に見る限り不規則な出土状況で玉類をばら撒いたようである。水辺での水を媒介としたマツリが想定されるのであろうか。また、これら石製品などのほかにＳＸ214内東北部では、鹿と考えられる獣歯が出土している。

須恵器　（475～487）は坏身である。（475）は口径11.0cm、高さ4.5cmと小さく、壺などの蓋の可能性が考えられる。全体に天井部は丸く、稜はやや鈍い。（487）はやや焼成が悪い。

（488～495）は有蓋高坏蓋である。（491・492）は中央部が膨らむ形状のツマミをもつ。（495）のそれは偏平である。（489）はケズリはわずかで、ナデを丁寧に施す。（494・495）は青灰色で焼成は良好である。

（496～499）は壺である。（496）は外面下半には格子状のタタキが残るが、内外面とも

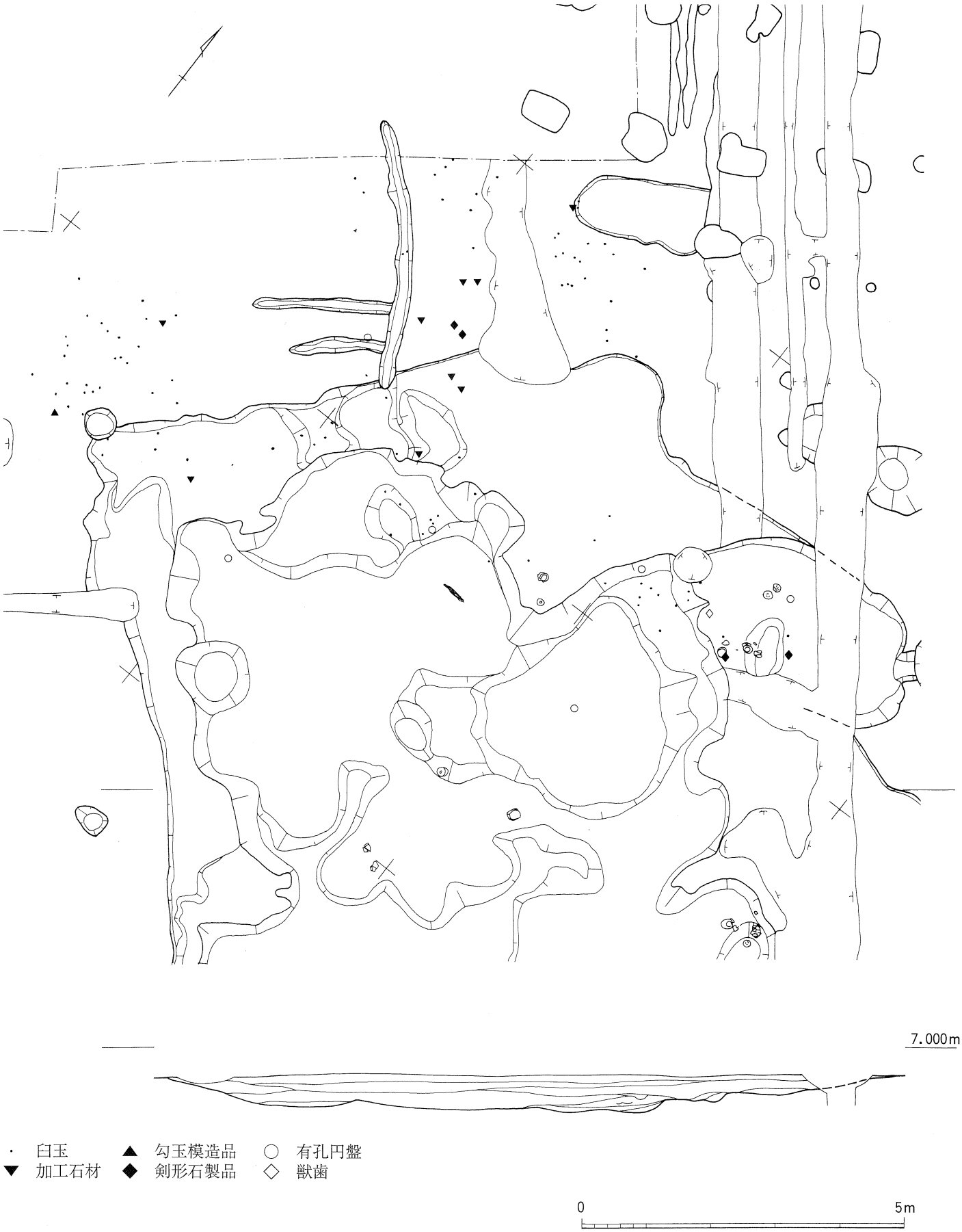


fig.143　ＳＸ214 周辺玉類出土状況平面・断面図

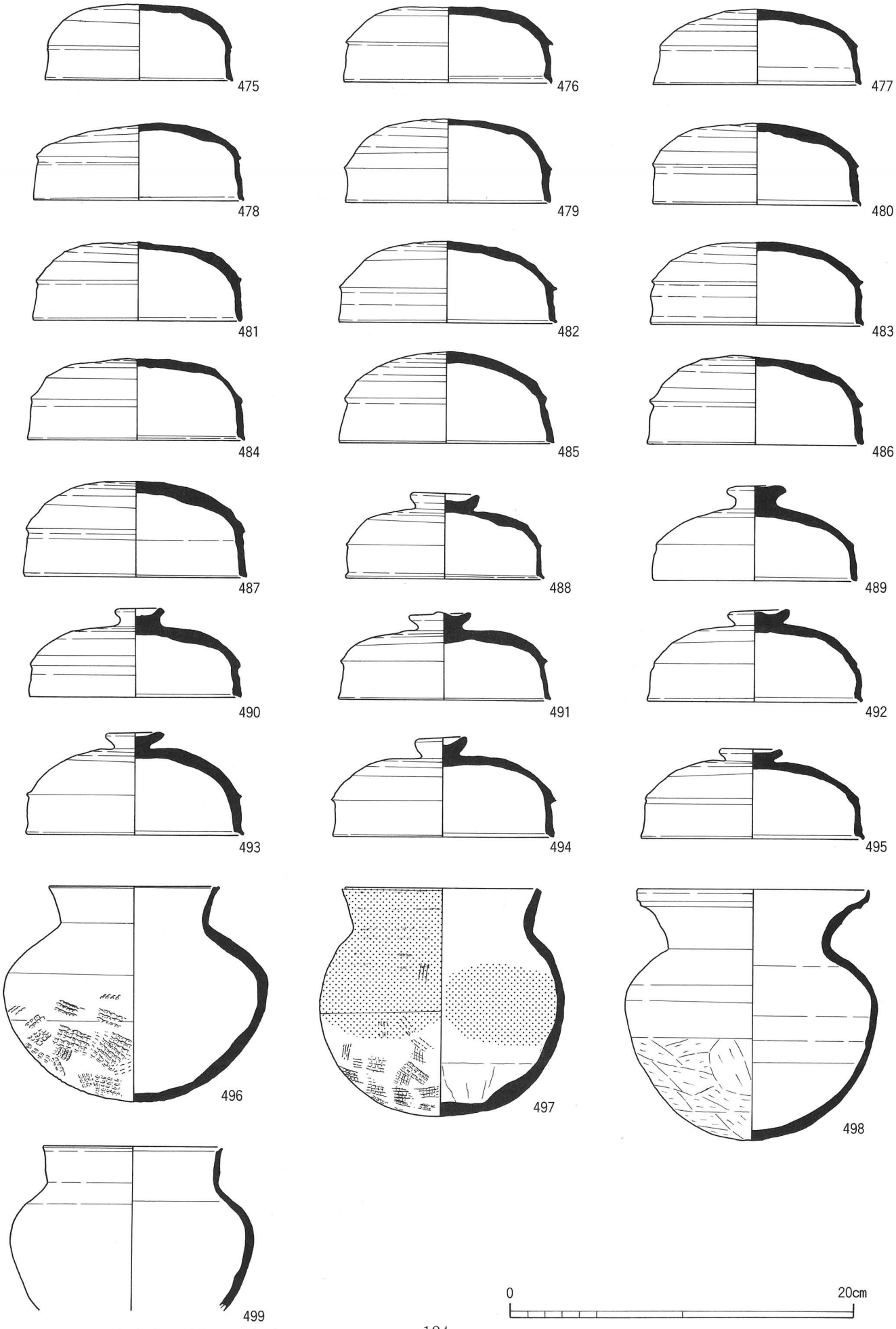


fig.144　ＳＸ214 出土土器実測図（１）

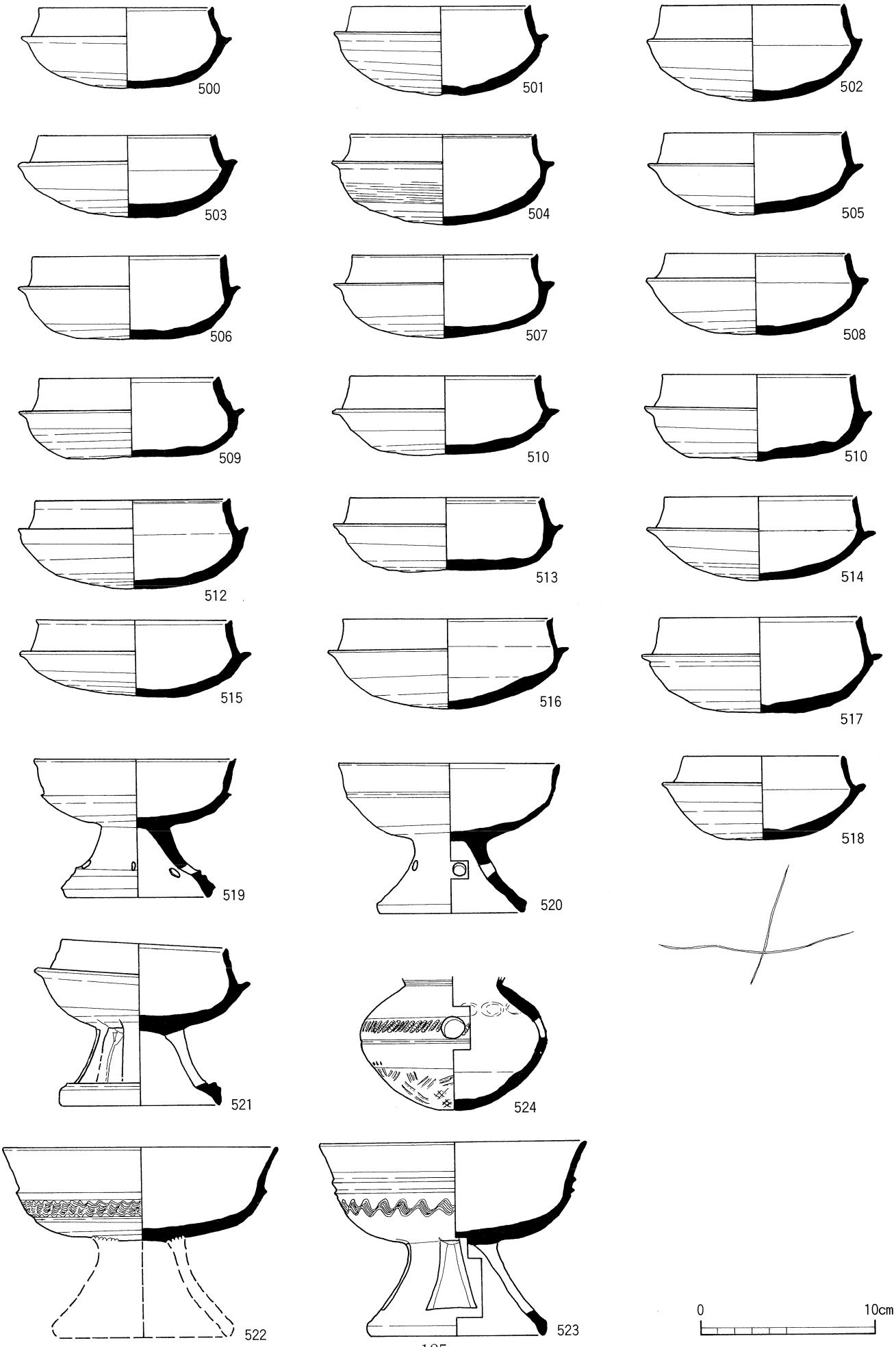


fig.145　ＳＸ214 出土土器実測図（２）

に丁寧なナデを施す。口縁端部はやや凹み気味に終わる。

(497) も同様に外面下半にタタキが残る。ほかは丁寧にナデを施す。口縁端面は平らで、外方に傾く。図示した網掛部分には赤色顔料が付着している。内外面に付着しているため塗布したのではなく、赤色顔料を蓄える容器であった可能性もある。

(498) は外面下半は静止ヘラケズリである。外面上半は回転ヘラケズリ後ナデを施す。内面はナデである。口縁端部はつまみあげて2条の稜を形成する。焼成の程度は悪く、灰黒色で瓦質である。

(499) は口縁部が垂直気味にたちあがる壺である。内外面はナデ調整である。口縁端部はやや凹み気味に終わる。

(500～518) は坏身である。底部が丸くなるもの (500～508) と底部がやや平らなもの (509～511・513) がある。焼成の程度は良好なものと軟質なものとがある。(504) は外面にカキ目を施す。(518) は底面に「×」印のヘラ記号がある。

(519・520) は坏蓋に脚をつけた無蓋高坏である。坏は稜をもつ。坏下半はケズリの後ナデを施す。脚部のスカシは5方向ある。長径6㎜、短径3㎜ほどの楕円形のスカシである。外側からヘラ状工具で穿孔しているが、5カ所のうち2カ所は貫通していない。スカシの下に1条の凸帯を形成する。端面は少し凹み気味に終わる。

(520) の坏部は稜をもたず凹線をもつ。ケズリの範囲は狭く、口縁端部は丸く終わる。脚部は円形3方スカシをもつが、スカシの位置は均等ではない。

(521) は有蓋高坏で、長方形3方スカシである。脚端部はあまり上下には拡張しない。

(522) は脚部が欠損する。坏に施された波状文は、一部直線文になるところがあり、そこを挟んで波状文のピッチが変わる。胎土に砂粒を多く含む。坏底部には4方スカシの切り込みが残る。

(523) は坏に2条の凸帯ををもちその下に波状文を描く。長方形4方スカシである。脚端部は丸く終わる。

(524) は鼎である。体部外面下半にはタタキ目が残るが、ナデで消す。体部最大径の辺りに凹線をもち、その上に列点文を施す。内面の調整はナデであるが、肩部には指オサエ痕が残る。

土師器

(525) はＳＸ204の埦に比べやや深い埦である。調整は内外面ともナデである。

(526～531・534) は土師器小型から中型の甕である。(526) は体部外面はハケ後ナデである。内面は下半はケズリ、上半はナデ、口縁部はナデである。(527) は口縁部はナデ、体部外面はハケ、内面は横方向のナデである。(528) も同様の調整で、内面は不規則方向のナデである。口縁端面は内方へ傾く。(529) の口縁部は横ナデ、口頸部はハケ後ナデである。下半の調整は不明である。

(530) の下半のハケ調整以外、調整は不明である。口縁端面は外方へ傾く。(531) は体部内面はケズリで粘土接合痕が残る。口縁部から外面はナデ調整である。(534) は口縁端部は欠損している。内外面ともにナデである。

(532) は弥生時代後期に属する壺の体部である。外面下半はミガキで底部はケズリがみられる。上半は調整は不明である。内面はナデである。混入した遺物と考えられる。

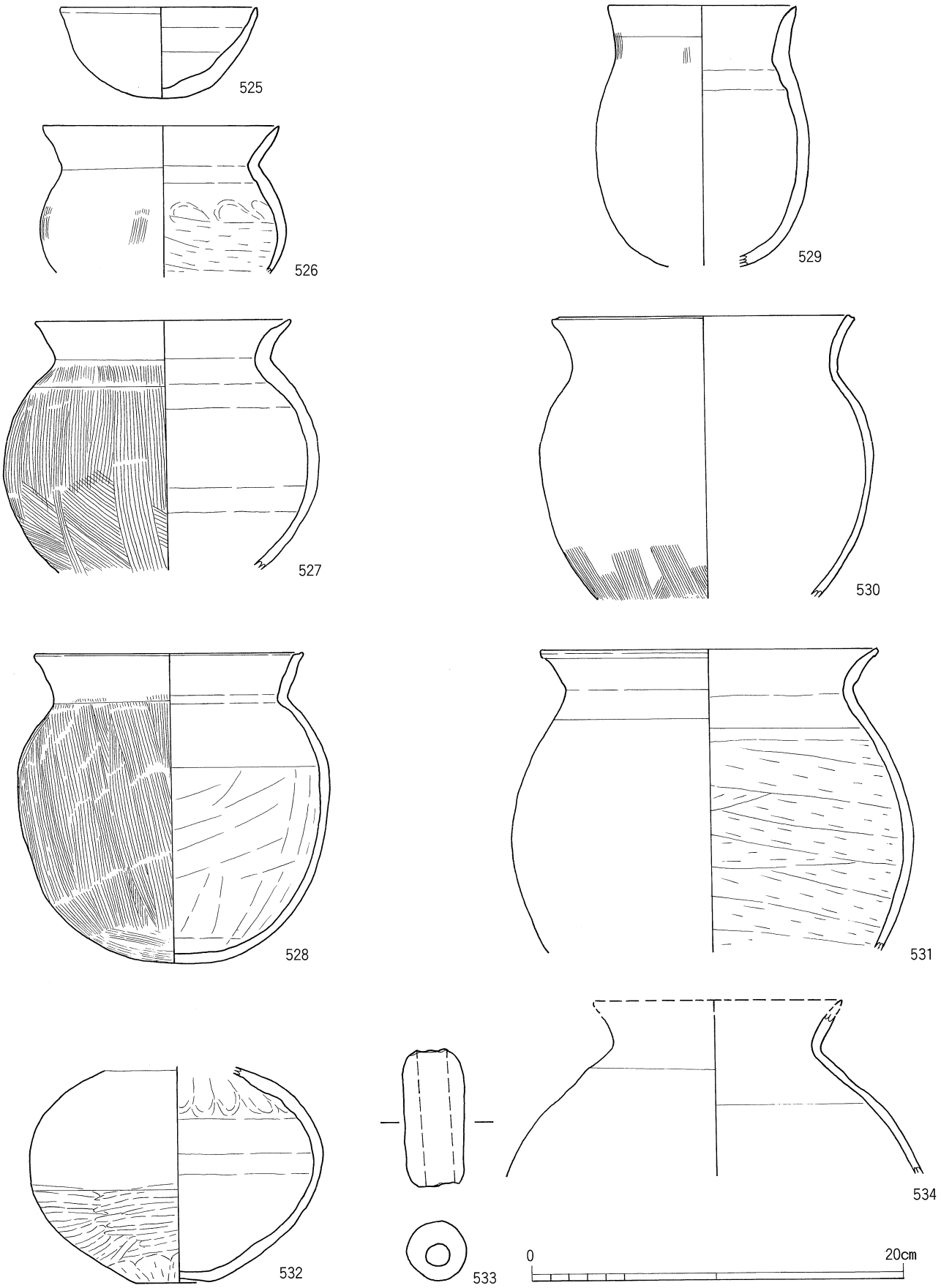


fig.146　ＳＸ214 出土土器実測図（３）

（533）は長さ75mm、直径32mmの土錘である。残存状況が悪く、調整は不明である。

（535～537）は須恵器甕である。いずれも体部内面のタタキをナデによって消す。（535）は口縁部直下に凸帯をもつ。（536）は口縁端部を強くナデ端部を形成している。

（538・539）は器台である。器台坏部は口径は36.0cmである。口縁端部は短く屈曲して外方に拡がる。２条の凸帯を挟んで波状文が施文されている。器台脚部は三角形５方スカ

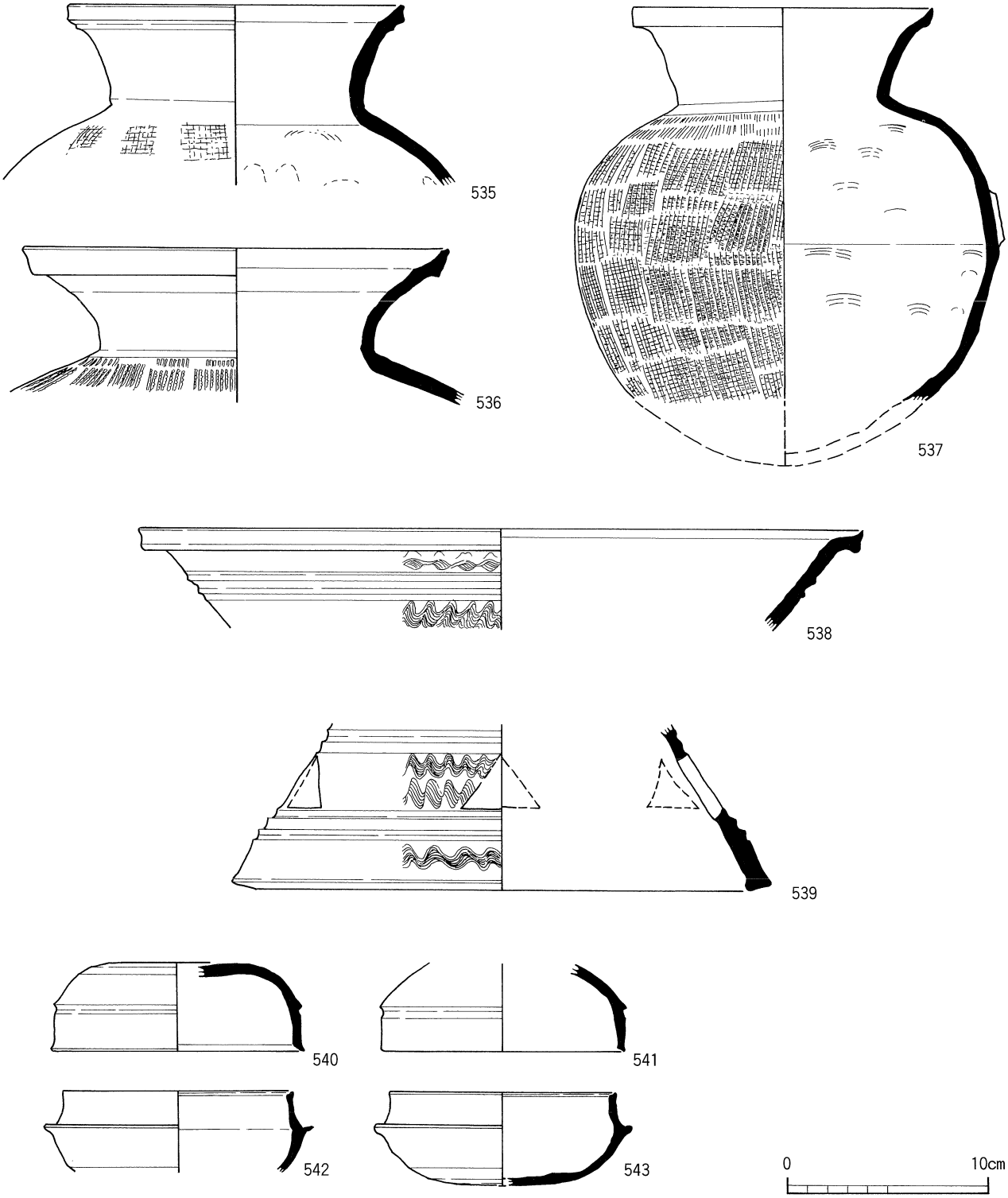


fig.147　ＳＸ214 出土土器実測図（４）

シをもつものとして復元図化した。底径26.0cmである。２条ずつの凸帯を挟んで２段の波状文を施文し、スカシを配する。さらに、裾部に１段の波状文がある。脚裾部はやや内側へ屈曲する。脚端部は内外にわずかに拡がる。端部は丸みをもつ。(538・539) は良く似た胎土・色調であるが、同一個体であるか確証はない。器台は図示したものではＳＸ204とＳＸ207がある。いずれも破砕され廃棄されたような出土状況である。

(540～543) は須恵器坏身と坏蓋である。天井部もしくは底部を欠く。坏蓋は稜があり、(540・541) は口縁端部が内傾する。(542・543) もたちあがりの端部が内傾する。

滑石製品　(544～561) は滑石製品である。ＳＸ214で出土した双孔円盤４個・剣形模造品２個・その他２個で、このほかに青色のガラス小玉１個と臼玉365個が出土している。

ＳＸ214と先述した４群の箇所で出土したものを合わせると、双孔円盤８個、剣形模造品７個、勾玉模造品１個、その他１個、臼玉682個、臼玉未製品29個、青色ガラス小玉１と１／２個や滑石原石などとなる。

(546～553) はＳＸ214の上面で検出された滑石製品である。(546・547・551) は双孔円盤で、(546) は円形と言うより多角形にみえる。厚さは４～５㎜とやや厚く、表裏面からの研磨は完全ではないようである。周縁には研磨痕がある。淡緑色である。

ここでの製品もしくは未製品とすべきかの区別は、この遺構で使用されて検出されたことを前提として、基本的には製品であると考えておく。

(547) は厚さは2.5㎜で、周縁には研磨痕がある。緑灰色である。(551) は半分欠損したもので、光沢のある薄緑色である。

(548) は形態から勾玉模造品とした。表面には穿孔途中の孔がある。光沢のある淡緑灰色である。

(549・550・552・553) は剣形模造品である。(549) は１孔で、孔に対する一端が尖ることから剣形模造品とした。上半は調査時に欠損した。緑灰色である。(550) は厚さは４～８㎜と厚く、裏面の研磨は足りないようである。暗緑色である。(552) は、表面に２カ所の穿孔途中の孔がある。緑灰色である。(553) は先端が欠損している。薄緑色である。

(554～561) はＳＸ214上層から検出された滑石製品である。(554～557) は双孔円盤で、(554) は長方形に粗く割られた石材を、長方形の角を研磨しながら成形した工程が窺えるものである。(555) はほかの双孔円盤と比べ整った遺物である。(556) は５㎜とやや厚く、研磨途中であろうか。(557) は部分的に光沢がある石材である。(554～556) は緑灰色、(557) は濃緑色である。

(558・560) は剣形模造品である。(560) は上部が欠損しており、孔の部分がない。(558) は緑灰色、(560) は濃緑色である。

(559) は双孔五角形盤とでもいうべきものであろうか。淡緑色である。(561) は同様の単孔のものである。緑灰色である。

(544) は双孔円盤片、(545) は剣形模造品片と考えた。(544) は緑褐色、(545) は緑灰色である。(口野)

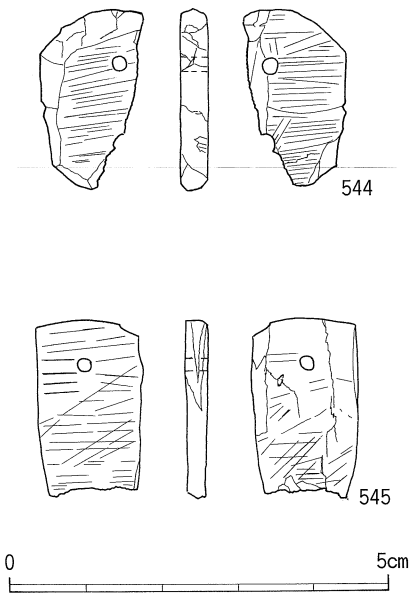


fig.148　ＳＸ214
出土石製品実測図（１）

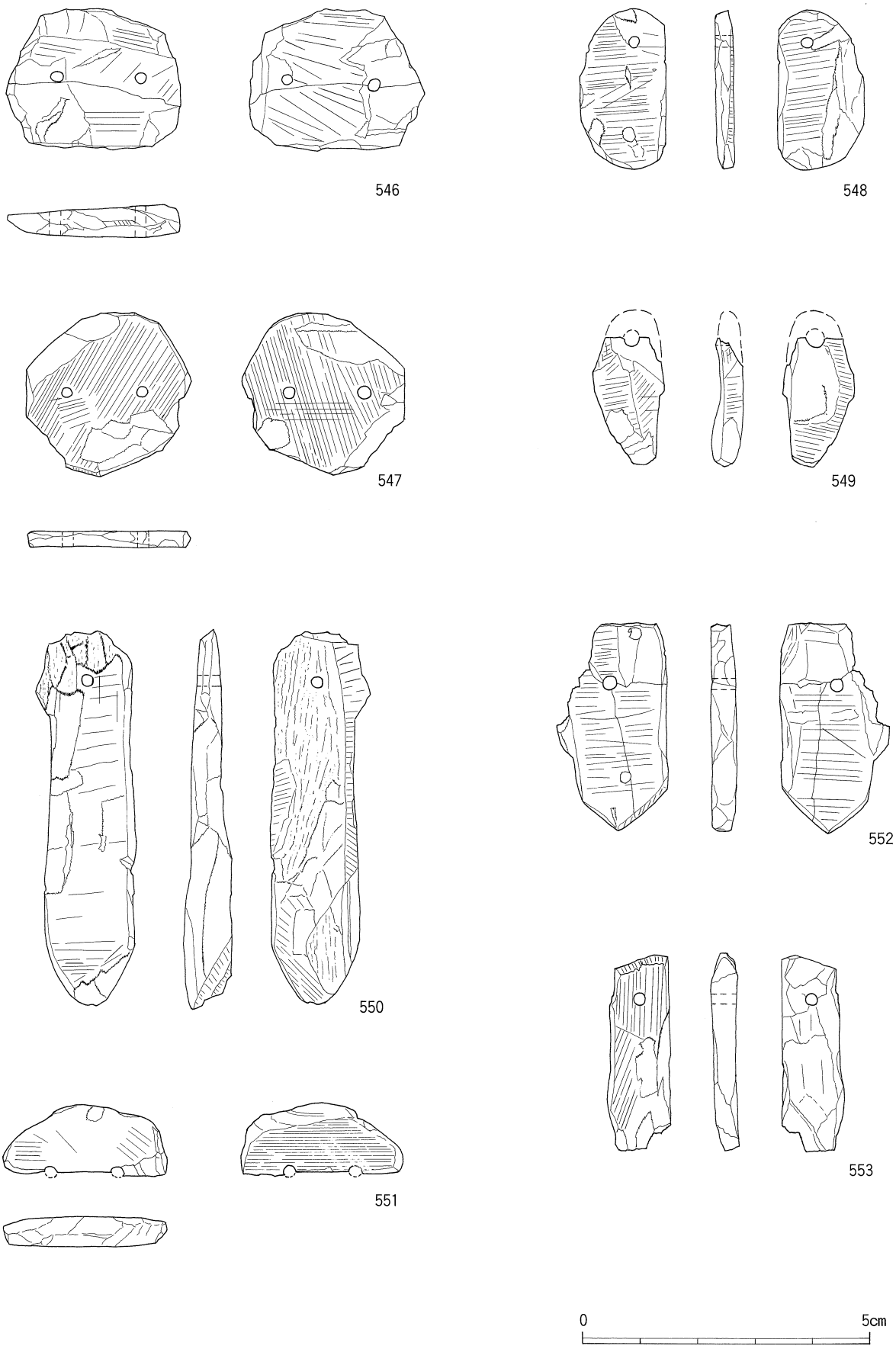


fig.149　S X 214 上面出土石製品実測図

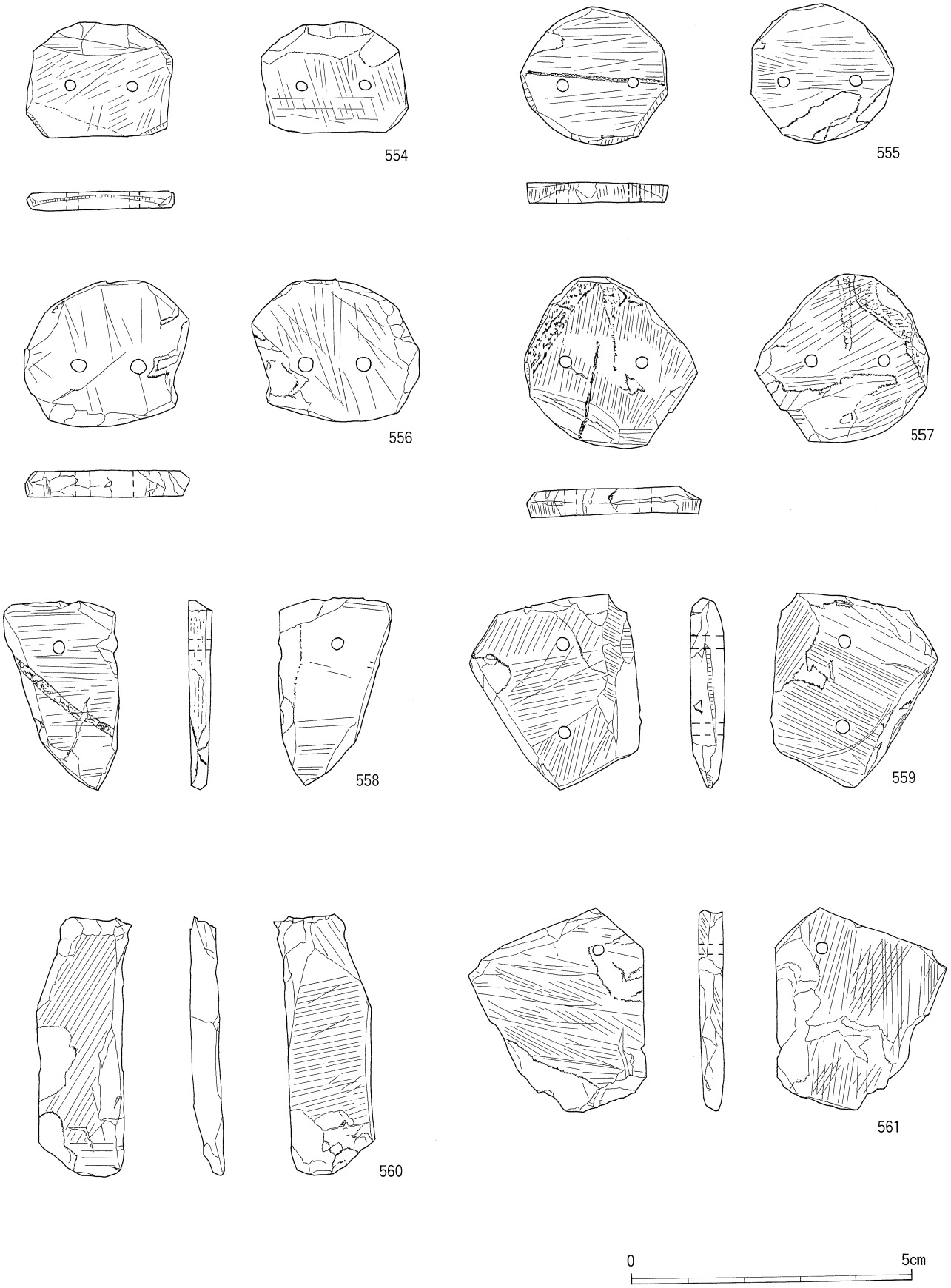
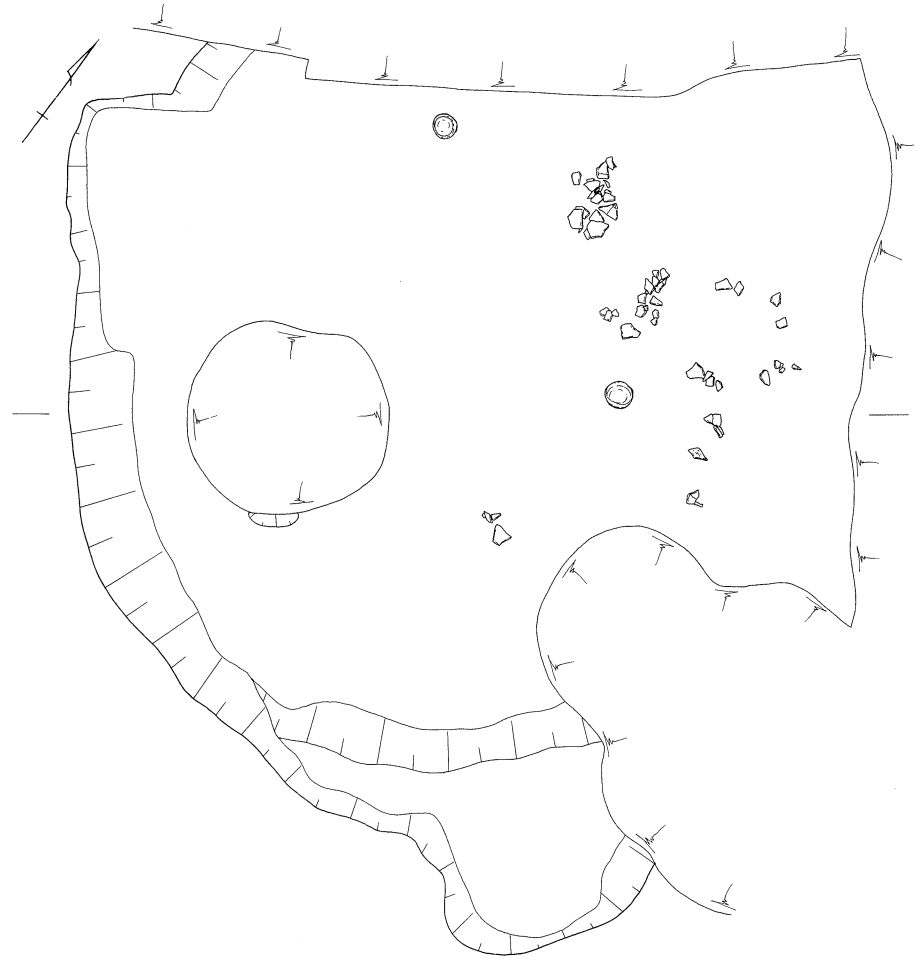


fig.150　ＳＸ214 出土石製品実測図（２）

ＳＸ215　区画溝の内側で掘立柱建物ＳＢ221の東側で確認された遺構である。北側と東側を攪乱によって失っているため、本来の形状は不明であるが、現存長５ｍ以上、深さ0.3ｍを測る不整円形あるいは隅円方形を呈する浅い落ち込みと考えられる。底面はほぼ平坦に仕上げられている。遺物は遺構の東半部から土器がまとまって出土したが、復元可能な個体は少なかった。滑石製の双孔円盤（567）１点と、土器が出土した周辺の土を水洗いした結果、滑石製の臼玉（568～597）が30点確認されている。

（563）は土師器壺で、口縁部を欠損している以外はほぼ完存していた。（564）は土師器の長胴化の著しい大型の甕で、器高36.7cmを測る。内外面ともに調整は板状工具によるナデである。（565・566）は須恵器の蓋坏で、（565）は天井部と口縁部を界する稜はまだしっかりしており、口縁端部にも段を持っている。（566）についてもほぼ同様の傾向がみてとれることから、須恵器についてはほぼＴＫ47型式に相当するものと考えられる。（前田）



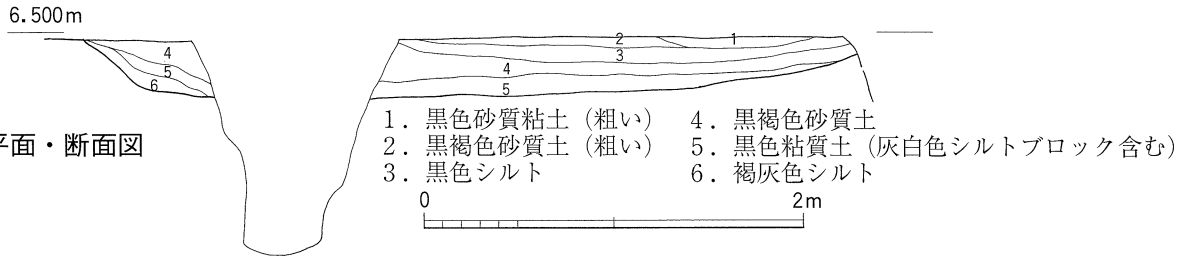


fig.151
ＳＸ215 平面・断面図

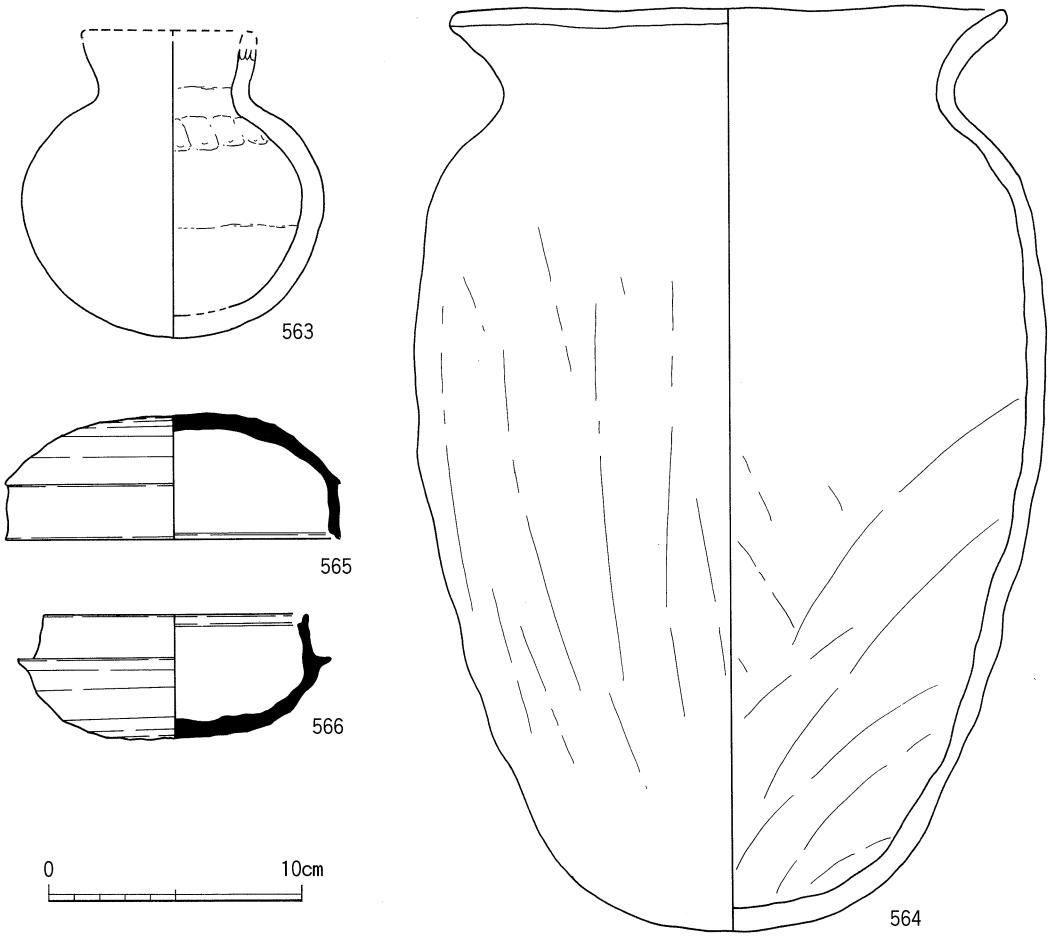


fig.152
ＳＸ215 出土
土器実測図

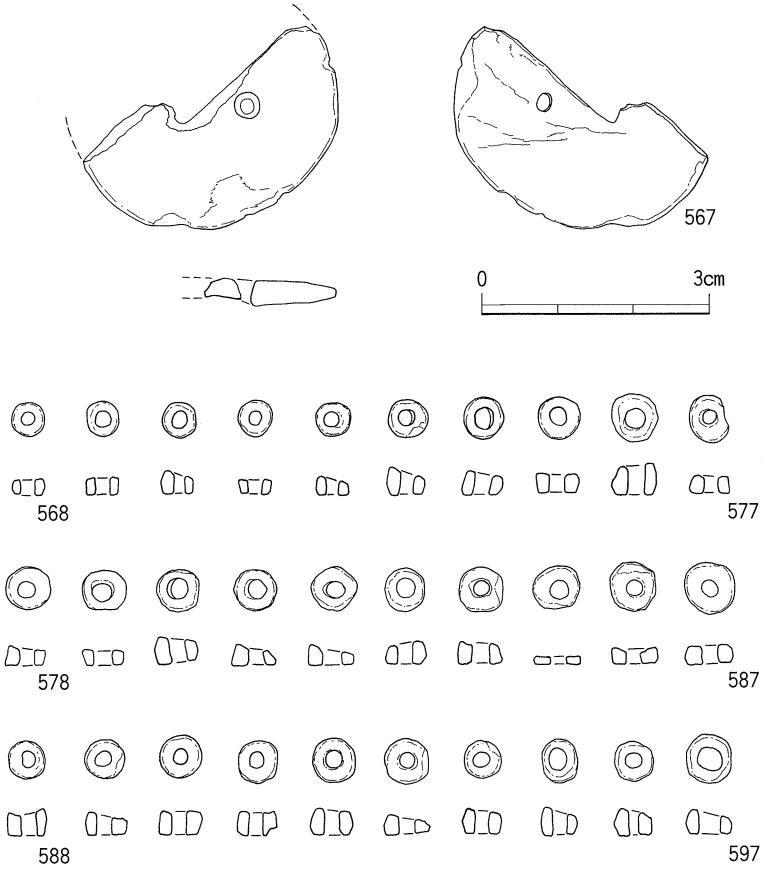


fig.153　ＳＸ215 出土玉製品実測図

ＳＸ216　調査区南東角付近で検出した落ち込み状遺構である。全長1.26ｍを検出したが、東側は削平により全体規模は不明である。深さは検出面から２㎝である。中央部から完形の須恵器坏蓋２点、坏身１点、土師器の小型甕片が出土した。須恵器は蓋が外面を下に、坏は正位置で据えられた様な状況で出土した。玉類等の共伴はなかったが、何らかのマツリに伴うものと考えられる

（598・599）は須恵器坏蓋で天井部はやや丸みを帯びる。（600）は坏身で、受部は直線的に外方に延び、鋭い。たちあがりはやや内傾して延びる。ＴＫ47型式に併行すると考えられる

（601）は土師器の小型甕で、口縁部がやや受口状を呈し、体部はハケ目調整を施す。（阿部）

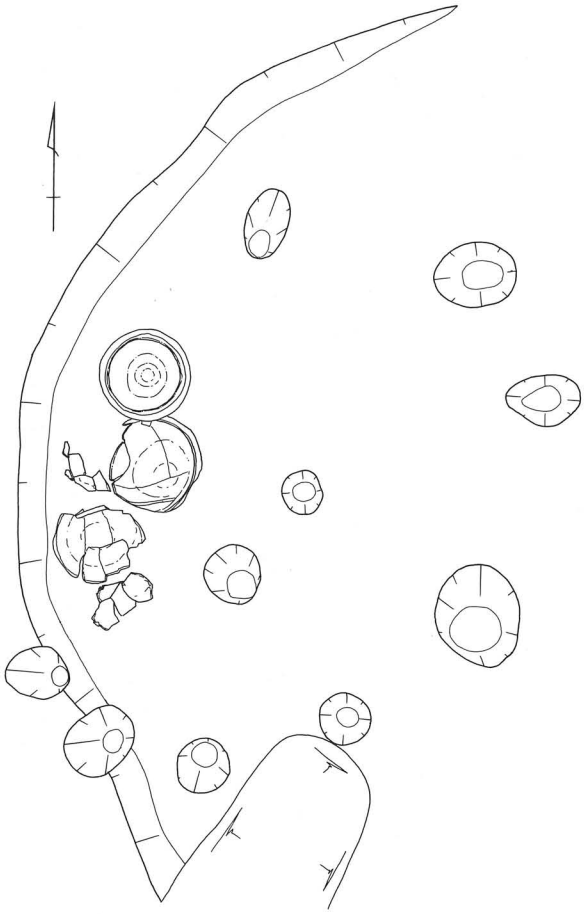


fig.154　ＳＸ216 遺物検出状況平面図

挿図写真19　ＳＸ216 土器検出状況（南から）

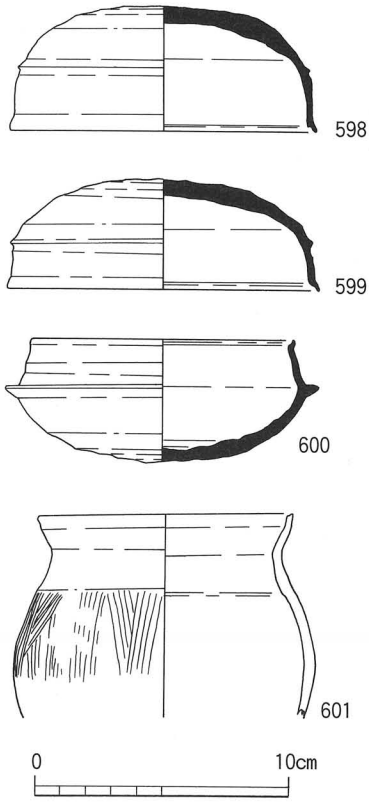


fig.155　ＳＸ216 出土土器実測図

遺構番号など	滑石製品等									砥石	碧玉原石チップ	ガラス玉	備考
	剣形	双孔円盤	単孔版	子持勾玉	菅玉	臼未	臼玉	異形線刻子持勾玉	滑石原石				
ＳＢ214							18		1？				
ＳＢ217							2		2				
ＳＤ201北上面							4		2		2		
ＳＤ201	1	6		1		19	99						石鏃共伴
ＳＤ203上面							5		4		1		
ＳＤ204直上							1						
ＳＤ204						5	336		5		○原石		
ＳＤ207							1						
ＳＥ201						2	28		1				
ＳＥ204		1					1						孔なし大型
ＳＥ206	1		1				5						円形
ＳＫ212							13		1				
ＳＫ211						1							
ＳＸ204	1						29	1	2	1	3		有孔砥石
ＳＸ204 土師器甕							26						
ＳＸ204 須恵器瑳							24						
ＳＸ205東上面									1				
ＳＸ205周辺	3					1	69	1			○		ＳＸ205周辺
ＳＸ205	2	1		1	1		112				○		
ＳＸ205・206	1	2				5	776				○	1	土玉１
遺構面直上							6						ＳＸ206西側
ＳＸ206	1	1				7	385		1				
ＳＸ207上面	1未												
（ＳＸ214）	1	1				2	8						旧ＳＤ115
ＳＸ214上面包含層 ＳＸ214上面包含層 ＳＸ214上面包含層 ＳＸ214上面包含層	1	1		1			4 78 1 1		2 1			1	東 西 南 北東　青色1/2
ＳＸ214北・上面	3	2				10	225					1	青色小玉
ＳＸ214	1	4.小2	1五角			17	365		7				
	未1	双孔五角											
		形板 1											
ＳＸ215		1					30						
合　計	20	22	2	3	1	69	2652	(2)	(30)	2	10＋α	3	

表４　日吉２地区遺構別玉製品等出土一覧表

6．ピット

ＳＰ201～204は柱材と考えられる木質が検出された柱穴である。分割された状況で調査を行ったため、次の調査で建物の一部となる可能性も考え、樹種などの分析も平行して実施した。結果的にはそれぞれは、建物にまとまらない柱穴となった。

ＳＰ201　調査区北東部で検出された直径0.35m、深さ0.3mのピットで、底より柱材の残欠と考えられるものが検出された。材の樹種同定結果よりマツ属である。

ＳＰ202　調査区北西部で検出された直径0.3m、深さ0.3mのピットである。直径0.05m、長さ0.3mの棒状に遺存した木質が検出された。材の樹種同定結果よりカヤであることが判明した。

ＳＰ203　調査区中央部で検出されたピットである。ＳＰ203は直径0.3m、深さ0.5mのピットで、上面は中世の耕作痕跡と考えられる溝状遺構によって切られている。底より柱材の残欠と考えられる木質が検出された。材の樹種同定からヒノキ属である。

ＳＰ204　直径0.4m、深さ0.3mのピットで、底より柱材の残欠と考えられる木質が検出された。材の樹種同定からヒノキ属である。

ＳＰ205　区画溝の内側の掘立柱建物ＳＢ222の東側で確認されたピットである。直径約0.4m、深さ0.3mで、鉄鏃が１点出土している。

鉄鏃は銹化が著しいが、現存長10.2cm、最大幅2.9cm、最大厚1.0cmを測る有茎式の鉄鏃である。茎部の断面は方形であるが、端部は欠損している。共伴する土器はないが、古墳時代の鉄鏃であると考えられる。（前田・口野）

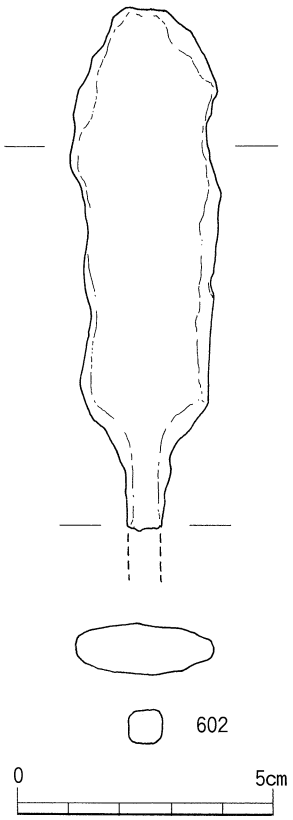


fig.156　ＳＰ205 出土鉄製品実測図

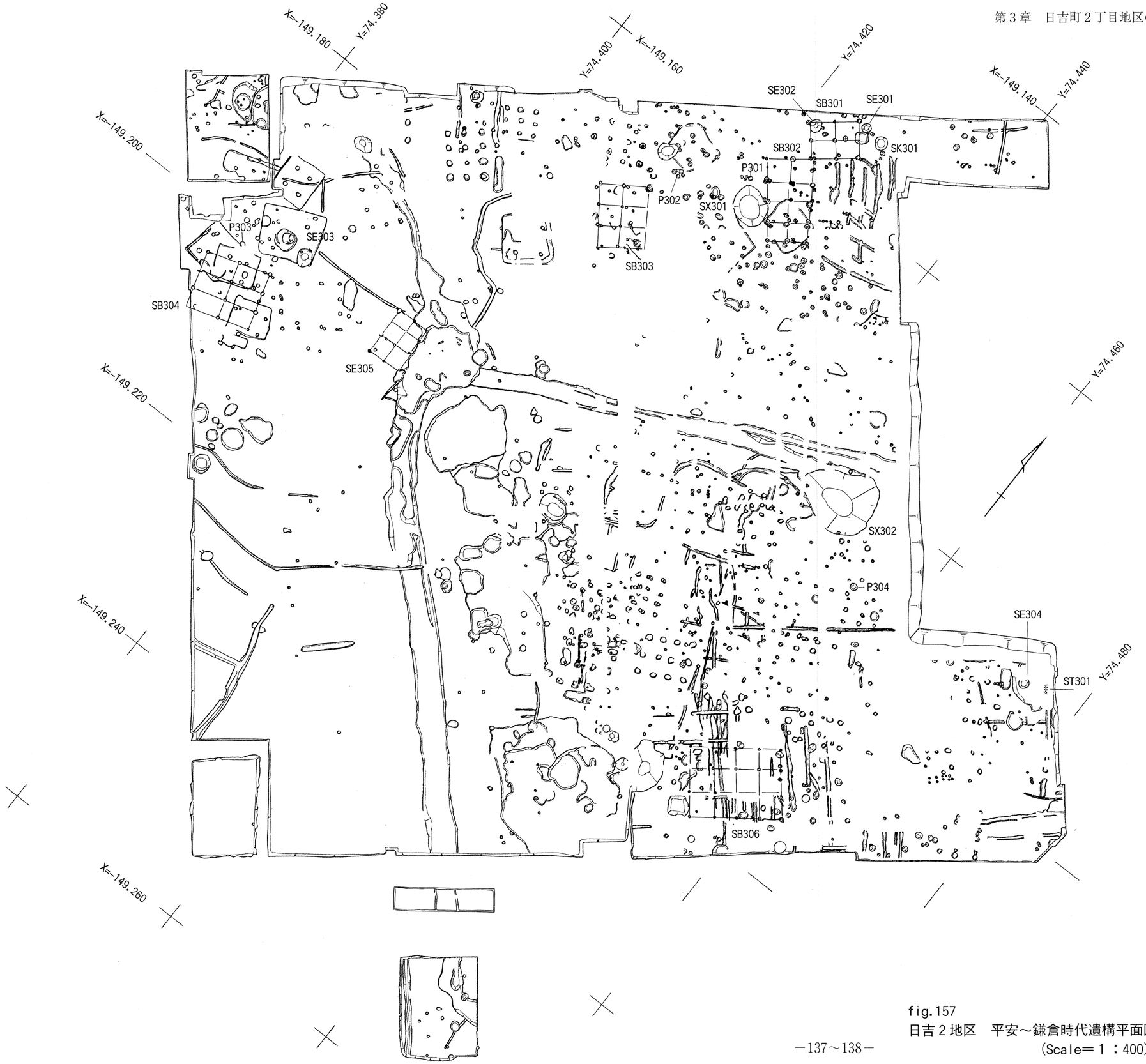


fig.157
日吉２地区　平安～鎌倉時代遺構平面図
(Scale＝１：400)

第４節　中世の遺構と遺物

１．掘立柱建物

ＳＢ301　調査区北東部で検出された掘立柱建物である。桁行（東西）柱間距離2.2mと2.8m、梁行（南北）柱間距離1.9mの２間×２間の東西棟の総柱建物である。

柱穴は直径0.4m前後、深さ0.2m前後で、全体に浅く柱穴の残存状況が悪いと思われる。堆積土は灰色系の泥砂で、遺物はほとんど出土しなかった。

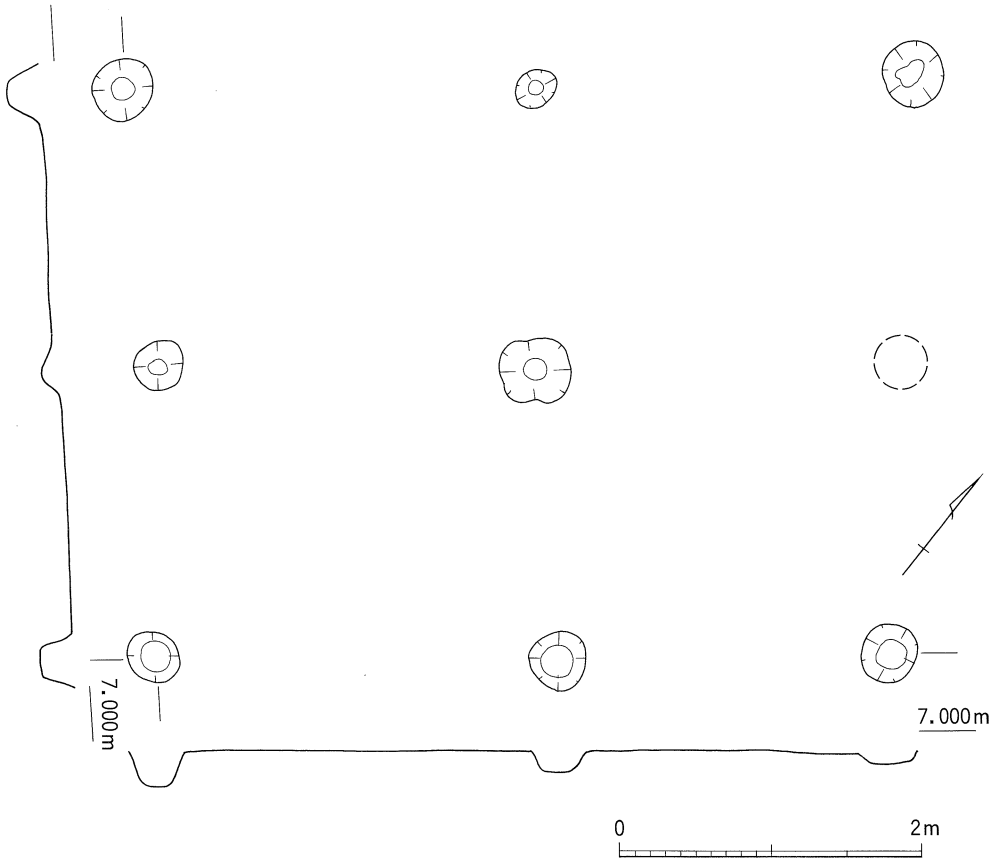


fig.158
ＳＢ301 平面・断面図

ＳＢ302　ＳＢ301と同様調査区北東部で検出された掘立柱建物である。梁行（東西）柱間距離2.2m～2.6m、桁行（南北）柱間距離2.3mの２間×４間の南北棟の総柱建物である。それぞれ複数の柱穴が検出されることから、建て替えがあったと考えられる建物である。

西辺の破線で表した柱穴は、遺構面に石のみが検出され、根巻石などの残欠として復元した。

柱穴は直径0.4m前後、深さ0.3m前後である。東列中央のＰ７から須恵器椀（603）が出土した。遺物からこの建物の時期は、12世紀後半ころと考えられる。

建物の東西方向の柱通りは直線的に並ぶが、南北の柱通りは、余り直線的ではない。また、建物全体の平面形は、長方形ではなく北辺は5.2m・南辺は4.2mの台形を呈す。（川上・口野）

fig.159　ＳＢ302-Ｐ7 出土遺物実測図

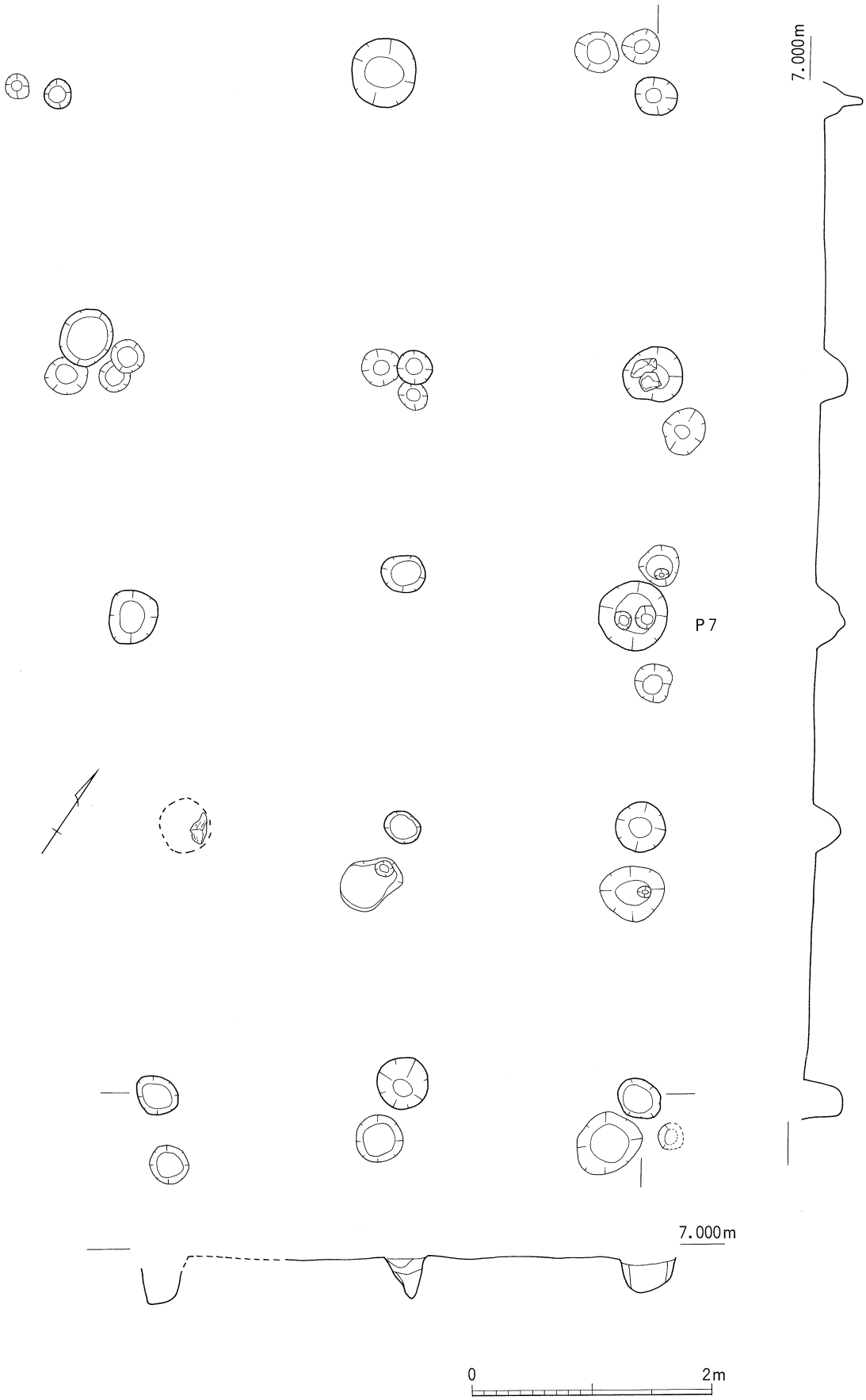


fig.160　ＳＢ302 平面・断面図

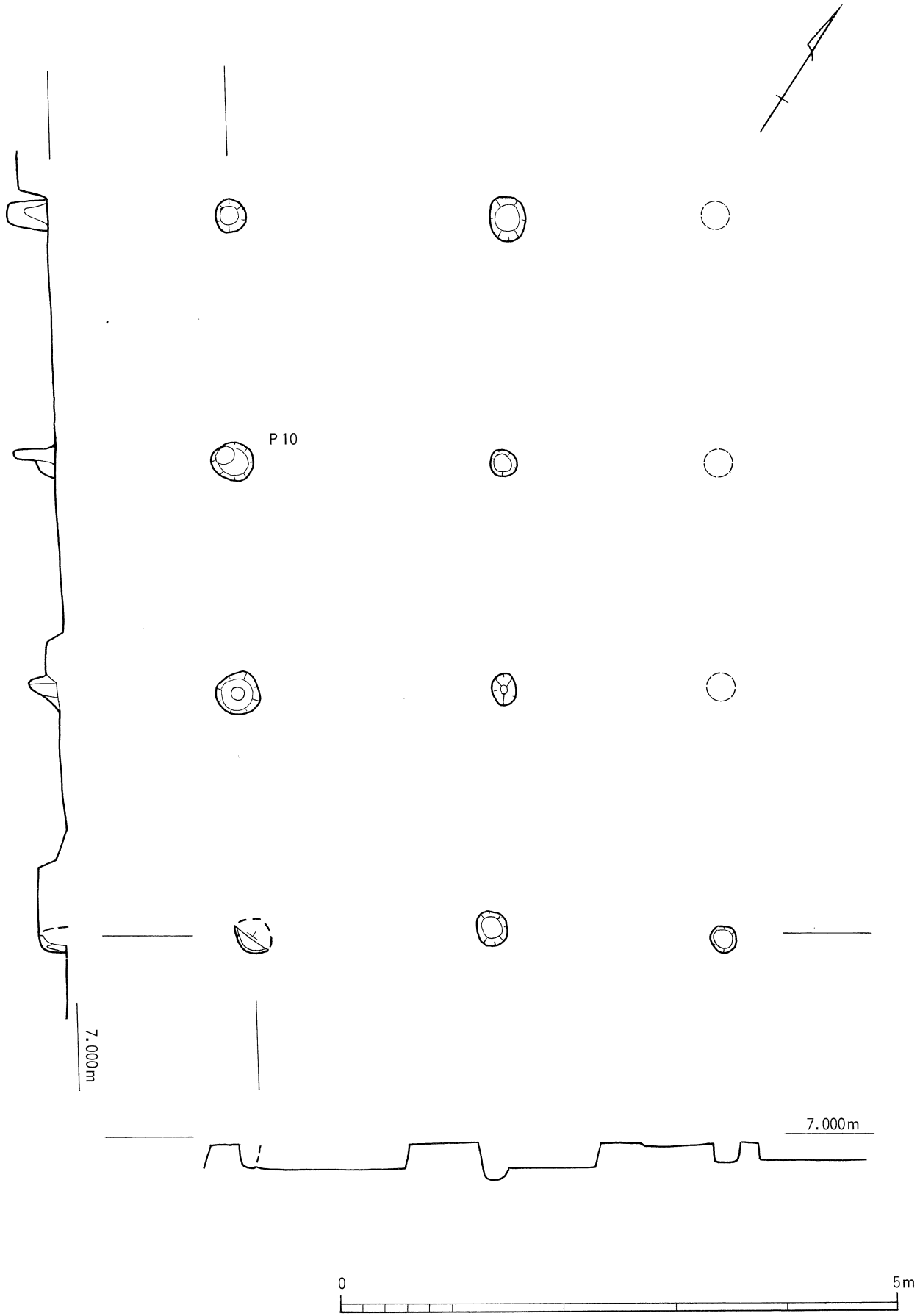


fig.161　ＳＢ303 平面・断面図

ＳＢ303　調査区北側中央で検出された掘立柱建物である。東西柱間距離・南北柱間距離ともに、2.2mで、南北棟２間×３間の総柱建物と復元できる。建物の東側は大きな撹乱を受け、東側への拡がりは不明である。

Ｐ10から、須恵器埦が出土した。他の柱穴からはほとんど遺物は出土しなかった。柱穴の堆積土は、古墳時代の遺構のそれとは異なり灰色系の泥砂である。

（604）は底部を欠く須恵器埦である。遺物より建物の時期は、12世紀後半ころと考えられる。（口野）

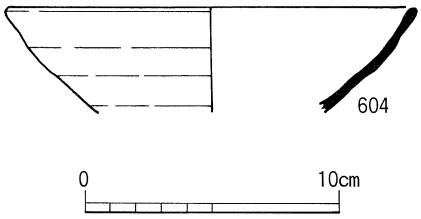


fig.162　ＳＢ303－Ｐ10 出土遺物実測図

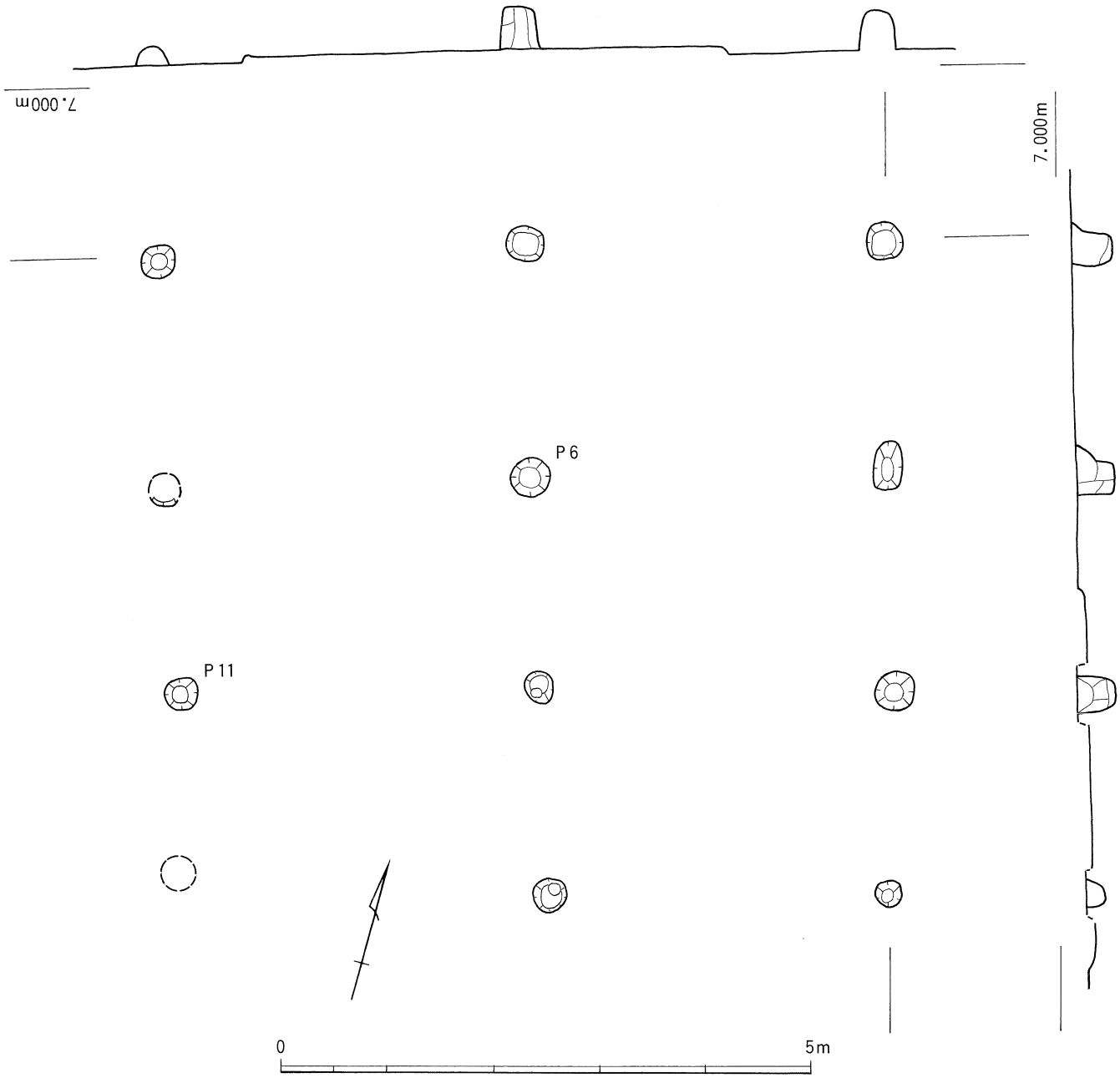


fig.163　ＳＢ304 平面・断面図

ＳＢ304　梁行（東西）柱間距離3.4m、桁行（南北）柱間距離2.0mと1.8mの２間×３間の南北棟の総柱建物である。

柱穴掘形は直径0.4m前後、深さ0.4mである。東西柱間距離3.4mと梁行が長い。

Ｐ６とＰ11からわずかではあるが、図化できる遺物が出土した。(605) はＰ11からの土師器堝である。口縁部が大きく開き、内面はハケ目調整で、以下はナデである。口縁部外面はナデで、体部は指オサエの痕跡を残し、ハケで調整する。(606・607) はＰ６からの須恵器埦である。これらの遺物からＳＢ304の時期は12世紀後半ころと考えられる。

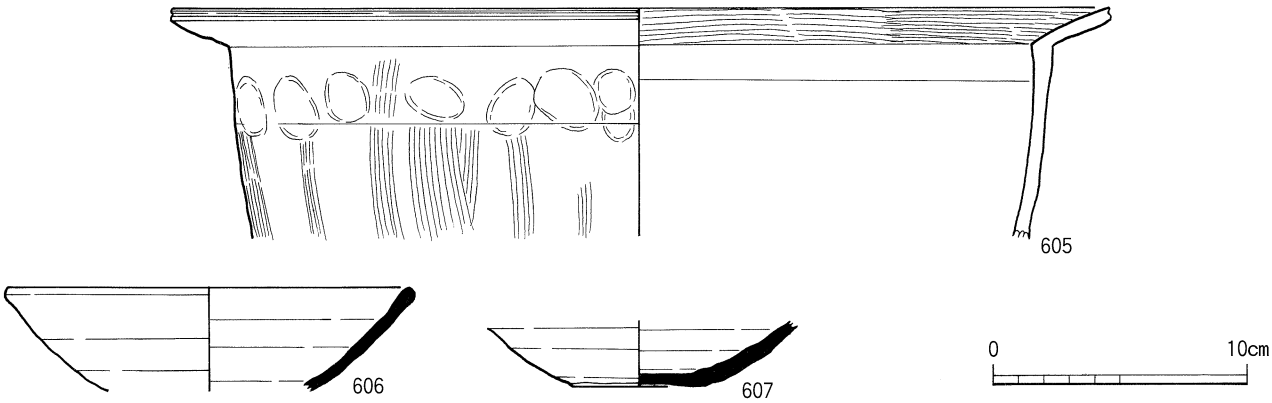


fig.164　ＳＢ304 出土遺物実測図

ＳＢ305　ＳＸ204の西側で検出されたＳＸ204を切る掘立柱建物である。梁行（東西）柱間距離1.8m、桁行（南北）柱間距離2.0m、２間×３間の南北棟の総柱建物である。

柱穴掘形は直径約0.2～0.3mの円形で、柱痕は直径約0.1m、深さ0.3mである。Ｐ４では柱材がわずかに遺存している。材の同定結果はマツ属であることが判明した。また、Ｐ７では、黄緑色のガラス玉１個（直径約0.4cm）が出土した。古墳時代の遺構からの混入かと思われる。各柱穴からの出土土器が小片のため、詳細な時期は不明と言わざるを得ないが、須恵器埦の口縁部小片から、ＳＢ303・304などの同様の時期と考えられる。(口野)

ＳＢ306　調査区の南で検出された掘立柱建物である。主軸をＮ36°45′Ｗにとり、梁行（南北）柱間距離2.4m、桁行（東西）柱間距離2.4m、３間×４間の東西棟の総柱建物である。建物の中程と西柱列の中央は大きな攪乱があるため、削平を受け、柱穴は検出されなかった。

建物全体の規模は、東西が9.8m、南北が7.6mで、74.5m²を占有している。中世における松野遺跡の掘立柱建物では最大規模の建物である。

柱穴掘形は直径約0.2～0.4mの円形で、柱痕は直径約0.15m、深さ0.3mである。南東隅の柱穴には柱の沈み込みによる窪みが検出された。

建物の構造は、柱間の配置の間隔に特に変化が見られないことと、柱穴の規模に差異が見られないことから、庇などの付き方は不明である。

柱穴からの出土遺物は、少量の小破片が出土しているが、わずかながら図化できる遺物が出土した。(608) はＰ20から出土した須恵器埦である。この遺物からＳＢ306の時期は11世紀末から12世紀初めころと考えられる。(川上)

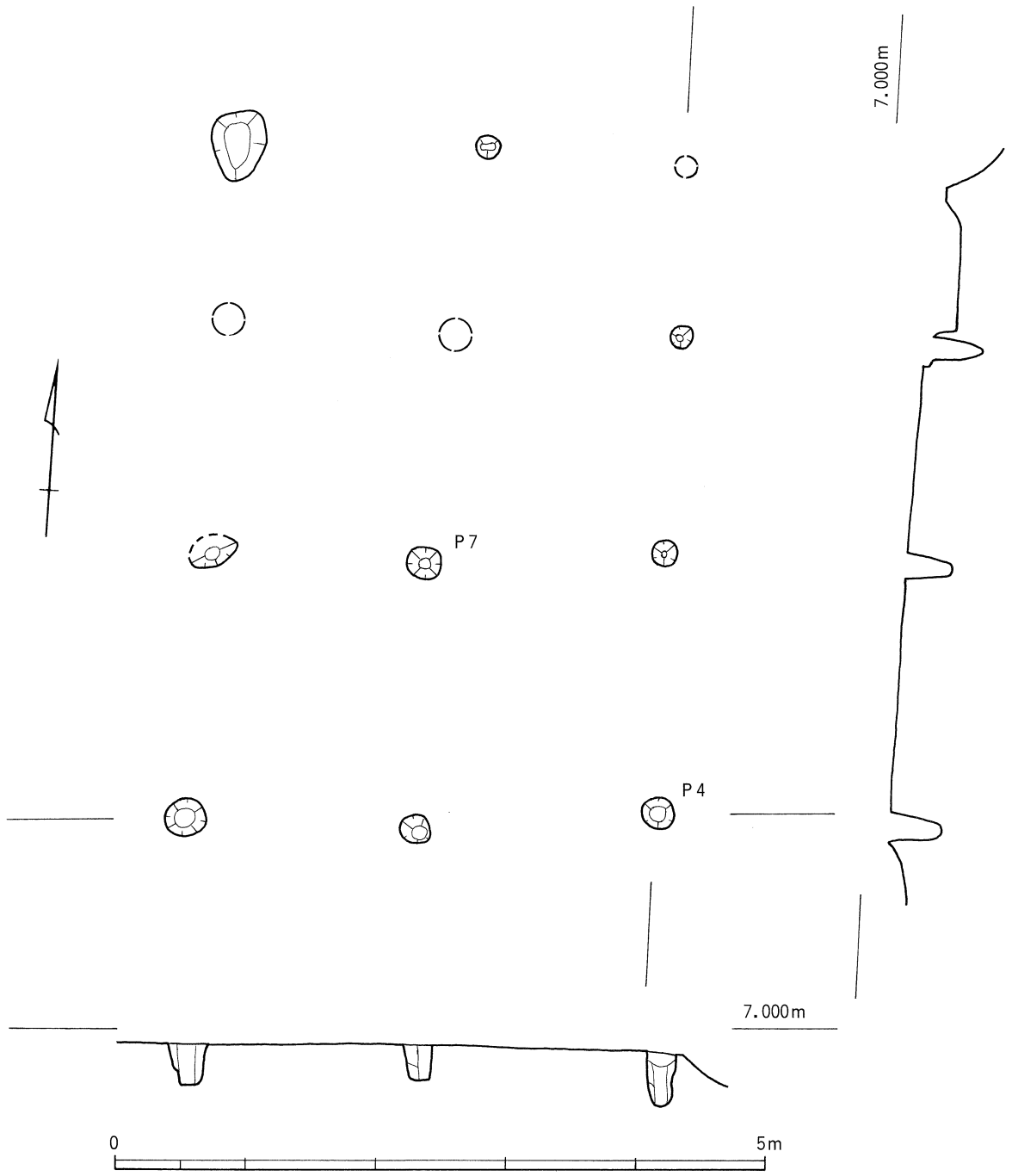


fig.165　ＳＢ305 平面・断面図

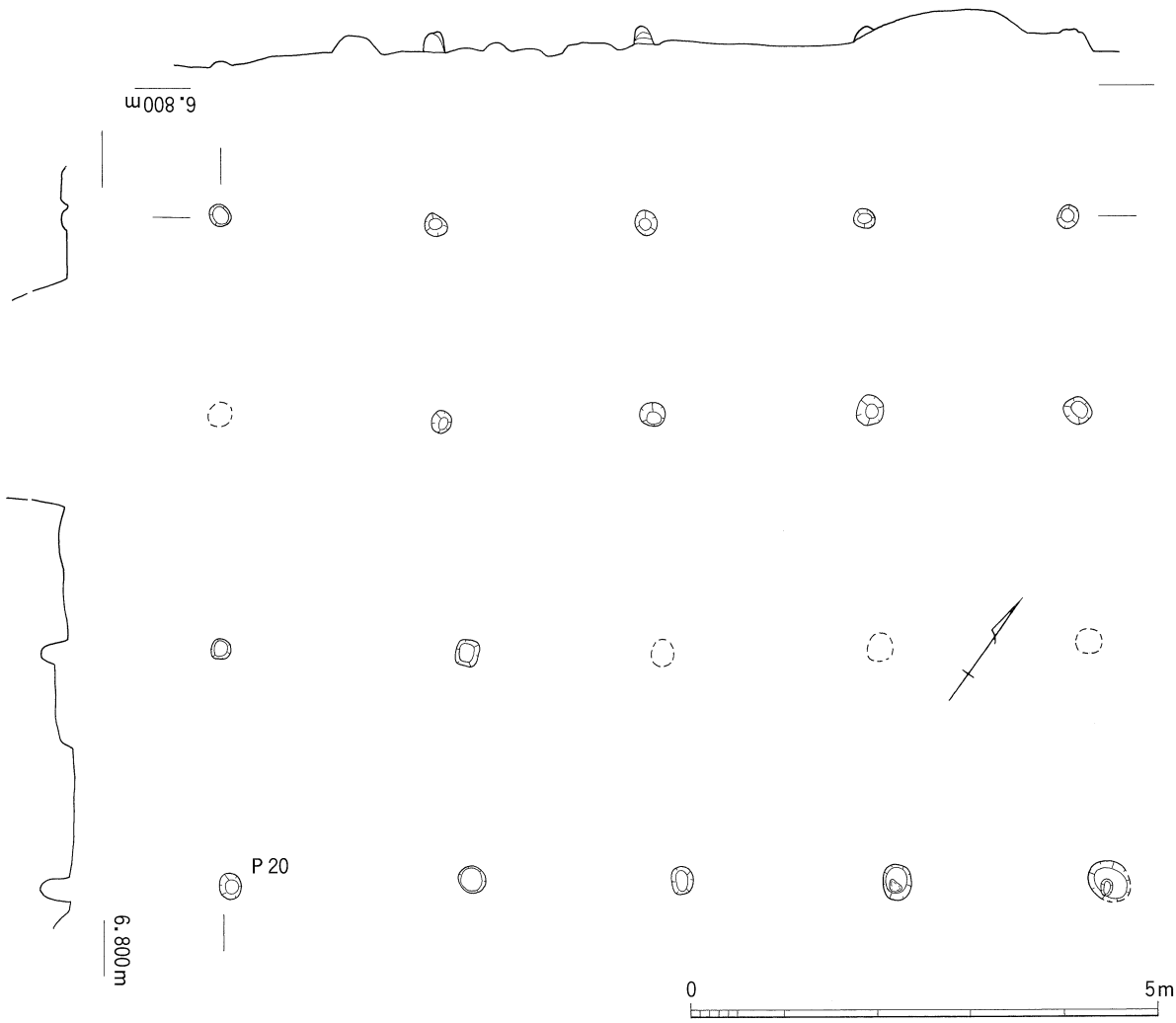


fig.166　ＳＢ306 平面・断面図

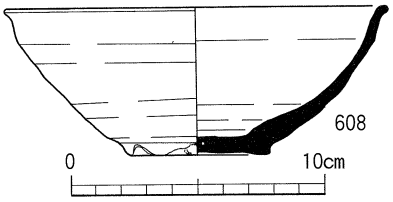


fig.167　ＳＢ306-Ｐ20 出土遺物実測図

調査地区	遺構名	規模 間数	規模 東西(m)	規模 南北(m)	方位	面積 (m²)	備考
日吉２地区	ＳＢ301	２×２	5.2	3.8	N45° W	19.0	総柱　東西棟
	ＳＢ302	２×４	5.2	9.2	N35° 30′ W	47.8	総柱　南北棟
	ＳＢ303	２×３	4.4	6.6	N35° W	29.0	総柱　南北棟
	ＳＢ304	２×３	7.0	6.4	N15° 30′ W	44.8	総柱　南北棟
	ＳＢ305	２×３	3.6	6.0	N 5° W	21.6	総柱　南北棟
	ＳＢ306	３×４	9.8	7.6	N36° 45′ W	74.5	総柱　東西棟
若松７地区	ＳＢ307	２×１	3.5	1.9	N27° 30′ W	6.7	総柱？東西棟
若松６地区	ＳＢ308	２×２以上			N38° W	－	総柱？

表５　第３～７次調査　平安～鎌倉時代掘立柱建物一覧表

2．井戸

ＳＥ301　調査区の北東隅で検出した井戸である。直径は90cmの円形プランを呈している。井戸の深さは70cmと浅く、松野遺跡の基盤層となっている黄褐色の粘土層の中で収まっており、砂質の湧水層に到達していない。

井戸の中からは、少量かつ小破片の土器が出土したが、図示できるような資料は得られなかった。井戸底からは、人頭大の四角い石が投棄されたような状態で検出された。この石には、焼けた痕跡が見られる。そのすぐ横では、杓の柄が突き刺さった状態で出土した。また、小片ではあるが、曲物の破片が数点出土している。

井戸の底部の構造は、平坦になっており曲物などを据え付けた痕跡は検出されなかった。井戸の状態から見て、湧水を溜めたのではなく、溜水を利用する溜井的な利用が考えられる。(川上)

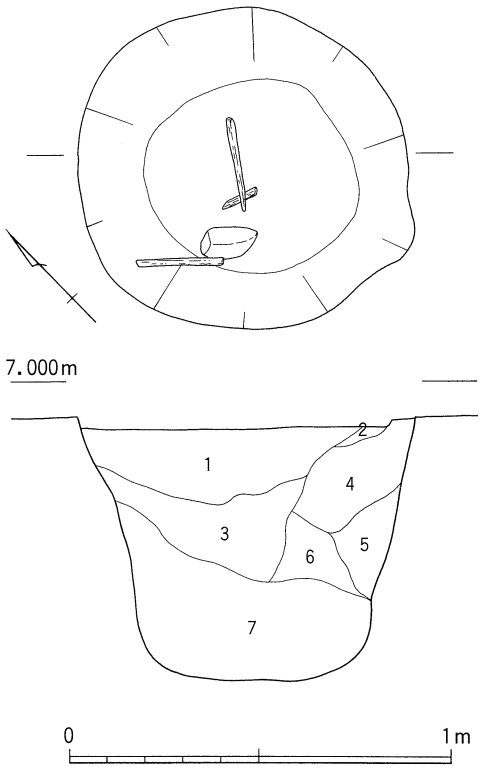


fig.168　ＳＥ301 平面・断面図

1．乳灰茶色シルト質中砂
2．乳黄褐色シルト質極細砂
3．濁灰黄色シルト質細砂
4．乳灰色シルト質細砂
5．淡灰色シルト質極細砂
6．濁黄灰色極細砂シルト
7．暗黒灰色極細砂シルト

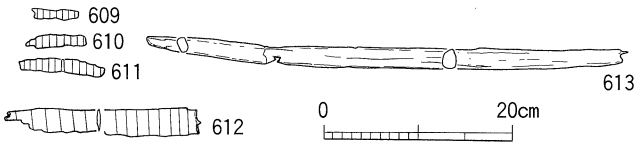


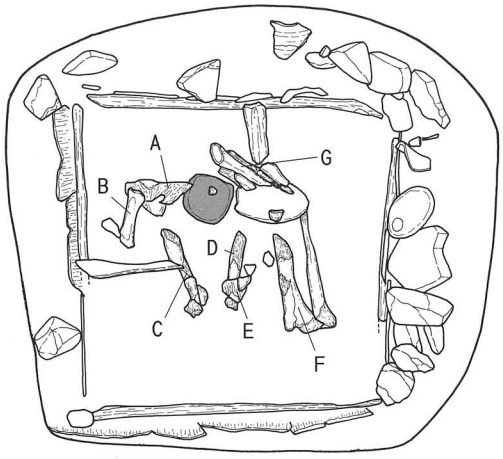
fig.169　ＳＥ301 出土木製品実測図

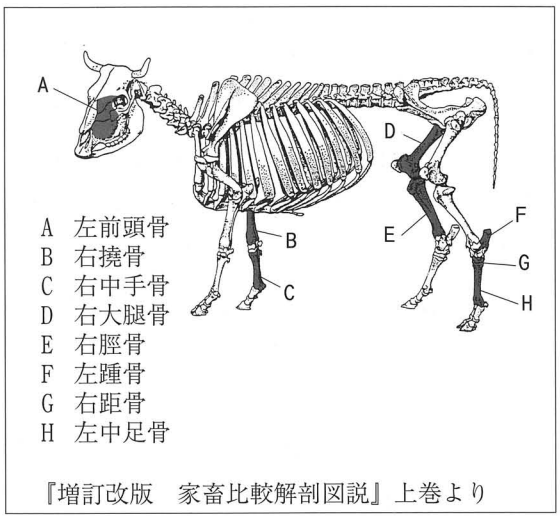
ＳＥ302　調査区の北端で検出された井戸である。一辺が約1.2mの方形の掘形を呈している。井戸の深さは約1.6mあり、底は湧水層と思われる粗砂層に到達している。

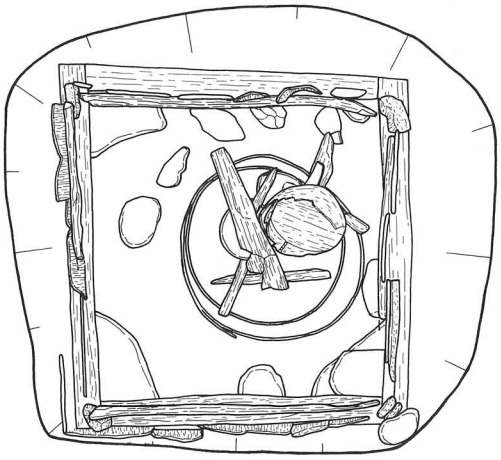
井戸の構造

井戸側の構造は、底部に20～30cm程の不定形の平坦面をもつ石を四隅に礎石状に基礎として据え、それぞれの石を井桁状に角材を組んで設置している。その上に四隅に６cm角の角材を建て、縦板を一辺に３枚並べ、横桟を中間に添えた構造のもので、縦板組隅柱横桟留構造に分類される。縦板には、幅25cmから37cmの規模のものを下段に立て並べ、上段には幅12cm前後の板を立て並べている。下段の縦板は、表面を手斧で平滑に仕上げており、中には角の面取りを行い、短辺の中程に長さ９cm、幅２cmの穴を穿孔しているものもある。樹種同定の結果、これらはヒノキ、スギ、コウヤマキなど多種にわたって使用しており、加工の頻度から、建築部材を転用したものと考えられる。湧水部の構造は、直径48cm、高さ33cm、直径42cm、高さ26cmの曲物を二段に組み上げた構造である。

出土遺物の状態・種類から、この井戸が廃絶した際に何らかの祭祀を行ったと考えられる。最下層の湧水部では、須恵器の椀２個を並べており、その中に箸と面取りをした幅３cm、長さ40cmの短冊状の板に縦に切り込みを入れた人形の様なものが差し込んだ状態で出土した。この遺物に墨書などの痕跡はみられず、頭部をつくり出す切り込みもみられない







1．乳茶褐色シルト混じり中砂
2．濁黄褐色シルト質極細砂
3．暗灰色シルト質細砂
4．濁灰黄色シルト質細砂
5．黒灰色シルト質極細砂
6．暗黒灰色シルト質極細砂
7．淡黒灰色極細砂シルト
8．淡黄灰色シルト質細砂
9．暗黒灰色砂質シルト
10．暗黄褐灰色シルト質極細砂
11．暗黒灰色砂質シルト
12．茶褐色シルト質細砂
13．暗黒灰色粘質土
14．暗黒褐色砂質シルト
15．暗灰色粘質土
16．暗灰色砂質シルト

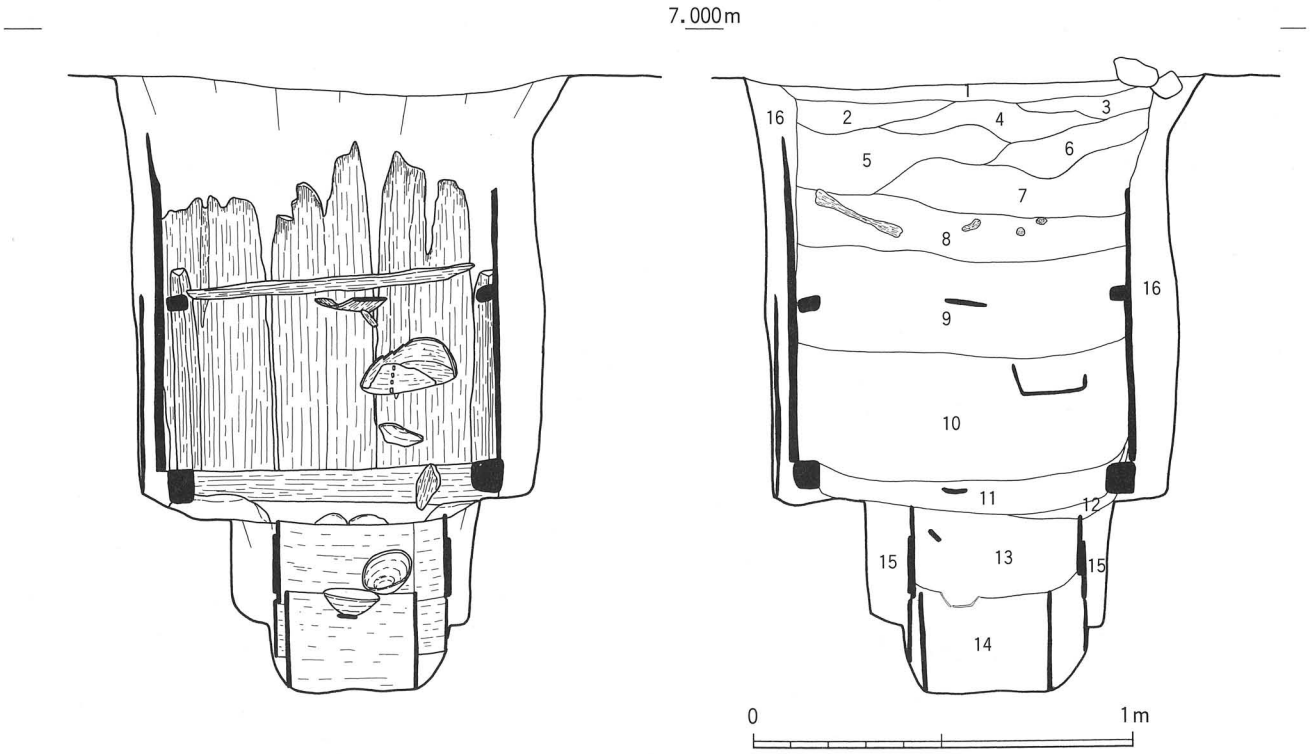


fig.170　ＳＥ302 平面・断面図

ため、斎串としての利用が考えられるかは不明である。その他にも、短冊状の木片や棒状の木片が出土したが、用途などは不明である。この埦の中の土に関しては、土壌水洗による大型植物遺体などの洗い出し調査を行ったが、何も検出されなかった。埦を据えた後、３層分の埋め戻しを行い、そこで直径35cmの小型の底の付いた曲物を据えている。これに伴う遺物は他に見られなかった。２層分の埋め戻しを行いその上層において、再び祭祀を行っている。

井戸側上層での祭祀は、中央よりやや東よりの位置に拳大のチャート質の石を北に赤色のものと南に白色のものを並べて設置している。その後、牛の骨を石に被せるように配置している。この牛骨は、牛の頭部の一部分（左前頭骨）と右前足の一部分（中手骨・橈骨）左右後足の一部分（左中足骨・左距骨・右脛骨・右大腿骨）が牛骨の部位として確認できた。離れた部位の骨が、それぞれ固まって検出されることから、牛を解体した後に肉を取り除き、骨だけの状態になったものを個別に設置したものと考えられる。骨の観察では、解体時などに付く、切りわけた痕跡は見られなかった。

紅白の石と牛骨を供えたあとは、断面土層の観察から、それまでに比べて細かく土を入れて埋め戻しているようである。井戸を完全に埋め戻した後には、最後の祭祀として手のひら大の石もしくは須恵器などの土器の破片を井戸枠に沿うように並べており、あたかも井戸の存在を埋没後も強調するように配置されていた。配列された物の中には、用途不明の石製品が１点配置されていた。石材は砂岩質であり、長径15.5cm、短径13cm、厚み７cmで、片面は球面をしており、反面は平坦な面をしたものである。球面をした面には、中央から片方に偏ったところに直径３cm、深さ４cmの抉りが設けられている。この抉りは石の中心方向に斜めに穿たれている。出土状況として、この穴の方向は上に向けて設置されていた。

井戸の廃絶時期は、井筒内に据えられた埦などから12世紀前半と考えられる。上述したように、再三にわたる祭祀が行われたことが伺え、木材などの再利用が盛んに行われる中世の時代を考えると、大きな一枚板を抜き取らずに放置したまま、埋め戻しを行い、目に見える形で埋め戻しを終了していることなどから、なにがしかの重要な用途、もしくは重要な場所で使用されていた井戸である可能性がある。（川上）

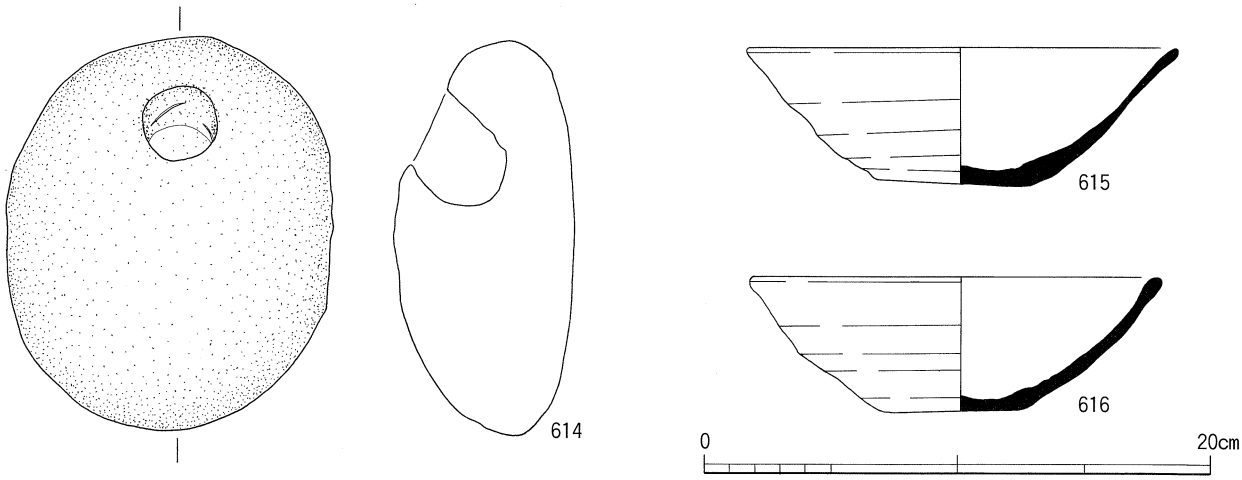


fig.171　ＳＥ302 出土遺物実測図

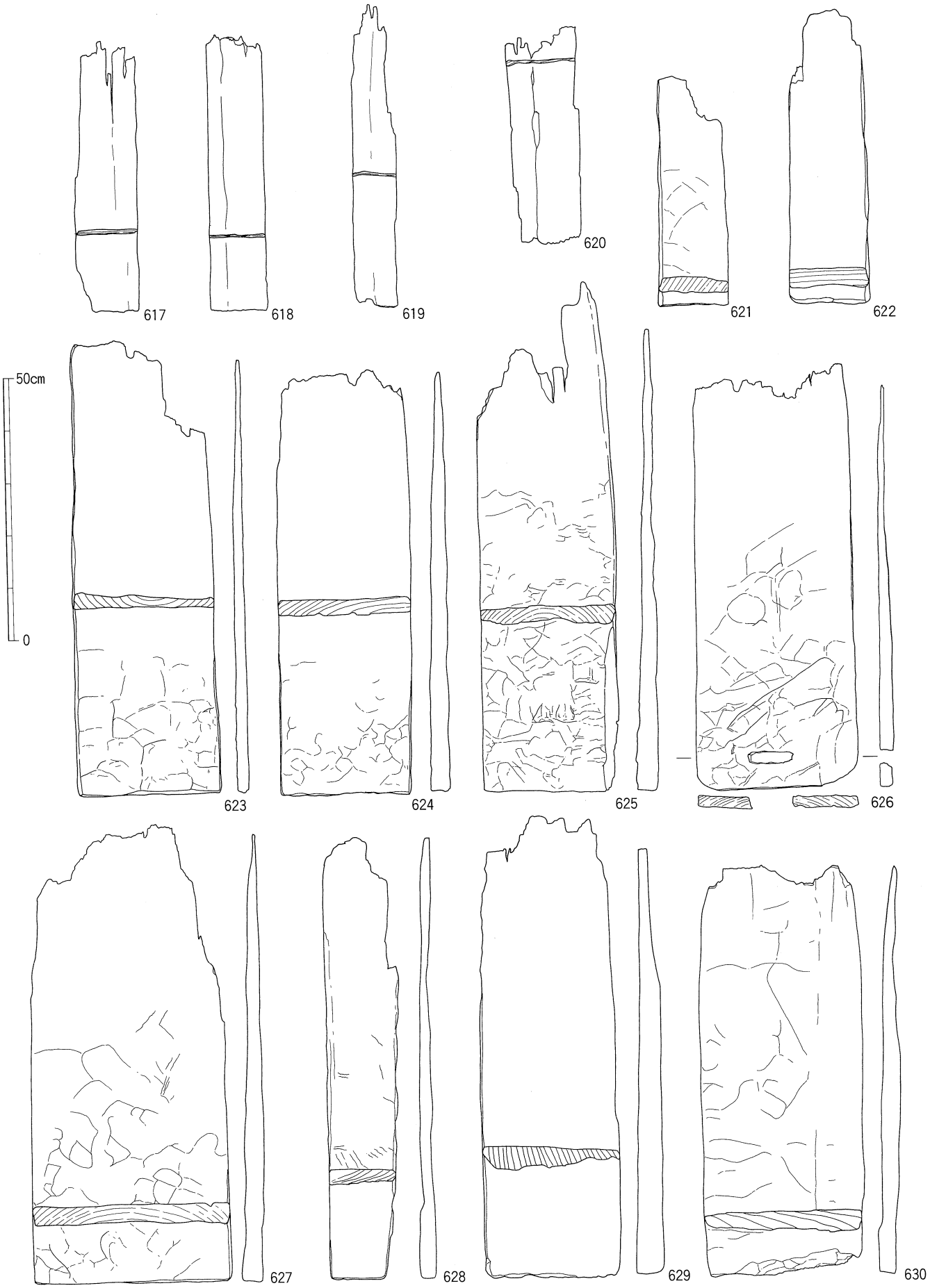


fig.172　ＳＥ302 出土木製品実測図（１）

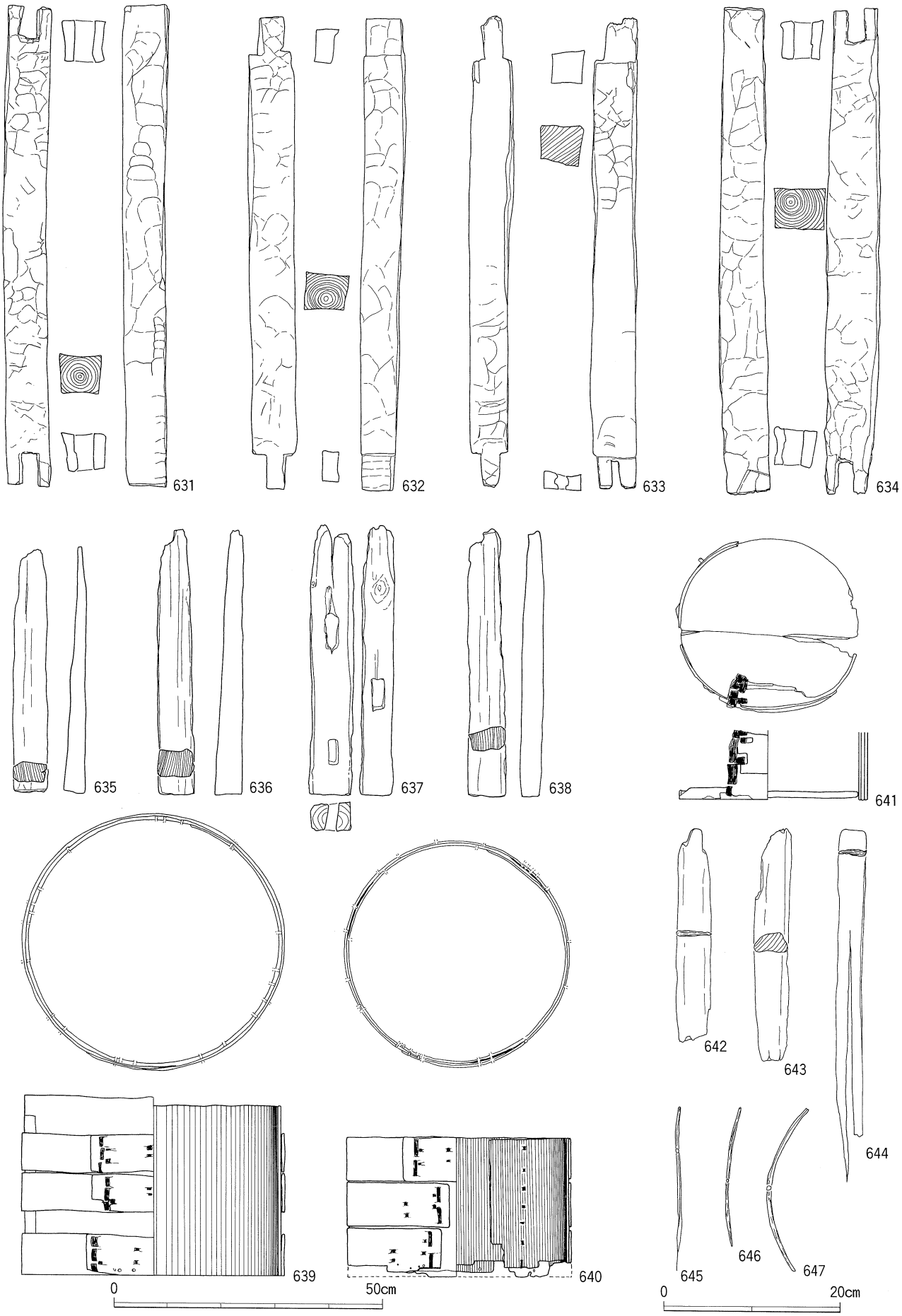
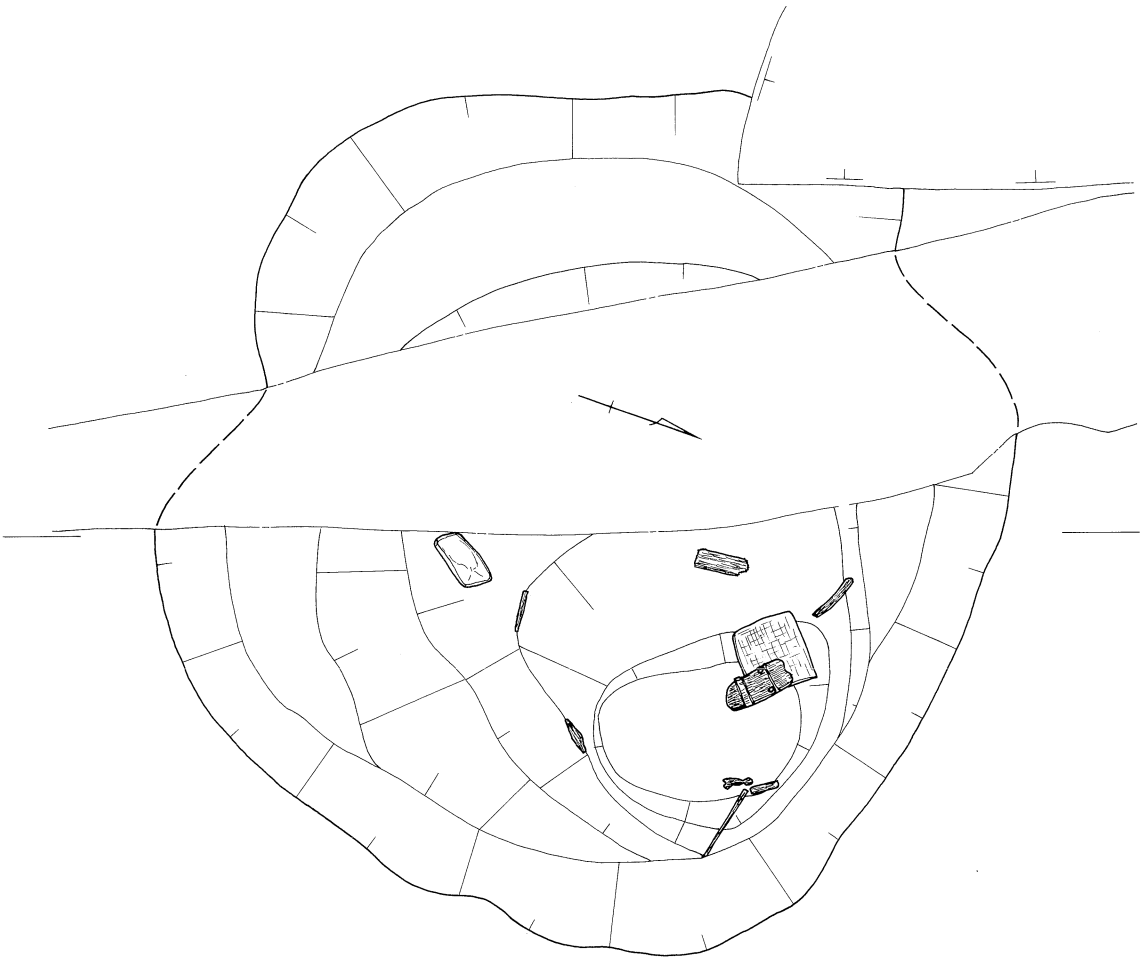
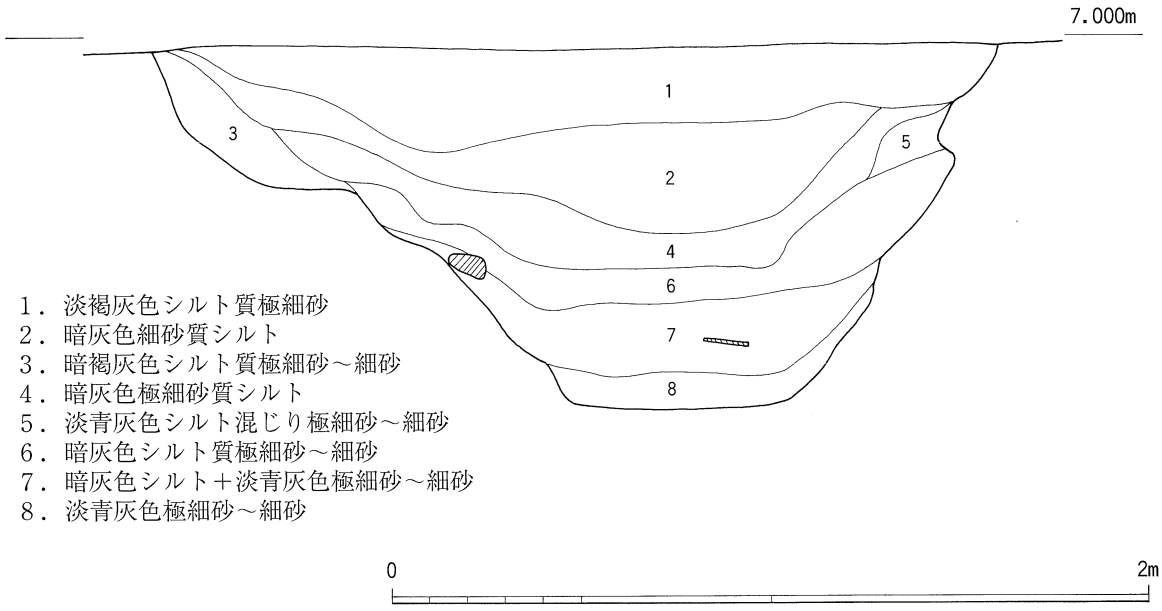


fig.173　ＳＥ302 出土木製品実測図（２）





1．淡褐灰色シルト質極細砂
2．暗灰色細砂質シルト
3．暗褐灰色シルト質極細砂～細砂
4．暗灰色極細砂質シルト
5．淡青灰色シルト混じり極細砂～細砂
6．暗灰色シルト質極細砂～細砂
7．暗灰色シルト＋淡青灰色極細砂～細砂
8．淡青灰色極細砂～細砂

fig.174　ＳＥ303 平面・断面図

ＳＥ303　　ＳＢ214の上面から切りこまれた井戸状遺構である。ＳＢ214の項でも触れたが、第５－１調査と第６－２調査の狭間で、未調査区を挟んでの調査であったため、井戸の底まで完掘できなかった。平面形は一辺2.0mの隅円方形と考えられる。直径2.2m、深さ1.0m以上で、断面形は漏斗状である。遺構内の堆積状況は、断面観察から堆積を繰り返しながら徐々に埋まっていったようである。

出土遺物は土師器片・須恵器片と下駄・曲物・木片などである。(648～653) は須恵器で、(648・651・652) は椀、(649・650) は皿、(653) は鉢底部である。(654・655) は土師器である。(655) は口径15cmの皿で、他の遺物より遡る時期のものであろう。

(656) は下駄である。残存状況は悪い。樹種同定の結果、針葉樹材である。(657) は長方形の曲物の底若しくは蓋板と考えられるが、図表面の左辺に４カ所の綴皮が残る。補修のためであろうか。また、裏面には不規則な多条の刻みが残る。また、網点で示した部分は焦げ痕である。樹種同定の結果板材は広葉樹材である。遺物より13世紀頃に埋没したものと考えられる。(口野)

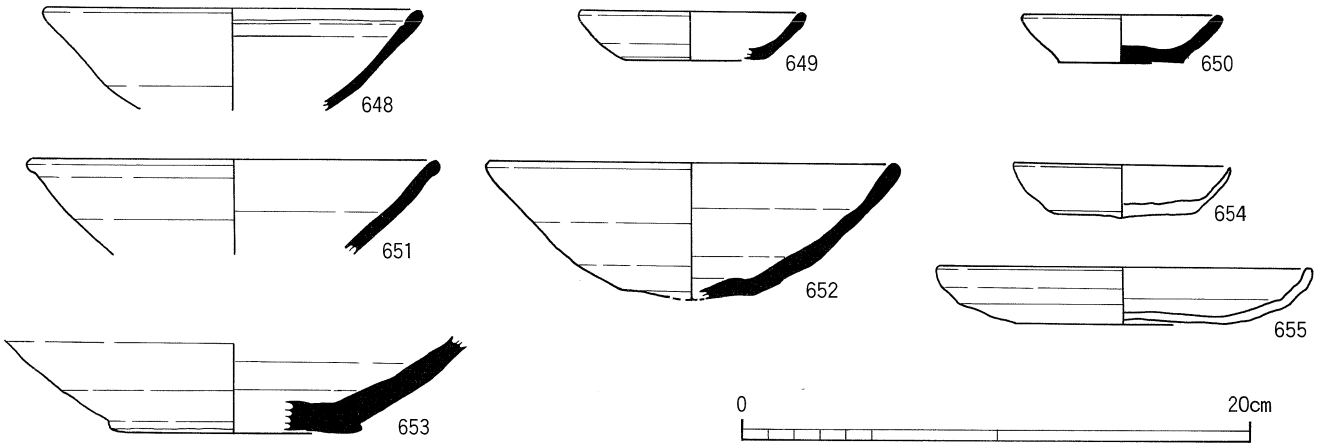


fig.175　ＳＥ303 出土土器実測図

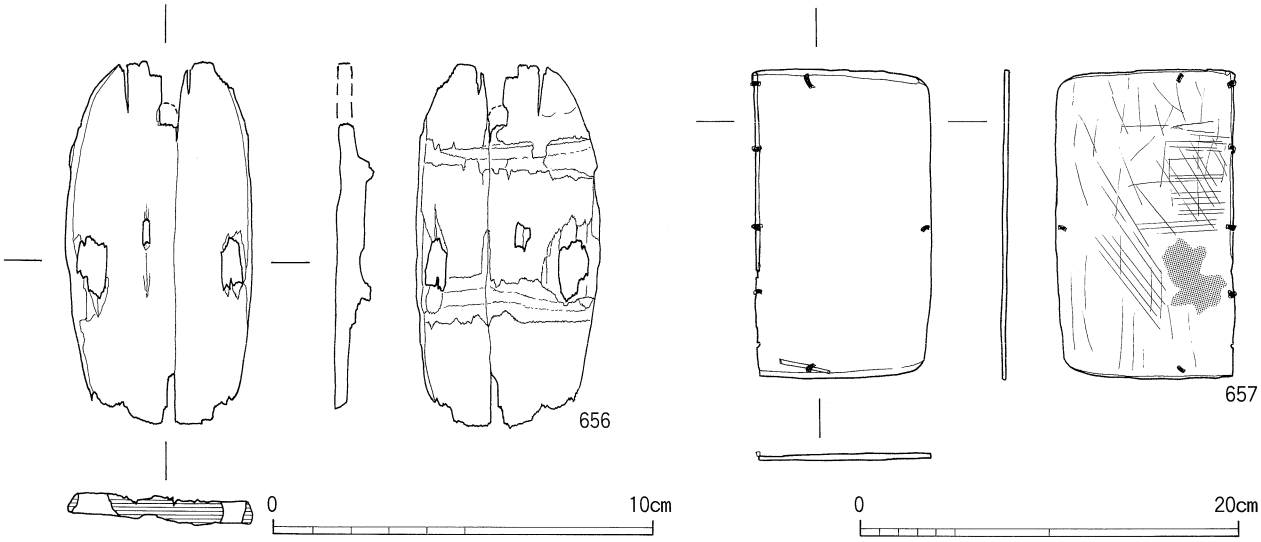


fig.176　ＳＥ303 出土木製品実測図（網かけ：炭化）

ＳＥ304　調査区の東端部で確認され、古墳時代の遺構ＳＸ215を切り込んでいる。直径1.1m、深さ1.1mを測る円形の井戸である。掘形の底に曲物が１段据えられていた。埋土から遺物はあまり出土していない。

図示できたものは、曲物のみである。

曲物（658）は直径45cmで、高さ約20cmが残存している。材はヒノキである。時期については、出土遺物が少ないことから明確ではないが、出土した土器の細片には鎌倉時代前半ころのものが多いようである。（前田）

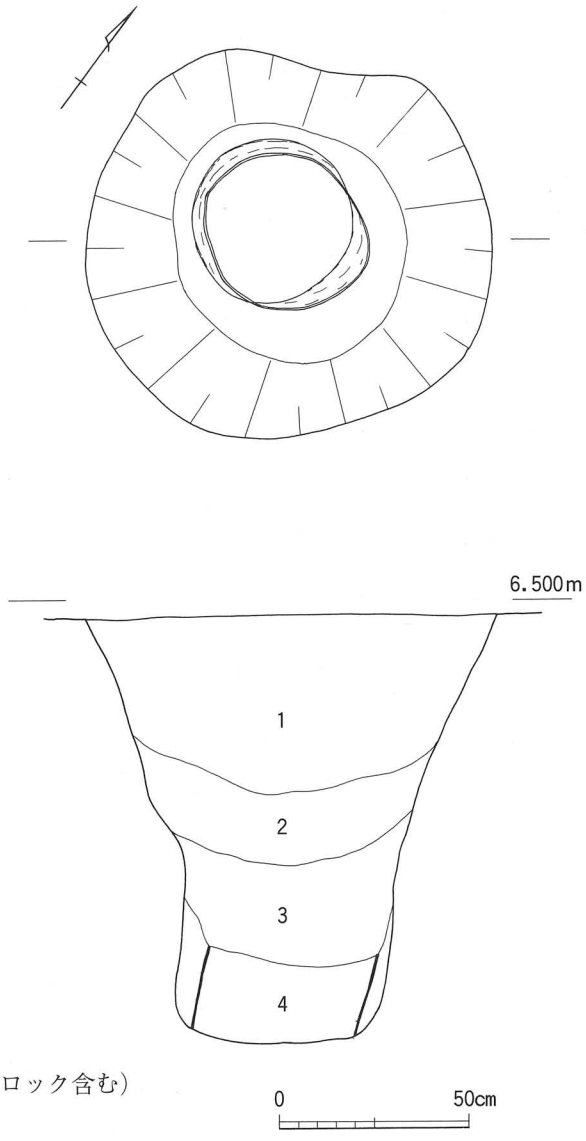


fig.177　ＳＥ304 平面・断面図
1．黒褐色シルト
2．黄灰色砂質土（粗砂混じり）
3．黒色粘土（灰オリーブ色シルトブロック含む）
4．黒褐色シルト（粘質強い）

挿図写真20　ＳＥ304（北から）

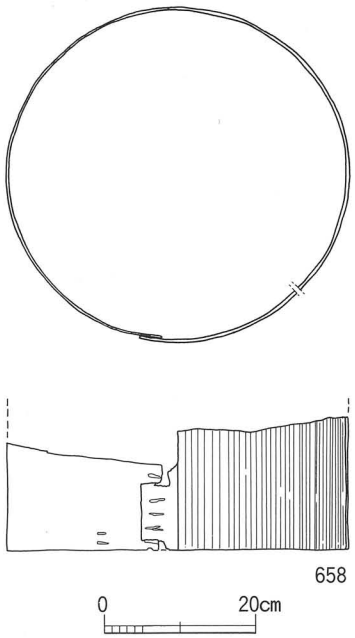


fig.178　ＳＥ304 出土木製品実測図

3．木棺墓

ＳＴ301　調査区の東端、古墳時代の遺構ＳＸ215を切り込む形で検出されたものである。ＳＸ215の埋土と墓壙掘形の埋土がよく似ていたため、墓壙掘形については検出することができず、棺底材を確認した段階で木棺墓と認識できたものである。

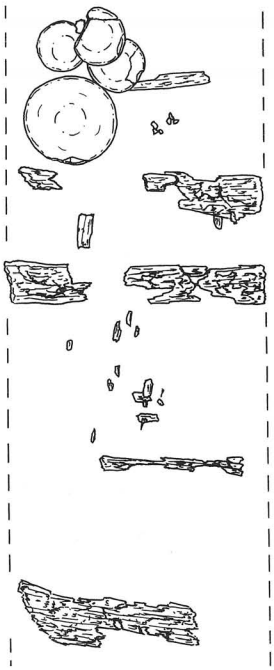
木棺の長さは1.0m以上で、幅0.5m以上である。棺内の北側に瓦器椀１点と土師器の小皿３点が置かれていた。また、この付近に右上顎の大臼歯３個分と小臼歯２個分が遺存していたことから、頭部は北を向いていたことが判る。

棺底材は、遺存していた材の状態から、横方向の板材を数枚組み合わせることで構成されていたようである。材の樹種はモミ属であった。

図示した遺物は、(659～661) が土師器小皿で、(662) が瓦器椀である。

(659・660) の口縁端部はやや上方へつまみ上げ気味に仕上げられている。(659～661) の調整は口縁部の内外面にはヨコナデ、底部の内外面はナデである。(662) は形骸化した断面三角形の低い高台を持つ。内面は磨滅のために暗文や調整は観察できないが、外面は口縁部がヨコナデ、体部がユビオサエの後にナデで仕上げられている。いずれも鎌倉時代前半の遺物であろう。(前田)

挿図写真21　ＳＴ301出土歯牙
（上段：小臼歯、下段：大臼歯）



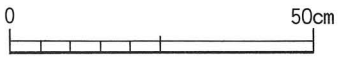
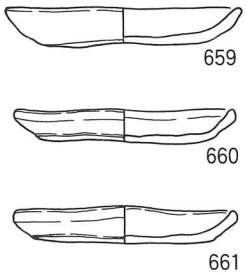


fig.179　ＳＴ301 平面図



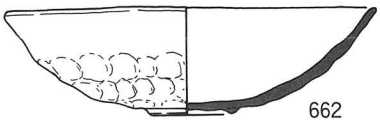


fig.180　ＳＴ301 出土遺物実測図

４．土坑

ＳＫ301　調査地の北東隅、ＳＥ301に隣接して検出した土坑である。直径126cmの円形で、遺構検出面からの深さは30cmを測る。緩やかな角度で掘り込まれており、底部は直径80cmの円形の平坦な面をしている。底の西端の傾斜変換点で直径10cm、深さ15cmのピットと、人頭大の焼けた石２個を検出した。（川上）

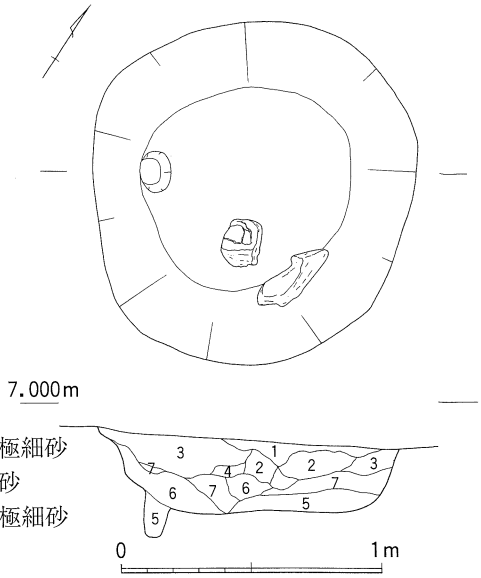


fig.181　ＳＫ301 平面・断面図

1．乳茶灰色シルト質細砂
2．濁黄褐色シルト質極細砂
3．乳茶褐色シルト質中砂
4．茶褐色シルト質細砂
5．暗黒灰色シルト質極細砂
6．黒灰色シルト質細砂
7．濁灰黄色シルト質極細砂

５．落ち込み等用途不明遺構

ＳＸ301　ＳＢ302の西側で検出した不明大型土坑。長径4.3m、短径3.2mの楕円形、遺構面からの深さは1.3mを測る。初期堆積層は、粗砂層で遺構面から50cm下がった斜面には鉄分の沈着が検出された。12世紀初頭と考えられる。（川上）

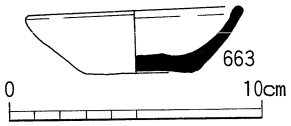


fig.183　ＳＸ301 出土遺物実測図

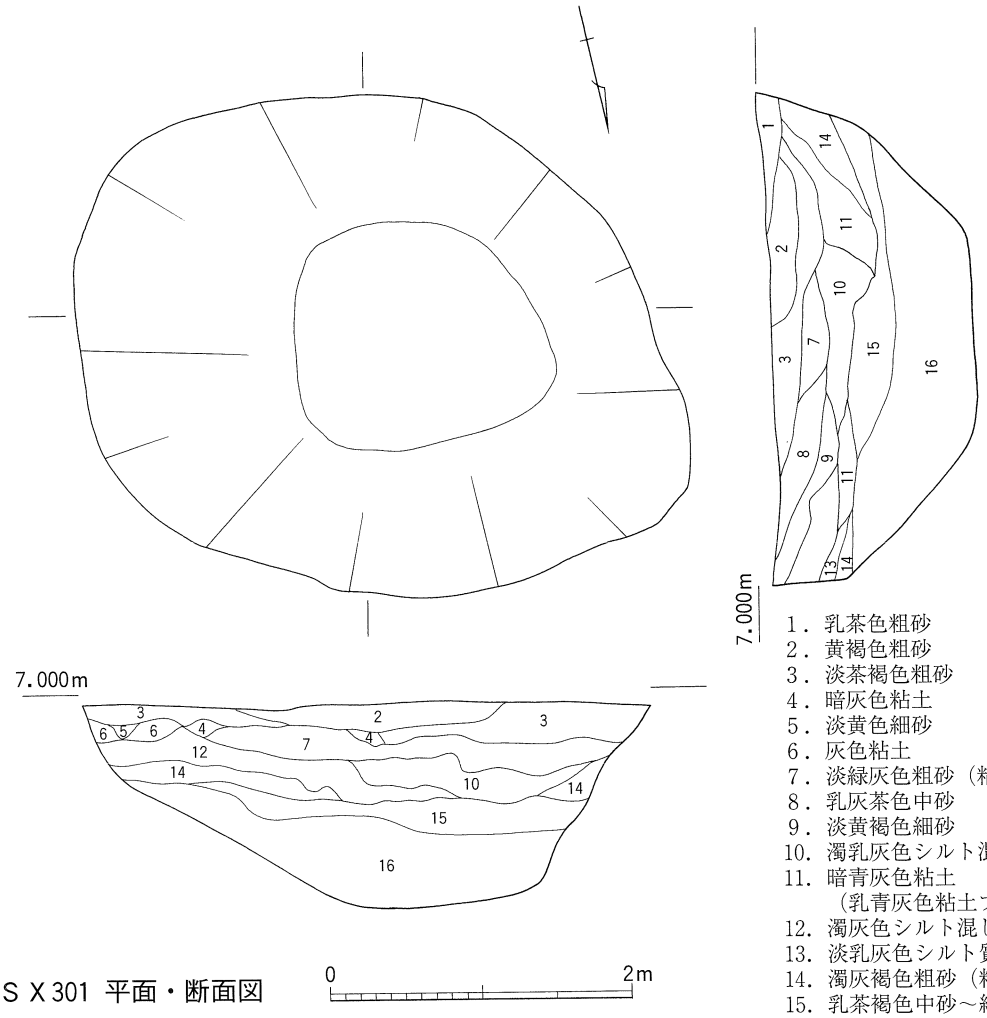


fig.182　ＳＸ301 平面・断面図

1．乳茶色粗砂
2．黄褐色粗砂
3．淡茶褐色粗砂
4．暗灰色粘土
5．淡黄色細砂
6．灰色粘土
7．淡緑灰色粗砂（粘土ブロック含む）
8．乳灰茶色中砂
9．淡黄褐色細砂
10．濁乳灰色シルト混じり中砂
11．暗青灰色粘土
（乳青灰色粘土ブロック含む）
12．濁灰色シルト混じり中砂
13．淡乳灰色シルト質極細砂
14．濁灰褐色粗砂（粘土ブロック含む）
15．乳茶褐色中砂～細砂
16．黄褐灰色中砂

S X 302　　調査区中央部の東端で確認された大型の落ち込みである。長径8.4m、短径7.0m、深さ1.2mを測る。平面形は楕円形で、断面形は一段浅い掘りこみをもったのちに、逆台形状をなしている。井戸の曲物を抜いた跡とも考えられたが、そのような痕跡は確認することができなかった。このような大型の落ち込みは、松野遺跡南側に位置する二葉町遺跡でも中世前半期に確認され、水溜め遺構などの機能が推定されているが、その用途についてはまだ明確にはできていない。

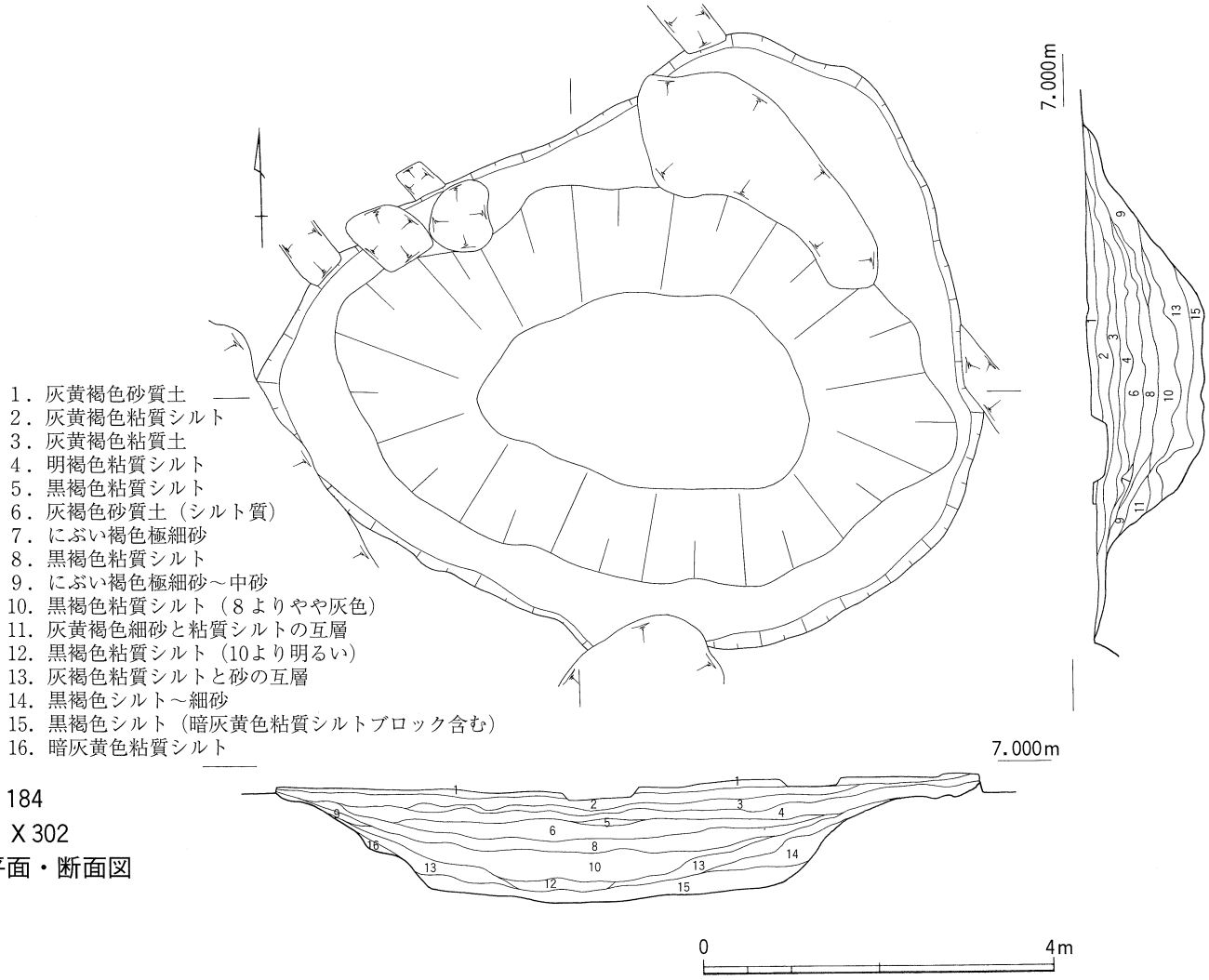


fig.184
S X 302
平面・断面図

（664～666）は土師器の小皿で、口縁部はヨコナデ、内外底面はナデで仕上げられている。（664）の内面には煤が付着している。（667・668）が瓦器小皿で、（667）は磨滅のため調整は不明で、（668）は口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面は指押さえの後にナデで仕上げられ、暗文は観察できない。（669～671）は東播系須恵器の椀で、（669・670）はやや内湾気味に体部が立ち上がり、（671）は体部が直線的に立ち上がり、口縁部付近でやや外反気味に仕上げられている。（672）は瓦器椀で、高台が断面台形を呈しているが、古い段階の高台とは異なる。口縁部はやや外反するように仕上げられている。箸（673）は残存長約15cm、直径は約0.5cm、断面形は不整円形で、材はコウヤマキである。いずれも鎌倉時代前半のものと考えられる。（前田）

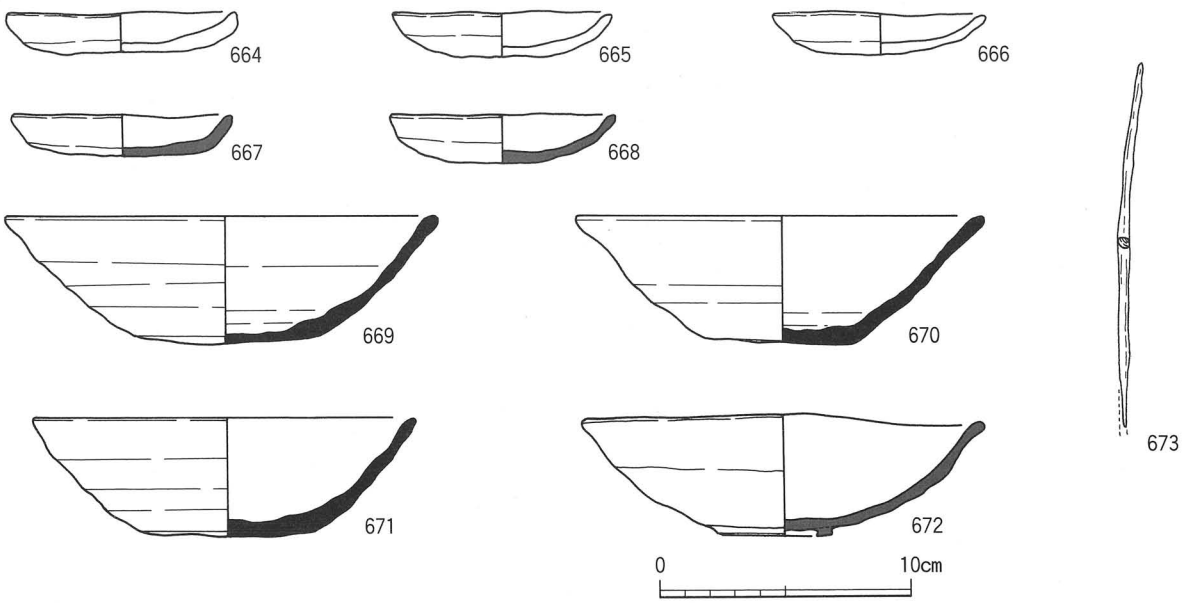


fig.185　ＳＸ302 出土遺物実測図

６．ピット

ＳＰ301　建物を構成する柱穴としては確認されなかったが、柱の沈み込みを抑えるために据えたと考えられる石と瓦が出土した。

石は最大長25cm、厚さ５cmの平坦面をもつものである。石の上面と小口面の一部に火を受けた痕跡が見られる。石の下層からは、石に潰されたような状態で軒丸瓦片が出土した。

この瓦（674）は八葉複弁蓮華文軒丸瓦で、瓦当の直径は14cmである。中房の蓮子は、１＋６個を配し、圏線を巡らせた外区には珠文を16個配している。

焼成はあまり焼けしまらず、やや軟質である。瓦当笵に詰め込む粘土は非常に薄く丸瓦と同じく折り曲げの手法を用いている。丸瓦部は粘土紐で形成している。

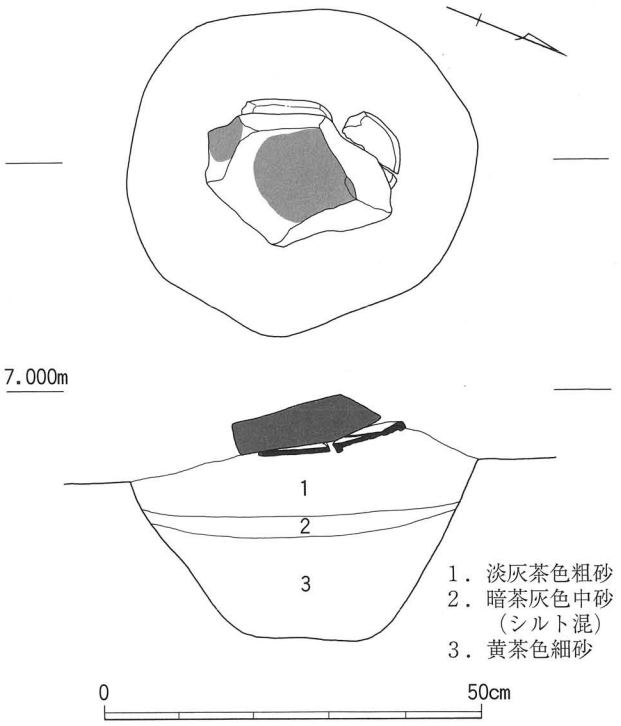


fig.186　ＳＰ301 平面・断面図

文様と瓦当の直径から播磨産の12世紀末のものと考えられる。

ＳＰ302　建物を構成する柱穴としては確認されなかったが、ピット内から完形の須恵器の埦（675）が据えられた状態で出土した。地鎮などの祭祀に使用されたものと考えられる。他には土師器の小片が出土している。これらの遺物から12世紀前半の遺構と考えられる。（川上）

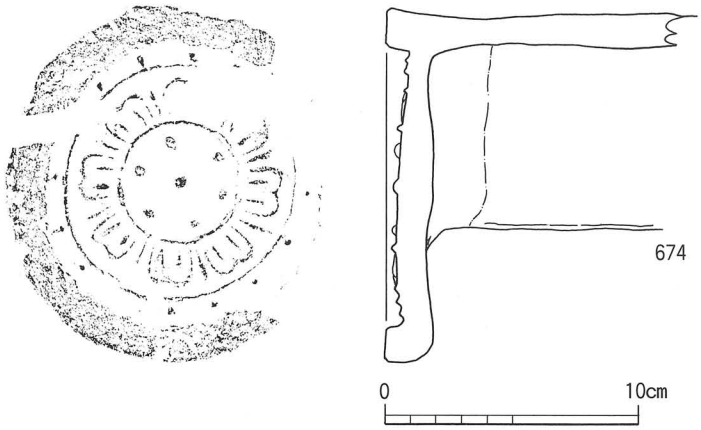


fig.187　ＳＰ301 出土瓦当実測図

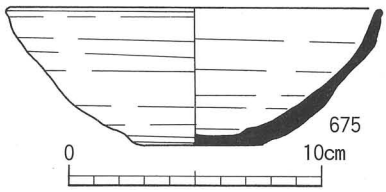


fig.188　ＳＰ302 出土遺物実測図

ＳＰ303　　ＳＢ304の北側で検出された直径0.3m、深さ0.3mのピットで、ＳＢ304の中央柱列線上に位置する。ＳＢ304が北側にさらに１間分拡張する可能性も考えられるが、ＳＰ303の東西ではややずれた位置にしか柱穴は検出されなかった。遺構内から須恵器椀・皿、土師器皿が出土した。(676～678) は底部外面に回転糸切り痕がみられ、その他は内外面を回転ナデで仕上げる。(679～681) は口縁部を回転ナデで仕上げ、底部外面には回転糸切り痕がみられる。(682・683) は口縁部内外面をナデで仕上げ、(682) の底部外面は指オサエ後粗いナデ、(683) の底部外面には回転糸切り痕がみられる。

小規模なピットから数多くの遺物が出土しており、地鎮の可能性を示唆するのであろうか。(口野・富山)

挿図写真22　ＳＰ303（南から）

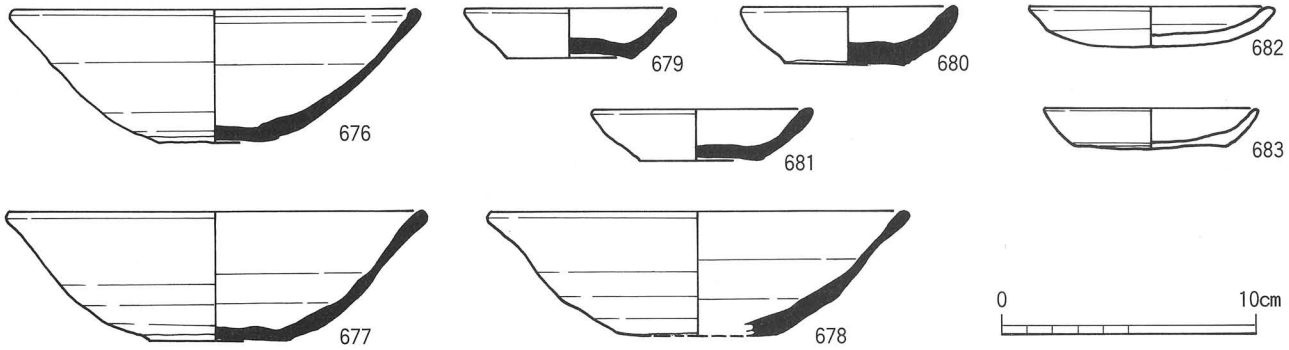


fig.189　ＳＰ303 出土遺物実測図

ＳＰ304　　ＳＸ201の南側で確認された直径約70cm、深さ約40cmのやや大型の円形ピットである。

埋土からは図示した須恵器椀（684）が出土している。口縁端部を丸く収める。体部は回転ナデで、底部外面は糸切り後未調整である。口径15.0cm、器高4.9cmである。鎌倉時代前半の土器と考えられる。（前田）

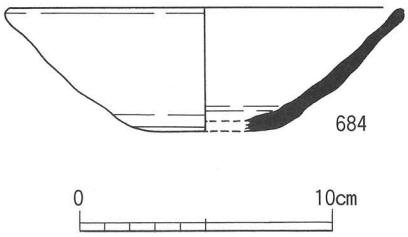


fig.190　ＳＰ304 出土遺物実測図

第４章　　若松町７丁目地区の調査

第１節　調査の概要

調査対象地の現況は、日吉２地区と同様に宅地で現代の生活により、遺構面は多く撹乱を受けている。

検出された遺構には、古墳時代中期から後期にかけての掘立柱建物や竪穴住居・井戸・溝などと鎌倉時代中頃の掘立柱建物や井戸などがある。

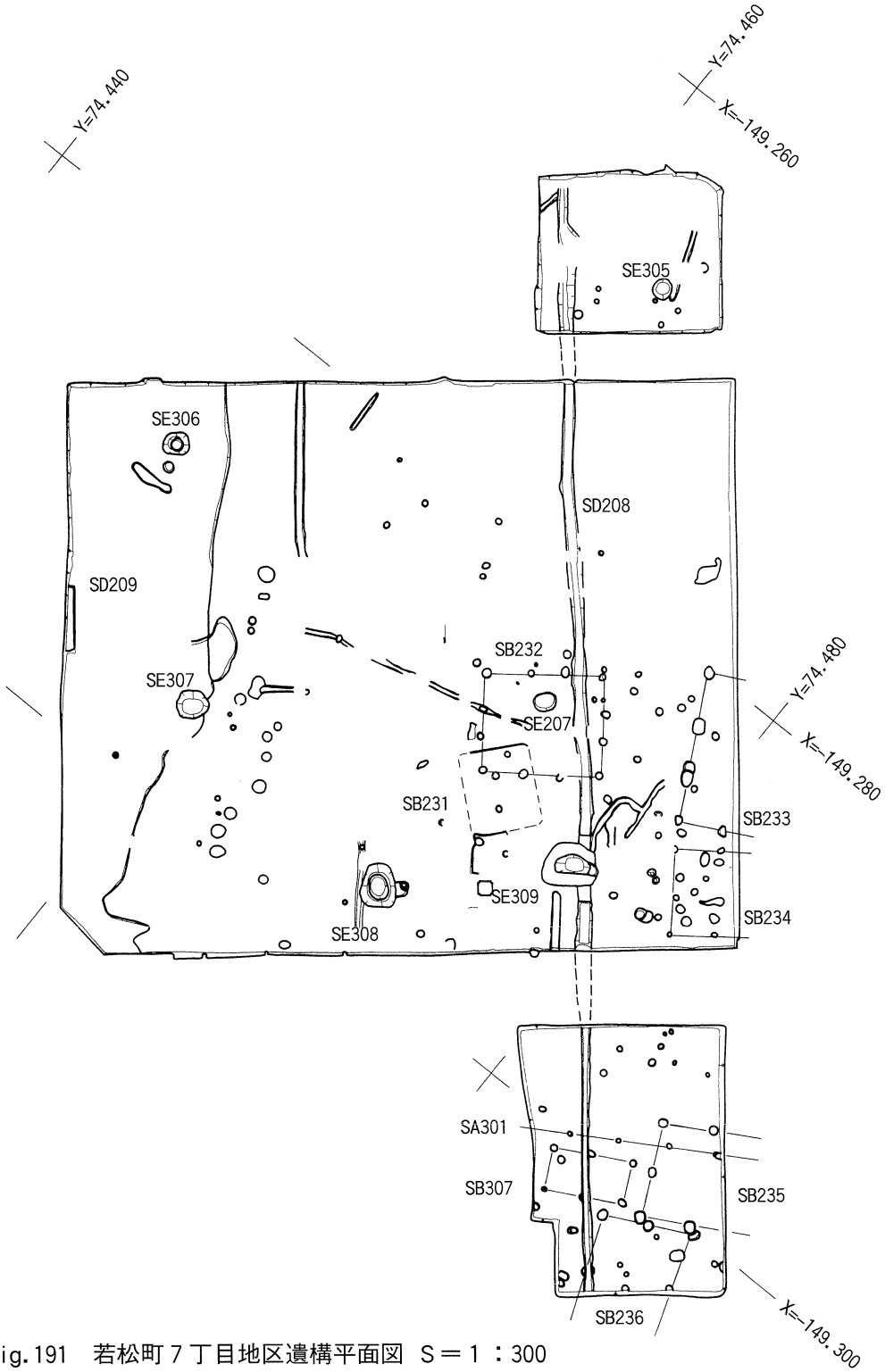


fig.191　若松町７丁目地区遺構平面図　S＝1：300

出土遺物については、遺構面の残存状況が悪く、全体に出土量は少なく、遺構内からの出土遺物も少なく、特記すべきものは少ない状態である。

基本層序　基本層序については、調査区東壁について述べる。ただし、第４次－２での東壁については調査の安全上土留めを行ったため、土層断面図は作成できなかった。このため、図示した断面図は、第６次－３と第５次－２の資料と第４次－２の北壁と南壁の断面図と遺構面の高さから復元して土層断面図を作成した。

層序は、現代盛土及び撹乱坑（１層）・黄灰色細砂（２層）・淡灰色細砂（３層）・黄褐色細砂シルト（４層）・灰褐色細砂シルト（５層、包含層）・黄褐色泥砂（６層、遺構面）となる。

遺構面は徐々に南に下がっていくが、後世の改変も加わって、調査区毎に段状に下がるように観察される。

３・４層は中世頃の洪水に起因する厚い堆積土で、中世頃の土師器・須恵器片が少量出土した。

５層は古墳時代の遺物包含層であるが、全体に残存状況が悪く、遺物の出土量も少量であった。

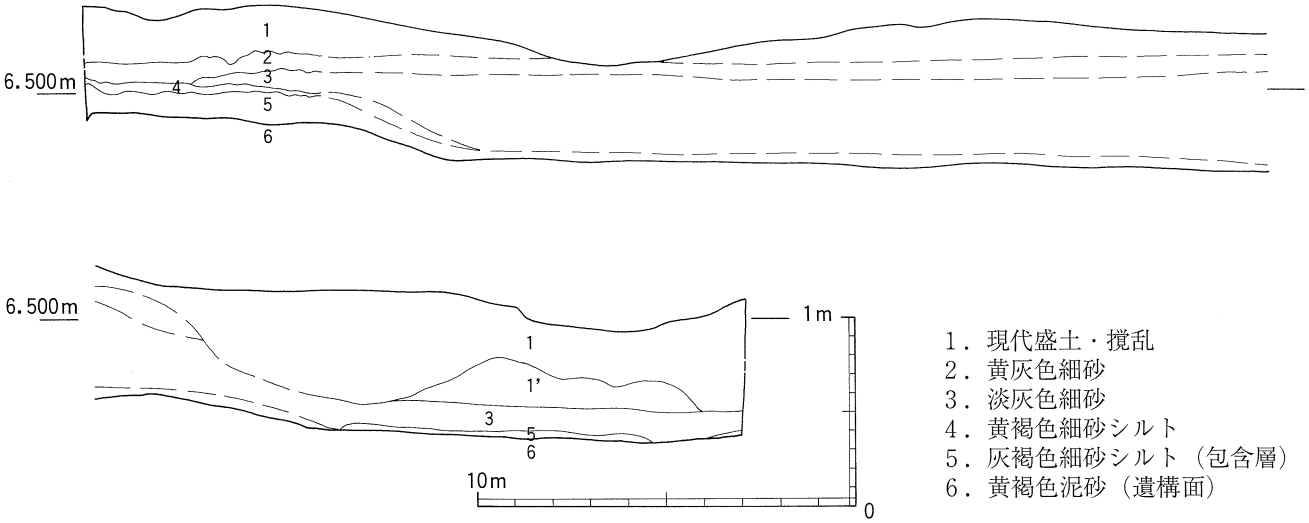


fig.192　若松７地区基本層序南北断面図

ＳＢ231　調査区南東部で検出された竪穴住居と考えられる遺構である。現代の建物の基礎などによって撹乱を受け、規模は不明である。遺構の残された部分から、１辺約4.0m前後の隅円方形の住居と推定される。深さは約0.1mで、周壁溝は存在しない。Ｐ１、Ｐ２は0.2m足らずと浅いが、住居の柱穴と考えられ、復元すると４本の支柱穴を持つ構造であったようである。中央や周辺に取りつく土坑などの存在は不明であった。床面からやや浮いた状態で、土師器甕・須恵器坏身が出土した。炭化材も床面からやや浮いた状態で検出された。検出状況から垂木と考えられる。炭化材そのものの残存状況も、決して良好とは言えない。

竪穴住居は日吉２地区でも９棟検出されており、いずれもあまり残存状況はよくない。しかしながら、焼失住居は当検出例が唯一である。このため、残存状況は悪く資料数も少ないが、炭化材のサンプル採集を行い、樹種同定の分析を行った。分析結果から、針葉樹

や広葉樹など周辺に存在する材で竪穴住居を構成していたようである（分析結果については、第６章第４節参照）。

ＳＢ231から出土した土器はfig.194に図示した。(685) は土師器甕で、胎土は粗く、調整も粗い粗製の甕である。(686・687) は須恵器坏でＴＫ47型式からＭＴ15型式に収まるものと考えられる。図示した遺物は火災による熱を受けている。

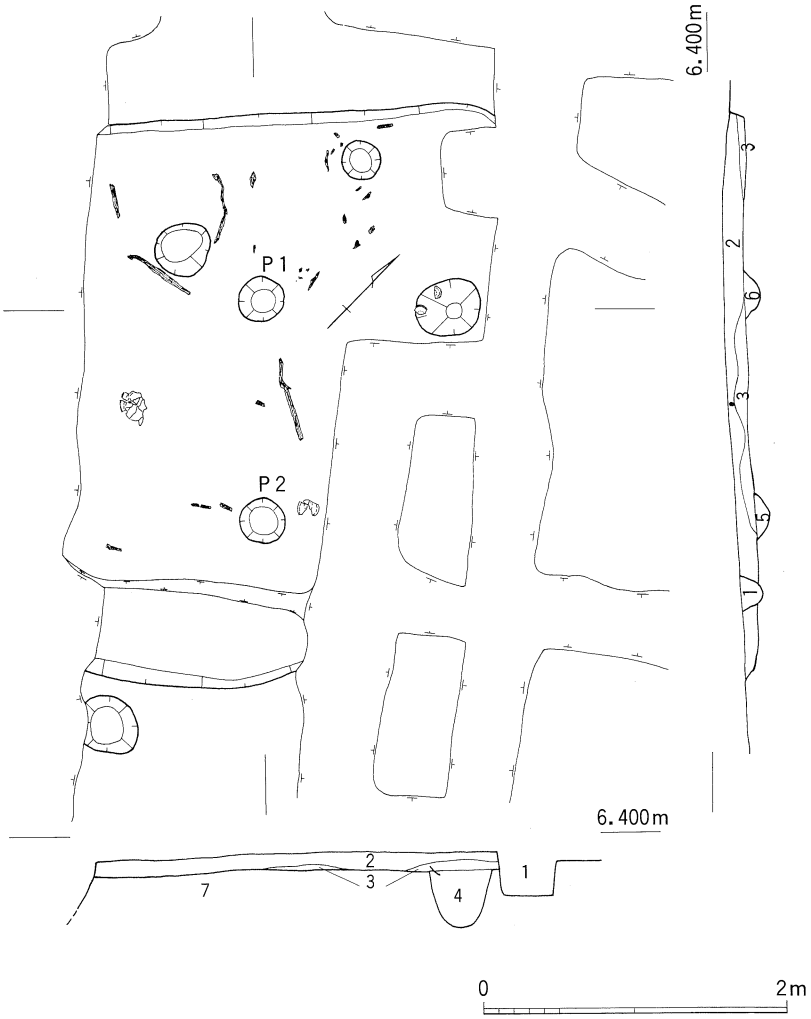
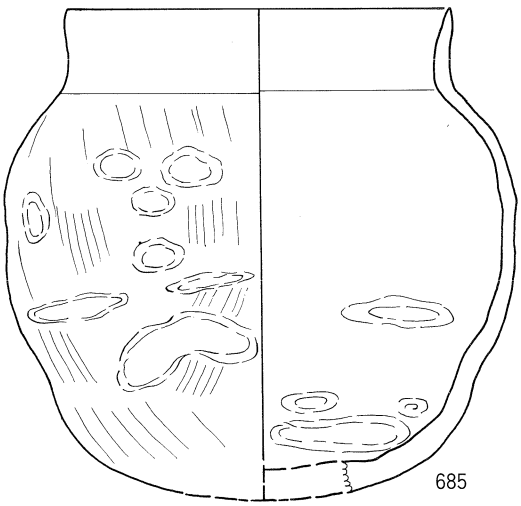


fig.193　ＳＢ231炭化材検出状況および平面・断面図

1．攪乱
2．茶褐色泥砂（炭を含む）
3．褐色泥砂
4．茶褐色混礫泥砂（SB232-P3）
5．淡茶褐色泥砂（P1）
6．茶褐色泥砂　（P2）
7．暗黄褐色泥砂（小礫を含む）



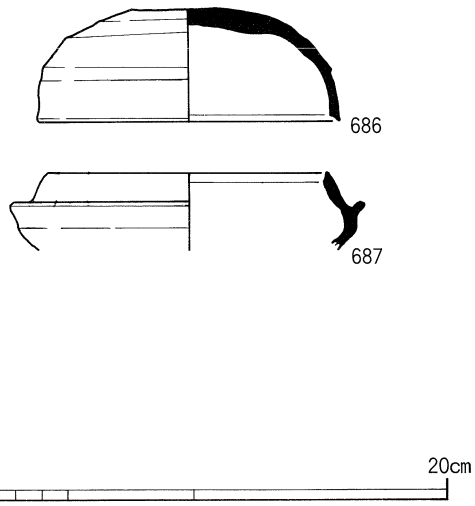


fig.194　ＳＢ231 出土遺物実測図

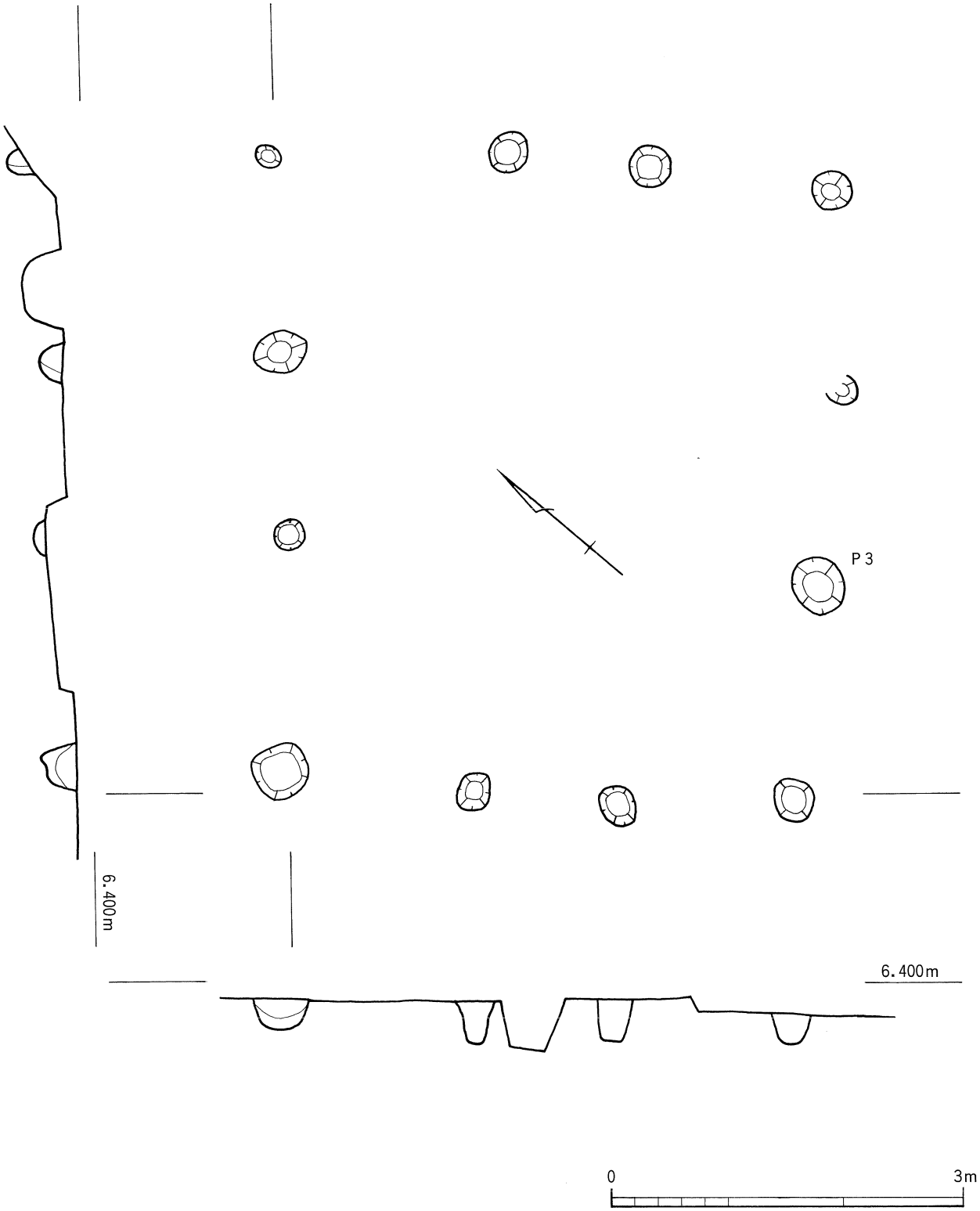


fig.195　ＳＢ232 平面・断面図

ＳＢ232　　３間×３間で、南北柱間1.3m・1.5m、東西柱間1.6m・1.8mの側柱建物である。柱間距離は不揃いな建物である。また、ＳＢ232の柱穴Ｐ３・４がＳＢ231を切っており、ＳＢ232がＳＢ231より新しいことがわかる。

Ｐ３から出土した須恵器坏身（688）はＳＢ231の型式より新しく、ＭＴ15型式あたりの

型式が考えられる。また、底部外面には１条のヘラ記号がある。その他の柱穴からは微量の土師器・須恵器片が出土した。

ＳＢ233　３間×１間以上の調査区外に延びる建物で、東西柱間2.0m、南北柱間2.1mである。

ＳＢ234　ＳＢ234も同様、２間×１間以上の調査区外に延びる建物である。東西柱間2.0m、南北柱間2.1mである。

ＳＤ208　第６次－１調査区から第６次－３・第４次－２調査区を経て、第５次－２調査区まで連続する溝状遺構である。第４次－２調査区では、幅約0.6m、深さ0.3～0.4mの規模である。第５次－２調査区の南端あたりでは、幅約0.3m、深さ0.1m程の規模となる。遺構面の削平が著しいためであろうか、溝の断面形は緩いＵ字形である。古墳時代後期の土師器片、須恵器坏・甕片が少量出土した。

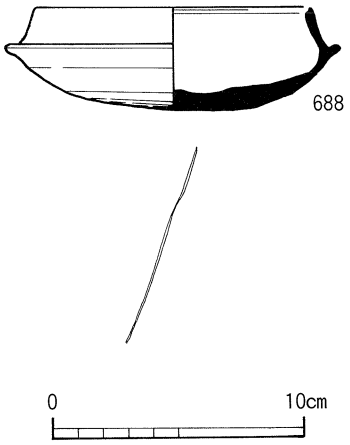


fig.196　ＳＢ232-Ｐ3 出土遺物実測図

調査の概要では触れなかったが、溝の断面図から第６次－３・第４次－２調査区では、遺構面の標高は6.3m前後前後である。第５次－２調査区の南端では5.9mと6.0mを切る。また、第４次－２調査区ではＳＤ209へ向かって徐々に下がる。さらに、ＳＤ208から東方向へもやや下がり、ＳＢ231・232の周辺がやや高い箇所であることがわかる。

第６次－１調査区の北端から第５次－２調査区の南端まで70m以上直線的に連続する溝状遺構と考えられ、何らかの区画を示すものである可能性が考えられる。

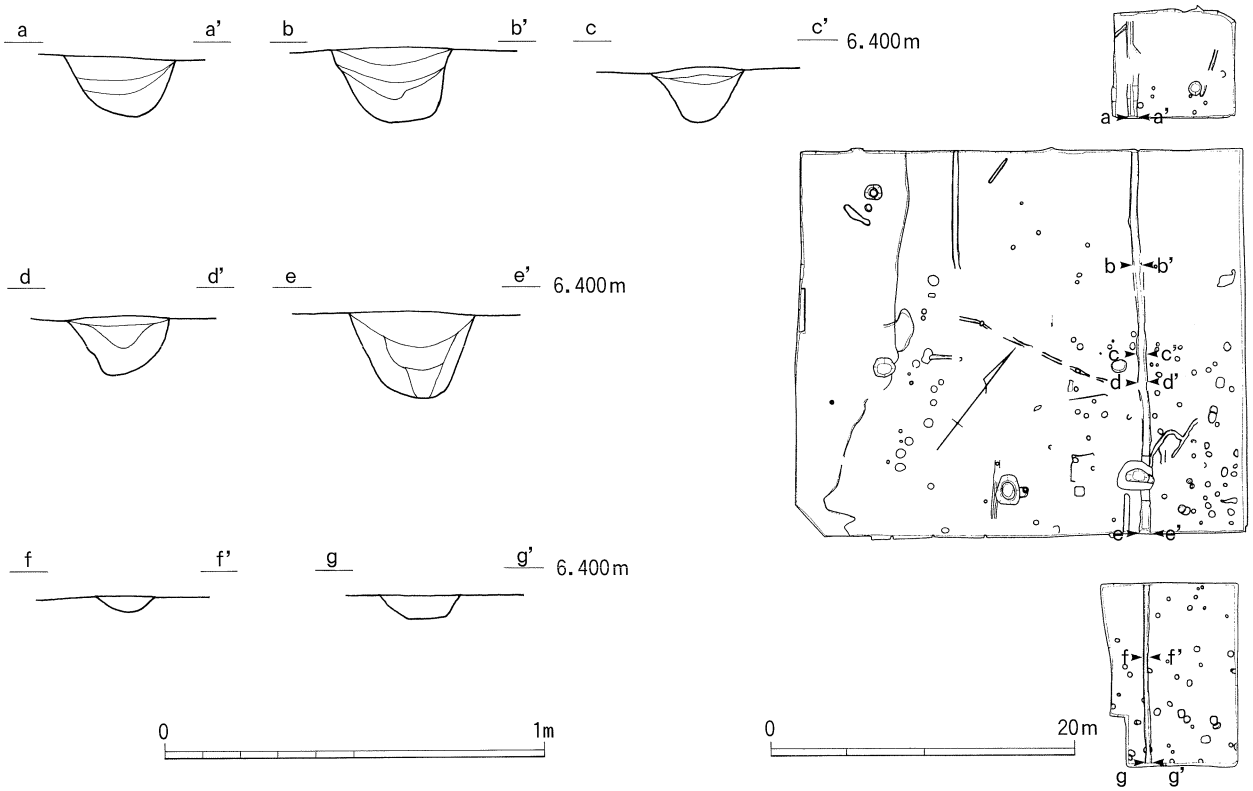


fig.197　ＳＤ208 平面・断面図

ＳＤ208から西に約12mにほぼ平行に走る溝状遺構があるが、ＳＤ208より規模が小さく、また、溝が走ると推測される南側は攪乱を受け、比較対照することができない。

ＳＤ209　調査区西辺で検出された深さ約0.2mの浅い溝状遺構である。遺構名は溝状遺構としたが、西へ緩やかに下がる地形が検出されたものとして考える方が妥当である。古墳時代の土師器片・須恵器片が少量出土している。この状況は日吉２地区の南西部と同様の状況である。

前述したが、遺跡の残存状況が悪い。このため、遺構の堆積土の色によって時期を判断する基準とした。大まかには、古墳時代の遺構の堆積土は基本的に茶褐色系を呈し、中世のそれは灰色を呈する。

第４次－２調査区では、溝状遺構が数条検出されたが、いずれも狭く浅い溝で、多くの部分で攪乱を受け、性格が明らかになるものはなかった。また、ピットは調査区に散在的に検出されたが、その多くは東南部に集中している。その他に検出されたピットは散在的で、建物などにまとまるものはないようである。

ＳＥ207　調査区西部中央で検出された井戸状遺構である。直径約0.8m、検出面からの深さ1.1mの素掘りの井戸である。断面はＵ字形で、微量の須恵器が出土した。（口野）

第６次－３調査　第６次－３調査では、ＳＤ208のほかに、ＳＥ305や溝状遺構・ピットが検出された。

ＳＥ305　直径約0.8m、深さ約0.6mの円形を呈する井戸状遺構からは、中世の土器片が少量出土している。埋土に木質は認められず、断面観察においても井戸枠となるべき土層を示していないことから、素掘り状の遺構と考えられる。（中居）

ＳＥ306　調査区北西部で検出された井戸状遺構である。検出面は攪乱坑などによって損なわれているが、直径約1.1mの円形であると推定される。深さ1.2mで、断面形はＶ字形である。

遺物は堆積層のほぼ中間から、土師器皿２・瓦器皿２・須恵器椀１・土師器羽釜片１・箸２・木片・昆虫の羽などが出土した。また、同様の層位から赤と白と暗灰色のチャートの拳大からこれよりやや大きな礫が出土した。井戸を埋め戻す際のマツリに使用した遺物であろうか。

（689）は須恵器、（693・694）は瓦器である。これらの出土土器からみて13世紀頃に埋め戻された井戸と考えられる。

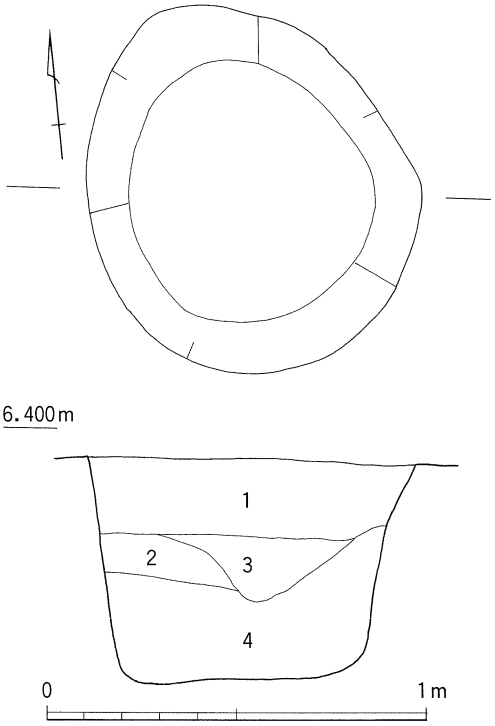
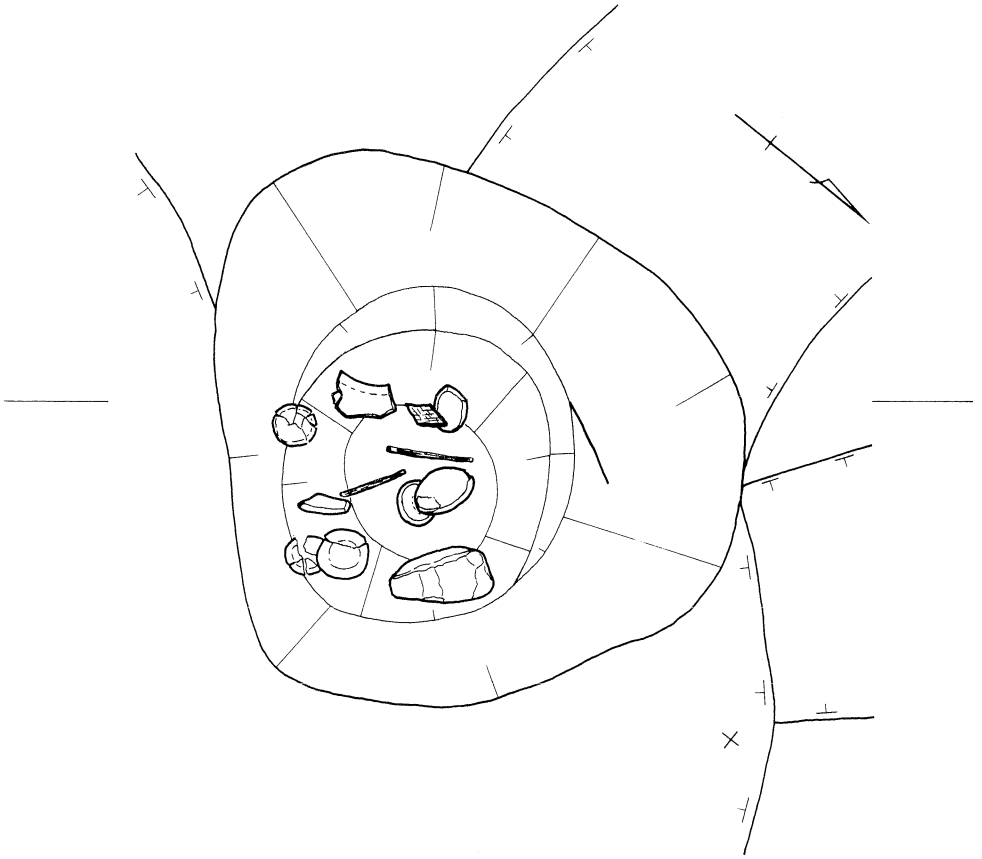


fig.198　ＳＥ305 平面・断面図
1．灰褐色細砂シルト
2．淡黄灰色細砂シルト
3．灰褐色極細砂シルト
4．黄灰色細砂シルト



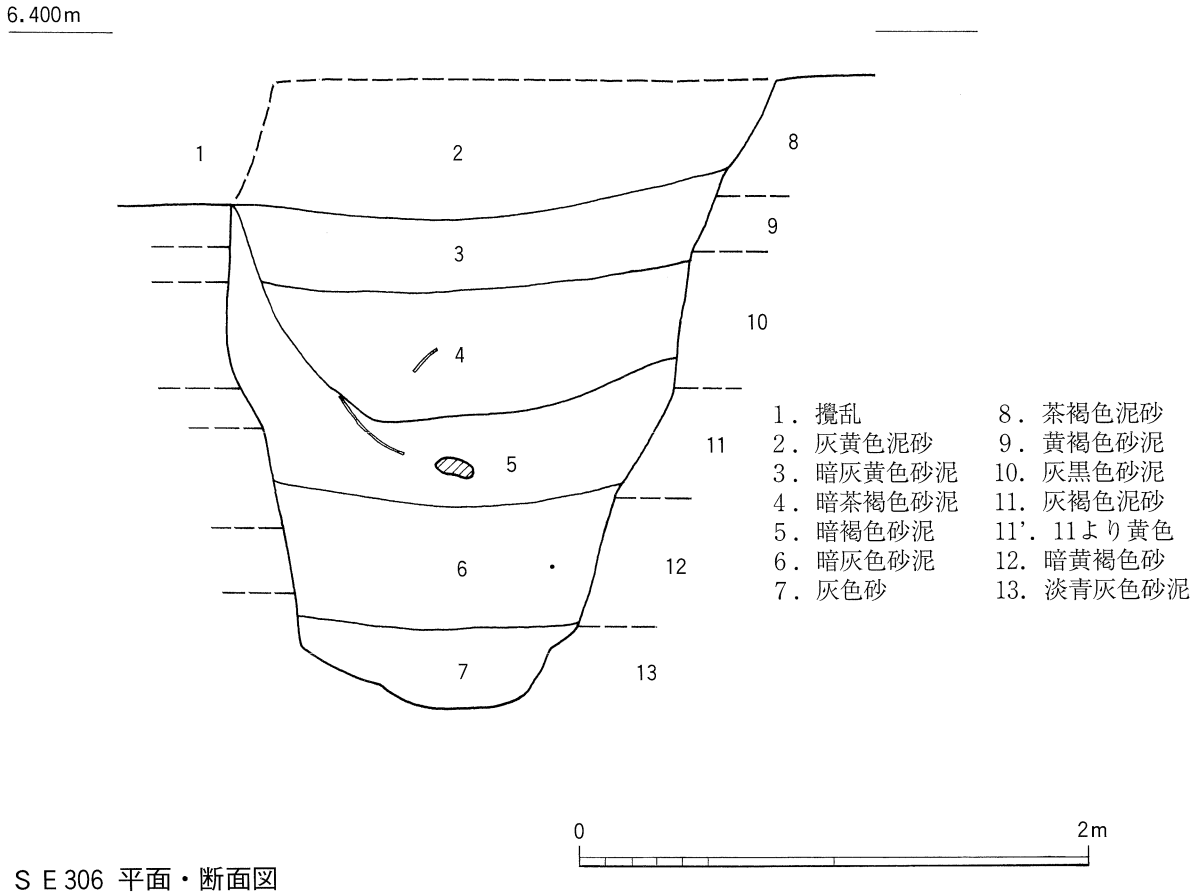


fig.199　ＳＥ306 平面・断面図

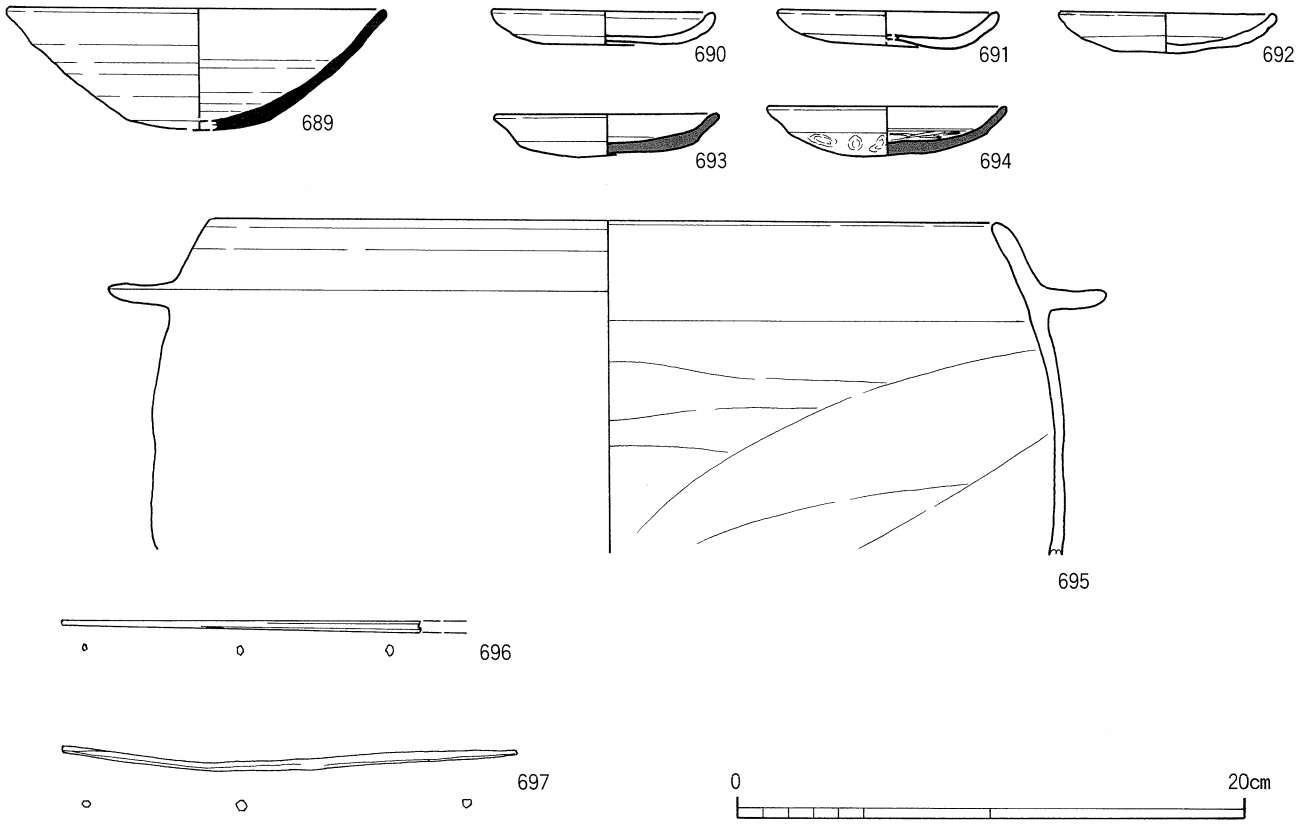


fig.200　ＳＥ306 出土遺物実測図

ＳＥ307　調査区北西部で検出された井戸状遺構である。直径約1.2m、深さ0.8mの規模で、断面形はＶ字形である。微量の土師器・須恵器が出土した。ＳＥ307・308・309の堆積土は、断面観察から周囲の土がブロック状に入っている。比較的短期間の使用後、埋め戻されてしまったのであろうか。また、埋め戻しの際の遺物なども検出されなかった。これらに比べ、ＳＥ306の堆積土は均質な土層となり、一定の期間の使用と埋め戻しの儀礼が存在する。この両者の相違は何であろうか。また、井戸に赤や白などの石を入れる井戸の類例などがあることから、今後検討したい。

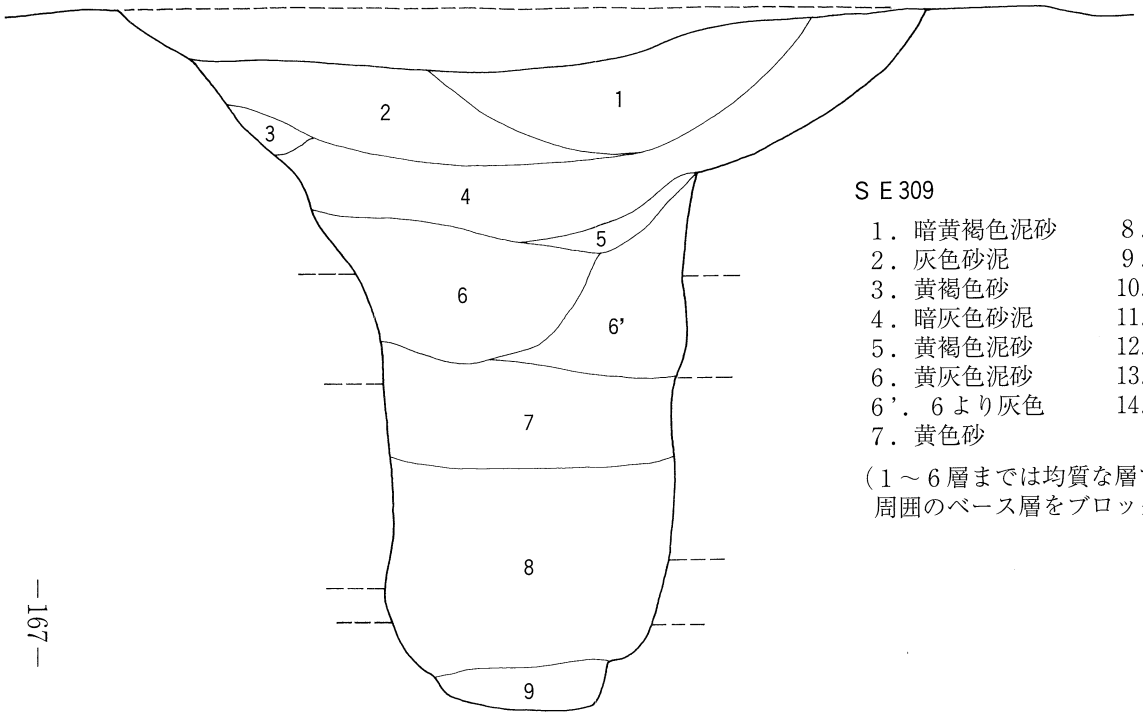
ＳＥ308　第４次－２調査区南部で検出された井戸状遺構である。平面形は整円ではなく、長径2.1m、短径1.8m、深さ1.2mの規模で、断面形は緩やかなＶ字形である。微量の土師器・須恵器が出土した。また、ＳＥ308の西側でＳＥ308に切られる溝状遺構が検出された。幅約0.3m、深さ0.1mの規模で、微量の土師器・須恵器が出土した。中世の時期に属する遺構と考えられる。

ＳＥ308の検出された現代の建物の基礎の撹乱坑で囲まれた部分は、中世の遺構が古墳時代の包含層を切り込んでいることが判明し、さらに、古墳時代包含層の掘削後に２ヵ所のピットが検出された。しかしながら、このＳＥ308に切られる溝状遺構は、北にも南にも検出されず、中世の遺構も他の箇所では残存状況が非常に悪いことが確認できた。

ＳＥ309　調査区南東部で検出された井戸状遺構である。平面形は卵形で、長径2.2m、短径2.0m、深さ1.8mの規模で、断面形は喇叭形を呈す。微量の土師器・陶器が出土した。

fig.201　ＳＥ207・ＳＥ307・308・309 断面図

6.400m

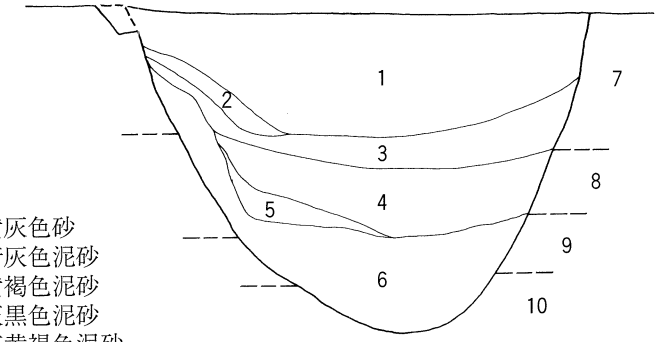


ＳＥ309

1．暗黄褐色泥砂
2．灰色砂泥
3．黄褐色砂
4．暗灰色砂泥
5．黄褐色泥砂
6．黄灰色泥砂
6'．６より灰色
7．黄色砂
8．黄灰色砂
9．青灰色泥砂
10．黄褐色泥砂
11．灰黒色泥砂
12．暗黄褐色泥砂
13．灰白色砂泥
14．黒色粘質砂泥

（１～６層までは均質な層ではなく、
周囲のベース層をブロック状に含む）

6.400m

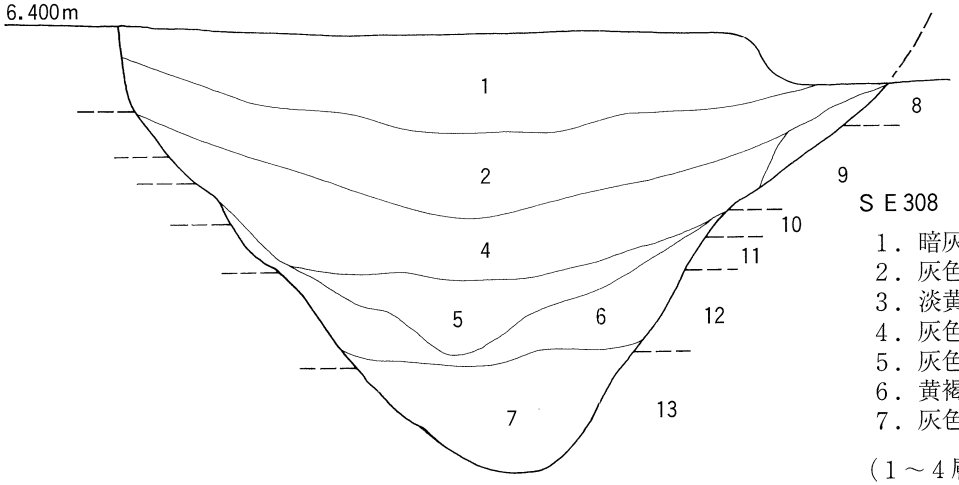


ＳＥ307

1．灰色泥砂
2．黄灰色砂
3．暗灰色砂泥
4．暗黄灰色泥砂
5．黄色砂
6．暗青灰色粘質砂泥
7．黄褐色泥砂
8．灰黒色砂泥
9．黄灰色泥砂
10．淡褐色砂

（１層は７・８層をブロック状に含む）

6.400m

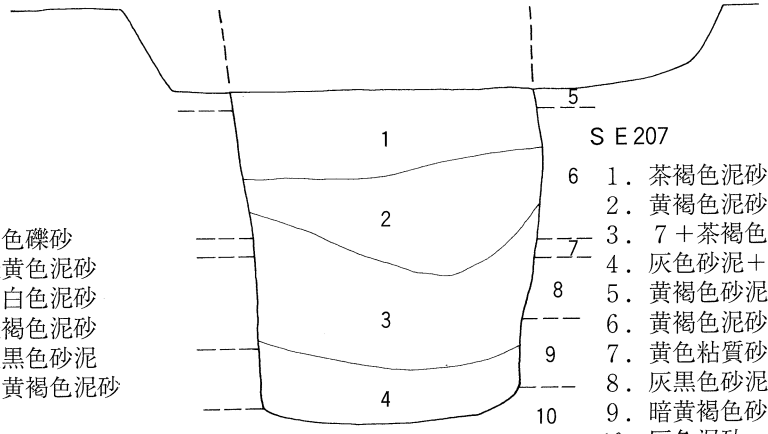


ＳＥ308

1．暗灰泥砂
2．灰色泥砂
3．淡黄色泥砂
4．灰色・黄灰色泥砂
5．灰色砂泥
6．黄褐色泥砂
7．灰色砂
8．褐色礫砂
9．淡黄色泥砂
10．黄白色泥砂
11．淡褐色泥砂
12．灰黒色砂泥
13．濁黄褐色泥砂

（１～４層までは均質な層ではなく、
周囲のベース層をブロック状に含む）

6.400m



ＳＥ207

1．茶褐色泥砂＋黄褐色砂泥
2．黄褐色泥砂＋茶褐色泥砂
3．７＋茶褐色砂泥
4．灰色砂泥＋８
5．黄褐色砂泥
6．黄褐色泥砂
7．黄色粘質砂泥
8．灰黒色砂泥
9．暗黄褐色砂泥
10．灰色泥砂

0　2m

第５次－２調査　遺構検出時に、土師器・須恵器片が少量出土し、微量のサヌカイト片も出土した。いずれも少量細片で図化できるものはなかった。溝状遺構１条とピット40ケ所足らずが検出された。

ＳＢ235
ＳＢ236　ピットは柵と建物とにまとまるようである。ＳＢ235は東西・南北柱間距離2.1mで、２間×２間以上検出され、調査区東側へ延びるようである。ＳＢ236は東西柱間距離2.0m、南北柱間距離2.3mの２間×２間以上の調査区東南へ拡がる掘立柱建物である。ＳＢ235・236を構成する柱穴の規模は長辺0.5m、短辺0.4mで、比較的大きな掘形であるが、深さは非常に浅く、0.1～0.2m程度である。

ＳＡ301　柱間距離2.1mで、３間分以上検出された。柱穴の規模は直径0.2m前後であるが、他の柱穴に比べ約0.3mと深いものである。柵を構成する柱穴の埋土は褐色泥砂である。調査区東端では柱穴の切り合いがあり、灰色の埋土の柱穴が褐色の埋土の柱穴を切る。単純にこれまでの調査で得られた知見から、灰色の埋土の柱穴が中世であれば、SA301は古墳時代のものとする可能性もある。

ＳＢ307　東西・南北の柱間距離1.9mで、２間×１間の小規模な掘立柱建物である。柱穴規模とその埋土から、時期は中世に属する建物と判断した。

第２節　小　結

基本層序でも触れたが、良好な遺物包含層はほとんど存在せず、また、遺構は日吉２地区に比べて、より残存状況が悪く、後世の水田や畑によって削平を受けているものと考えられる。このような状況から調査区内からの出土遺物は少なく、時期を決定しうるものは少ないが、層序とわずかな遺物から古墳時代後期としておきたい。

なお、第５次－２区と前年度調査の第４次－２区は約４m離れており、第４次－２区南西部の建物と第５次－２区と建物のつながりは不明のままである。

しかしながら、遺跡の残存状況が悪くなるものの、ＳＢ231・232などの住居や井戸などの遺構が存在し、生活の空間は存在している。そして、遺跡はさらに南側に拡がっているものと考えられる。（口野）

第５章　　若松町６丁目地区の調査

第１節　調査の概要

松野遺跡第７次調査は、南北27m、東西17mの420m²について実施した。調査区は標高約５mのほぼ平坦な地形に位置しており、調査の都合上東西に分割して行っている。確認された遺構には、井戸、溝状遺構、掘立柱建物、鋤溝、ピットがある。

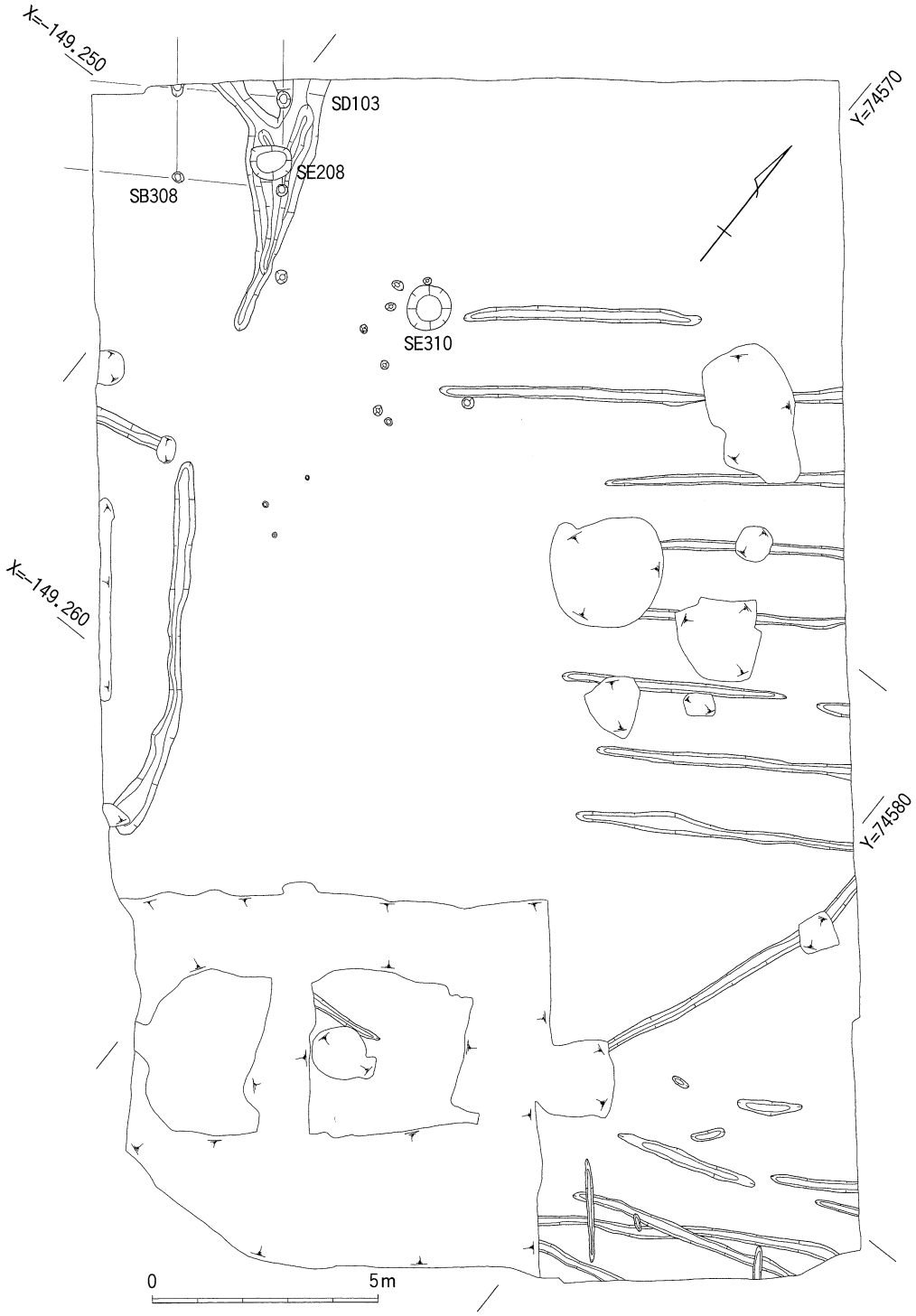


fig.202　若松町６丁目地区遺構平面図

基本層序　重機掘削は従前の建物の基礎を除去した上で、黄褐色砂混じりシルトの掘削まで行い、その後人力による掘削を行っている。基本層序は上層より盛土、黄灰色細砂、黄褐色砂混じりシルト（床土）、黒灰色粘質シルト（包含層）、黄褐色シルト（遺構面）となっている。遺構はいずれも同一面で確認されている。

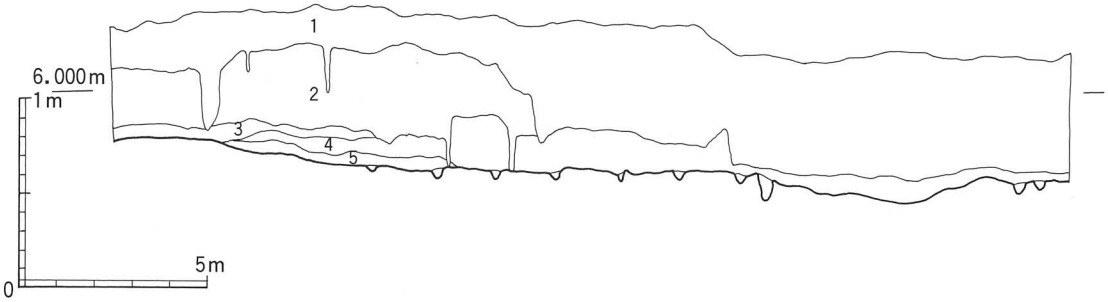


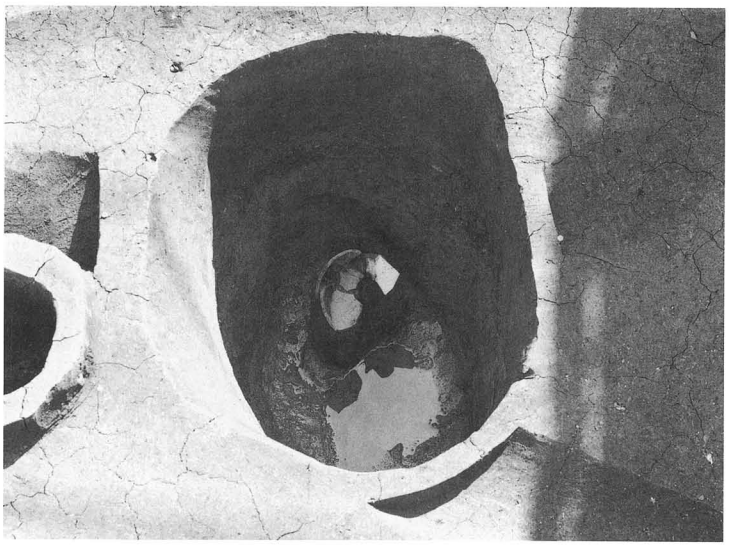
fig.203　若松６地区 南北断面図

1．盛土・撹乱　　4．黄褐色砂混じりシルト
2．黄灰色細砂　　5．黒灰色粘質シルト
3．淡灰色細砂

弥生時代 ＳＤ103　最大幅1.5m、深さ0.3mの溝状遺構で、灰褐色粘土の埋土から弥生土器片が出土している。土器は細片であるが、おそらく後期のものと考えられる。

古墳時代 ＳＥ208　楕円形を呈する井戸状遺構で、長径約1.0m、短径0.8m、深さは約0.8mの素掘りのものである。出土遺物は、中層にあたる濃灰色粘質シルト層から、古墳時代中期の須恵器壺の破片が出土している。

この壺は口縁端部及び底部が欠損し、体部には直径約５cmの円孔が焼成後開けられている。この壺の孔にあたる部分の破片は、同じ井戸埋土の中から出土していることから、この壺は井戸付近で故意に穿孔され、その後投棄されたと考えられる。



挿図写真23　ＳＥ208（北から）

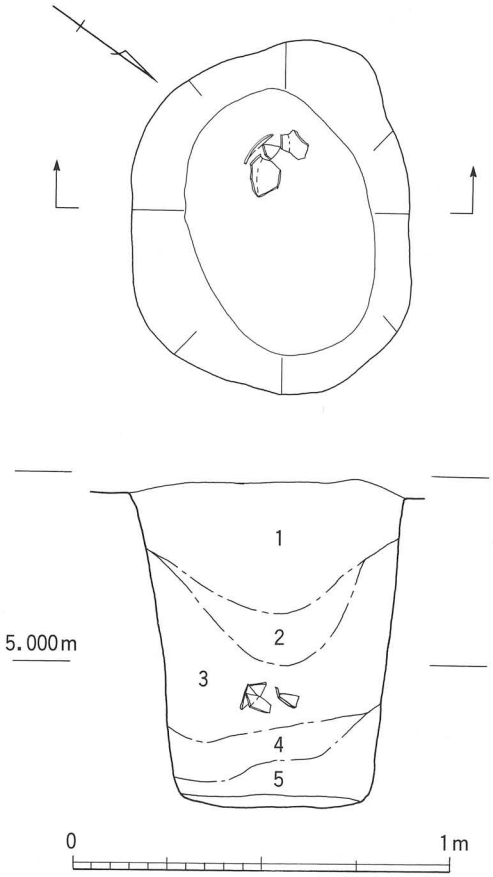


fig.204　ＳＥ208 平面・断面図

1．濃灰色粘質シルト　　4．淡黄灰色細砂
2．灰色細砂混粘質シルト　5．灰色細砂シルト
3．濃灰色粘質シルト

（698）は最大胴径は21.4cm、頸部には波状文を施し、胴部には列点文を施している。底部にはタタキがみられるが、のちナデ消しを行っている。淡灰色を呈し、焼成は良好である。

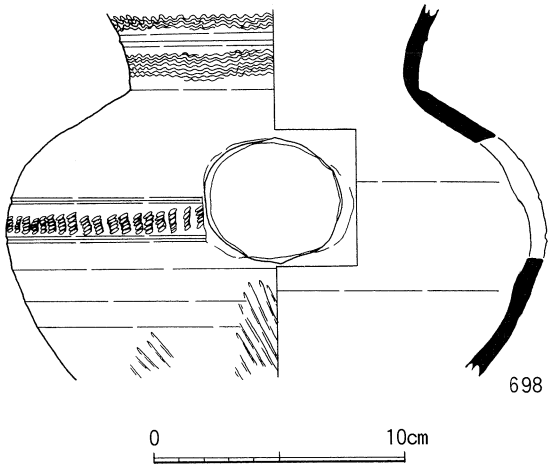


fig.205　ＳＥ208 出土遺物実測図

中世
ＳＢ308

ＳＤ103を切る形で検出したこの掘立柱建物は、１間分の柱穴しか判明しなかった。しかし、本報告の日吉２・若松７地区においては、中世の掘立柱建物が数棟確認されているが、２間あるいは３間の建物が多いことから、ＳＢ308は北・西ともに拡がる可能性が考えられる。

柱穴はいずれも遺構面から深さ30cm程度残っており、柱間距離は東西2.2m、南北1.8mであった。北から54°30′東に振っている。

その中の１つの柱穴の底からは、遺構面から深さ35cmの位置で、直径15cm程度の礎盤が確認できた。ＳＢ308の時期は柱穴内から出土している土師器小皿から、ＳＥ310と同時期と考えられる。

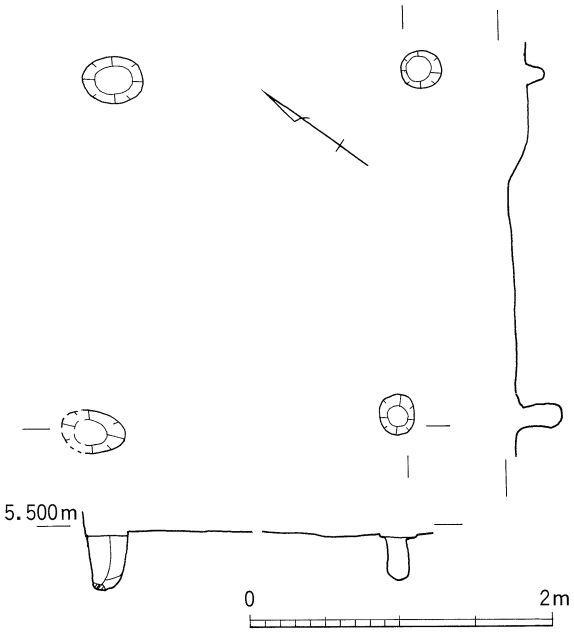


fig.206　ＳＢ308 平面・断面図

ＳＥ310　調査区の北東で検出した、直径約１ｍ、深さ約１ｍの素掘りの井戸状遺構である。遺物はいずれも灰黄褐色極細砂シルト層より出土している。この層の下層部分からは土師器小皿（700）、瓦器小皿（699）が完形品で１点ずつ出土しており、中層からは土師器小皿、羽釜の破片、砥石２点、焼石が出土している。時期は13世紀頃と考えられる。

羽釜（703）は口径28.2cm、鍔径35.8cmで、淡黄灰色を呈す。体部から底部にかけては欠損しており、口縁端部はナデで丸く収めている。調整は磨滅のため、内外面ともに不明で、外面には煤の付着が認められる。

土師器小皿は３枚出土しており、いずれも口径９cm程度、淡黄橙色を呈す。口縁端部はナデで丸く仕上げている。瓦器小皿（699）は、口径8.8cm、器高2.1cmで、内面にミガキが施されているものの粗く、磨滅しているため不明瞭である。

砥石（704・705）は砂岩で、方形の断面をもつ。外面には焦げ痕がみられることから、一時的に火を受けていたと考えられる。多少磨滅しているためか、使用痕は明確でない。砥石は２点出土しており、接合面をもたないものの同一個体の可能性がある。

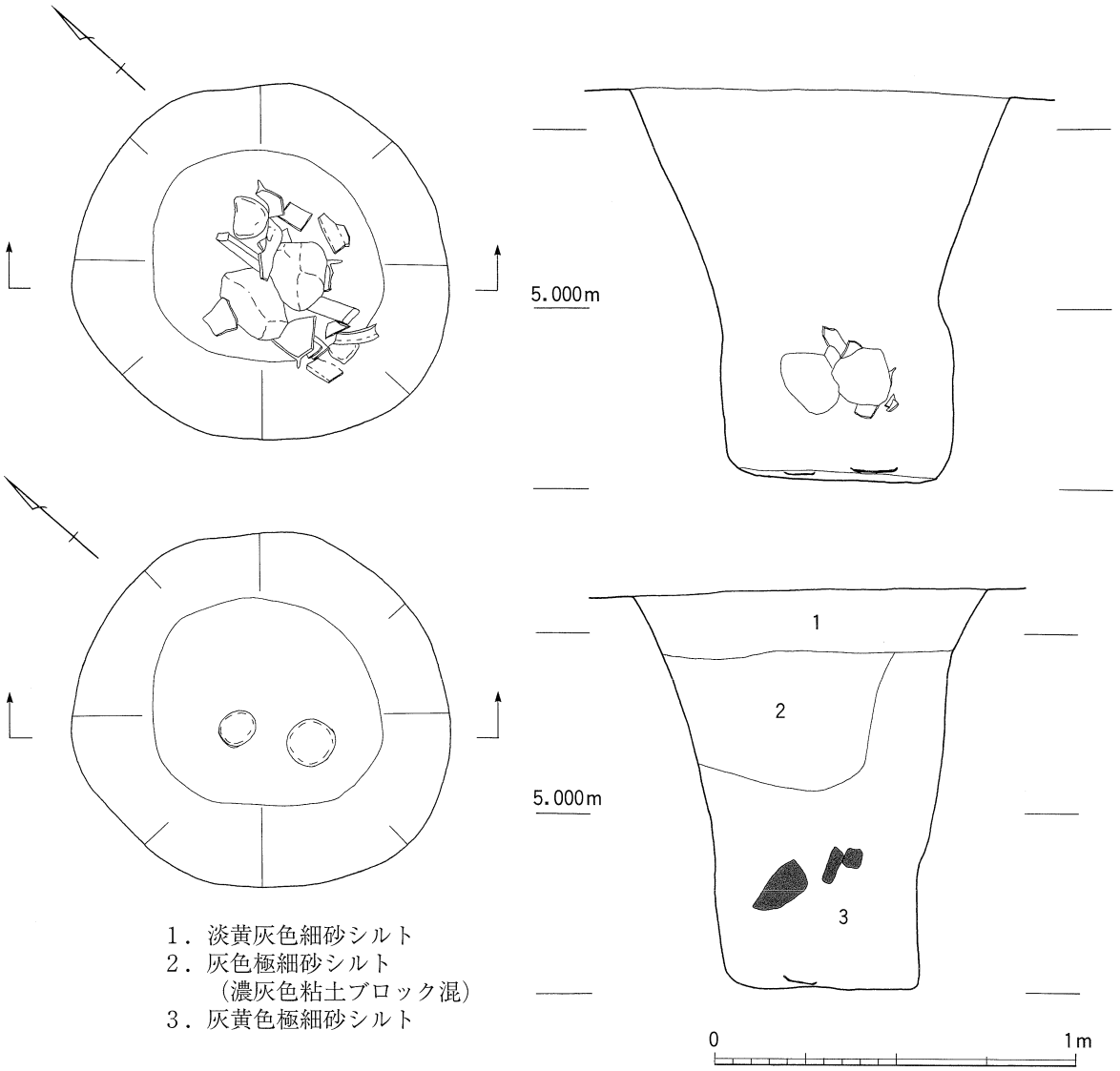


fig.207　ＳＥ310 遺物出土状況および平面・断面図

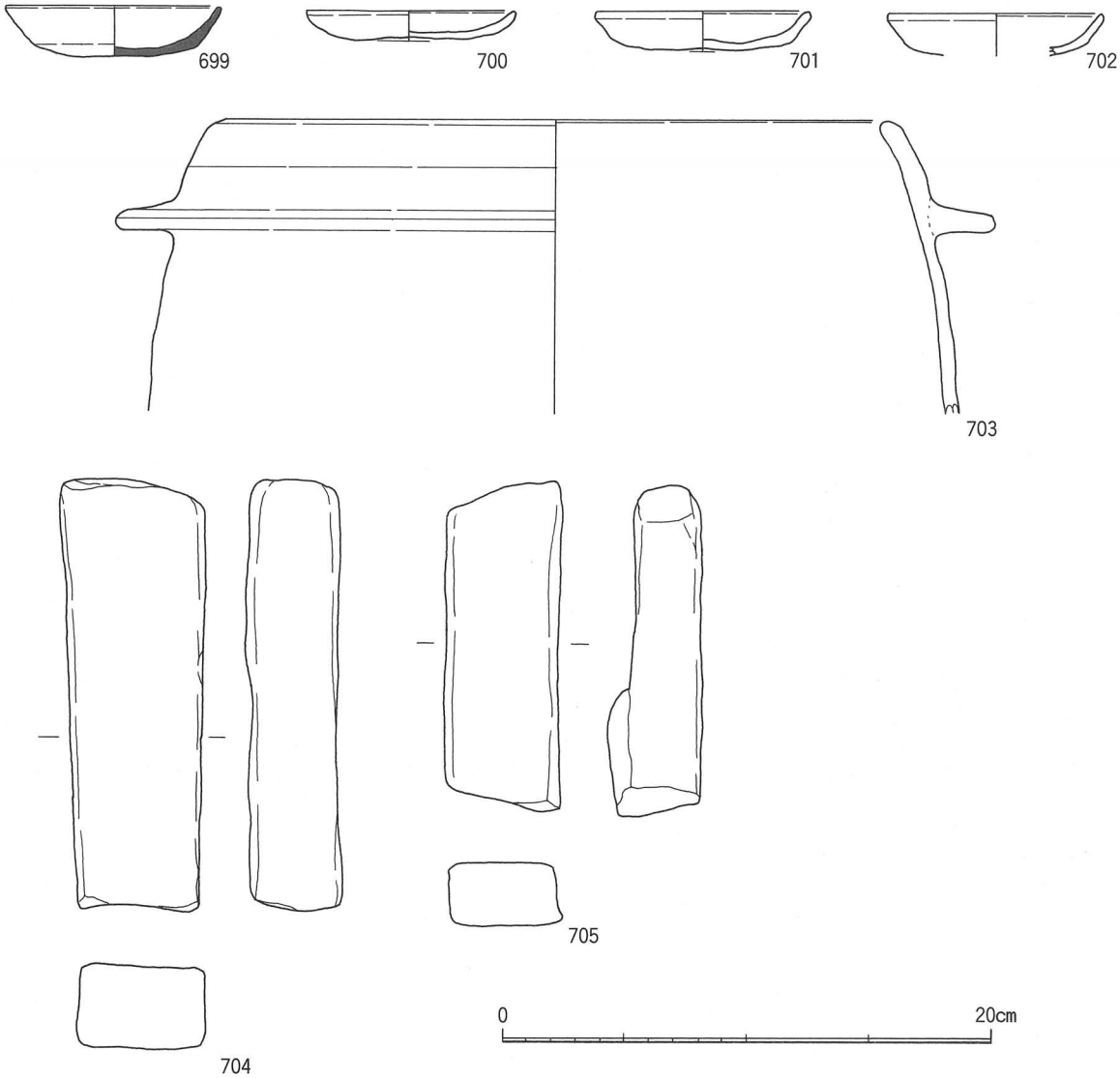
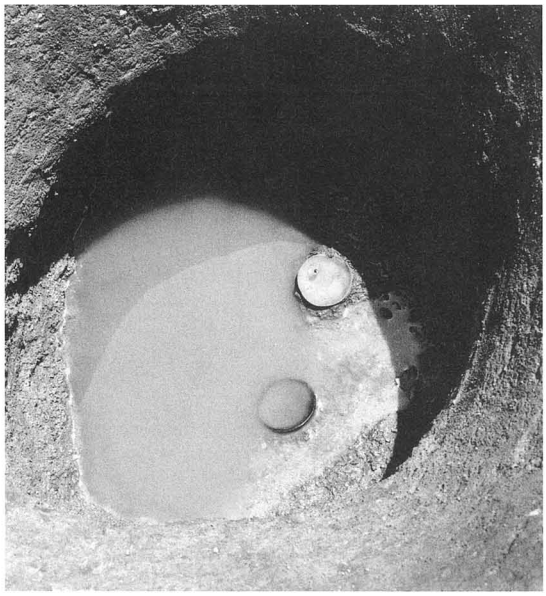


fig.208　ＳＥ310 出土遺物実測図



挿図写真24　ＳＥ310 下層（南から）

挿図写真25　ＳＥ310 中層（南から）

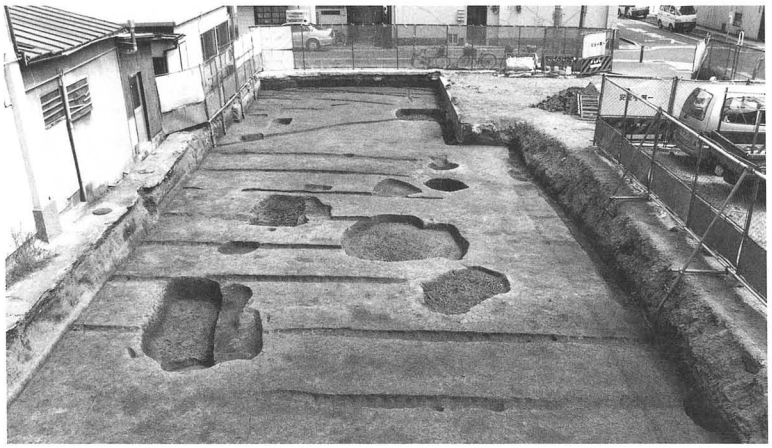
鋤溝　調査区内の東半では３方向の溝状遺構が数条検出された。いずれの溝も浅く、深さ約10㎝、幅は約25㎝で、溝間はいずれも約1.5ｍである。鋤の痕跡がみられるものはなかったものの、鋤溝の可能性が高いと考えられる。出土遺物は微量のため、時期が判明しないが、遺構埋土が掘立柱建物の柱穴と同じであることから、中世の遺構と考えられる。

このような鋤溝状の遺構は、最近調査例が増加している。松野遺跡においては、遺跡の北端（今回報告する日吉２地区の北側）で南北方向の鋤溝状遺構が確認されている。溝間は約２ｍで、５条検出され、時期は古墳時代の可能性が高いとされている。

長田区内では、若松町遺跡において、弥生時代後期から古墳時代初頭の畝状遺構が確認されている(1)。この遺構には南北方向と東西方向のものがあり、長いもので19ｍを測る。また、畝幅は約1.4ｍで、今回報告分とほぼ似通っている。

また、二葉町遺跡においては、中世の鋤溝状遺構が南北・東西方向ともに、現在の地割りに沿って検出されている。溝間は約１ｍの部分が多いが、重なり合うように検出されている部分もある。特に、二葉町遺跡においては近年広範囲にわたって調査が行われており、耕作地と切り合うような状態で建物群が確認されている(2)。

また、兵庫区の大開遺跡においても、現在の地割りと同一方向の溝状遺構が確認されている(3)。時期は中世で、遺構面からの深さが20㎝以上のものが多く、端部を揃えていないことから、耕作に伴う鋤溝の可能性があるものの、他遺跡とは様相が異なっている。



挿図写真26　鋤溝（北から）

以上、鋤溝状遺構の可能性が考えられる周辺での状況を簡単に述べたが、共通の傾向としては現在の地割りに沿ったものが多く、また、等高線に対しては斜行しているように考えられる。しかし、時代が異なるため、時期ごとに差異が存在する場合はその差異を明確にするには至らなかった。今後の類例の増加に期待したい。

第２節　小結

若松６地区は松野遺跡の東端にあたり、今回の調査では弥生時代の溝状遺構１条、古墳時代中期の井戸状遺構１基、中世の掘立柱建物１棟、井戸状遺構１基、鋤溝状遺構が検出された。特に、古墳時代では、遺跡の中心地と考えられる第１次調査地点および日吉２地区からわずか100ｍ離れているだけであるが、遺構は稀薄となり、遺物の出土量も少ないことから、古墳時代の遺跡の範囲が概ね確定できる資料と言える。

また、中世においては、密集した状態ではないものの、居住域と耕作地として土地利用されていることが判った。しかし、その広がりは判明しておらず、古墳時代のように線引きできる資料とは言いがたい。周辺での調査が進むことを期待したい。（中居）

（註）（１）山田清朝・高木芳史　『若松町遺跡』　神戸市教育委員会　2000
（２）川上厚志編　『二葉町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2001
（３）前田佳久編　『大開遺跡』　神戸市教育委員会　1993

第６章　自然科学分析

第１節　松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定

松葉礼子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

神戸市長田区日吉町にある松野遺跡から出土した木製品計117点について樹種を調べた。これらの木製品は、古墳時代～鎌倉時代に属するが、煩雑なため大まかに２期に分類した。それは５世紀末から６世紀前半と、12世紀後半から鎌倉時代前半である。出土木製品は杵や鍬などの農具や曲物、祭祀用具、柱、棺など多岐にわたり、何らかの製品に集中してはいない。

これらの木製品の樹種を明らかにし、遺物の性格を明らかにする一助とすることを目的として、樹種を調査した。

２．方法と記載

同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・挿図写真ａ）、接線断面（板目と同義・挿図写真ｂ）、放射断面（柾目と同義・挿図写真ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定はこれらの標本を光学顕微鏡下で観察し、現生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は表６～８に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、神戸市埋蔵文化財センターで保管されている。

同定根拠

モミ属　*Abies* PINACEAE　　挿図写真27　1a～1c：W-5875

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり単列。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、１分野に１～４個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。いずれも常緑高木の針葉樹である。

アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb.et Zucc. PINACEAE　　挿図写真27　2a～2c：W-6133

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られるが、一部腐朽の為欠落している。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、１分野に１～２個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。アカマツは常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯～暖帯にかけて分布する。

ツガ属　*Tsuga* PINACEAE　　挿図写真27　3a～3c：618

垂直・水平両樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部の量は多く、年輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、単列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の水平壁には単穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小型のトウヒ型で１分野に１～４個存在する。

以上の形質により、マツ科のツガ属の材と同定した。ツガ属にはツガとコメツガ２種が含まれるが、いずれも常緑高木の針葉樹である。

スギ　*Cryptomerica japonica* (L.fil.) D.Don TAXODIACEAE　　挿図写真28　4a～4c：W-5855

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は大型のスギ型で、通常１分野あたり２個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯～暖帯、太平洋側に多く存在している。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. SCIADOPITYACEAE　挿図写真28　5a～5c：W-5873

水平・垂直両樹脂道と樹脂細胞を持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行はやや緩やか。放射組織は、単列ですべて放射柔組織から構成される。分野壁孔は小型の窓状。

以上の形質により、コウヤマキ科のコウヤマキの材と同定した。コウヤマキは本州（福島県隔離分布）～九州（宮崎）まで分布する常緑針葉樹である。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. CUPRESSACEAE　　挿図写真28　6a～6c：298

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は放射柔組織のみからなり、単列。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で、一分野に１～３個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは常緑高木の針葉樹で、福島県～屋久島の温帯に分布する。ヒノキ、サワラ両者の区別が曖昧なものについてはヒノキ属と同定した。

カヤ　*Torreya nucifera* (L.) Sieb. et Zucc. TAXACEAE　　挿図写真29　7a～7c：W-6119

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。樹脂細胞はなく、放射組織は放射柔細胞のみからなり単列。分野壁孔は小型のヒノキ～トウヒ型。仮道管内壁に、顕著な対列状の螺旋肥厚がある。

以上の形質により、イチイ科のカヤの材と同定した。カヤは宮城県～屋久島まで分布する常緑高木の針葉樹。種子から油が取れる。

シイ属　*Castanopsis* FAGACEAE　　挿図写真29　8a～8c：638

大型で丸い道管が単独で、年輪界にまばらに間隔を置いて一列に並ぶ環孔材。晩材部では、徐々に径を減じた薄壁の多角の道管が火炎状に並んでいる。道管の穿孔は単一、木部柔組織は接線状。放射組織は単列同性。

以上の形質により、ブナ科のシイ属と同定した。シイ属にはスダジイとツブラジイが含まれており、いずれも常緑高木で、スダジイは福島・新潟県以西～屋久島まで、ツブラジイは関東地方以南～屋久島まで分布する。

アカガシ亜属　Subgen. *Cyclobalanopsis* FAGACEAE　　挿図写真29　9a～9c：253

中型で厚壁の円形の道管が単独で、放射方向に幅を持って配列する放射孔材。道管穿孔は単一。木部柔組織は１～３細胞幅程度の接線方向の帯状を呈す。放射組織は単列同性で、時に複合状となる。放射組織道管間の壁孔は柵状を呈す。

以上の形質により、ブナ科のアカガシ亜属の材であると同定した。日本に産するアカガシ亜属には８種が含まれ、いずれも常緑高木。

ヤブツバキ　*Camellia japonica* L.; *Thea hozanensis* Hayata; *T.Nakaii* Hayata THEACEAE

挿図写真30　10a～10c：W-6595

小型の道管が単独、時に２～３個複合して年輪界に向かって径を減じながら散在する散孔材。道管穿孔は10～20本ほどの横棒からなる階段状で、木部柔組織は散在状。放射組織は異性で背は低く、２～３細胞幅。単列部分や直立細胞には、しばしば大型の結晶細胞が見受けられる。

以上の形質から、ツバキ科のヤブツバキの材と同定された。ヤブツバキは青森県～琉球の暖帯に広く分布する常緑高木である。

クスノキ　*Cinnamomun canphora* (L.) Presl LAURACEAE　　挿図写真30　11a～11c：631

中型で丸い道管が単独、あるいは２～３個複合して散在する散孔材。道管の周囲には顕著な周囲状の柔組織をもち、時に大型の油細胞がある。道管の穿孔は単一。放射組織は２細胞幅、10細胞高程度の異性。上下端の直立細胞にも大型の油細胞を持つ。

以上の形質から、クスノキ科のクスノキの材と同定した。クスノキは本州・四国・九州の暖帯に生える常緑高木である。

ツゲ　*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* (Muell. Arg. ex Miq.) Rehder et Wils. BUXACEAE

挿図写真30　12a～12c：W-6583

きわめて小型で厚壁の道管が単独で均一に散在する散孔材。道管の穿孔は、数段の横棒からなる階段状。放射組織は１～２細胞幅の典型的な異性。

以上の形質により、ツゲ科のツゲの材と同定した。ツゲは常緑の低木で、本州（関東以西）～屋久島の主に低山帯に分布する。

３．結果

同定結果は、表６～８に示し、その結果の概要は表９に集計した。その際、項目整理のため、一部の加工程度の低い製品は、不明に一括したものがあるため、表６と表７～９の遺物名が異なる場合がある。

古墳時代中期末～後期初めのうち、５世紀末では、ＳＥ204遺構出土の製品が中心である。他の時期と比較して加工材や杭に多種の広葉樹が利用されている事が特徴である。竪杵はヤブツバキであった。類例は西

日本を中心として各地で確認されており、アカガシ亜属が多い鍬・鋤とは異なる傾向を示す。杵には他にユズリハの類やサカキ、シキミなど道管の小さな均質な樹種が多く利用されている（島地他1988）。針葉樹は曲物と柱に利用されており、ＳＢ228遺構では確認された木材４点がすべてコウヤマキであった。６世紀初めにはＳＥ206遺構から出土した計９点の製品のみが含まれている。板にアカマツが使用され、蝶々形にヒノキが使用されているほかはシイ属、アカガシ亜属が使用されている。鍬は上述の通り、アカガシ亜属が使用されており他の遺跡の傾向と一致する。

平安時代後半～鎌倉時代前半には82点が含まれる。このうち、12世紀はＳＥ301遺構のヒノキの杓柄と曲物片の２点とＳＥ302遺構の56点がある。板材や割材にモミ属やツガ属といった材質が軟らかい針葉樹が出現するのが特徴で、広葉樹はシイ属に集中し、種類数が減少している。井戸枠にクスノキが使用されているが、耐湿性を利用したものか転用と考えられる。13世紀にはＳＴ301遺構の棺材６点、ＳＥ306、ＳＸ302の箸材３点とＳＥ303の下駄１点、木（表９では不明に含まれる）12点が確認されている。箸はツガ属とコウヤマキで、下駄は針葉樹と確認された。木は２点を除いて、すべて針葉樹でモミ属、アカマツ、ツガ属、ヒノキといった針葉樹が使用されている。

神戸市周辺の自然植生は、地形にもよるが暖帯にシイ属・アカガシ亜属を中心とした群集が成立し、標高450－500ｍではアカガシ亜属が優占するシキミ－モミ群落が成立すると考えられている。代償植生にはアカマツが多く、温帯のブナクラス域内の痩尾根や岩角地ではヒノキも自生している。これらのことから、神戸市付近ではヒノキ・アカマツ・ツガ属・モミ属といった本遺跡で確認される主要針葉樹は、比較的手に入りやすい環境であったと考えられる。

遺物でも市内では弥生時代から針葉樹材が大量に利用されており（新方遺跡東方地点）、針葉樹が利用されること自体は時代にかかわらず一般的な結果といえる。その点を考慮して、本遺跡の時代毎の樹種変化を概観すると、５世紀末～６世紀前半ではシイ属、アカガシ亜属を中心とした広葉樹材が利用され、針葉樹ではヒノキ・コウヤマキ・アカマツが利用されていた。しかし、12世紀には、モミ属、ツガ属、アカマツの利用が増加し、利用樹種の拡大が見受けられる。しかし、一方で製作上他の樹種で代用し難い曲物にはヒノキ材利用が残っている。鎌倉時代ではさらに針葉樹への依存が高まり、12世紀後半以降針葉樹の利用が拡大している。

遺物番号	遺　物　名	時　期	層　位	樹　種	木製品登録番号
—	木材	古墳時代後期初頭	ＳＢ228-P11	コウヤマキ	W-6100
—	角材	古墳時代後期初頭	ＳＢ228-P11	コウヤマキ	W-6101
—	木材	古墳時代後期初頭	ＳＢ228-P11	コウヤマキ	W-6102
—	板材（礎盤）	古墳時代後期初頭	ＳＢ228-P11	コウヤマキ	W-6103
—	杭	５世紀後半	ＳＥ201	ヤブツバキ	W-6595
253	刀装具（把頭）	５世紀末	ＳＥ204 下層	ツゲ	W-6107
254	竪杵	５世紀末	ＳＥ204 下層	ヤブツバキ	W-6112
255	指物腰掛脚	５世紀末	ＳＥ204 下層	ヒノキ	W-6110
256	加工木（斧柄？）	５世紀末	ＳＥ204 下層	アカガシ亜属	W-6114
257	加工木	５世紀末	ＳＥ204 下層	アカガシ亜属	W-6115
258	杭？	５世紀末	ＳＥ204 下層	アカガシ亜属	W-6111
259	杭？	５世紀末	ＳＥ204 下層	シイ属	W-6109
260	加工木	５世紀末	ＳＥ204 下層	シイ属	W-6116
261	加工木	５世紀末	ＳＥ204 下層	シイ属	W-6117
262	板	５世紀末	ＳＥ204 下層	ヒノキ	W-6105
263	板	５世紀末	ＳＥ204 下層	ヒノキ	W-6108
264	木片	５世紀末	ＳＥ204 下層	モミ属	W-6106
—	加工木	５世紀末	ＳＥ204 下層	シイ属	W-
266	板	５世紀末	ＳＥ204 中層	ヒノキ科	W-6097
267	板	５世紀末	ＳＥ204 中層	ヒノキ属	W-6098
268	板	５世紀末	ＳＥ204 中層	コウヤマキ	W-6096
298	蝶々形	６世紀初め	ＳＥ206-3	ヒノキ	W-6585
300		６世紀初め	ＳＥ206-2	アカガシ亜属	W-6584
301	ナスビ？	６世紀初め	ＳＥ206-4	アカガシ亜属	W-6586
302	杭	６世紀初め	ＳＥ206-1	アカガシ亜属	W-6583
303	杭	６世紀初め	ＳＥ206-5	アカガシ亜属	W-6587
—		６世紀初め	ＳＥ206-7	シイ属	W-6588
—	板	６世紀初め	ＳＥ206-8	アカマツ	W-6589
—	板	６世紀初め	ＳＥ206-9	シイ属	W-6590
—	板	６世紀初め	ＳＥ206-10	アカマツ	W-6591
—	割木材	古墳時代後期初頭	ＳＸ210	コウヤマキ	W-6099
—	柱痕？	古墳時代後期初頭	ＳＰ202	カヤ	W-6119
—	柱痕？	古墳時代後期初頭	ＳＰ203	ヒノキ属	W-6120
—	柱材？	古墳時代後期初頭	ＳＰ204	ヒノキ属	W-6104
—	柱痕？	平安時代末	ＳＢ305-P4	マツ属	W-6118
613	杓柄	平安時代末	ＳＥ301	ヒノキ	W-5829
614	曲物片	平安時代末	ＳＥ301	ヒノキ	W-5830
617	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5844
618	板材	12世紀前半	ＳＥ302	ツガ属	W-5870

表６　松野遺跡出土木製品の樹種同定結果（その１）

遺物番号	遺　物　名	時　期	層　位	樹　種	木製品登録番号
620	板材	12世紀前半	ＳＥ302	ツガ属	W-5874
621	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5859
622	板材（補強材）	12世紀前半	ＳＥ302	スギ	W-5850
623	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5843
624	井戸枠	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5866
625	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ科	W-5869
626	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	コウヤマキ	W-5849
627	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	スギ	W-5846
628	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	スギ	W-5848
629	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ツガ属	W-5841
630	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5857
631	井戸枠	12世紀前半	ＳＥ302	クスノキ	W-5880
632	井戸枠	12世紀前半	ＳＥ302	クスノキ	W-5881
633	井戸枠	12世紀前半	ＳＥ302	クスノキ	W-5879
634	井戸枠	12世紀前半	ＳＥ302	クスノキ	W-5882
635	角材	12世紀前半	ＳＥ302	シイ属	W-5852
636	角材	12世紀前半	ＳＥ302	広葉樹	W-5851
637	井戸柱	12世紀前半	ＳＥ302	マツ属	W-5878
638	割材	12世紀前半	ＳＥ302	シイ属	W-5877
639	曲物・内側板	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5884
640	曲物・内側板	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5883
641	曲物（外）	12世紀前半	ＳＥ302 第10層	ヒノキ属	W-5833
641	曲物（底）	12世紀前半	ＳＥ302 第10層	ヒノキ属	
642	板材	12世紀前半	ＳＥ302 曲物内	スギ	W-5885
643	割材	12世紀前半	ＳＥ302	シイ属	W-5840
644	板材	12世紀前半	ＳＥ302	シイ属	W-5839
645	箸	12世紀前半	ＳＥ302 曲物内	ツガ属	W-5888
646	箸	12世紀前半	ＳＥ302 曲物内	ツガ属	W-5887
647	箸	12世紀前半	ＳＥ302 曲物内	ツガ属	W-5886
—	曲物の板材	12世紀前半	ＳＥ302 第９層	スギ	W-5827
—	割材	12世紀前半	ＳＥ302	シイ属	W-5834
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5835
—	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ属	W-5842
—	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	スギ	W-5845
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ属	W-5847
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	クリorシイ属	W-5853
—	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5854
—	井戸枠	12世紀前半	ＳＥ302	スギ	W-5855
—	割材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-

表７　松野遺跡出土木製品の樹種同定結果（その２）

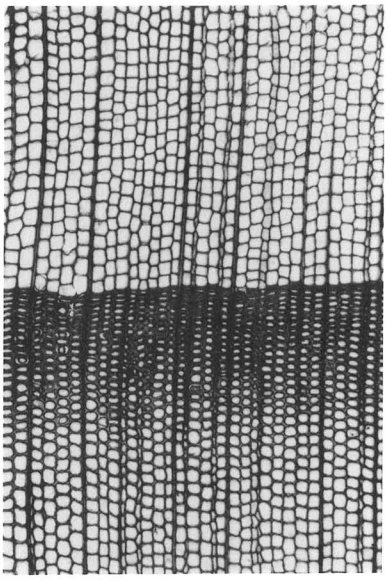
遺物番号	遺　物　名	時　期	層　位	樹　種	木製品登録番号
—	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5856
—	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	ヒノキ	W-5858
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	スギ	W-5860
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5861
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5862
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5863
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5864
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5865
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5867
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	ツガ属	W-5868
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	ツガ属	W-5871
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5872
—	井戸板材	12世紀前半	ＳＥ302	コウヤマキ	W-5873
—	板材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5875
—	割材	12世紀前半	ＳＥ302	モミ属	W-5876
656	下駄	鎌倉時代前半	ＳＥ303-1	針葉樹	W-6121
657	曲物底板	鎌倉時代前半	ＳＥ303-2	広葉樹	W-6122
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-3	モミ属	W-6123
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-4	アカマツ	W-6124
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-5	コナラ属	W-6125
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-6	マツ属	W-6126
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-7	モミ属	W-6127
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-8	マツ属	W-6128
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-9	アカマツ	W-6129
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-10	ツガ属	W-6130
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-11	アカマツ	W-6131
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-12	ヒノキ	W-6132
—	木	鎌倉時代前半	ＳＥ303-13	アカマツ	W-6133
658	曲物	鎌倉時代前半	ＳＥ304	ヒノキ	W-6593
696	箸	鎌倉時代前半	ＳＥ306	ツガ属	W-6597
697	箸	鎌倉時代前半	ＳＥ306	ツガ属	W-6596
—	棺材サンプル	鎌倉時代前半	ＳＴ301-1	モミ属？	W-
—	棺材サンプル	鎌倉時代前半	ＳＴ301-2	モミ属？	W-
—	棺材サンプル	鎌倉時代前半	ＳＴ301-3	モミ属？	W-
—	棺材サンプル	鎌倉時代前半	ＳＴ301-4	モミ属？	W-
—	棺材サンプル	鎌倉時代前半	ＳＴ301-5	モミ属？	W-
—	棺材サンプル	鎌倉時代前半	ＳＴ301-6	モミ属？	W-
673	箸	鎌倉時代前半	ＳＸ302	コウヤマキ	W-
—	柱（根）	平安時代後期	ＳＰ301	マツ属	W-5838

表８　松野遺跡出土木製品の樹種同定結果（その３）

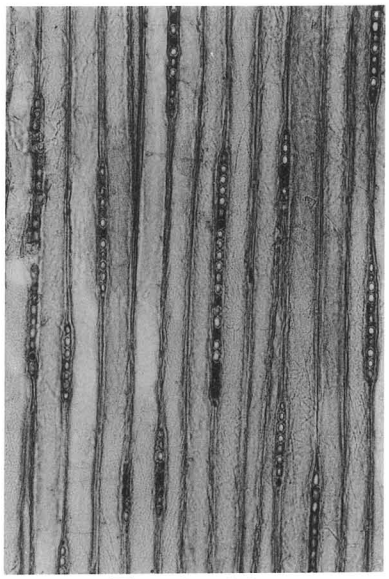
時期区分	製品名	モミ属	モミ属？	アカマツ	マツ属	ツガ属	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	ヒノキ属	ヒノキ科	カヤ	針葉樹	シイ属	クリ・シイ属	アカガシ亜属	コナラ属	ヤブツバキ	クスノキ	ツゲ	広葉樹	総計
5世紀末－6世紀初め	竪杵																	1				1
	ナスビ形鍬？															1						1
	柱？				1					2		1										4
	杭													1		3		1		1		6
	礎盤							1														1
	板			2				1	3	1	1			1								9
	蝶々形								1													1
	角材							1														1
	加工木													3		2						5
	不明	1						3						1		1						6
小　計		1		2	1			6	4	3	1	1		6		7		2		1		35
12世紀前半－13世紀前半	曲物								1													1
	曲物 側板								2	1												3
	曲物 底板									1												1
	井戸 柱				1																	1
	井戸 枠								1										4			5
	祭祀具？													1								1
	斎串？													1								1
	箸					5		1														6
	下駄												1									1
	板	10				5	8	2	5	2	1											33
	棺		6																			6
	柱				1																	1
	横木材								1					1	1							3
	角材													1							1	2
	割材	2												1								3
	不明	2		4	2	1			2								1					14
小　計		14	6	4	4	11	8	3	13	4	1		1	5	1		1		4		1	82
総　計		15	6	6	5	11	8	9	17	7	2	1	1	11	1	7	1	2	4	1	2	117

表９　松野遺跡時期別樹種同定一覧

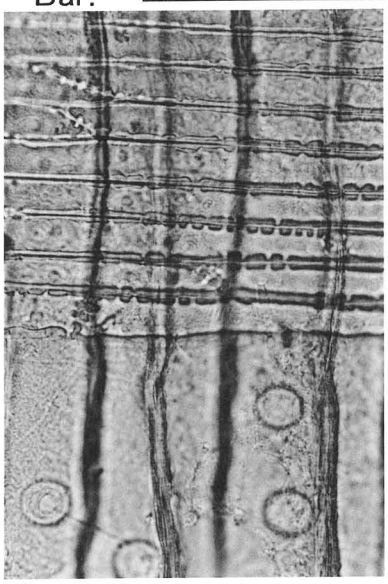
Bar:



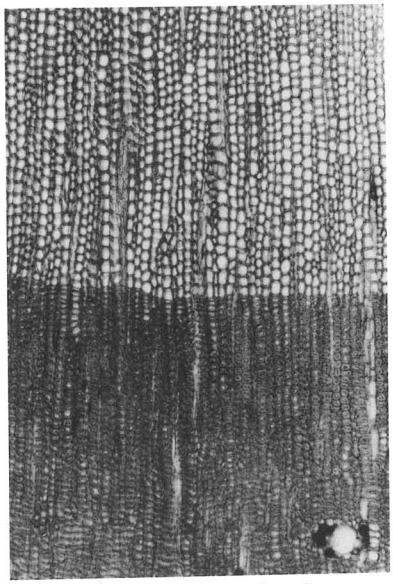
１ａ モミ属　　bar:1mm



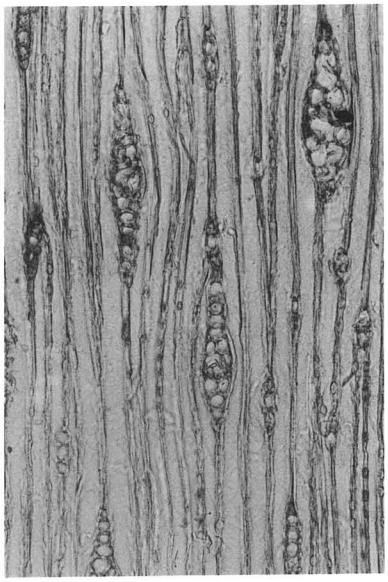
１ｂ　同　bar:0.4mm



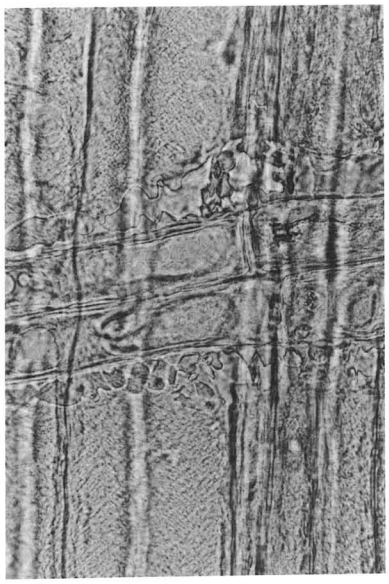
１ｃ　同　bar:0.1mm



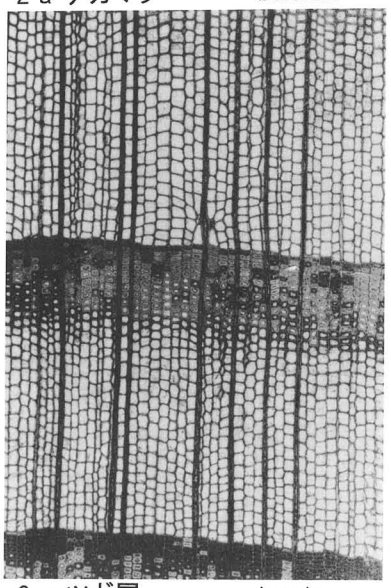
２ａ アカマツ　　bar:1mm



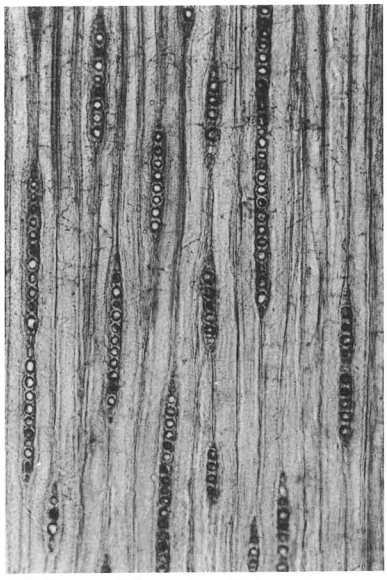
２ｂ　同　bar:0.4mm



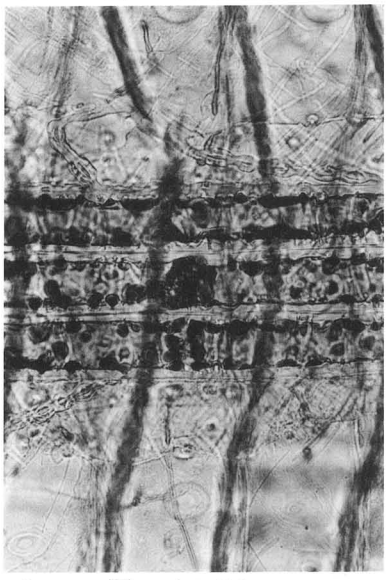
２ｃ　同　bar:0.1mm



３ａ ツガ属　　bar:1mm



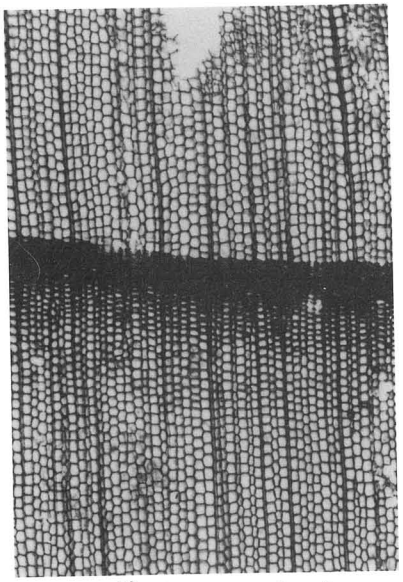
３ｂ　同　bar:0.4mm



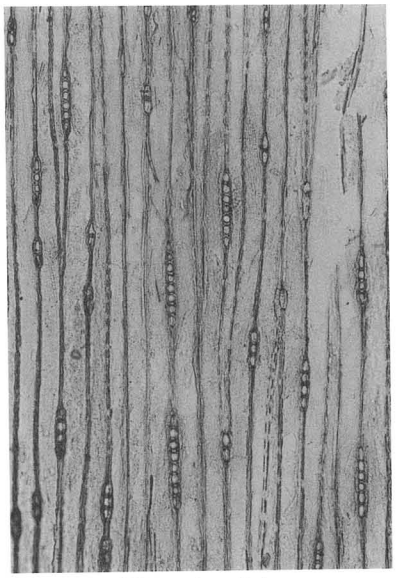
３ｃ　同　bar:0.1mm

挿図写真27　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真（１）

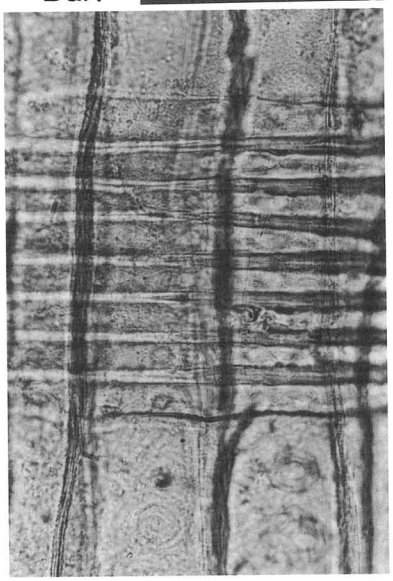
Bar:



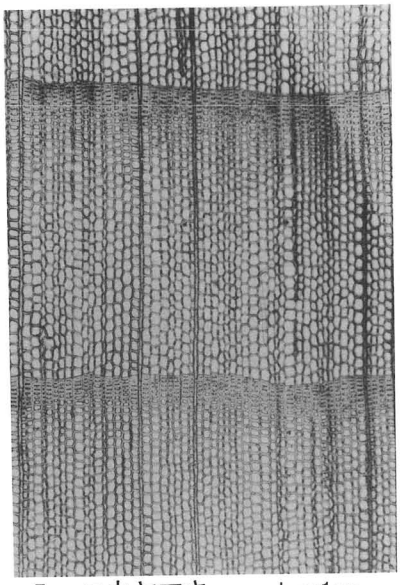
4 a スギ　bar:1mm



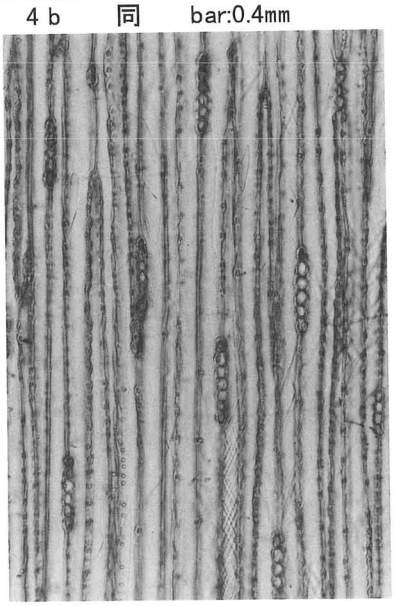
4 b　同　bar:0.4mm



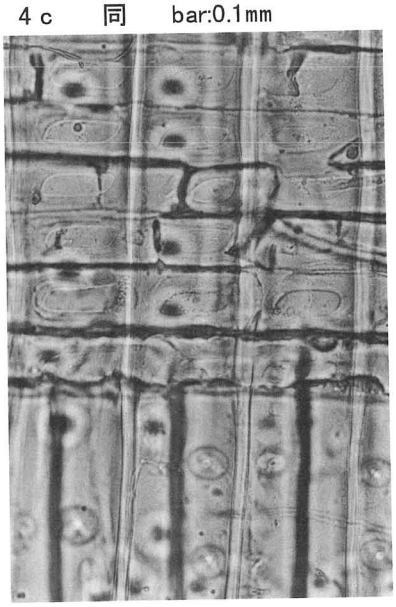
4 c　同　bar:0.1mm



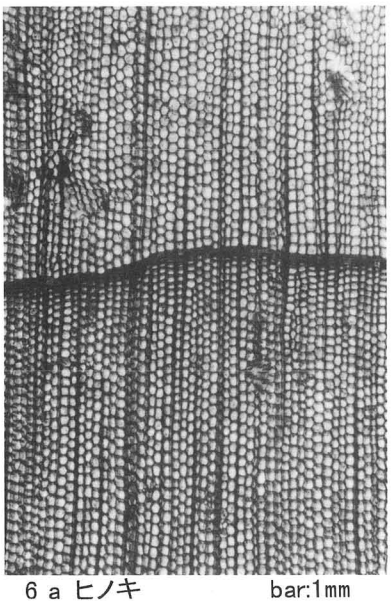
5 a コウヤマキ　bar:1mm



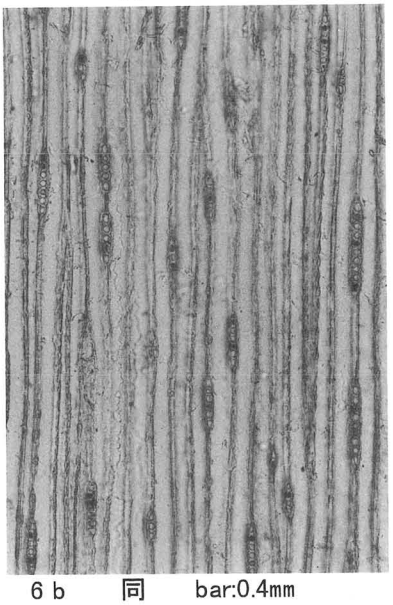
5 b　同　bar:0.4mm



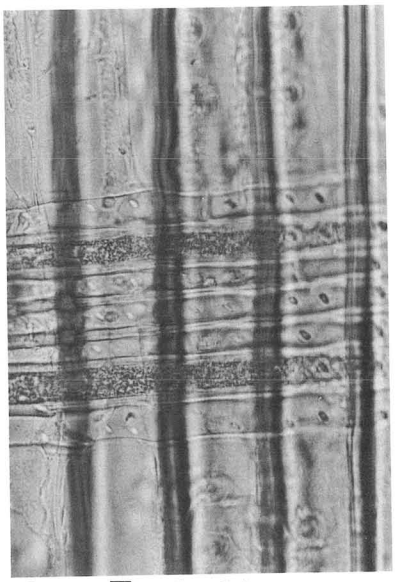
5 c　同　bar:0.1mm



6 a ヒノキ　bar:1mm



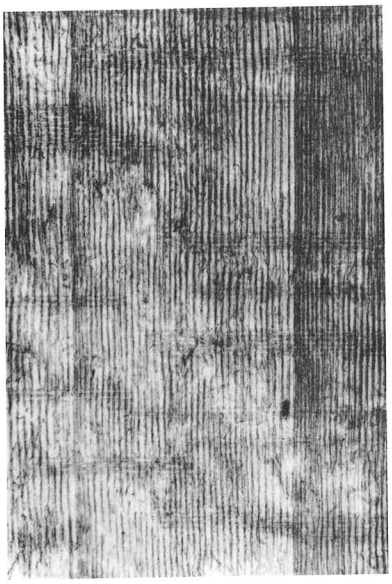
6 b　同　bar:0.4mm



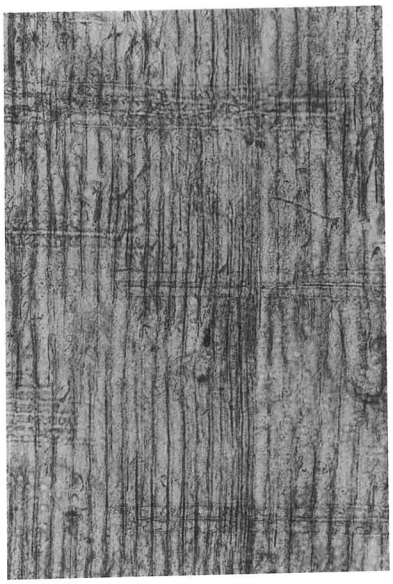
6 c　同　bar:0.1mm

挿図写真28　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真（2）

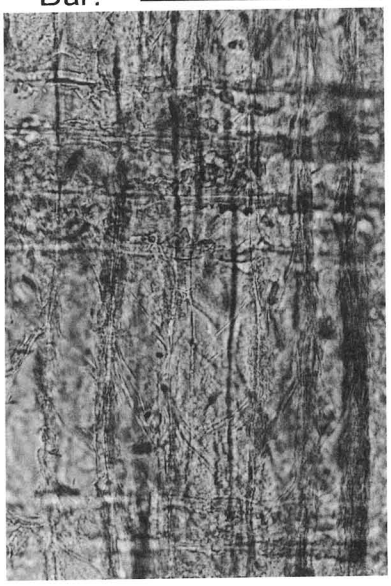
Bar:



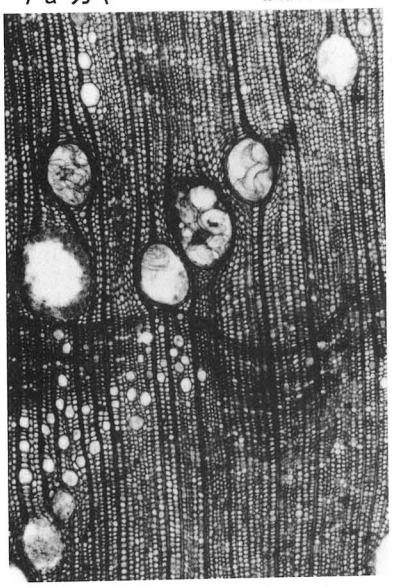
7 a カヤ　　bar:1mm



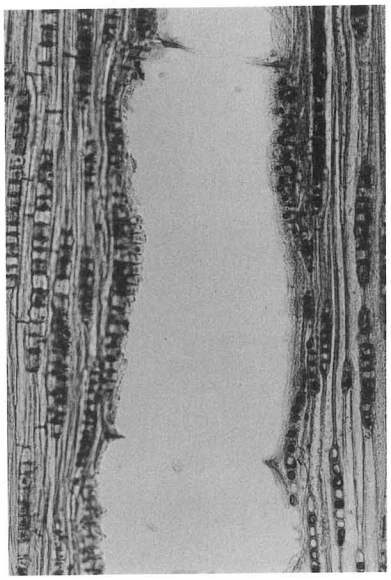
7 b　同　bar:0.4mm



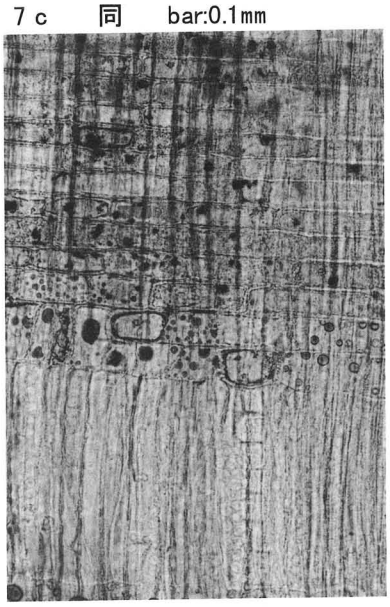
7 c　同　bar:0.1mm



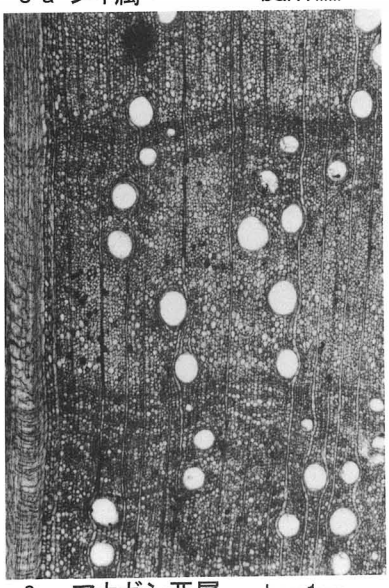
8 a シイ属　　bar:1mm



8 b　同　bar:0.4mm

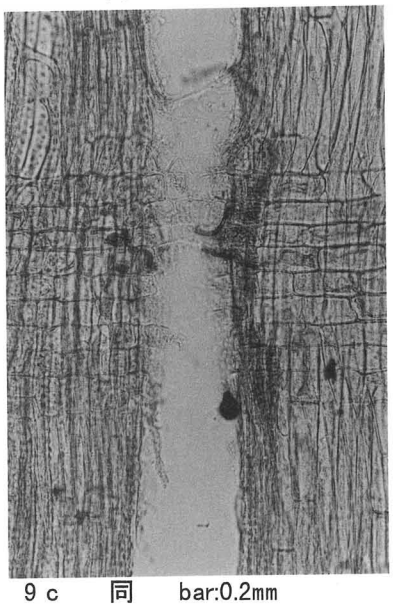


8 c　同　bar:0.2mm



9 a アカガシ亜属　　bar:1mm

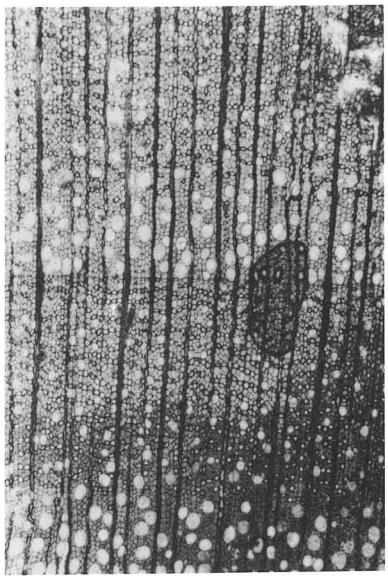
9 b　同　bar:0.4mm



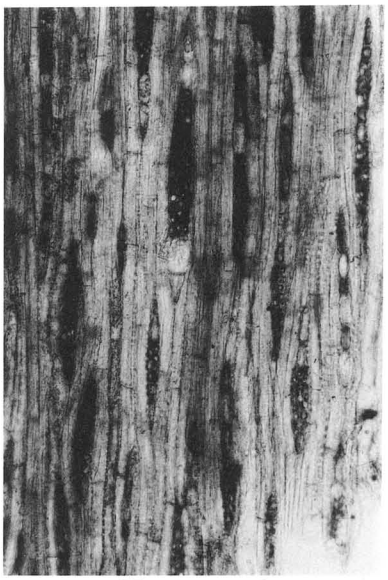
9 c　同　bar:0.2mm

挿図写真29　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真（３）

Bar:

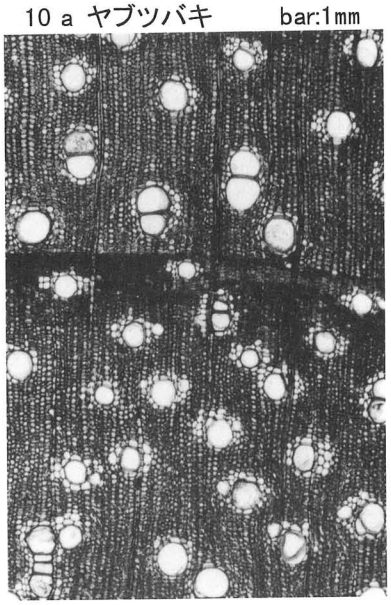


10 a ヤブツバキ bar:1mm

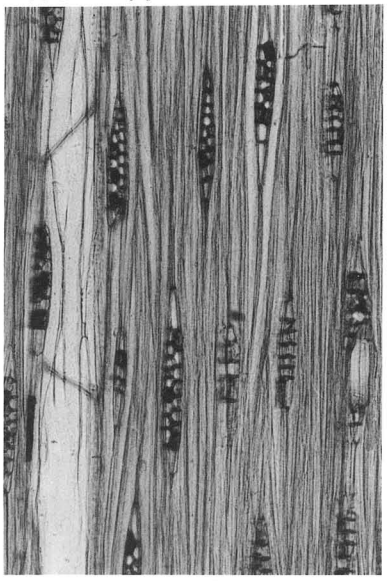


10 b 同 bar:0.4mm

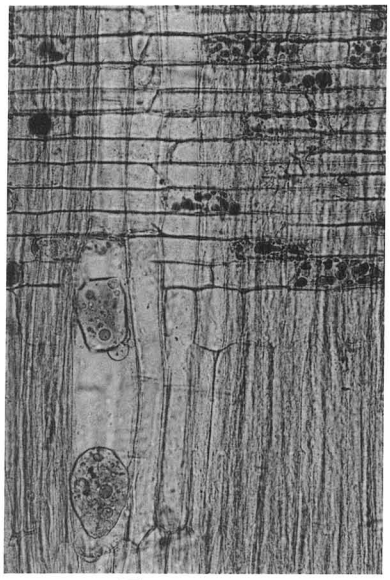
10 c 同 bar:0.2mm



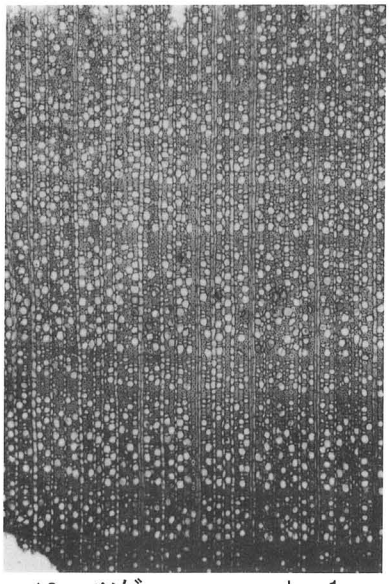
11 a クスノキ bar:1mm



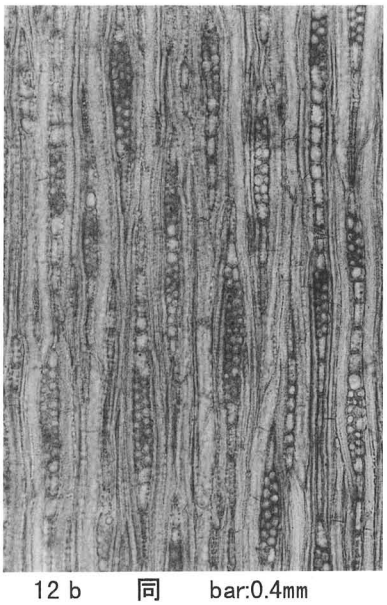
11 b 同 bar:0.4mm



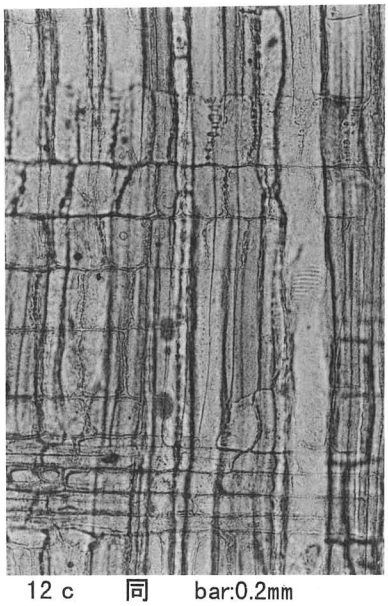
11 c 同 bar:0.2mm



12 a ツゲ bar:1mm



12 b 同 bar:0.4mm



12 c 同 bar:0.2mm

挿図写真30　松野遺跡出土木材組織顕微鏡写真（4）

第２節　松野遺跡第５－１次調査の花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

１．はじめに

松野遺跡は、神戸市長田区日吉町２丁目に所在する。本遺跡は、妙法寺川と苅藻川に挟まれて形成された緩扇状地性低地に立地し、遺構面の標高は約６～８ｍである。これまでの発掘調査により、古墳時代後期初めの濠と柵に囲まれた貴族の居館跡やこれに付随すると考えられる掘立柱建物や竪穴住居などが確認されている。また、一部では弥生時代後期の遺構や鎌倉時代前半の掘立柱建物なども確認されている。ここでは、出土遺物（須恵器・土師器）から古墳時代後期初めと考えられている井戸（ＳＥ204)および溝状遺構（ＳＤ204）の堆積物を試料として当時の周辺植生を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

２．試料

試料採取地点の土層断面図と試料採取層準をfig.209に示した。以下に各試料についての簡単な記載を示す。

ＳＤ204（Ａ～Ｄ）：Ａは９層（遺物包含層）から採取され、暗褐色シルト質極細砂で砂礫を多く含む。Ｂは10層（ＳＤ204埋土）から採取され、黒褐色シルトで細砂～砂礫を含む。Ｃは11層（ＳＤ204埋土）から採取され、褐色シルト質極細砂。Ｄは13層（基盤層）から採取され、淡黄色シルト質極細砂。時代については、Ａ～Ｃは古墳時代後期初め、Ｄは弥生時代後期～古墳時代後期初めと考えられている。

ＳＥ204（No.１～８）：No.１（２層）は暗褐色砂礫混じりシルト質細砂。No.２（３層）は暗褐色シルト質細砂で鉄分の集積が認められる。No.３（４層）は暗灰色極細砂まじりシルト。No.４（５層）は黒灰色シルト。No.５（６層）は暗緑灰色極細砂混じりシルト。No.６（９層）は暗灰色極細砂質シルトで炭化物を多く含む。No.７（13層）は暗灰色極細砂質シルトで指頭大の緑灰色粘土が多く混じる。No.８（14層）は暗灰色極細砂質シルトで拳大の黒色シルトが混じる。時代については、古墳時代後期初めと考えられている。

３．分析方法

花粉化石の抽出は、試料約２～５ｇを10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとにして、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

４．花粉化石群集の記載

［ＳＤ204（Ａ～Ｄ）の花粉化石群集］

同定された分類群数は、樹木花粉12、草本花粉13、形態分類で示したシダ植物胞子１である。Ｂ以外は十

分な花粉化石が産出せず、花粉化石分布図として示せなかった。Ｂは樹木花粉の占める割合は、約22％である。その中でスギ属（約31％）、シイノキ属（約29％）が比較的高率であり、マツ属複維管束亜属（約11％）、アカガシ亜属（約10％）もやや目立つ。他に、コウヤマキ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属なども約２～５％で出現する。草本花粉では、ヨモギ属が約35％で最優占し、次いでイネ科が約16％で出現する。アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ科、他のキク亜科、タンポポ亜科も約４～５％とやや目立つ。他に、ツユクサ属、イボクサ属などが１％未満の低率で出現する。Ｂ以外では、Ｃ、Ｄで第三紀末から第四紀の初めの頃に絶滅した分類群であるフウ属が１点ずつ産出した。Ｃは古墳時代後期初め、Ｄは弥生時代後期～古墳時代後期初めと考えられていることから、これらフウ属は二次的に堆積した誘導化石であると考えられる。

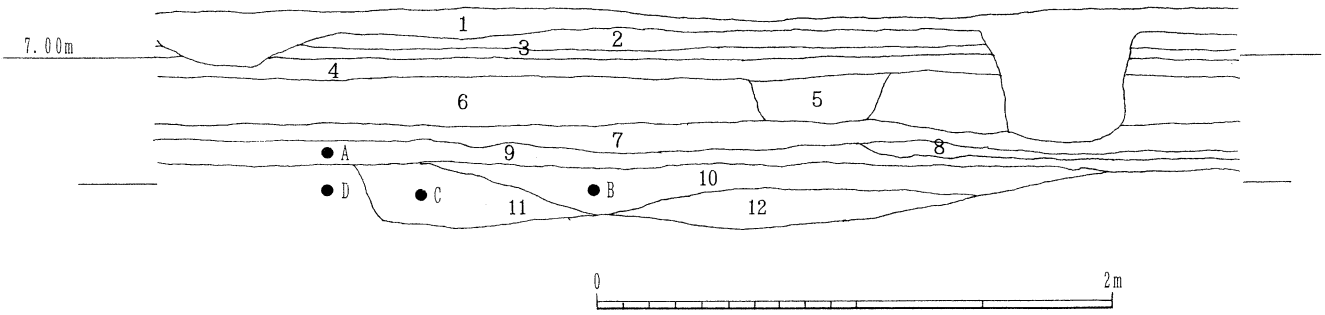
［ＳＥ204（No.１～８）の花粉化石群集］

同定された分類群数は、樹木花粉25、草本花粉26、形態分類で示したシダ植物胞子２である。

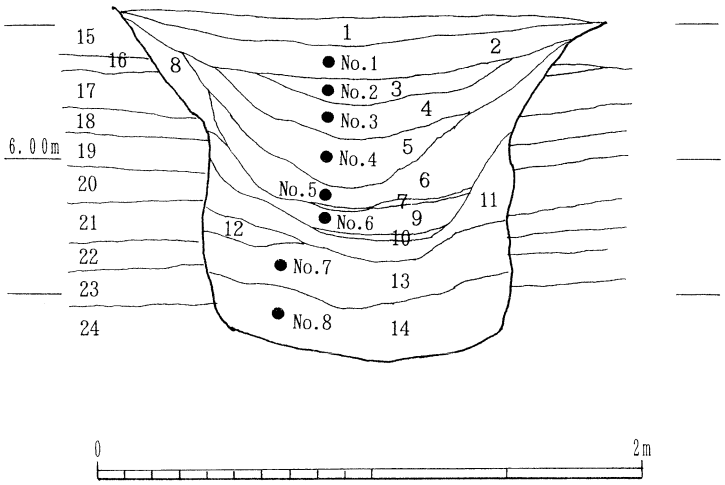
樹木花粉の占める割合は、約10～39％と低率である。その中で、スギ属が約15～43％で概ね最優占する傾向である。次いで、コウヤマキ属（約０～22％）、アカガシ亜属（約13～18％）、シイノキ属（約３～23％）が比較的高率であり、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（約４～12％）、コナラ亜属（約２～10％）もやや目立つ。他に、試料７、８では、誘導化石と考えられる絶滅種のフウ属が１％未満で出現する。草本花粉では、イネ科（約９～39％）、ヨモギ属（約８～70％）が圧倒的な高率であり、特に試料６のヨモギ属は突出した出現である。クワ科、ギシギシ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、マメ科、セリ科、他のキク亜科などもやや目立った出現傾向であり、試料５のクワ科（約16％）、試料６の他のキク亜科（約10％）はやや突出した出現傾向を示す。他に、ガマ属、ツユクサ属、イボクサ属、キジムシロ属近似種、ワレモコウ属、ミゾハギ属、ミズユキノシタ属、オオバコ属などが一部試料から低率で出現する。

５．考察

古墳時代後期初めの頃、遺跡周辺では、針葉樹のスギ属からなる林分とアカガシ亜属、シイノキ属（大型植物化石でツブラジイが出土）などからなる照葉樹林が優勢であったと思われる。また、マツ属複維管束亜属（大型植物化石で毬果が出土）、コウヤマキ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹や落葉広葉樹のコナラ亜属なども主要な森林構成要素であった。一方、遺跡付近では、イネ科、ヨモギ属を主とした多種類の草本類が生育しており、ガマ属、ツユクサ属、イボクサ属、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ミソハギ属、ミズユキノシタ属、セリ科などは溝やその付近といった湿った場所に、ギシギシ属、オオバコ属、ヨモギ属などは幾分乾き気味の場所に生育していたものと思われる。



ＳＤ204

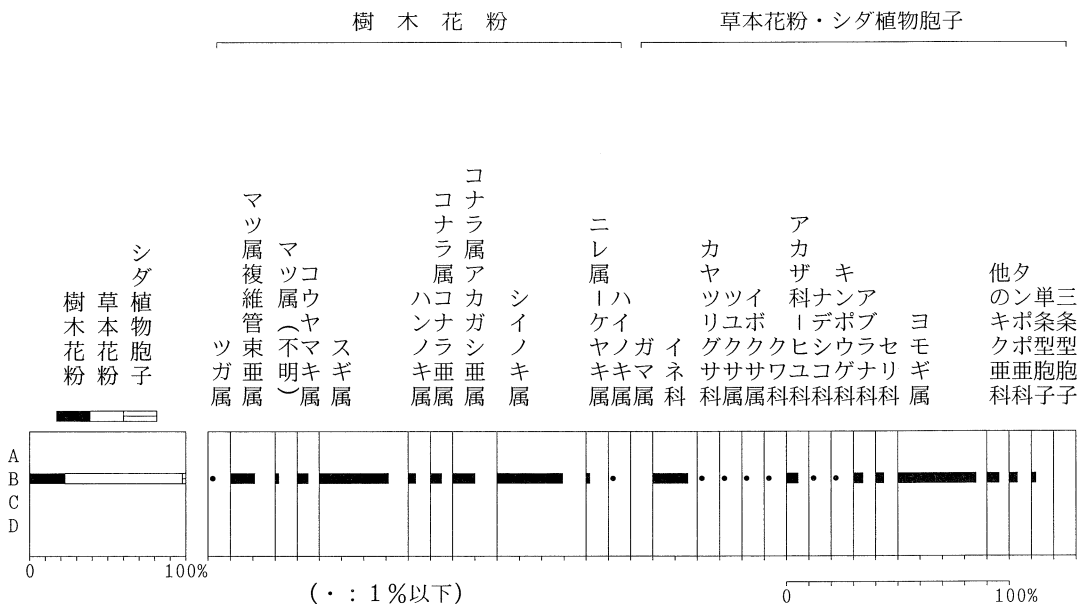


ＳＥ204

fig.209　試料採取位置図

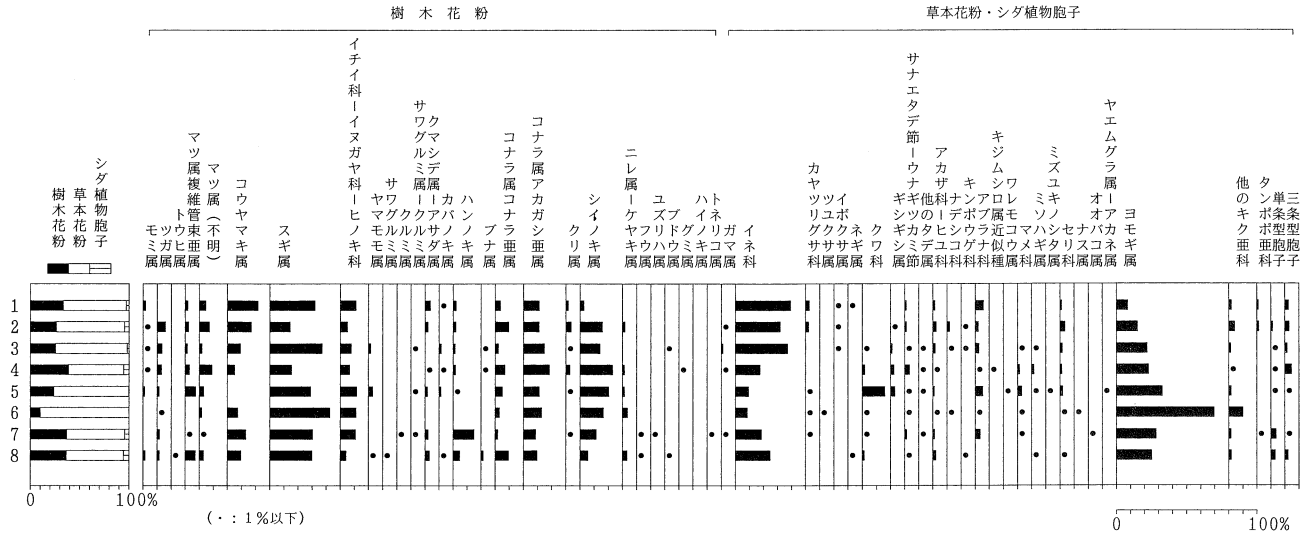
和名	学名	SE204								SD204			
		1	2	3	4	5	6	7	8	A	B	C	D
樹木													
モミ属	*Abies*	4	2	1	1	3	-	-	2	-	-	-	-
ツガ属	*Tsuga*	-	14	9	9	4	1	4	2	-	1	-	-
トウヒ属	*Picea*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	4	6	4	9	20	-	1	9	-	13	1	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	10	17	5	26	9	4	1	4	-	2	1	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	46	40	24	15	-	17	29	12	-	6	2	-
スギ属	*Cryptomeria*	68	34	95	44	77	95	66	37	-	37	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	24	12	20	19	31	25	24	5	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	4	-	8	-	-	1	-	-	-	-
サワグルミ属	*Pterocarya*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クルミ属	*Juglans*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	8	5	-	1	5	-	5	4	-	-	-	-
カバノキ属	*Betula*	1	-	4	1	4	-	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	*Alnus*	5	5	4	5	1	-	33	6	-	4	4	1
ブナ属	*Fagus*	-	-	1	2	-	-	-	2	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	8	23	6	20	14	7	4	12	-	6	1	-
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	24	26	38	52	30	29	19	12	-	12	-	-
クリ属	*Castanea*	4	9	2	8	1	-	1	-	-	-	-	-
シイノキ属	*Castanopsis*	6	37	36	65	54	37	25	7	-	35	4	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	-	4	-	4	4	8	-	4	-	2	-	-
フウ属	*Liquidamber*	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	1	1
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ブドウ属	*Vitis*	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
グミ属	*Elaeagnus*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	*Symplocos*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
トネリコ属	*Fraxinus*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本													
ガマ属	*Typha*	-	8	12	3	-	-	3	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	250	282	373	128	105	191	110	85	2	84	3	1
カヤツリグサ科	Cyperaceae	17	19	-	-	5	1	4	-	-	2	-	-
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-
イボクサ属	*Aneilema*	2	2	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ネギ属	*Allium*	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	-	5	13	178	5	5	5	-	2	-	-
ギシギシ属	*Rumex*	-	5	12	19	35	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	8	13	1	26	1	6	9	1	-	-	-	-
他のタデ属	other Polygonum	-	-	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	10	23	19	4	13	4	8	8	-	28	1	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	-	18	9	-	-	4	-	-	-	2	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	1	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-
アブラナ科	Cruciferae	38	21	27	2	61	8	22	-	-	23	1	-
キジムシロ属近似種	cf. *Potentilla*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	-	-	8	12	35	6	1	-	-	-	-	-
ミソハギ属	*Lythrum*	-	-	5	13	1	-	-	1	-	-	-	-
ミズユキノシタ属	*Ludwigia*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	8	31	18	10	23	5	-	2	-	20	-	-
ナス属	*Solanum*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
ヤエムグラ属－アカネ属	*Galium - Rubia*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	51	133	220	168	366	1562	167	86	-	186	18	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	13	38	15	6	20	227	10	7	-	29	2	1
タンポポ亜科	Liguliflorae	8	13	-	-	-	-	4	-	-	20	-	1
シダ植物													
単条型胞子	Monolete spore	-	12	1	5	2	-	23	11	-	11	3	-
三条型胞子	Trilete spore	17	28	17	35	1	-	2	8	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	212	234	255	282	266	223	218	124	0	119	14	2
草本花粉	Nonarboreal pollen	406	607	727	406	847	2021	346	197	2	399	25	3
シダ植物胞子	Spores	17	40	18	40	3	0	25	19	0	11	3	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	635	881	1000	728	1116	2244	589	340	2	529	42	5
不明花粉	Unknown pollen	8	17	22	12	26	13	54	30	0	22	3	0

表11　花粉化石一覧表



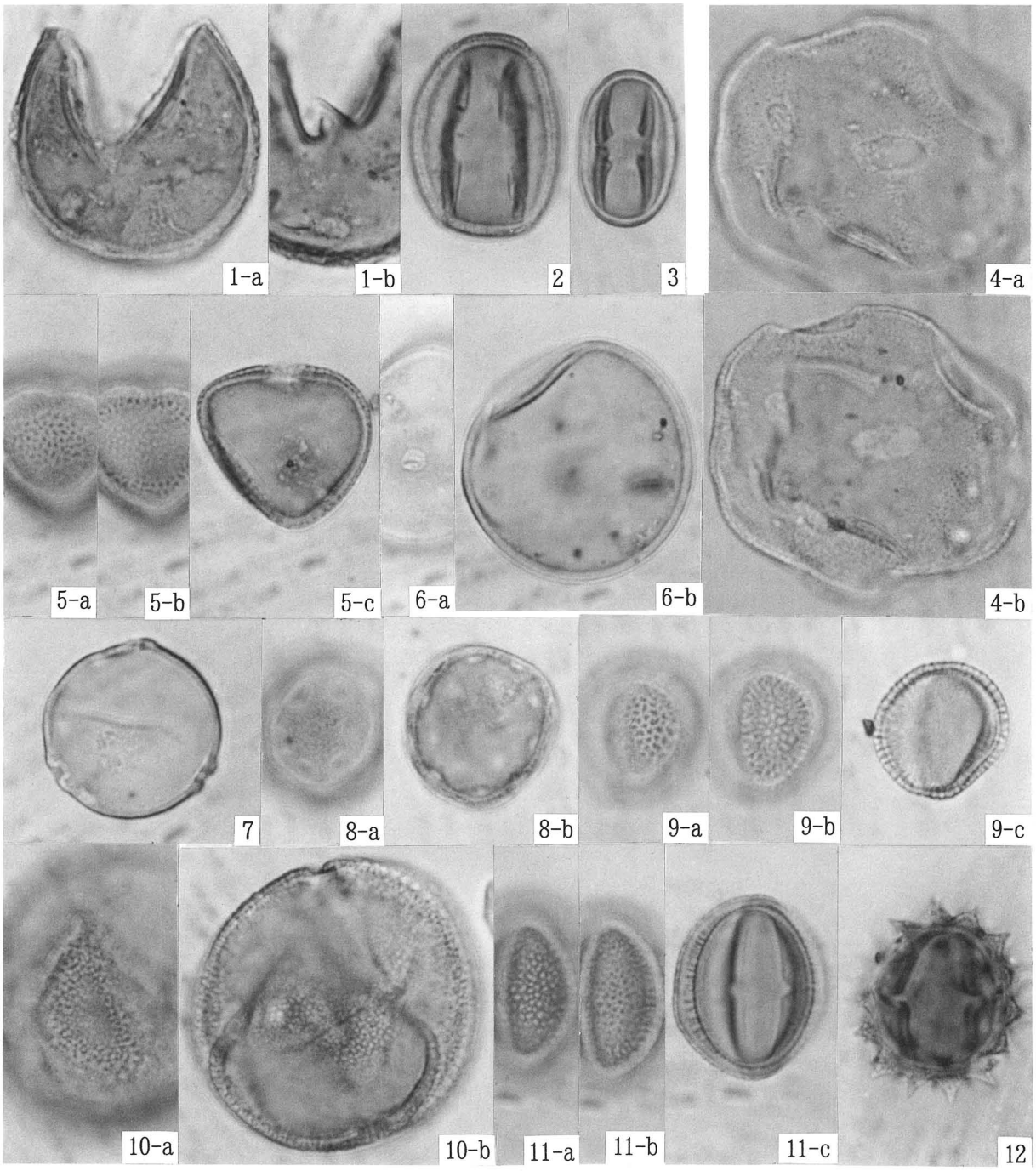
（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

fig.210　ＳＤ204 花粉化石分布図



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

fig.211　ＳＥ204 花粉化石分布図



挿図写真31　産出した花粉化石（scale bar：20μm）

1：スギ属、SE204/No.6、PAL.MN 1244
2：コナラ属アカガシ亜属、SE204/No.4、PAL.MN 1251
3：シイノキ属、SE204/No.4、PAL.MN 1250
4：フウ属、SD204/C、PAL.MN 1252
5：ガマ属、SE204/No.3、PAL.MN 1247
6：イネ属、SE204/No.5、PAL.MN 1249
7：クワ科、SE204/No.5、PAL.MN 1242
8：アカザ科－ヒユ科、SE204/No.3、PAL.MN 1248
9：アブラナ科、SE204/No.5、PAL.MN 1241
10：ギシギシ属、SE204/No.5、PAL.MN 1243
11：ヨモギ属、SE204/No.6、PAL.MN 1246
12：他のキク亜科、SE204/No.6、PAL.MN 1245